

墮雪の花言葉【3年以
内に私はそれを●す】

藍沢カナリヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1987年4月。呪術界最強の呪術師・五条悟誕生の3年前。

呪術師の少女・草木美澄。そして、その親友・花房雪。

特級仮想怨霊『墮雪』に関わる彼女たちの運命は動き出す。『墮雪』が五条悟を殺害するまであと3年。同時に、それは彼女たちに残されている時間でもあった。

これは2人の少女が世界を救うまでのお話。

※キャラ絵を下記のとがきに追記中です。

草木美澄↓第1話

花房
雪↓第1話

目次

些事

第1話	1987年4月	1
第2話	草木美澄という人間は	10
第3話	破邪一壺	21
第4話	破邪二式	31
第5話	破邪三参	48
第6話	幕間の話	61
第7話	些事動乱一壺	71
第8話	些事動乱二式	79
第9話	些事動乱三参	96
第10話	些事動乱四肆	108

第1話	些事動乱一伍	120
第2話	些事動乱一陸	135
第3話	些事動乱一漆	143
第4話	恒久的な日常について	156
第5話	呪吐一壺	176
第6話	呪吐二式	189
第7話	離	207
転化		
第8話	1988年4月	217
第9話	裁断欠如一壺	226
第10話	裁断欠如二式	240
第11話	裁断欠如三参	253

第33話	吳越同舟―弍―	417
第32話	吳越同舟―壹―	398
第31話	對話記憶	387
第30話	通話記録	380
器		
第29話	傷痕	370
第28話	転化制動―伍―	358
第27話	転化制動―肆―	341
第26話	転化制動―参―	327
第25話	転化制動―弍―	308
第24話	転化制動―壹―	293
第23話	偶然必然	284
第22話	裁断欠如―肆―	267

537	第44話	汚泥のような違和感と	527
	第43話	恋慕の情―参―	515
	第42話	恋慕の情―弍―	504
	第41話	恋慕の情―壹―	492
恋慕			
	第40話	終秋	484
	第39話	蚕食鯨吞―参―	472
	第38話	蚕食鯨吞―弍―	465
	第37話	蚕食鯨吞―壹―	456
	第36話	盛夏	447
	第35話	吳越同舟―肆―	436
	第34話	吳越同舟―参―	

第45話 福は濁りて淀みゆく

第55話 恋慕の情―壞想―

679

548

美澄と雪

第56話 終幕―壺―

697

第57話 終幕―式―

707

第46話 1989年6月

第58話 終幕―参―

724

第47話 黄泉廻り―壺―

第59話 終幕―肆―

739

第48話 黄泉廻り―式―

最終話 美しく澄んだとある雪の日に

第49話 黄泉廻り―参―

749

第50話 黄泉廻り―肆―

完結後のエンドロールのようなもの

第51話 黄泉廻り―伍―

余談雑談

757

第52話 黄泉廻り―陸―

第53話 黄泉廻り―漆―

第54話 恋慕の情―花言葉―

667

654

635

621

607

597

589

578

566

些事

第1話 1987年4月

—————

1971年。

後の特級呪術師・五条悟の誕生から19年前。

それは生まれた。

生まれ堕ちた。

特級仮想怨霊『だせつ堕雪』。

出自不明の特級呪霊。

何故生まれたのかも、何故存在するのかも分からない。

唯一分かっているのは『それ』がもたらす結果のみ。

その16年後、『堕雪』にまつわる物語は動き出す。

—————1987年・4月—————

私の名前は、草木美澄^{くさきみすみ}。

準一級呪術師だ。

呪術師とは負の感情の集合体である『呪霊』に対抗するために、呪術を使ってそれを祓う者のこと。

呪術師や呪霊には強さによって、一級から四級までの等級がつけられており、さらに、一級とは比べ物にならない位置に特級が存在する。

つまり、私の強さのランクは上から三番目。

まあ、それなりに強いわね。

……だけどさあ、

「この状況はキツイっしょ……」

目前に広がるは呪霊の群れ。

一体一体は強くはない。

強い奴でも二級程度の呪霊だから、サシで戦う分には問題ない。

ただ、

「(う)う……も！ 数が、多いとっ!!」

流石の私でも厳しい。

多勢に無勢ってやつだ。

こんなことなら他の呪術師を連れてくればよかつたなあ。

まあ、そうは言っても、他の呪術師も年々力を増す呪霊退治にいつぱいいつぱいだから、来てくれるか分からないけどさ。

『こツチにおいデエえ』

『アソぼうよオオお』

『おいデオイデ』

『あソぼうアソぼう』

「!」

そんな風に考えていると、その隙を突いて呪霊たちの攻撃が苛烈になる。

「やばッ!？」

攻撃をした後の一瞬の隙。

それをこの二級呪霊は見逃さなかった。

体勢は崩れたまま、私は――

――キィィイン――

突如、金切音が鳴り響いたと思つたら、私に襲いかかってきた二級呪霊が爆発した。それだけではない。周りの呪霊も次々と爆ぜていく。

私と同じ準一級でもこんなことができる奴はいない。

一級以上。

いや、一級呪術師とはいえ、あれだけの数の呪霊を同時に祓うのは不可能に近い。

こんな真似ができる奴は、私を知る限り一人しかいない。

「……………つまらん」

背後から聞き慣れた声が出て、私は振り向いた。

そこにいたのは、私と同じ年の女の子。

真っ黒な制服にうずまきのボタン。

ポブカットの黒髪で、本来目元が完全に隠れる長さの前髪を邪魔くさそうにかきあげている。

その仕草を、私は知っている。

私の親友『じゃない奴』の仕草だ。

「近年、呪霊のレベルが上がっているとはいってもこの程度か」

「……っ、お前、何しに来たッ！」

「ん？ ああ、お前か。なに、最近、どうも体が鈍っていてなあ」

運動だよ、運動。

そう言つて、『そいつ』は笑う。

真っ青な瞳を輝かせ、口角を不自然に上げて、邪悪に笑う。

直感で分かる。

人間の笑みでは決してない。

「あの子は……う？」

「寝ている」

それが本当かも分からない。

もしかしたら、『こいつ』にあの子が……。

そんなことを考えていると、目の前の『そいつ』が口を開く。

「お前が話をしたから、起きてしまったではないか」

「！」

億劫そうに欠伸をすると、目を閉じた。

それから数秒後、ゆっくりと目を開けた。

赤い瞳が見えると同時に、前髪が彼女の綺麗な瞳を隠してしまう。

さつきまでの邪悪な雰囲気ではなく、いつもの、ほんわかとした彼女の雰囲気だ。

「あ、れ……………」

「ダイジョブ？」

「美澄ちゃん？」

「うん、私だよ。ユキの親友のミスミ」

彼女——はなぶさゆき花房雪は、少し寝惚けたような様子でゆっくりと辺りを見渡す。

「……………そっか……………わたし、また」

ユキは状況を飲み込んだようで、ポツリと呟いた。

そのまま俯いてしまう。

私は見ていられなくなつて、彼女の頭を撫でた。

「ダイジョブだよ、ユキ。今回は被害はなし。呪霊だけを狩つてたほいから」

「……………そっか」

「だから、安心して。ね？」

「……………うん、ごめんね……………美澄ちゃん」

俯いてるから彼女の表情は見えない。

けど、私にはユキが悲しんでいるように見えた。

「不安かもだけど、ユキには私がついてるからね」

「うん……」

思わず抱きしめる。

ユキがこれ以上不安に思わないように。

「……………」

ううん。

きつとそれは言い訳なんだ。

私もそうしている間だけは現実を忘れていられる。

こうやって、ユキを抱き締めている間だけは。

私は、今から3年以内に彼女を殺さなくてはならない。

そうでなくては、彼女に宿る『堕雪』が彼を殺してしまうから。
3年後に生まれるという彼——『五条悟』を。

第2話 草木美澄という人間は

—————回想—————

私がユキと出会ったのは、私が10歳の頃。今から6年も前の話だ。当時、私とユキは普通の小学校に通っていて、ごく普通のどこにでもいるような小学生だった。

私たちが小学6年生になり、しばらくした5月のある日のこと。

学校の帰りに偶然迷い込んだ神社で『呪霊』に襲われた。

その時に『墮雪』がユキの中に入り込んだんだ。

そして、それに遭遇した私とユキはそれぞれ呪術師の家系に引き取られた。孤児であつた私たちにとつて、それはありがたい話ではあつたけれど。

ともかく、私は引き取られた草木家で呪術師として育てられた。

私には術師としての才能があつたらしく、最初は荷物持ち程度だったけど、少しずつ軽い任務を任せられるようになった。

最近では準一級という立場になり、呪霊狩りも本格化して。

そして、私が呪術高専に入学する時に、それは言い渡された。

特級仮想怨霊『墮雪』。

3年以内に、ユキに入ったその呪霊を殺せ。

さもなければ、『墮雪』は特級呪術師となるはずの赤子を殺め、結果として世界の均衡が崩れる。

最初はそんな話信じなかった。

『墮雪』がユキに入っていることは知っていたし、実際に入るところも見ていた。

思い出補正、とはまた違うかな？

とにかく、そこまでのものではないだろう。そう思っていた。

でも、初めて『墮雪』を見た時、私は理解してしまった。

この呪霊は世界を滅ぼしかねない存在であると。

————呪術高専————

「ねえ、ユキ！ 今日、授業抜け出そう！」

机にお行儀よく座るユキにそんなことを持ちかける。

「ええ、だめだよ」

おろおろとした様子でユキは首を横に振る。

その様子を見てると、小動物を思い出す。

そういえば昔、孤児院の側に猫が住み着いてたなあ、なんてほんわかした。

……って、いやいや、違う。

授業サボりの話だった。

「どうせ今日の授業だって大したことないって！ 授業でやる内容なら私が教えたげるしー！」

「でも……サボりなんてしちゃったら、先生方にご迷惑がかかるから」

「ダイジョブダイジョブ！」

呪術師っていう人種がそもそもマイナーだから、私たちの学級も2人だけだし。

担任にも話はつけとくし……事後承諾だけどね。

「……でも、花房家の人に迷惑かけちゃう」

「うっ」

それを言われると弱い。私も草木家に迷惑をかけた訳ではない。ここまで育ててくれた恩もあるし。

「だから、ね？ 学校終わったらおしやべりはできるよ」
「むう……わかった！ わかりました！」

仕方がない。

ここはユキに免じて、授業受けてやるか。

—————

今日は呪霊を祓いに行けという担任の一声で、私たちはとある墓地に来ていた。

その上に私が準一級だからと担任も補助監督もつかずにだ。

まあ、相手は三級だっていうから心配はないだろう。

結果的には授業から抜け出すことに成功したわけだ。

「んじゃ、さつきと祓って遊びにでもいこう！」

「そうだね」

私の言葉に笑みを返すユキ。

私とのお出かけ自体はいつも楽しんでくれる。

呪霊の祓除任務という免罪符ができたわけだから、彼女も罪悪感を感じることなく楽しんでくれるだろう。

ちなみに、呪術師としてのユキは、自身に例の呪霊が宿っているだけあって、呪力は使える。

術式はないらしいが、それでも三級呪術師なんだから等級の同じ三級呪霊程度の相手もダイジョブなはず。

さて、それじゃあやるか！

「闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え」

『帳』を下ろす。

基本的に『帳』は、下ろした範囲を一般人の認識から外し、恐怖や不安から生まれる呪霊の発生を抑えるもの。

補助監督が使うことが多いらしいけれど、結界術が苦手ではない私は自分で使うことが多い。

ちなみに、前に『帳』を下ろさず呪霊を祓ったことがあったけど、その時は私の保護者代わりの人にもものすごく怒られた。

まあ、それはともかく。

「……ユキ」

「うん」

「来るよー！」

私は素手で、ユキは短刀を構える。

呪力が私たちの左手側から近づいてきた。

「先に行くー！」

そうやって、私は未だ姿の見えない呪霊に向かう。

本来であれば、視認できる範囲のはず。

それでも見えないのだから、姿を隠せる性質か術式をもっているんだろう。

三級つて話が正しければ恐らく前者。

でも、呪力は――

「丸見えだっ!!」

――バギイッ――

『いぎイイいいッ』

捉えた!

断末魔をあげてたその呪霊の呪力が消えた。

まずは1匹。

あとは……。

「美澄ちゃん、あと2匹」

「りょーかいしたー！」

ユキの呪力感知は私と同じかそれ以上の精度だ。
だから、私はその声に耳を傾けながら残りの呪力を探す。

「……いたー！」

2匹目！

目には見えないそいつを祓おうとして、

「っ、いやっ！」

耳に入った声。悲鳴。

咄嗟にその方向を見ると、ユキの体の三倍はある呪霊の姿が見えた。

同時に走り出す。

考えるよりも先に体が動いていた。

「ユキに触るなッ!!」

ードスツ---

呪力を纏わせた拳が呪霊の体を突き破る。

あと一匹は---

『キイイイ』

突き破った呪霊のせいで死角になっていた足元からそいつは襲いかかってきた。

気づいた時には手遅れ。

反射的に呪力で全身を強化する……が、それは杞憂に終わったようだった。

音もなく、もう一匹の呪霊は消え去ってしまった。

もちろん私がやったんじゃない。

「はあつ……はあ……」

「ありがと、ユキ」

「う、ううん……わたしで役に立てたなら」

謙遜してそう言うユキ。

目元は見えずとも、その笑顔がたまらなく愛おしくなって、私はユキを抱きしめた。
ああ、本当に彼女は愛おしい。

—————

準一級呪術師だとか。強力な術式をもっているとか。

面倒くさがりな性格とか。甘いものが好きだとか。

赤色が好きとか。一度死にかけたこととか。

私にまつわる情報のすべては全部些末なこと。

私、草木美澄という人間を語る上で唯一必要なのは、花房雪の親友で、そして、花房雪を「あいしている」ということだけだ。

そのために。

ユキと私の幸せな未来のために、今の私のやるべきことは2つ。

私は『墮雪』をユキから引き剥がすこと。

そして、『墮雪』を殺すこと。

だから、ここに断言しておく。

私が彼女を殺すなんてことはあり得ない。

3年後に彼女が死ぬ未来は存在しない。

私はユキのためならば、なんだってする。

そういう人間だ。

—————

第3話 破邪一巻一

————1987年・4月中旬————

その任務が入ったのは4月中旬のことだった。
任務へ参加するのは、私とユキ。

そして、お邪魔虫もとい準一級術師1名。

2人と1人で任務に当たることになっていた。

その内容は——

————呪術高専1年教室内————

「は？　今、なんて？」

「美澄ちゃん、失礼だよ」

担任が話した内容に思わず聞き返す私。

ユキは私の口調をたしなめる。
ちよつと怒った顔もかわいい。

「聞いていませんでしたか。草木さん」

「……………」

「僕よりも等級が低いくせに無視とはいいい度胸ですね」

「……みすみちゃん」

「はっ！」

ユキの耳打ちで我に返る。

しまった。

ユキの可愛らしさに目も心もが奪われていた。

一見丁寧そうに見える無表情の担任・佐木が私に対して、舌打ちをしている。

まあ、気にしないけど。

「それでさっきの任務の話だけど」

「ええ。君たち2人では不安ですから、もう1人同行させることにしました」

「余計なことを……」

「一級術師としての判断です。意見をしないでください」

「いやだあああ、折角ユキと任務なんだから二人きりで行きたいいい!!」

「チツ」

「……すみません、先生。わたしから美澄ちゃんには話しておきますので……すみませ
んっ」

佐木はユキの言葉を受けて納得したのか、ひとつ咳払いをしてから話を続ける。

私を放つてである。

「相手が相手ですから、草木さんと同程度の等級の呪術師を1人同行させ、任務に当たつ
てもらいます」

「あの、先生」

「なんですか、花房さん」

「それで『相手』というのは……」

「ええ、お察しかと思います」

「二級相当の呪霊の可能性があります」

————— 廃工場跡 —————

バブルとやらで景気がいいとは言っても、私たち未成年にはあまり関係ない。

呪術師としての収入はあるけれど、バブルには影響しない。

むしろ社会の裏で膨れ上がる負の感情のせいだ、呪術師の仕事量は増える一方だ。

3年後に生まれると予言されている『最強の呪術師様』が本当に生まれてくれたら私
たちも少しは楽になるんだろうけどさ。

「お行儀悪いよ……っ?」

ポケットと考え事をしていたせいかわ足を開いて座っていたところをユキに注意される。

いいじゃない、スカートでもないし。

そう返すと、それでも行儀は悪いからと言われてしまった。

「はーい、直しまーす」

そうやって足を閉じる。

ユキにそこまで言われたなら仕方あるまい。

一方のユキの姿は、服装こそ制服だが、雰囲気はお淑やかな女の子そのもの。思わず口角が上がってしまう。

「あ、例の術師の人、来たみたい」

と私たちの時間を邪魔するかのように1人の男性がこちらに向かってくる。

こんな場所に来る人間は恐らくこつち側の人間なんだろう。

顔は……恐らく悪くはない。切れ長の目に高い鼻筋。

ところどころ白髪之交じた黒髪。

服装は少しくたびれた黒いスーツ。ネクタイをつけていない分、どこか仕事帰りの会社員にも見えた。

ただし、目の下の隈が酷い。

「お前ら、呪術高専の学生だな」

「……はい。要田かなめださんですか？」

「ああ……」

「今回、一緒に任務につきます花房雪といいます。それから彼女は草木美澄ちゃんです」
「ども」

「……女学生2人とは呪術師の人手不足もいよいよ深刻というわけか」

初対面の人間に対してお前呼ばわり。

それに加えて、女を見下すような態度。

うん、私、こいつ嫌い。

「そっちの女」

「あ？」

「お前が準一級か」

品定めをするかのように上から物を言いなされるこの男。

そうですが、なにか？

そう返すと、こんなのが準一級とは……とため息を吐かれた。

ため息を吐きたいのはこちらなんだけど。

ユキとの任務を邪魔される上に、態度も最悪。

「くれぐれも俺の邪魔をするなよ」

こっちの台詞だ。

なぜ私たちの周りの大人はこうも性格が壊滅的なのか疑問である。

—————廃工場内—————

「バブルの好景気にも関わらず、ここの工場の経営は芳しくなかったみたい。父親が無理心中をして、家族全員が死亡したって……」

やりきれない話だね。

ユキは少し心を痛めた様子だった。

前髪に隠れて目は直接見えないけれど、悲しげに伏せているのが容易に想像できる。

本当にいい子だなあ、ユキは。

「おい、お前ら」

「あ？」

「術式は？」

先を歩く要田にそう訊ねられるが、誰が答えるか。
ユキが答えようとするのを手で抑える。

「……………本当にそれで準一級か？」

話にならない。

そう言つて、要田は

「……………ねえ、美澄ちゃん」

「どした？」

「情報の共有しておいた方がいいんじゃないかな」

「えええ……………だつて、明らかにあいつ私たちのこと下に見てるよ？」

そんな奴に術式を教える必要なくない？

「相手は一級だつて言うし……」

「……………」

「ね？」

「……………はあ、わかりました！」

私、本当にユキには弱いなあ。

自分でもそう思いながら、前を歩く要田に声をかけようとして、止まった。

前の男も、もちろんユキもそれを感じ取ったようで、目の前のその場所を凝視する。

「楽しいおしゃべりはそこまでだ」

「言われなくてもわかつてますうう」

要田にはあつかんべーを返し、臨戦態勢に入る。

さて、ユキにいいところ見せちやおうかな！

} } } } } }

第4話 破邪一弑一

————— 廃工場内 —————

『ジテンしゃのりタイヨお』

『タかいタカいしテ』

現れたのは子供型の呪霊が2体。

そして、後ろにはもう1体。

恐らく無理心中に巻き込まれた子供とその親だろうな。

——— ゾゾゾゾツ———

「!？」

子供の背後にいる親呪霊から出た霧が、私たちの前にいる要田を包み込んだ。
分断、されたって訳ね。

まあ、向こうも準一級って話だし、死にはしないだろう。
こちらはー

「ユキ！」

「美澄ちゃん、はやく祓ってあげよう……」

ユキの表情は明るくない。

優しいユキのことだ。目の前の子供の様子に心を痛めてるんだ。
そんなユキの言葉に頷く。

『あそば』

『アそボ』

子供の呪霊が駆け寄ってきた。

速度はそんなに速くはない。見てからでも回避は十分可能だ。

「ユキ！ 左！」

「う、うんっ」

「ーバツー」

2人でそれぞれ左右に避け、私は足に、ユキは体全体に呪力を纏わせる。すぐに構えて、距離を詰めていく。

2体なら私1人で十分だ！

「ふっ！」

「ーブツー」

まずは1体目の側頭部を蹴り抜く。

呪力を流した足ならば、呪霊といえどその体を捉えられる。

1体目ーとりあえず呪霊Aが転がった。

よし、次！

「らあっ!!」

振り返ると同時に、さつきとは逆の足で背後に蹴りを放つ。捉えて、ない。

踏み込みが甘かった。呪霊Bはちようど1歩分間合いの外。なら！

ーグッー

ーバキッー

『ぎィ!?!』

呪力で強化した脚力で今度は完全に間合いに入り、確実に祓えた。

これで終わー

『アそぼ』

『あソボ』

「……………確実に入ったはずなんだけどな」

呪力を通して完全に祓ったはず。

なのに、呪霊は立ち上がってくる。
攻撃が効かないってこと？

「美澄ちゃん！」

ユキの声。

たぶん何かを感じたんだと思う。

一旦下がり、ユキの側へ。

「普通に祓ったと思ったのに、なんで祓えてないんだろ」

「たぶんあれは……動かされてる、と思うよ」

動かされてる？

ユキは頷き、説明をしてくれる。

「うん。うつすらだけど、あの子たちの頭から細い糸みたいなものが見えるの」

「糸？ 私には見えない……ってことは」

「たぶん呪力の糸。それが工場の奥に続いてるんだと思う」

廃工場の奥。

あの男と親呪霊がいる方向、つまり、親呪霊がこの2体を操ってる訳ね。

言わば親呪霊の傀儡のようなものか。

だから、攻撃をしても立ち上がってくる。自分の子供を都合のいいように操るとはズいぶんと性質の悪い術式だな。

「糸を切ればいいってことでいい？」

「たぶん、だけど」

「オツケー!!」

それなら話は早い。ややこしくなくていいね。

再度、私は呪力を足へ纏わせた。

そして、それを廻す。

「術式解放『廻かい』」

術式『廻』。

呪力を廻し、加速させる。

それによって、本来以上の呪力出力を発揮することができる術式。

単純だけど、足技を中心にした肉弾戦を得意とする私にぴったりの術式だ。

両足で呪力が廻る。

廻った呪力は推進力になり、私の体を異常ともいえる速度で押し出してくれる。

そのまま――

「かいぎやく
廻脚」

ーブツンツッー

一閃。

私の足は呪霊の頭から出ているという糸を同時に切った。

……らしい。

私にはそれが見えてはいないから、後からユキに聞いたただけだけどね。

ともかく、

ーシューウー

糸が切れた呪霊は煙と化して消えていった。
よし。

あとは向こうの親呪霊で終わりだ。
まだ黒い霧は消えてないけど……。

「あいつ、やられたかな？」

「美澄ちゃん、そんなこと言っちゃー」

ーゾワツー

「!!」

突如として悪寒が走る。

ユキも同じようで、いや。

「っ、はあ……っ、みすみ、ちゃん」

「ユキっ!!」

呪力感知能力が高い故の弊害だ。

ユキは高濃度の呪力に当てられてしまっていた。
私は彼女を抱える。

「みすみちゃん……うっ……」

「ダイジョブ、すぐにここから離脱するから」

「で、でも……」

ユキが言いたいことは分かる。

恐らくさつきの子供の呪霊も、要田が戦っているであろう親呪霊も傀儡に過ぎない。

あの濃い呪力の主こそが今回の任務の標的なんだろう。

佐木が言っていた一級呪霊。

もし要田がまだあの親呪霊を祓えておらず、一級呪霊に遭遇したとしたら、助からな

い可能性が高い。

彼の生存率を上げるためには、私がすぐに駆けつけることが必要だ。

ユキはそう言いたいんだろう。

けど、

「ユキが最優先だから」

それがすべてだ。

彼女を連れてここを離脱し、落ち着くまで側にいることが私にとって最も大切なこと。

「で、も……」

異論は認めない。

ユキにお願いをされる前に、私は廃工場の外に向けて駆け出した。

——要田視点——

目の前に『それ』が現れたのは、呪霊を三回ほど倒した後だった。倒れても倒れても立ち上がってくる呪霊のカラクリがなんとなく読めた頃に、『それ』は現れた。

『なんでジャました』

さほど大きい訳でもない。俺よりも少し小さい程度。だが、その呪力量はさつきまでの奴の比ではない。

『かぞくとシのウ』

「これが本体ってことでいいな」

読み通り。

本体は別において、俺が倒していた呪霊やあの女学生の方の呪霊はその本体が操っていったことだな。

無理心中を行った父親といったところだろう。

どちらにせよこの『父親』を祓えば終わる。

「『構築術式』」

術式『構築術式』

己の呪力を元に物質を0から構築する術式だ。

この術式で一度生成された物質は術式終了後も消えることはない。

それ故に呪力消費が激しく体への負荷が大きい。

だから、これを使うのは1日に一度と決めていた。

だが、その分――

「構築・鎖鋸」

呪力を帯びたチェーンソー。

それでまずは一太刀。

ーギユイイイイイー

『ぎイイイツ』

『父親』の首を落とす、はずがその間にさつきまでの呪霊が割り入ったきた。そのままチエーンソーは呪霊の体を捉え、切り裂いた。

『きひゃひゃひゃひゃ』

それを見て、『父親』は愉快そうに不愉快な声を上げる。

胸糞悪い呪霊だ。

だが、これで奴を守るものはない。

次の一撃で終わらせてやる。

ーギユイイイイイイーンー

もう一度構え、振りかざした。

ーガシッー

「あ?」

足元に違和感があった。

視線をそちらへ向けると、そこには切り裂いたはずの呪霊が俺の足を掴んでいた。

「ぐっ!?!」

そのせいで一歩踏み出せず、チェーンソーは空を切る。

その隙をついて、

『きゃきゃききゃきききゃききゃッ』

奴が俺目掛けて飛びかかってくる。

しくじったか!?!

「死ねええ!!」

ーバキツー

奴の攻撃が俺に当たる前に、その乱入者によって、奴は吹き飛んだ。

乱入者は女学生の1人。

準一級だという女の方だった。

「…………お前」

「はあああ、それで本当に準一級ですかああ？」

「……………」

当てつけのように皮肉を言う女。

ふっ、面白い。

「……………お前、名前は」

「草木美澄」

「草木、さつきは悪かった」

「あ？」

「今のは助かった」

「あつそ」

「愛想悪くそれだけを言い、草木は『父親』へと向かい直る。

その姿は確かに呪術師のそれだった。

姿形だけで判断するのは、俺の悪癖だな。

「ふっ」

「なに笑ってんのよ」

「なんでもない。おい、草木。こいつの術式は恐らくー」

「糸で他の呪霊を操ってるんでしょ！」

「ご明察だ」

奴が吹き飛ばされた瞬間に、俺の足を掴んでいた呪霊の動きが止まった。

その後、呪霊からなにかが切れる音がしていた。

呪力の糸。

それが答えというわけだ。

さて、ネタもあがった。

「終わらせるぞ」

「うっさい！ 命令すんな！」

—————

第5話 破邪―参―

―――独白―――

私は結構色んなものを集めるタイプの人間だ。

ユキから貰ったものはもちろんだけど、それ以外にも紙袋とかお菓子の缶とかも案外とっておく。

なにかに使うかも、なんて思っっちゃってき。

ユキには結局使わないんだから、捨てたらしいのに、とも言われる。

まあ、その通りなんだけど。

ユキに言われて部屋の整理するときもどこかで使いそう、そう思って、結局色々保管しちやうんだよね。

―――廃工場内―――

――ギユイユイユイ――

轟音が工場内に響き渡る。

要田がもっているその武器は、一級呪霊は捉えられない。思ったよりも動きが速い。

「なんで人間と変わらない大きさであんなに速いのよ……」

目で追いきれない。

「大振りでは当たらないか。仕方がない」

そう言うと、要田はその武器を捨てる。

そして、懐からナイフを取り出した。

「……そんなのでどうにかなるわけ？」

「呪力を流せばそれなりにはやれる」

それを証明するかのように彼は動いた。
瞬間、姿が消え、そして、すぐに現れる。

『ギイイエエツ』

上半身と下半身が分かれた『父親』呪霊と共に。

今の一瞬で呪霊に攻撃をしていた。

しかも、あのナイフで。

………なるほど、確かに私と同じくらいの力はあるみたいだ。

「こんなものか」

ナイフを拭う要田。

だが、その背後から操られている方の呪霊が襲い来る。

私の術式で倒す。

そう考えた時には、呪霊は崩れ落ちていた。

「そつちももう祓っている。心配するな」

そうして、彼は戦闘を瞬く間に終了させた。

—————

「もう一人はどうした？ 死んだか？」

「あ？ お前を殺すぞ」

そんなやり取りをして、私たちは用の済んだこの廃工場の出口へ向かう。

仲がよくなったとは一切言えないが、要田の中でどうやら私への評価は多少よくなつたようだ。

私は正直、どう思われようが関係ないけど、ユキは他の術師とはある程度仲良くした方がいいと思ってるようだから、大きな収穫といえれば収穫だったな。

「それでもう一人の女学生は？」

「工場の外にいる」

呪力感知能力が高いから、あんまり濃い呪力には当てられるんだ。

ユキの名誉挽回のためにそれを伝える。

任務の最初、ユキはこいつにその話をしようとしていたみたいだから、私が話しても問題はないだろう。

ついでに、ユキ自身に術式がないことも教えておく。

「草木、お前は？」

「あ？」

「お前の術式はなんだ？」

ああ、そういえば教えてなかったか。

私にとってはユキが一番だから、私自身のことを伝えるのはよく忘れてしまう。

「私の術式は『廻』。呪力を廻せるってだけの術式」

足に纏わせ、呪力を高速で廻して破壊力を上げる。

それを聞いて、要田は納得したように頷いた。

曰く、女学生にも関わらずスカートではなく、ズボンなのが珍しいと感じたようだった。

まあ、事実ユキもスカートだから、私もそうしようと思ったんだけど、どうしても戦闘形態の関係上スカートを選ぶわけにもいかなかった。

「ふむ……呪具に呪力は込められるのか？」

「……一応。得意ではないけど」

「なら、それを伸ばすの必要だろう。お前が今後もう一人の女学生と組むのならば、純粋な体術や破壊力だけではどうしようもない相手も現れる」

呪具——呪いを宿した武器——には特殊な術式効果を付与されているものも多い。

発動中の術式の強制解除。

呪力を炎へ変換する術式。

相手の術式を乱す効果。

その術式効果は多岐に渡り、1つ五億は下らないという代物もあるくらいだ。

「特に『生得領域』持ちの呪霊には尚更だ。肉弾戦にも限界はある」

「……………分かってるし」

「なら、いいが」

そう言つて、彼は歩を進める。

と何を思ったのか要田は止まり、こちらへ振り向いた。

「なに？」

「『構築術式』」

「あ？」

「呪力を使い、0から物質を構築する俺の術式だ」

そちらにばかり情報を言わせるのはフェアではないだろう。

要田はそう言つて、薄く笑つた。

「……………さつき使つてたナイフとかチェーンソーもそれで？」

「ああ、呪力消費は激しいが、術式解除後や術師の死後も物質が残るのが利点だ。事実、

ナイフは数日前に構築して所持していたものだからな」
「ふうん」

『構築術式』か。

なるほど。

そっか。

「……………」

「どうした？ 草木」

「いや、なんでもない」

「なら、いいが」

彼はきつといい人なのだろうな。

実力を認めた相手には、敬意を払い、その上助言もするような。

いい呪術師なんだろう。

だから、少し残念。

「闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え」

呪霊が消滅し、一度は消えた『帳』。

それを再び下ろした。

この『帳』に追加した効力はただひとつ。

『呪術師の出入りの禁止』

その代わりに一般人からは視認され、侵入も許す。

これで足し引きは合う。

「……………」

「おい、草木。何の真似だ」

まさかあの呪霊に操られているのか。

そう訊ねてくる要田に、言葉は返さない。

いや。

念のためだし、『あれ』だけ話しておこうか。

「さつきさ、私の術式の話をしたじゃん」

「……ああ」

「あれ、嘘。私の本当の術式は——」

—————

——パキインツ——

『帳』が上がる。

その中から、美澄ちゃんが出てきた。

「美澄ちゃんっ！」

「ユキ！」

そのまま美澄ちゃんと2人で抱きしめ合う。

よかった……。

「突然、『帳』が下りたから……何かあったのかと思ってっ！」

「ダイジョブ。ただちよつと呪霊を倒し損ねてみたいでさ」

急いで『帳』を下ろしたから、変な効果も着いちやつてたんだ。

そう言つて、美澄ちゃんは笑つた。

うん、いつも通りの美澄ちゃん的笑顔だ。

「それより、ユキは体調ダイジョブ？」

「うん。さつきよりだいぶいいよ」

「それならよかつた！」

美澄ちゃんはわたしの頭を優しく撫でてくれる。

……この時間、とつても好き。

「つて、ちがうちがう」

「？」

「美澄ちゃん、要田さんは？」

要田さんは廃工場から一向に出てきていない。

準一級つて言っていたから美澄ちゃんと一緒なら大丈夫、だと思っただけ……。

「……………」

「もしかして……………」

「うん。呪霊に殺された」

「っ、そっか……………」

「ごめんね、ユキ」

仕方ないよ。

謝る美澄ちゃんにそう返す。

呪術師が死ぬ。それは決して珍しいことではないけれど。

それでも、悲しい。

例え、それがあつたばかりの人だとしても。

「……………美澄ちゃん」

「うん、おいで」

わたしたちはしばらくその場を動けずにいた。

—————

第6話 幕間の話

—————記録—————

都内S沢製鉄工場跡地にて。

準一級呪術師・要田純及び草木美澄、三級呪術師・花房雪が一級相当と思われる呪霊と会敵し、祓除した。

その際、要田純が死亡した。

その遺体からは脳幹が抉り出されており、草木美澄の証言から得られた呪霊の行動と一致した。

—————

「ねえ、ユキ。まだやってるの?」

呪術高専の女子寮内。

ユキの部屋で、私はユキにそう訊ねた。

当のユキはというと、呪力感知の訓練のために、壁一面に貼り付けたおびただしい数の心靈写真とにらめっこしていた。

その辺の訓練は、私はよく分からないけど、なにやら花房家でもそんなことをしてきたらしい。

まあ、事実ユキの呪力感知能力は高い訳だから、きっとその方法は効果的なんだろうね。

「もう少し……」

珍しく前髪をピンで止め、真剣な表情をするユキ。

かわいい。

真剣な顔もかわいいなんて反則だよお。

本当にかわいいなあ、ユキは。

「……あの……美澄ちゃん？」

「ん〜？ なに〜？」

「そんなに見られると……集中できない」

「おかまいなく！」

「わたしが気になるのっ」

もう終わり！

そう言つて、ユキは写真を片付け始めた。

どうやら訓練は終わりみたい。

「それにしても、今日はいつもに増して真剣だったね」

片付けを手伝いながら、聞いてみる。

いつも真面目なユキだけど、今日は少し様子が違ったように見えたから。

私の言葉にユキは、

「……うん。わたしが倒れてなかったら、もしかしたら……」

俯いてしまった。

もしかしたら、か。

「あの要田って人が死んじやったのはユキのせいじゃないよ。相手は一級呪霊だし、呪術師ならそんなこともあるって」

「……わかつてる。でも、やっぱりね」

「仲間が死んじやうのは悲しくなるよ」

「……………そっか」

本当に、ユキは優しい子だ。

————呪術高専1年教室内————

「先日の任務は、ご苦労様でした」

担任・佐木はわたしたち2人にそう言った。

感情のない声。

わたしはこの声が少しだけ苦手。

「ありがとうございます。先生」

「早速ですが次の任務です」

わたしの言葉を軽く流し、先生は話を進める。
それに対して、美澄ちゃんが不満の声をあげた。

「まだ2日よ？ 私たちが任務から帰ってきてから」

「もう2日も休んだのですから十分でしょう」

「十分じゃない！」

ユキと遊びに出掛けたいのよ!!

そんな風に声を大にする美澄ちゃん。

正直、同感。だけど、

「美澄ちゃん」

「ユキもそう思うよね！」

「任務は任務だよ」

「……………むう。ユキが言うならそうするけどさあ」

少し不満そうにしながらも、美澄ちゃんは引き下がってくれた。

「もういいですか」

「はい、すみません。続けてください」

「では、任務の内容ですが、その前に……………草木さん、花房さん」

先生は2人の名前を呼ぶと、1枚の紙切れを差し出してきた。

少し前のものなのだろう。

紙は日焼けて、そこに書かれた文字も読みにくくなっている。

「これは……………なんですか？」

そう訊ねると、先生は答える。

「そこに書かれた場所に行つて、『あるもの』の回収をお願いします」
「……あるもの？」

「特級呪物『両面宿儺』。その指の回収です」

『両面宿儺』。

花房家にいた頃、その名前を聞いたことはある。

呪術全盛の時代に、当時の呪術師が総力をあげて挑み敗れた呪術師。
腕が4本、顔が2つある仮想の鬼神の名を冠する呪いの王。

「その指……」

「そんなヤバいものを私たちにとってこさせるわけ？」

「人手不足ですから」

「……………先生」

「なんですか、花房さん」

「……………わたしは三級、美澄ちゃんは準一級です。その呪物の回収には役不足ではありませんか」

『両面宿儺』の指は他の呪いを惹き寄せる。

それも知っていた。

だから、わたしたちでは流石に厳しい。

そう思つての発言だったけど。

「先ほども言いましたが、他の一級術師は僕も含め、年々活発になる呪霊の相手で手一杯です」

「それは、わかつてます……」

「それに今回は指の受け取りだけですから、準一級でも十分です」

受け取り？

特級呪物の？

「はい。相手には話は通してありますから、そのメモに記されている場所に行き、それを渡せば受け渡しは完了です」

「先方？ 相手は誰？」

「……………アイヌ呪術連の関係者とだけ言っておきます」

詳しいことは話さないし、話せない。

先生からはそんな雰囲気を感じ取った。

以前、先生から聞いた話だけど、一級術師に課せられる任務の危険度は然ることながら、機密性に関しても準一級以下の比ではないらしい。

だから、きつとわたしたちには気軽に話すことはできないだろう。

正直、腑に落ちないことはあるけど、今はこの件について、自分の中でそんな風に決着をつけた。

「明日より任務に取りかかってもらいます。準備をしてください」

そうして、その日は午前で放課となった。

ちなみに、午後は美澄ちゃんと任務のための買い出しに出掛けた。

買い出しの間、美澄ちゃんは終始ご機嫌で。

……機嫌がなおったみたいでよかったな。

|
|
|
|
|
|
|

第7話 些事動乱一巻一

————呪術高専女子寮前————

「北海道旅行だと思ったのに……」

そう言つて、美澄ちゃんは膝をついて分かりやすく落ち込んでいた。

道理で買い出しの時も変に荷物が多いと思つたんだよね。

そういえば、先生からわたしが受け取つたメモ、美澄ちゃんは読んでなかつたなあ。

こんなに落ち込むなら、その時に言えばよかつたよ……。

「まあまあ、今度近くのデパートに物産展も来るらしいから」

「一緒に行つてくれる……?」

「うん、一緒にいこ?」

「よし! やるぞおお!!」

一気にやる気になる美澄ちゃん。
現金だなあ。

「それでどこが受け取り場所なの？」

「渋谷だって」

「渋谷？ そんなに人の多いところで？」

「うん……」

それはわたしも疑問だった。

特級呪物の受け渡しに渋谷って……。あまりにも危険すぎるんじゃないかな。

そう思つて、ここに来る前に先生に聞いたんだけど、渋谷で間違いないと言われてしまつていた。

なにか事情があるのかもしれない。

「とにかく行ってみようか」

「そだね。それで渋谷のどこ？」

「……スクランブル交差点」

「まじっ。」

「……」渋谷・スクランブル交差点「……」

メモを見て驚いてた。

渋谷のスクランブル交差点なんて、人が大勢行き交う場所の代名詞みたいなものなのに。

そこで特級呪物の受け渡しなんてあり得ない。

そう思っていた。

けれど、実際に、ここに来て、ここで受け渡しをする方法が分かってしまった。

『帳』……?』

スクランブル交差点を覆うように、『帳』が下りていた。

こんなものを非術師が見たらその不安や不信感から呪霊が生まれてしまう。

そう思ったんだけど、

「昼間なのに、周りには誰もいない」

交差点の周りには人っ子一人いなかった。

『帳』を見て近づかないようにしているんじゃない。

詳しくは分からないけれど、たぶんこの『帳』には、非術師が無意識のうちにここを避けるような効力が追加されてる。

あとは不可視、かな。

つまり、見えないけれど近づきたくないという無意識を植え付けるような術式効果。少なくとも一般人の人には被害がないはず。

「ユキ〜？」

「あつ、ごめん。ブーツとしてた」

「どうかした？ この『帳』のこと？」

「うん。あのね……」

少し考え込んでいたようで、美澄ちゃん呼びかけで我に戻った。

美澄ちゃんにこの『帳』に付与されているであろう効果を伝え、ここならば呪物を持ち込んで被害はでないだろうと伝える。

「……………」

「美澄ちゃん？」

「なんでもない。とりあえずさ、これで私がわざわざ『帳』を下ろす必要もないみたいだし入ろっか！」

「そうだね」

美澄ちゃん自身も『帳』が使えるからか、この『帳』の性質を見抜いているみたいだ。たしかに目の前の『帳』には呪術師を入れないような効果はない。

というよりも、一定以上の呪力をもつものの侵入については一切禁止していない、の
かな。

非術師から認知もされず侵入もできない代わりに、呪術師は入り放題。
それなら、足し引きも合う。

「……………ねえ、美澄ちゃん」

「ん？ なに？」

「もしかしたら、この中に呪霊がいるかもしれない……」

『両面宿儺の指』は呪霊を引き寄せる。そう聞いたことがある。

もちろん、指にかかっているという封印が解けていればだけど。

わたしの呪力感知でも、この『帳』の中の呪力は感知できないみたいだから。

「気を付けて」

「りょーかい！」

そうして、わたしたちは警戒をしながらその『帳』へ入っていった。

————『帳』内————

そこにいたのは1人の呪術師。

その顔は知っている。

アイヌ呪術連に所属してるっていう有名な呪術師だ。

たしか、等級は一級で、かなり腕がたつて話を聞いたことがあった。その彼が今回の受け渡しの相手、だったんだろう。

「みすみ、ちゃん……これって……」

「うん。もしかしなくても、そうみたいだ」

彼は死んでいた。

全身には夥しい数の刺し傷。

そこから流れ出るはずの血液が一滴もその場に残っていない綺麗な刺殺体がわたしたちの目の前に転がっていた。

「これは……まずいかもね」

呆然とするわたしをよそに、美澄ちゃんは彼の遺体を調べてくれた。その結果、そこにあるはずのものがなくなっていた。

—————記録—————

1987年4月21日。

渋谷・スクランブル交差点にて、アイヌ呪術連所属の一級呪術師・早雲薙臣が死亡しているところを発見された。

死因は全身56箇所を刺されたことによる失血死である。

その遺体からは呪詛師のものと思われる残穢が残っており、その呪詛師の行方を追っている。

また、特級呪物『両面宿儺』の指が現場からは失くなっており、回収を一級呪術師4名に任ずる。

—————

第8話 些事動乱一弍一

————呪術高専寮・花房雪の部屋————

「あー、もうっ!!」

やっと解放された美澄ちゃんは、寮のわたしのベッドに体を投げ出した。

お疲れ様といって、さつき淹れたお茶をいつも美澄ちゃんが使っている湯呑みで出してあげる。

「ありがとう、ユキい」

「いえいえ」

事情聴取という形で想定以上に拘束されていた美澄ちゃん。

わたしよりも長かったのは、実力的にわたしではアイヌ呪術連の彼を殺せないから、という理由だと思う。

「ずずず、とお茶をすすりながらため息を吐く美澄ちゃん。

「もー！ せっかくの2人での任務だったのにさあ」

「まあまあ」

人が1人亡くなってるんだから、そんなことを言ったら不謹慎だよ。そう伝えると、美澄ちゃんは渋々といった様子で返事をした。

「……美澄ちゃん」

「なに？」

「『両面宿儺の指』はどうなったんだろう」

「一級術師に引き継がれたんでしょ。私たちが気にすることないよ」

「でも……」

「……………」

「このまま放っておいたら、もしかしたら悪用されるかもしれない。

『両面宿儺の指』は呪霊を引き寄せる。」

呪霊に渡れば、それを取り込み、特級に匹敵する呪霊が生まれてしまう。呪詛師の手に落ちれば、それこそ直接的に被害が出るだろう。

「……ねえ、美澄ちゃん」

「やだよ……しないからね」

わざわざユキとの時間を削るようなことはしない！

美澄ちゃんはわたしがお願いしようとしていることを予測したのか、そんな風に拒否した。

けど、わたしは知ってる。美澄ちゃんは、

「おねがい、美澄ちゃん」

「うっ……」

わたしのおねがいを断れないことを。

ごめんね。ずるいよね。

でも、わたしは

「放っておけないよ」

多くの被害が出ることを放ってはおけない。

だから、ずるいと言われてもいい。

「……………わかった」

「美澄ちゃん！」

「でも、ユキの身が危ないと思ったらすぐに止めるから！」

こうして、わたしと美澄ちゃんは特級呪物『両面宿儺の指』を持ち去った何者かを探
すことになった。

—————

そうは言っても、わたしたちには手がかりらしい手がかりがない。

高専の上層部や任を受けている一級術師には、もしかしたら情報が流れているのかも

しれないけれど、独自に動いている人間に情報を渡してくれるお人好しは上層部にはいないだろうと思う。

なら、やれることは『両面宿儺の指』の特性――呪霊を引き寄せるといってそれを逆手に取って動くことだ。

呪霊集まる所に『両面宿儺』あり、と。

ただし、これも封印がしっかりしてあれば無意味な行動になってしまう。

「平和だったね」

「うん……」

というわけで、2人で代々木公園のベンチに座り、項垂れる。

気づけば日が傾き始めている。

結局、今日1日を無駄に使ってしまった。

どうやら封印はしっかり持続しているらしく、呪霊が極端に集まっているような現象は確認できなかった。

……本当はいいことなんだけどね。

そもそも特級呪物に施すレベルの封印なんだから、簡単に解けるわけではない。ただ、

一級術師を殺害できるほどの呪詛師なら可能性はあるから、まったくの杞憂ということはない……と思いたい。

「どーしよーね」

「……………」

『両面宿儺』へのアプローチはできない、となれば、できるのもうひとつの手段。

「殺害した犯人へのアプローチをする……かな」

「まあ、そうだねえ」

美澄ちゃんも同じ結論に至っているようで、わたしの言葉に頷いてくれた。
そう。

殺害されたのが一級の呪術師であること。

そして、遺体に見られた異様な状況ー刺し傷はあれど、血液の跡がないことーから考えるに、殺害した何者かの術式が推測できるはず。

これらの情報から犯人を直接的に特定していくしかない。

「実力は一級以上。もしくはそれができる術式をもつ呪詛師もしくは呪霊」

「それに血液を丸ごと消せる術式」

「呪具の可能性もあるかもね」

「あとは大量の刺し傷………殺された彼に恨みをもつてた呪術師ってことかな」

「んー、どうだろ。基本的に呪術師なんて、みーんなイカれてるからねえ」

手がかりには少し弱いんじゃない？

美澄ちゃんはそう言った。

たしかに否定はできないけど、それでもあんなに刺しているのは異常だとわたしは感じていた。

怨恨か、それともそれが条件の術式か。

どちらにせよ、出先で調べられることはないのかもしれない。

「そろそろ帰ろっか、美澄ちゃん」

「んー、りよーかい」

わたしの言葉を受けて、美澄ちゃんは立ち上がった。

今日のところは2人で帰ろう。

せつかくの休日だったのに付き合ってもらったから、帰りにスーパーで美澄ちゃんの好きな甘いものでも買ってあげようかな。

そんなことを考えていたら、

「あつ、ごめん！ 私、少し寄るところがあるんだつた！」

ユキは先に帰ってて。

美澄ちゃんは珍しくそう言った。

いつもなら、わたしと帰ることをなによりも優先するのに……。

まあ、たまにはそんなこともあるよね。

「わかった。あまり遅くならないようにね」

「はい！」

そうして、美澄ちゃんに見送られながらわたしは1人帰路に着いたのだった。

——美澄視点——

無念だ。

こうしてユキを一人で帰すことになるなんて。

本来ならば、休日を無駄にしたと思っっているユキの罪悪感に漬け込み、手をつないで帰ろうと思っていたのに……。

それが叶わなくなるなんて、本当に残念でならない。
いや、むしろこれは怒りだ。

「……隠れていないで出てきなよー」

周囲に響くように、私は声をあげた。

声が響いて数秒後、その人物は私の横の茂みから姿を現した。

髪は短い女だった。青みがかつた黒色の髪。

背は高い。私よりも頭ひとつ以上は高い。

黒い……たしかチャイナ服といったか、そんな服を着ており、相当自分の体型に自信

があるに見える。

そして、特に目を引くのはその左目。眼鏡をしているが、それ越しでも分かる。右目はよくある茶色の瞳。だからこそ、吸い込まれそうな空色の左目が際立っていた。

非術師では決してない。呪術師の中でも異質で、不気味な雰囲気がある。

女は私の視線に構わず、話を始める。

「驚いたわ。呪力は出していなかったはずよ」

「……一日中、嫌な気配があった」

「気配、ときたかあ。それも気をつけたはずだったのに」

そう言って、顔をしかめる女。

しかし、その表情にはどこか余裕が感じられた。

余裕。私よりも強いという余裕だ。

「何者？」

正直、声を張り上げた時には込み上げていた帰路を邪魔された怒りはどこかに消えて

いた。いや、怒りよりも優先する感情ができたと言った方が正確だ。今は警戒の感情が強い。

こいつ、なんだ？

「貴女たちを害するつもりはない。それだけ言っておこうかしら」

「何を根拠に……」

「……うーん、そうねえ」

少し考えた後に、女はそれを口にした。

「あなたが追ってる術師の正体と術式を教える。それでどうかしら？」

「……………」

それはユキが今、求めているもの。

信用するかどうかはともかく、ユキのためになるならば聞くだけ聞いてもいいのではないか。

数秒の思考を経て、私はそれを訊ねた。

女は答える。

「術師の名前は……花房正藤」
はなぼうせいとう

「その術式は『流体操術』。大気中の流体を操ることができる術式よ」

ちよつと待つて。

いきなり、気になる言葉が出た。

『花房』だつて？

「そうね。花房正藤は花房家次男で、花房雪の兄にあたる人物だわ」

「目的は」

「花房雪の抹殺」

少し固まっていた。

十数秒後、私の脳がその意味を理解した。

「待つて。なんで一級術師の殺害と『両面宿儺の指』の盗難が、ユキを殺すことに繋がるの?。」

「それにユキは花房家にはよくしてもらってると言つてた。なんで兄から命を狙われるような事態になるわけ?。」

予想外の答えに動揺してたんだと後になって思う。

矢継ぎ早に問いを投げる私に、女は落ち着くようにと声をかけてくる、が……。

「落ち着いていられると思う!?!」

この女の話が本当ならば、ユキが狙われているのだ。

落ち着いてなんていられる訳がない。

「……………そこまで思われているんだから幸せ者ね」

「いいから!」

「分かったわ。話すから少し落ち着いて聞いて頂戴」

「つ……………わかった」

少しだけ息を吸って、吐く。

さすがに事を急ぎすぎた。

話を聞く。それが今、私がしなきゃいけないことだ。

「まず、花房雪は本当に可愛がられているわ。それは間違いない」
「けれど、それをよく思わない者もいた」

それが正藤ってことか。

でも、可愛がられてるっただけで殺そうとする？

しかも、あのユキを。

「『墮雪』……貴女もそれを知っているわよね」

「!」

「正藤は花房雪と『墮雪』を同一視しているの。呪霊が花房家に存在すること自体、彼にとつて忌むべきことなのよ」

ユキとあの呪霊を同一視？

ありえない。ユキはユキ以外の何者でもないというのに。

「……………愚かな」

「……………ここからが本題よ。正藤は『両面宿儺の指』を雪に取り込ませようとして
いる」

「あ？」

「それで『墮雪』を表に引き摺りだして、自らの手で祓おうとしているの」

その後も女の説明は続く。

実の兄である一級術師・花房はなぶさ在藤ありふじが、他の一級術師が正藤を見つけ出す前に、彼を始

末しようと動いていること。

正藤の術式の対処法。

だけど、やるべきことがハッキリした今の私にはそんなことはどうでもよかつた。

大事なのはひとつだ。

「……………そいつは」

「ユキを殺そうとしている」

「それで間違いない？」

「そうね、間違いない。誓って嘘は吐いてないわ」

それだけハッキリすれば十分。

つまり、『両面宿儺の指』を強奪した花房正藤は私の敵だ。

つまり、私が殺すしかない。

——美澄は知り得ない独り言——

「よろしくね、草木美澄ちゃん」

美澄が去った後、女は呟いた。

薄い笑みを浮かべて。

さらに、彼女はかけていた眼鏡を外し、左目を隠すように覆う。

「しかし、凄い呪力量ね。見てるだけで目に負担がかかるわ」

「それにあの『術式』……あれは雪を守るために使ってもらわなきゃね」

日が沈み、辺りは暗くなる。

その中で彼女の左目だけが怪しく輝いていた。

—————

第9話 些事動乱―参―

|-----|

今日は具合が悪いから休むね。

ユキも今日はゆつくり休んで。

私は翌日、日曜日の早朝にそんなメッセージをユキに送った。

お見舞いに行くというユキの聖母の如き優しさを泣く泣く断る私の心中を誰か察して褒めてほしい。

……いや、やつぱり褒めてもらうならユキ以外考えられないから、褒められなくてもいいや。

ユキに嘘をついちやうのは心苦しいけど、仕方ない。

「これもユキのため」

そんな言葉を口にして、自らを鼓舞する。

さて、これからどうしよう。

花房正藤……『流体操術』とあの女は言っていた。その対処法も話してはいたが、それだけだ。肝心の部分、その男がどこにいるかという情報はなかった。

……ということは、あの女も正藤の所在は分からないということか。

「……仕方がない」

やりたくはない手だったけど、背に腹はかえられない。

私は近くの公衆電話からある場所へ電話をかけた。

—————

「ただいま戻りました」

仰々しい門の前。

呼び鈴を鳴らし、戻ったことを告げる。

寸刻して、門がギギギと大きな音を立て、開いていく。

中にいたのは、この家の家政婦である初老の女性・イチ。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「……お嬢様は止めて、イチさん」

「ふふふつ、旦那様が広間でお待ちですよ」

「はあ、分かった……」

いつもここに帰る時は気が重い。

ここは草木家。

孤児であつた私が引き取られた呪術師の家だ。

———草木家・広間———

草木家の広間には大きな机が置いてある。

長方形のそれで、入って奥側の上座にその人は座っていた。

「帰ったか、美澄」

「はい、お父様」

くさききりゆうべえ
草木琉兵衛。

結界術を得意とする歴代草木家当主の中でもずば抜けた実力をもつと言われている一級呪術師。

勿論、御三家のそれには及ばないが、呪術界においてそれなりの発言力を有する人物である。

もうすぐ70とは思えない鍛え上げられた体から発する圧からも、只者ではないことを感じさせられる。

この人の前では、ユキ以外はどうしてもいいと思っている私でも余所行きならぬ家行きの態度で接さざるをえない。

その程度には私も恩義を感じているから。

「どうだ、呪術高専は」

「はい。多くのことを学ばせていただいています」

「そうか、それは重畳。『お前には』期待しているぞ、美澄」

「……私には勿体ないお言葉です」

私の返答に満足げに頷くお父様。

『お前には』。

ふと、その言葉が引つ掛かった。

「お父様。失礼とは思いますが、兄様に何かあったのでしょうか」

「……」

兄。

軽薄で、だが実力はある兄・咲人の話を振った途端に、お父様の雰囲気が変わった。

今までの圧を感じつつも寛大な様子ではなく、重苦しい雰囲気、ドス黒い呪力がお父様から放出されていると錯覚すらしてしまう。

それほどの負の感情だ。

……もしかしたら地雷を踏んだかもしれない。

「あの馬鹿は知らん。勝手に高専からの任務を受けた挙げ句に、それで負傷しおった」

「！ 兄様が、ですか？」

「ああ。高々呪詛師一匹程度で手こずるとはな」

あの馬鹿のように強い咲人が負傷というのも驚いたが、それよりも……呪詛師、か。
一応、まだ花房正藤は呪術師として扱われているはずだ。
なら、その件は関係ないかな。

「心中お察しします」

「……やはり美澄はあの馬鹿とは違うな」

そう言つて、お父様は立ち上がる。

どちらへ、と訊ねると、これからその咲人のところへ行くという。

病室で怒鳴るお父様と耳を塞いで聞こえないと大人気なく振る舞う咲人の姿が容易に想像できてしまった。

「確か情報が欲しいとのことだったが」

「お父様の手を煩わせるほどのことではありません」

「いつも通りイチに聞くといい。その辺りはすべて一任してある」

「はい、ありがとうございます」

そのままお父様は扉の方へ。

広間から出る直前に、

「どうだ、そろそろ見合いを受ける気になったか」

「……………」

「まあ、ゆっくり考えるといい。高専卒業までは待つという約束だからな」

「……………ありがとうございます」

そう言って、お父様は広間を出ていった。

……………見合い、ね。

それだけは受け入れるわけにはいかないし、受け入れるつもりもない。

—————草木家・資料室—————

草木家の資料室はかなり大きい。

呪術に関連する情報を大きなことから些細なことまで蓄積してあるからだ。草木家の呪術界への発言権は、お父様自身の力も勿論あるが、この資料室の存在がかなり大きかった。

資料室に入ると、いつも通りの埃っぽい空気を感じた。

毎日掃除はされているが、ここに保管されている物自体が古いことや立地が地下室ということもあり、どうしてもそうなってしまふ場所だった。

「あら、お話は終わったのですか、美澄様」

資料室の奥。

ポツンと置かれている椅子に彼女は静かに座っていた。

イチさんだ。

彼女はここを自室としており、家政婦としての仕事をしている時以外は常にここにいる。

草木家にとっての力の根底ともいえるこの資料室を自室に割り当てられる所以は、その能力の高さだ。

資料室に置かれているすべての資料の配置は勿論、その内容すら記憶しているらし

く、また、情報整理や・処理能力に関しても、常人とは比べ物にならない。恐らく彼女がいなくなったら、この家の力は急速に衰退するだろう。

「とりあえずね。また、お見合いのこと言われて、イラついてるけどさ」

「仕方ありません。咲人様は家を継ぐことを放棄されておりますから、家の存続を考えるとやはり美澄様しかないのですよ」

「……………私にはユキがいるし」

「……………そうですねえ。困りました」

そう言つて微笑むイチさん。

呪術界に身を置くにも関わらず、柔らかなその笑みは流石としか言い様がないなあ。

ちなみに、私がユキを愛しているのを唯一知っている人物でもある。

勿論、『手段』については知らないけれども。

「そういえば、また咲人やったの？」

本当は早く花房正藤のことを聞こうと思つていたんだけど、つつい関係のない他愛

もない世間話をこちらから始めてしまうのは、イチさんの人柄の賜物、なんだろう。

イチさんは困ったように眉を下げ、私の言葉に答えてくれる。

「はい、そのようです」

「呪詛師にやられたって聞いたんだけど」

「昨晚のことです。深夜、渋谷の路上で気を失っていた咲人様を、通行人が発見し通報したようで、救急病院に運び込まれたとお聞きしました。腹部には刺し傷があったらしく……」

「……また女の人にやられたんじゃないやなくて？」

前科がある。

6股をかけた挙げ句、4人から刺されたんだっけ？

あれ？ それは3回目の話だったっけ？

「旦那様もそれを疑ってらしたのですが、倒れていた際の咲人様の症状がどうもおかしかったようで」

「？」

「刺し傷が13箇所ほどあったにも関わらず、その場には血が一滴も流れていなかったように」

「！ それ！」

イチさんの話に、思わず大声をあげてしまった。

イチさんは、どうしたのですか、と少し驚いた様子で私に聞いてきた。

それだ！

複数の刺し傷と残っていない血痕。

あの時の状況と、私が調べている状況と一致する。

つまり、

「ねえ、イチさん！」

「は、はい」

「花房家に関する情報ってある？」

「はい、勿論把握しておりますが……雪様のことでは何か……？」

まあ、ユキのことと言えばもちろんそうなんだけど。

今回聞きたいのは、

「花房正藤のこと……特に、その人の行きそうな場所の候補分かる？」
「そちらも把握しておりますよ」

流石、イチさんだ。

これで一步奴に近づくはずだ。

ユキの命を狙うという愚か者に。

—————

第10話 些事動乱―肆―

―――渋谷・喫茶店―――

イチさんからの情報によると、花房正藤には行きつけの喫茶店があるらしく、私はその店の前にいた。

近年、喫茶店がブームということもあって渋谷にも続々と開店している中、大きな通りから少し入ったところにあるところに、その喫茶店はある。

喫茶・サルビアと書かれた看板を見上げ、私はそのまま店に入った。

カランコロンとベルが鳴る。

内装はよく見る落ち着いた雰囲気 of 喫茶店。カウンター席が何席もあり、4人がけのテーブル席もある。

喫茶店の店主らしき男性がお好きな席へどうぞ、と告げた。

周囲を見渡し、それらしき人の近くへ。

「あんたが花房正藤?」

「……………そうですが、何かご用でしょうか？」

カウンター席に座り、珈琲を啜るその男は私の質問を肯定した。

この男が花房正藤。ユキの兄で、ユキを殺そうとしている呪術師。

ぱつと見、そうは見えない。穏やかな笑みを静かに浮かべながら、受け答えできる理性的な青年に見えた。

だが、その実は――

「……………」

「中々の呪力量ですね」

本来ならば、ここで殺し合いを始めてもいいんだけど、客が少ないとはいえ人目があ
る。事情の知らない人間からしたら、私はただの殺人犯になってしまう。

ユキと一緒にいられなくなるのは、困る。

やるなら見つからないように、そして確実に。

「私は草木美澄。ユキの友達」

「ああ、草木家の……養子に入られたという」

「どうやら私のことは知っているらしい。」

「なら、話は早いかな。」

「話がある。着いてきてくれる？」

「構いませんよ」

「一見にこやかに見える表情のまま、それだけを答えると、正藤は席を立ち、店主に声をかけた。」

「また来ます」

「お待ちしております。」

「そんな言葉と共に丁寧に一礼する店主を背に、私と正藤は喫茶店を後にした。」

「……神社……」

渋谷の裏路地を通り、さらにその奥。

渋谷にも関わらず、人氣がまったくといっていいほどない寂れた神社に私は正藤を連れてきた。

その道中も、正藤は抵抗する様子もなく、ただただ着いてきた。呪力の揺れも波もない。穏やかなものだった。

「これはこれは……中々に立派な神社ですね」

こんな場所があるとは知りませんでした。

正藤はそう言って、苔むした鳥居を眺めている。その様子に、私は少し苛立っていた。

「……話の内容分かっているでしょ」

「さて。私には皆目検討もつきませんが」

あくまでも、白ばつくれるってこと？

そう聞くと、正藤はクスリと笑った後に言った。

「愚妹のことでしょうか」

愚妹……？

「ああ、いや。愚妹というのも嫌ですね」

「……ユキはあなたの義妹でしょ」

「いえいえ。止めてくださいよ、気持ち悪い」

「愚かで弱くその上邪悪な——人と呼ぶのも反吐が出る——そんな生きる価値もない人間擬きのこと……妹なんて呼べるわけじゃないでしょう？」

正藤はにこやかにそう言う。

次の瞬間には、私は奴の懐に入っていた。

そして、

——バギッ——

呪力を纏わせた蹴りを、奴の側頭部に叩き込む。

完全に捉えたはずだった。

だが、奴の頭と私の足の間には水が割り込むように存在し、それに私の蹴りは止められていた。

『流体操術』……聞いていた通りだ。

「物騒ですね。よくありませんよ」

「うるさいッ!!!」

連撃。

鳩尾へ、脇腹へ、膝関節へ、顎へ。呪力を廻し、ひたすらに蹴る。

けど、そのすべては奴に届いていない。

「うっとうしいッ!」

「……おや、少し呪力が上がりましたね。そんなに愚妹のことを気に入っているのですか」

「らあッ!!」

ーギリギリギリギリー

「!」

『廻』を解放し、足に触れている箇所の水を削り取る。

それを見た正藤は後方に跳び、距離をとった。

聞いていた対処法が通用している。それが分かれば十分だ。

「殺すッ」

一気に距離を詰め、呪力を廻した足でその首を刈り取ー

ーザクッー

「っ!?!」

間合いに入ったその時、攻撃のために一步踏み込んだ左足に激痛が走った。

「~~~~~ッ」

普通の痛みではない。ただの刺し傷では私は止まらないはず……ということとは、

「『流体操術』。どうやら私の周りの壁を削り取った様子を見るに、私の術式への対処法をご存じのようですね」

「しかし、詰めが甘いですよ」

そう言つて、正藤は地面からあるものを拾い上げた。

それは無色透明な刃物のような物体。頭に血が上つていたとはいえ、視界は良好だったはずだ。

「そんなものは、なかった……」

「不勉強ですね。流体……簡単にいえば、力を加えることで簡単に形が変わる物質のことです。つまり、この刃は……」

無色透明な刃物は奴の手の上、空中で形を変える。刃から球体へ。

それは液体だった。

「種明かしをすればこんなに簡単なことありませんが、傷痕を見れば分かるでしょう」

傷痕は刺し傷。血も流れてはいる。

だが、あの液体と触れた部分はまるで火傷のような状態になっていた。やっぱり普通の水じゃない。

「濃硫酸ですよ。私の術式は水以外も操ることができますから、液体自体の殺傷力が高いものの方が殺しやすい」

「呪詛師も、呪術師も、化け物も」

「……………」

奴はにこやかに嗤う。

不愉快な笑みだ。こんなものでユキを殺そうとしているのか。

こんなに痛い思いをユキにさせようとしているのか。

それは実に、

「腹立たしいっ」

「それはこちらの台詞です。いきなり攻撃をされるなんて心外です」

「あんたがユキを殺そうとしているからだッ!!」

「どこからその情報を……兄様でしょうか。それともー」
「うるさいっ!!」

左足の痛みにはもう慣れた。

こんな痛みでは、私はもう止まらない。

ーバギツー

「ぐっ……!?!」

そのまま、左足で奴の腹部を蹴り抜いた。

奴はそのまま後ろに吹き飛び、神社の賽銭箱に体を打ち付けられる。

「流石は草木家の呪術師……。事、結界術に関しては他の術師から頭一つ抜きん出ていますね」

奴の刃への対策。

それは体全体に纏った呪力の膜。この膜は結界術の応用で、呪力を感知する効力をもつ。膜に他の呪力が触れた瞬間、体を強制的に反らすことができる。その上で、『廻』を使えば、あの硫酸の刃は通じない。

今度こそこのまま……。

そう思い、もう一步確実に『廻脚』が奴の首をへし折れる間合いまで入ろうとして――

――バチンッ――

弾かれた。さつきまでの水を削るような感覚ではない。

見れば、正藤の周りを囲うように薄黒い膜が張られていた。

「これは……」

正藤自身はそれを不思議そうにしている。

ということとは……いや、その膜には覚えがあった。

瞬時に展開し、内外からの出入及び干渉を一切受け付けなくする結界術。そんなものを展開できる術師を、私は一人しか知らない。

神社の鳥居の上。

罰当たりにもそこに立つ人物を私は知っている。

自分以外を小馬鹿にしたような振る舞いと態度。軽薄な口調も聞き飽きている。

その上、切れ長の目や高く通った鼻。日に焼けた褐色の肌と特徴的な八重歯、などと妙に女受けのいい要素を詰め込んだ遊び人。

「よお、妹！」

「……咲人」

草木家長男・一級呪術師草木咲人がそこにはいた。

—————

第11話 些事動乱―伍―

「咲人！ 何の真似!!」

鳥居の上に立つ兄・咲人に向けて叫ぶ。

ユキを殺そうとしているこの花房正藤を庇うなんて……。

正気の沙汰じゃない!

「落ち着けよ、妹」

「つ、落ち着いてられるか！ こいつを殺さなきゃユキがッ！」

「ん？ 雪ちゃん？」

気がつけば、一瞬で咲人は私の隣に移動していた。

「なんだ？ 雪ちゃん絡みなのか。よく分からんが、お前は雪ちゃん絡みのことになると必死だなあ。まあ、雪ちゃんは可愛いから気持ちは分かるが」

「お前に、分かってたまるか……！」

「分かるさ。ありやあいい女だ。やっぱり兄妹だけあって、女の好み似ているなあ」
「っ」

「まあまあ、クールになれよ。俺が止めてなきや、お前死んでたぜ」

軽薄に笑いながら、咲人は私の肩に腕を回してくる。

「こいつはっ！」

「っ、触るな！」

「おー、怖い怖い」

「咲人、その辺にしておけ」

咲人と言いかい合っていると、鳥居の向こう側から男の声があった。

男は鳥居をくぐり、堂々と境内の中心を歩いてくる。

私には聞き覚えのない声だった。だが、その風貌は咲人が今、結界に閉じ込めている正藤にどこか似ている。

「結界術への集中がぶれるだろう。今優先すべきことを間違えるな」

「あー、すまんすまん。高専に入学して家を出た妹に久しぶりに会ったもんでな」

そうか。この人がユキのもう一人の兄、花房家長男・花房在藤。

正藤を追っているという一級呪術師か。

「兄様、やはり貴方でしたか。彼女に私のことを教えたのは」

「……何の話だ」

「とぼけないでください。貴方が、私があの人間擬きを処分しようとしていることを教えたのでは……?」

「私がここに来たのは、アイヌ呪術連の一級呪術師・早雲雉臣氏の殺害と特級呪物『両面宿儺の指』に関する件だ」

「ああ、それだけですか」

正藤の前に、その兄・在藤が立ち、何か会話をしていた。ここからじゃその内容は詳しく分からないけど。

「おー、正藤。昨日ぶりだな」

「……咲人くん、昨日確実に殺したと思ったのですが」

「お生憎様、俺は相当にタフなんでな。同級生なんだからよ、高専時代から知ってるだろう？ その上、在藤の反転術式でこの通り！ なんだったら、いつもよりも体が軽いくらいだ」

これもお前がいい感じに瀉血してくれたお陰だな。

そう言つて、咲人は得意気な顔を正藤に向けている。

奴のにこやかな笑みにほんの少し陰りが見えた気がした。

「さて、正藤。これからお前を本家へ連行する。異論は一切認めん」

「……それは困りましたね」

困つたと言う割には、正藤は落ち着いた様子。そして、何かを懐から取り出した。

赤色の球体。あれも何かの液体か？

でも、それがどんなものであれ、咲人の結界を破れるほどの力があるとは思えないけど……。

それでも咲人と在藤は動いていた。

「在藤！」

「分かっている。結界を解け、ここで正藤を拘束する」

「ーバシユツー」

「もう遅いですよ」

咲人の結界が解除されると同時に、正藤はその赤色の球を足元に向け、投げつけた。

瞬間、辺りに赤く染まった煙と強い匂いが立ち込める。

なんの匂い？ 甘くて焦げ臭い、まるで花が焼けるような匂いだった。私は思わず鼻を手で覆う。

煙幕？ それとも毒性のある煙？

それには咲人たちも思い至っていたようで、彼らも鼻を手で覆っていた。

「……………来ましたか」

赤の煙が広がって数秒後、その気配が近づいてきた。

それは呪霊のものだった。ただ、一体や二体じゃない。十体……いや、裕に二十は超えている。

「呪霊を引き寄せる類いの香か」

「『耐呪結界』！」

煙がこれ以上広がる前に、咲人は広域に呪霊を閉じ込める結界を発動する。

「っ、奴は!?!」

気づけば、正藤の姿はない。

その場にいる人間の意識が呪霊に向いたその数秒で、正藤の呪力はこの場から消えて

いた。

「くそっ!!」

奴を、ユキを狙う愚か者^ゴを逃^ミしてしまった。

これは……大きな失敗だ。

———草木家・広間———

神社に集まった呪霊を祓除した後。

咲人に連れられ、私は草木家に戻ってきた。

花房在藤も同行している。

ちなみに、広間にはお父様の姿はない。咲人曰く、お父様はまだ病院からの帰り道と
のこと。どうやらお父様をここから連れ出すために病院にいるなどという偽の情報を
流したらしい。

「いや、病院にいたのは本当だぜ? 30分くらいで在藤が着いたからとつと出たけ

どな」

「それより、どういうつもり？」

咲人へ訊ねる。

なぜ私を邪魔したのか、と。

私の問いに、悪びれる様子もなく咲人は答える。

「いやいや、言ったじゃねえか、妹よ。あのままだとお前死んでたんだ。結界術も中途半端、『廻』なんて弱い術式しかないお前じゃ、殺されることはあれ正藤を殺すなんて出来るわけがねえだろ」

むしろ助けたんだ。感謝しろよな。

本当にこの男は苛つく。文句の一つでも言おうとして、

「……我が家の不始末に関わらせて申し訳ない」

在藤の言葉に止められた。

我が家の不始末……それは正藤の行動そのものだろう。

「早雲薙臣氏の殺害の情報が入ってきた時、既に私と咲人は動き出していた。刺殺にも関わらず血液がその場に残らないなどという奇妙な状況を作り出せる人物は限られているからな。そして、咲人が襲撃され、正藤本人を目撃したことで、その犯行を確信した」

その後、すぐに咲人を反転術式で治し、正藤を探している途中に呪力を感知し、あの神社に馳せ参じた。

在藤は事のあらましをそう語った。

「君は、雪の友人だったな。雪から話は聞いている。仲良くさせてもらっていると」
「……………」

「君を巻き込んでしまったこと。重ね重ね謝罪しよう。なぜ君が正藤と戦っていたのか、正藤が何を考えているのかは分からない。だが、後は私がケリをつける」

これは花房家の汚点だ。

在藤は苦虫を噛み潰したような表情でそう言う。

……………なるほど。

この件から他の一級術師や私を引かせて、秘密裏に葬り去り、事実を正藤ごと抹消しよう算段というわけか。

平安から代々続く呪術師の家系である花房家長男として、思うところがあるんだろ
う。在藤は真つ直ぐに私を見つめてくる。

「そつちの事情は分かった」

「それはありがたい」

「だけど、私にも譲れないことがある」

譲れない。許せない。

ユキに害が及ぶことならば。

なによりあいつが口にしたことが、許せない。

「……………それは雪に関係しているんだな」

「奴はユキを殺そうとしてる」

「それは確かか」

「間違いない、とは言えない」

「だけど、奴はその口でユキに生きる価値がないと言った」

「私はそれが許せない」

私の言葉を聞いて、在藤は不意に目を閉じた。

そのまま続ける。

「……………花房家長男として、本来ならば止めるべき場面だ」

「……………」

「だが、雪の兄として、雪のために動く君を否定はしない」

それは私の行動を黙認するということだろう。

「だが、奴は生きて連行する。目的を吐かせなくてはならない。それにあの呪霊を呼び寄せる呪具がどこから流れたかも確認する必要がある」

「殺さないで、引き渡せということ？」

「ああ」

頷けるはずもない。

ユキを狙っている人間がいるならば、そいつは殺してユキの安全を確保しなきゃならない。

だけど、ここはフリでもいいから、話に乗っておこう。

在藤と咲人、そして、私自身が奴を探すのならば、1人で探すよりも短時間で奴の居場所を特定することができるはずだから。

「分かった」

「奴の居場所を特定し次第、連絡はする。そちらも連絡をするようにしてくれ」

私は在藤の言葉にとりあえず頷いた。

「咲人、いいな？」

「在藤がそう決めたなら、俺は従うさ。だが、妹は本当に弱いぜ」

「……………」

この兄様は本当に苛つく男だった。

—————廃屋—————

「ふう……参りましたよ」

花房正藤はポツリとそう漏らした。

独り言、ではない。

彼の側には人影がひとつ存在していた。

女。

その顔は一般的に美しいと言えるものであった。

年齢は20代後半だろう。痩せ形の長身。

艶やかな長い黒髪に、吸い込まれそうなほどの漆黒の瞳。

道を歩けば、男が自然に集まってくるような外見。

だが、その外見には一切の意味がない。

なぜなら、その姿は『仮初』のものであるから。他人から奪い取った姿形であるから。

「どうやら儂が渡した物を使ったようじゃな」

「ええ、助かりました。確か草木美澄といいましたか、彼女だけなら何も問題はありませんでした、流石に兄上と咲人を一度に相手にするのは分が悪い」

年寄りのような口調で、女は正藤に語りかける。

「肉親を一人殺す。相変わらず何を考えているか分からん」

「肉親ではありません。そもそも人間ですらない。あんなものが家に存在することが許せないだけですよ」

にこやかに、正藤はそう言った。

「まあ、いい。あの呪物の情報さえ渡すならば、協力は惜しまん」

「勿論ですとも。死人すら甦らせる特級呪物『降霊杖』……その在処は必ずお教えします。私があの人間擬きを処分した後で」

|
|
|
|
|
|
|

第12話 些事動乱一陸一

————呪術総監部より通達————

早雲薙臣の殺害に関して。

1、殺害に関わった人間を特定。死刑

死刑執行役として花房在藤と草木咲人を任命する。

2、他の呪術師は今後この件に一切関与しないこととする。

————雪視点————

土曜日に美澄ちゃんと一緒に捜査して。

日曜日は美澄ちゃんが体調を崩したって言ったから、わたしは美澄ちゃんには黙って、とある調べ物をしていた。

そして、今日、月曜の朝にその通達が呪術高専を通して、所属するまた、高専と協力関係にある呪術師に知れ渡った。

さて、その日の朝、1年教室でのことだ。

「美澄ちゃん、体調は大丈夫？」

「うん、ダイジョブ！ ありがと、心配してくれて！」

ウキウキとした様子で、美澄ちゃんはそう答えた。

「ねえ、美澄ちゃん。朝、寮の掲示板に貼ってあった通達見た？」

呪術総監部から出る通達は、ほぼすべてが重要なものであり、それは高専の寮にも貼り出されることになっている。掲示板は寮の玄関付近にあるから、高専生は必ず目を通しているはず。

「ん、ああ、見たよ」

やっぱり美澄ちゃんも見ていたようで、わたしの言葉に頷く。ただ、あまり興味はなさそうだけど。

「どうしようね……」

「……まあ、仕方がないんじゃない？ 総監部からの通達だから」

破ると処分対象になりそうだし。いくらユキが犯人を突き止めたいとはいってもさ。

そう言つて、美澄ちゃんはひとつ欠伸をする。

……あれ、なんだろう？

今の美澄ちゃんの発言、少し違和感があるような……？

「それにしても、咲人とお義兄さんが執行人に指名されるとは思わなかったね」

「え、あ、うん。そうだね」

気のせい、かな？

隣で笑う美澄ちゃんはいつも通りに見えた。

————美澄視点————

月曜日の放課後は、真っ直ぐ寮に帰った。

ユキを自室に送り届けてから、私は寮を出た。

勿論、花房正藤の搜索のため。

恐らく私たちが授業を受けている間も、咲人や在藤は搜索を続けているだろうが、連絡がないことはまだ見つけていないということか。まあ、向こうが律儀に連絡をくれるとは限らないけれど。

「……………3人、かな」

とりあえず今、寮の側にいる何人かの呪術師は、きつと在藤が護衛として配置した人間だろう。

私の呪力感知能力は、ユキほどではない。それでも今いる呪術師はなんとなく感知できた。

それから、あともう1人。

「またいるよね？」

寮から少し離れたところでそう声をかけた。寮の監視ではなく、私を監視するように追ってきた呪術師に。

「参ったわね、またバレちゃった」

そう言つて、チャイナ服の女は茂みの中から現れた。

呪力も気配も消してはいたようだけど、それでも女の気配の異様さは隠せない。眼鏡の奥に光るその空色の左目の不気味さも。

「こんなに簡単にバレてしまうなら、引退した方がいいかしら」
「……………」

肩を竦めてみせた女は冗談めかして笑う。

「たぶん、あんたの言つてたこと合つてた」

「正藤に会つたのね」

「……………会つた」

会って確信した。

あれはユキのことを人と思わず害を為そうとする愚^カか者^ミであると。

この女が味方である保証はないけれど、それでもこの女の情報で先手をとれたのは大きい。

そして、

「あんたがここにいてるってことは、また情報をもってきたってことでもいい？」

「察しがよくて助かるわ。その通りよ」

「……………」

この女は少なくともこちらを陥れようとはしていない。それが間違った情報ではないならば、こちらとしてはユキを守るために使わせてもらうだけだ。

「正藤の居場所を知りたい、ということでもいいのよね？」

頷く。

女はすんなりとその情報を私に伝えた。前回はそうだったけど、その対価は求めてこない。

「今度は聞いてくれないのね。私は何者か」

不意に、女はそんなことを口にした。

……ああ、そういえば前回は聞いたな。でも、今はそれはどうでもよかった。今の私にとつて、優先順位一位は奴を殺し、ユキを守ることだから。

「……………あんた」

「それ、イヤね。あんた呼びは流石に少し傷つくわ。これからも仲良くしてもらおう予定なんだから」

「……………」

仲良く、する気はないけれど。

ユキに有利になるなら、名前くらいは聞いておこう。

「名前は？」

「色々と事情があつて、本名は明かせないけれど」

「私は『五条』」

「ただの呪詛師よ」

空色の左目をもつ女はそう名乗った。
『五条』と。

第13話 些事動乱―漆―

―――都内23区外・森林公園―――

「来るならば、咲人くんか兄様かと思っていたのですが」

『五条』からの情報通り、奴はそこにいた。

録に整備もされておらず街灯もない、ただただ暗いその場所でも、奴が笑っているのが分かり、そのにやけ顔に不快感を感じる。

なんで笑っていられるのか理解に苦しむ。

「咲人くんから忠告を受けていましたよね。貴女では私に勝てないと」

「うるさい」

「お兄さんの話は聞くべきだと思いますが」

「……お前が『兄』について語るなよ」

「……本当に分からない人ですね。あれは人間ですらないと言ったでー」

ーバギツー

「吹き飛べッ」

呪力を帯びた不意討ちの一撃は、奴の腹を捉えた。
後ろに跳んだ正藤へ追撃に走る。

「『廻脚』」

ーブンツー

横に薙いだその攻撃は脇腹に命中した。
呪力を廻し、そのまま奴の肉を抉る。

「不意討ち、とは……ですが、その程度の攻撃で私を倒せるとも思いましたか」
「！」

そう言うと、奴は私の足を掴んだ。本来ならば、高速で回転する呪力で掴もうとする手は扱られる。だから、掴めるはずはないのに、奴は掴んだ。

その手には呪力と共に、さっきの不意討ちで奴自身が吐いた血液が纏わりついていた。

「潜ってきた修羅場が違います」

「ーボギッー」

「〜っ!?!」

突如掴まれた足に走る激痛。

呪力は帯びていたはず。それでも私の右足は奴に折られた。

術式だけではない。それほどの攻撃力を奴はもっている。

「っ」

堪らず、残った片方の足で距離を取った。

「私も貴女のことを調べさせてもらいました。その歳で準一級……確かに強い」
「……………」

「呪力量もまあ多い方でしょう。術式『廻』は強い方ではありませんが、それを補うほどの戦闘センスをお持ちのようだ。前回の戦闘でもそれは発揮されていました」

「だが、所詮はそれだけです。一級とは天と地ほどの差があります」

滔々と語る。

準一級と一級は違う。

それは私も知っている。

「けど、お前を放っておく理由にはならない。ユキに手を出させるわけにはいかない」
「……………素晴らしい友情ごっこですね」

喝いた拍手をする正藤。

数秒後、正藤はそれを止め、掌を私の方へ突き出した。

「仕方がありませんね。言っても聞かない子供にはそれに相應しい最期を与えましよう」

奴がそう口にした瞬間、呪力が跳ね上がる。

今まで2倍近いそれを醸し出したまま、奴は両の掌を上へかざした。

「流体操術・極ノ番『流々翼下』りゅうりゅうよくよつか」

それを告げた途端に、文字通り空気が変わる。

見た目に分かる変化ではない。

どこか重苦しい空気感……いや、その認識は間違っている。

重苦しいとかいう問題じゃない。

これは……体が、動かない……？

「極ノ番『流々翼下』は大気中の流体、空気や水を支配下に置く術です。それを使い、あなたの周りにある空気を固め、身動きがとれない状態を作り出しました」

「呪力消費は大きいですが、極ノ番発動中は何者も動くことすら叶わない。絶対支配の

力です」

術式を開示しながら、動けない私に奴は近寄ってくる。
そして、

ーグサツー

「後は私の前で立ち尽くし、殺されるのをただ待つだけ」

私の左腕を刃物で突き刺した。

右腕。下腹部。右胸。脇腹。喉。左腹。

そこから先は覚えていない。

何箇所も、何十箇所も、私は刺され続けた。

どれくらい経っただろうか。

今まで固まっていた体が急に崩れ落ちる。それから、急速に私の体から血が抜き取られていくのが分かった。

死が目前まで近づいている。

それを体を感じ取っていた。

「……………安心してください。すぐにあの人間擬きもあなたと同じところに送ってあげますから」

「……………」

声は出ない。出すことができない。

倒れた私に背を向けて、奴はそのまま立ち去ろうとしていた。

恐らく放っておいても、私は死んでいく。そう思ったんだろう。

正解だ。

私はこのまま死んでいく。

ただし、それは。

あの『術式』がなければ、の話だ。

————正藤視点————

呪力を感じました。

死んでいるはずの彼女・草木美澄から。

思わず振り返ると、ちょうど彼女が立ち上がるころでした。

「…………なぜ、生きています…………？」

体には複数の刺し傷。

それに加えて、血もそのほとんどを吸い尽くし、体外へと霧散させたはずです。

なのに、生きています。生きて、起き上がっている。そんなはずはない。あり得ない。

可能性としては、『廻』という術式で自らの体を無理矢理動かしている？

彼女のセンスであれば、ない話ではない。

そう感じましたが…………いや、これは……………。

「異常ですよ、貴女」

「……………」

「貴女、一体なにをしてー」

ーグンツー

気づいた時には、彼女が私の懐にいました。

そして、右腕が私の眼球をー

ーグチャツー

「あゝ ああゝ ああつ?!?!」

ー 抉られた。

抉り取られた。

「つ、はっ！ なにをして、いるツ!?!」

「なんなんだ、おまえはツ!?!?」

「なぜツ、死な……ないんだツ?!」

残った左目で見える。

なんだ、あいつは、なにをした、なんで生きてる、なんで何でなんで。

いや、いやいやいやいや、待て。

……冷静になれ、花房正藤。

何をしたかは今はいい。考えても仕方がない。先ほどは油断していただけだ。

極ノ番『流々翼下』を発動する呪力ならある。できて一回……ほんの十秒ほどだろうが、発動しさえすれば、片方の視界を失ったという不利も帳消しにできる。

治療は、そのあとに考えろ。

まずは、目の前のこいつを確実に殺すことだけを考えろ。

『流々ー』

「……………」

術式が発動するよりも前に、あいつは無言で、私から奪ったその眼球を握り潰した。そしてー

『りんねふくげん
輪廻復原』

——私は、私に殺された。

——都内・大型霊園内——

「これは……どういことだ」

花房正藤の呪力を感知したという部下からの報告を受け、花房在藤が現場である都内の大型霊園に到着した時には、既に正藤は息絶えていた。

その死に様は凄惨で、体には数百か所の刺し傷があり、特に、彼の顔はその原型を留めていなかった。

「おいおい。なんだよこれ」

「……分かん」

草木咲人と共に、その場に立ち尽くす。在藤。

血を分けた実の弟が死んだ。

勿論、そのことにも少なからず衝撃は受けていたが、彼が早雲薙臣を殺害した際に、彼が死ぬ覚悟はできていた。自ら手を掛けずとも処刑されるであろうことは分かり切っていたから。

だから、在藤が立ち尽くした理由は他にある。

その現場はまるで――

「正藤の仕業みたいじゃねえか」

咲人が口にした通り。

その現場は、正藤が犯した殺人現場の様子と同じく、遺体の損傷具合に反して、その場に血痕が一滴も残っていないという異常な光景であった。

「まさかこの死体が偽者か？」

「いや、それはないだろう。顔は判別できないが、呪力の残穢は確かに正藤のものだ」

「……自殺、ではねえよな」

「そんなことをする人間ではないのは、私が一番分かっている」

「……だよな」

こうして、一級呪術師・花房正藤の謀反は、本人の原因不明の死亡により幕を閉じた。花房在藤の工作により、表向きは正藤は失踪。裏へは在藤・咲人による処刑として処理された。

また、件の特級呪物『両面宿儺の指』も彼の遺体から回収され、呪術高専忌庫に保管されることとなった。

—————

アイヌ呪術連所属の呪術師の殺害。

名家花房家の呪術師の謀反と死亡。

これらは些事である。

これから起こる事件と比べたら、戯れと言っても差し支えのない出来事であった。

—————

第14話 恒久的な日常について

—————渋谷・喫茶店—————

例の事件の2日後。

私はユキと出かけていた。所謂デートである。

喫茶店巡りをして、珈琲や甘いケーキに舌鼓をうつ。呪術師としての収入があるからこそできる、普通の学生ではできない贅沢なデートだ。

「高専様々だねー」

「う、うん」

さて。

問題はこのユキの様子だ。

なにやら今日はどこか上の空というか、そんな雰囲気だった。

理由はハッキリしている。

「…………お兄さんのこと？」

「…………うん」

ユキの兄。

在藤ではない方、つまり、私が殺した花房正藤のことだ。

「失踪だって？」

「うん。昨日、在藤兄さんから聞いたんだ」

「ふーん」

私の残骸が見つからないように、殺した後に死体を霊園まで『運ばせた』のは正解だったみたい。

その死体は無事、花房在藤に発見され、処理されたようで、表向きは失踪したということになっているようだった。

「ユキはそのもう一人の…………」

「正藤兄さん？」

「そう。その人と仲良かったの？」

「……………良くはなかったかな」

むしろ嫌われてみたい。

そう言つて、ユキは切なげに笑う。

「きつと、わたしを疎んでた」

「なんで？ ユキはこんなにいい子なのに？」

「……………わたしの中にあるモノが、やっぱり気に入らなかつたみたい」

「それじゃ、そんな奴いなくなつたっていいじゃん」

「そんなことないよ。家族だもん」

嫌われていたとしても家族だから。

突然いなくなつてしまつたら悲しいよ。

ユキはまた下を向く。

「そういうものかね」

私には、ユキの言うことがよく分からなかった。

————呪術高専寮————

1日のデートのあと、私はユキを部屋に招いていた。

なんとなくこの間までの忙しさや一緒にいれなかった時間を取り戻そうと思ったから。

ユキはそれを快く受け入れてくれて、結局今日は私の部屋に泊まっていくことになった。

「わたしの部屋、隣なのに泊まる意味あるかなあ……」

苦笑するユキの意見は、今回ばかりは却下する。

同室と別室には大きな差がある。例えばそれが隣の部屋だとしても、だ。

「まあ、いいけど」

「ヤツタ！」

「今日だけだよ」

「もちろん！」

なんだかんだ言ってもユキだって私に甘い。

ユキのお願いを私が無碍に断れないように、ユキも私のお願いを聞いてくれることが多いんだ。

今日だけなんて言いつつも、この間も私の部屋に泊まってくれたこと、ちゃんと覚えてるからね。

そんな甘いところも好きだ。

「美澄ちゃん、そろそろ寝よつか」

「はーいー！」

何気ない話で盛り上がって、壁にかけてある時計が日付が変わったことを知らせる。それを合図に、私たちは就寝することに決める。

本当はもつと話をしていたいけれど、明日も授業はあるから仕方がない。

……少し前に同じ状況で、ワガママを言つて夜更かして遅刻をしたことがあり、それ以来そういつたことがないように2人で約束をしたのだ。

私は授業なんてどうでもいいんだけどね。

「……つて、美澄ちゃん」

「ん？ なに？」

「今日もそつちでいいの？」

そつちというのは、床に敷いた布団のことである。備えつけのベッドとは別に、入寮と同時に任務で稼いだお金で買ったものだ。こういう時用に準備したものなんだから、私は床に敷いた方で十分。

「いいの！ ユキはお客様なんだから、床じゃなくて、そつち使つて」

「う、うん……美澄ちゃんがそれでいいなら……」

本当は一緒に寝たいくらいだけど、それを伝えるのはぐつと我慢する。優しいユキの

ことだから、それでもいいと言われてしまっただろう。
……そうだったら、それこそ私は眠れないし。

「おやすみ、美澄ちゃん」

「おやすみ、ユキ」

互いにその言葉だけを交わし、目を閉じた。

—————

どれくらい経っただろうか。

私は、不意に覚醒した。

いや、正確には不意にはない。呪力を感じて、目が覚めたんだ。
この呪力は……。

「おお、起きたか」

「……………『墮雪』」

目の前にいたのは、ユキの姿をしたユキじゃないモノ。

特級仮想怨霊『墮雪』。

ユキの中に入り込んでいる呪霊だった。

「お前、なんで!?!」

「こいつが寝ているからだ。それに思ったよりも呪力が溢れていてな。こうして、表に出たのだ」

「っ」

そうか。忘れていた。

今日は28日。『呪吐』のろいはきの2日前。

そのせいで『墮雪』が顕現できる呪力がユキの中に残ってしまっている。

「……………暴れるなよ」

「それは無理な話だ。体が鈍って仕方がない」

「お前、ふざけてー」

「ふざけてなどいないさ。こうして出てこられるのも一月に一度なのだ」
「……………」

「お前も分かっているだろう？」

それが当然と言わんばかりに、こいつは長い前髪をかきあげながらそう言った。
暴れさせろ、と。

さもなくば…………。

「俺がその気になれば、この娘などすぐに殺せる」

「っ、やめろ」

「止めるかどうかはお前次第だ」

「…………分かった」

「聞き分けができるのはいいことだ」

邪悪に笑う『墮雪』。

いつもは見えないその瞳は、いつもとは違う青い光を放っていた。

ユキの顔で、そんな表情をするな。

広い場所にも出ようか。

そう言う『墮雪』に領き、私と奴は部屋を出た。

————呪術高専運動場————

「ふむ……中々に広く、いい場所だ」

準備体操をしながら、そう言う。

そうか。

前にこいつが表に出てきたのは、4月6日。私が高専に入学してから初めての任務に行つたときだった。

……今月はこれで2度目。出てくる頻度が明らかに増えている。

この前に表に出てきた時は外だったから、呪術高専を見るのは初めてで、奴は物珍しそうに辺りを見渡していた。

「施設案内だけで引つ込むつもりはない？」

「フツ、あるわけないだろう」

分かっていたけど、提案は却下される。

……分かつてる。その軽口は自分を奮い立たせるためだ。
奴の強さは私が一番分かつてるから。

「闇より出でて闇より黒くその穢れを禊ぎ祓え」

——ズズズズ——

『帳』を下ろす。

高専の敷地内で呪力の行使があれば、気づかれる。『墮雪』ほどの呪力ならば尚更だ。
そうなれば、高専側にもこの事態——『墮雪』の顕現に気づかれてしまうだろう。

だから、私は『帳』を下ろした。

この『帳』にはすべての人間・呪霊の出入りを禁じる効果を付与してある。私が死ぬ
か自分の意志で解除するまでは上がらない『帳』。

これで、最悪の事態だけは回避する。

最悪の——ユキが『墮雪』もろとも殺される事態だけは避けなくちゃならないんだ。

「…………『帳』か。わざわざ広い場所を区切るなど…………無粋なことをする」

「こうでもしないと、邪魔が入るでしょ」

「……………なるほど。撤回しよう。粋な計らいだ」

奴は納得したように頷く。そして、

「では、早速始めようか」

邪悪な笑みを浮かべる。

それを見て、私は構えた…………はずだった。

私が呪力を自身の体に張り巡らせるその刹那に、奴は既に私の視界から消えていた。

「どこを見ている?」

「ーバギイッー」

「がッ!?!」

腹部への衝撃。

殴られた後になって、私は殴られたのだと理解した。それほどに一瞬の出来事だった。

速い、とかいうレベルじゃない。

これでただの呪力強化だということのだから恐ろしい。

「ぐ……っ」

「おお、倒れんか。お前、人間にしてはやはり中々ではないか」

「では、もう一度」

「ードゴツー」

「あ、がつ!？」

今度は拳が顎に入る。

頭が、脳が揺れ、足に力が入らない。

「これも耐えるか」

「あ……………うあ……………」

「いい……………が、なんだ。もう意識が飛びかけてるではないか」

「あ……………つ、ふつ……………ふうつ……………」

奴の耳障りな声を聴きながら、どうにか意識を保つ。

だけど、ここから攻撃に転じる余裕はない。

術式さえ使えれば……………いや、まだダメだ。まだ準備ができてない。数も質も足りない。だから、今はとにかくー

ーバチンー

「ぎッ、っ!」

気づけば、私の目の前には奴の顔。

「起きたか？」

「な、に……………した……………」

「ただの気付けだ。まだ始まったばかりだぞ。起こしてやったのだから、ありがたく思

え」

「くくつ！」

「こいつツ！

「ん？ どうした？」

「……………はやく、ユキに体をかえ、せ…………」

「冗談を言うな。精々散歩程度にしか体は動かせてない。この程度では一日分にもならん」

「っ」

散歩程度。確かに大して時間は経っていない。

私を痛めつける労力は散歩と変わらないらしい。

「く、くくつ…………」

「ん？」

「言って…………くれるッ」

腹部。そして、脳へのダメージは大きい。けれど、絞り出す。

呪力を『廻』せ。

「っ、『廻脚』ツ!!」

脚の周りを高速で廻る呪力。

それを、奴の足元へ、地面へ叩き込む。

「ほう」

狙いは体勢を崩すこと。

そして、『廻』で削った瓦礫を空中へ舞い上がらせ、奴の視界の一部でも奪うこと。

その隙に、一瞬で全呪力を脚に廻す。

こいつがやった呪力強化による超速度の真似事だ。普通にやったんじゃ簡単に破られる技だ。

だけど、視界の一部でも奪われていけば、ほんの少し反応は遅れる。死角が生まれる。そこを突けば――

――ガシッ――

「発想は悪くない。だが――」

足を掴まれたのが分かった時には遅く。

そのまま、私の世界は暗転した。

――――

全身を走る酷い痛みで目が覚めた。

ゆつくりと、どうにか目を開けると、真っ先に私の視界に飛び込んできたのは、涙を流すユキの姿だった。

どうやら、無事にユキに戻れたらしい。よかった。

……そういえば、と。

見える景色と頭に当たる柔らかな感触から、今の私はユキに膝枕をされているのだと

気づく。

状況だけ見れば、喜びたいところだけれど。

「ユキ……」

「み、すみっ……ちゃん……っ」

流石の私もこんな泣き顔のユキを見たら、そうも言ってもらえなかった。

「ごめんねっ……ご、めんっ」

きっと何があつたか全てを理解しているんだろう。

「ダイジョブ、だよ……」

「……っ、ごめんっ……わたしのっ、せいでっ！」

違う。違うよ、ユキ。

ユキのせいじゃない。

それに、こんなのは苦でもなんでもないから。
だから、泣かないでいいんだよ。

「……………ごめん、ごめんなさいっ」

ダイジョブ。

そう言っただげる前に、私はまた意識を手放してしまった。

—————記録—————

1987年4月28日。

呪術高専運動場にて、特級仮想怨霊『墮雪』の顕現を確認。

それに伴い、応戦した準一級呪術師・草木美澄が重傷を負い、意識不明となっている。
花房雪に関しては、経過観察。

草木美澄の意識が戻るまでに、花房家にて『呪吐』の儀を執り行うこととする。

また、月一度行われていた『呪吐』の儀を月二度に修正し、花房雪の体内から『墮雪』が顕現するための呪力を取り除くように、花房家へ通達した。

〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕

第15話 呪吐壺

————呪術高専寮前————

4月28日深夜。

呪術高専の寮前に一台の車が止まった。

運転手は、

「在藤兄さん」

わたしの兄、在藤兄さん。

在藤兄さんは普段から車に乗っており、任務も補助監督をつけずに自分で運転することが多く、今日の迎えにも1人で来たようだった。

「支度は済んでいるか」

「はい……大丈夫です」

身支度は済んだ。

惜しむらくは、美澄ちゃんの側にいけないこと。

「今は余計なことを考えるな」

「……………」

兄さんの口調はいつもぶっきらぼうだ。

だけど、それはわたしを氣遣つてのことだって分かった。

わたしがその考えに至らないように。

「最善の処置は施した。後は彼女の回復力次第だ」

「ありがとう、ごこざいます」

「……………」

お前のせいではない、とは決して言わない。

だって、兄さんは嘘はつかないから。氣遣つてはくれる。けど、甘やかしてはくれな

い。

分かってる。これは紛れもなくわたしのせいだ。

……そもそも、あの日、わたしが『墮雪』を身に宿さなければこんなことにはなっていないんだ。

美澄ちゃんを傷つけるようなことにもー

「雪」

「っ」

「あり得ない仮定の話を考えても意味はない。今できることをやるしかない。違うか」

「……はい。その通りです」

今、わたしにできること。

それはすぐに花房家に帰り、『呪吐』を行うこと。

自分の呪力を少しでも吐き出して、これ以上の『墮雪』の顕現を回避することだ。

例え、それが耐え難い苦痛を伴うとしても。

「行くぞ」

「はー」

—————

「ん……」

眠っていたのだと理解した。

同時に、飛び起きる。

「ユキ!!」

周囲を見渡しても、彼女の姿はない。

遅れて、ここが呪術高専の医務室であることに気づく。

自身の体の傷を確認すると、綺麗に治っている。相当に腕のいい術師による反転術式。残穢を辿れば、これが花房在藤のものであろうことが分かった。

「……………」

状況から考えるに、あの後、意識を取り戻したユキによって、または『帳』を感知した高専関係者によつて、ユキと私は発見され、総監部へ連絡がいった。

『墮雪』の顕現ともなれば、当然、花房家の人間が招集される。恐らくそれが在藤だったのだろう。彼は私の傷を反転術式によつて治療し、ユキを『呪吐』のために連れて、花房家へと戻つていった。

そんなところだろうな。

「くそっ……」

静かに、吐き捨てる。

ユキのためならば、なんでもする。

その決意は決して嘘ではない。覚悟だつてある。けれど、私にはまだ力が圧倒的に足りないんだ。もし今、『墮雪』とユキを分離したとしても、私じゃ『墮雪』は祓えない。

まだ3年ある？

いや、もう3年しかないんだ。

「私は……」

「起きましたか」

ベッドの上で体だけを起こし、自分の力のなさを嘆いていた私に、声をかけた人物。医務室の入口に目をやると、そこには担任である佐木が立っていた。ずつとそこにいたわけではなく、偶然立ち寄ったら私が起きていたといったところだろう。この人に教え子を心配するような人間性はないのは知っている。

「佐木……」

「花房さんなら花房在藤一級術師に連れられて、本家に戻りましたよ」

予想通り、のようだ。

これから『呪吐』の儀が行われることも。

「まったく理解に苦しみます。なぜ彼女にそこまで固執するのか」

「……………分からなくて結構」

「理解する気もありませんが」

それより、と興味もなさそうに佐木は話を進めた。

「あなたにお客様です」

客？

こんな状況で誰が？

そう思い、医務室の入口を注視すると、そこにいたのは知らない着物姿の女だった。だが、どこかで見覚えがあるような……？

「失礼いたします」

その声には、心当たりがあつた。

「『五条』……？」

「？」

一瞬、あの女かと思つたのだが違う。

確かに、色白な肌と青みがかつた黒髪。そして、顔立ち。

異質な気配までも、目の前の女性は『五条』と同じ。

けれど、この女性は違う人間だとハッキリ分かる。

髪も長いし、なにより嫌でも目につく空色の瞳は、『五条』が左なのに対して、この女性
性は右。

「誰だ？」

「お初に御目にかかります。わたくしは東坊城天蓋ひがしほうじょうてんがいと申します」

丁寧にお辞儀をする東坊城天蓋と名乗つた女性。

その姿勢だけでも、育ちのよさを感じ取れた。

でも、なんでこんな人が私を訪ねてきたんだ？

「僕はこれで失礼します」

自分の役目は終わったとばかりに、佐木は医務室を後にした。
なるほど、この人を連れてくるためだけに佐木はここに来たのか……。

「……………」

「……………」

私と東坊城の間に沈黙が流れる。

待っても埒が明かないか？

なら、私から話を振ろう。私も暇じゃない。どうにかして力をつけなきゃならないんだから。

「私になにかー」

「ー 『墮雪』の拔除のお話です」

私の言葉を遮るように、彼女は口を開いた。

私に『墮雪』の被除の任が命じられていることを知る人間は数少ない。

私自身と呪術総監部の人間くらいだ。

ならば、この女は、

「総監部の人間？」

「当たらずも遠からずです。わたくしは総監部の者ではありません。ですが、貴女がその任に就いていることは存じ上げております」

「……話が見えない」

総監部ではない。だが、総監部ではなければ知り得ない情報を知っている。

なら、この女も上から話を聞いているということ？

そう訊ねると、東坊城は否定した。

「いえ、順序が逆なのです。総監部からそのお話をお聞きしたのではなく、わたくしが総監部の方々にお伝えしたのですよ」

3年後、『墮雪』が五条悟を殺す。

私もそれを聞いたのは、呪術総監部からだった。

その総監部に伝えたのがこの女……？

「っ！」

「はい。そうです」

「わたくしがその未来を『予知』しました」

ずっと疑問だった。

なぜ3年後に五条悟という人間が生まれることが分かるのか。

なぜその五条悟が呪術師最強になり得ることが分かるのか。

そして、なぜ『堕雪』が五条悟を殺すことが分かるのか。

そのすべての答えが、この女だ。

『予知』と言った。

胡散臭い。けれど、なぜか納得している自分もいた。

「今から2年と7ヶ月後……生まれてくる五条悟を『堕雪』は殺します。そうならば、世界の均衡が崩れ、呪詛師と呪霊が跋扈する世界に変貌します。その未来を回避するため、わたくしが貴女をこの任に就かせるよう指示しました」

「……………」

なぜなんだろう。今の私では『墮雪』には決して届かない。

私以上に強い術師はいくらでもいる。雪の兄・在藤や咲人も、私よりは強い。それでも、私に『墮雪』を殺させようとするのは……？

「いいえ、貴女でなくてはならないのです」

「『墮雪』を拔除できる可能性があるのは、貴女と貴女の術式『輪廻復原』のみ」
「ですから、わたくしの力を貴女にお貸しします」

要領を得ない。

この人は何を言おうとしている？

私の疑問に、彼女は微笑みながら答えた。

「『領域展開』」

「それが使える段階まで、貴女を引き上げてみせましょう」

|
|
|
|
|
|
|

第16話 呪吐一式一

『呪吐』の儀。

それは対象を『放出』の術式効果が付与された結界で囲うことで、対象の呪力を強制的に体外へと抽出する儀式のことだ。

主に、呪力量はあるものの呪力制御の未熟な者への処置の一つとして、花房家に伝えられてきた。

高い呪力もち生まれてくる子が多い花房家だからこそその儀式。

その中でも、わたしは異質だった。

実子でなく、呪力量自体もそこまで多くはない。

それにも関わらずこの『呪吐』の儀を行うのは、勿論わたしの内にいる『それ』のせいだ。

—————

「うっ、おえッ……」

嘔吐する。

吐瀉物が床に不快な音を立てて、撒き散った。

喉を通っていくその感覚はいつまで経っても慣れずに、涙目になってしまう。

「はぁ……はっ……はぁ……」

もう嫌だ。いつも思う。

でも、これからは決して逃れられない。

わたしを囲うように結界が張られているし、逃げ出さないように監視もついている。

花房家に引き取られてすぐの『呪吐』で、わたしが逃げ出そうとしたことが原因なんだけど。

あの頃はこの儀式が嫌で嫌でしょうがなかった。

けれど、今は『呪吐』が必要なことだと分かっているから。

「……続けて、ください」

息も絶え絶えになりながらも、そう伝える。

再び来るのは、あの嫌悪感と胃から迫上がってくる感覚。

ービシャツー

吐き出す。

それと同時に、呪力もわたしの体から放出され、そのまま霧散していく。

苦しい。けど、これは必要なことだと。

こうでもしないと、わたしの体は『墮雪』に乗っ取られてしまう。

そうだったら、わたしは多くの人を傷つけてしまう。

現にー

「み……すみ、ちゃ………っ」

ービシャツー

がんばれ、わたし。

——花房邸・雪自室——

「お疲れ様でございました」

花房家の使用人のひとりだが、無表情にお茶を差し出してくる。

せつかくけど、そのお茶は断った。

今、飲むとそのまま戻してしまいそうだったから。

「承知いたしました」

使用人の人が部屋を出ていったのを確認して、わたしはベッドに体を投げ出した。

疲れた。気持ち悪い。

未だに吐く時の感覚が残ってる。

5時間もぶつ通しだったから、それも仕方がないことだけど。

でも、その甲斐あってか自分の中に呪力がわずかしか残っていないことが確認でき

た。

「よかった……」

安堵のため息をもらす。

『呪吐』の後、食欲もなく気分も最悪ではある中で、唯一安心できるのがそれだった。

呪力の枯渇。

呪術師としては不安材料でしかないのだけど、依代としてはありがたい話だ。なぜならわたしの呪力がなければ、『墮雪』は顕現できないから。

安心。安堵。束の間の平穩。

……でも、毎回思う。

「美澄ちゃんには言えないや」

花房家に引き取られてから続くこの儀式の詳しい内容は、美澄ちゃんには伝えていなかった。

花房家相伝というのもあるし、何よりわたしが苦しい思いをしていると知ったら、美

澄ちゃんは怒ってしまふ。きつと怒り狂って、ここに殴り込みに来てしまふだろう。

「ユキを返してもらおう……なんて言っちゃうかも」

そんな美澄ちゃんを想像して、思わず笑みがこぼれた。

こんな時でも美澄ちゃんのことを思うと、少し気分がよくなる。楽しい気分になれる。

改めて、わたしは美澄ちゃんに救われているのだと実感する。

「……早く、会いたいな」

『呪吐』後は体調が回復するまでの約2日間、花房家で過ごすことになる。『墮雪』が顕現しないか様子を見るって節もあるんだろうけど。

だから、美澄ちゃんに会えるのは早くて2日後。

「……はあ」

ため息も出てしまう。
早く時間が過ぎないかな。

—————

翌日。

体も昨日よりは楽になったこともあり、1ヶ月ぶりの邸内散歩を楽しんでいると、

「雪様」

後ろから、わたしの名前を呼ぶ女性の声があった。

振り向くとそこにいたのは、在藤兄さんの妻、つまりはわたしの義理の姉に当たる人
物・花房圭はなぶさけいさんだった。

「圭さん」

「お体の調子はいかがですか？」

「お陰様でだいぶよくなりました」

「それはなによりです」

柔らかな物腰の女性だ。

わたしのことを雪様と呼ぶのは、昔のー彼女が使用人だった時の名残で、在藤兄さんの結婚直後に呼び方を変えてもらおうとしたものの失敗したのは、いまは笑い話だ。

「呪術に関することはさっぱりですので、雪様のお力になれないのが残念で仕方ありません」

そう言って、圭さんは少し寂しそうな顔をする。

彼女は呪力はおろか、呪霊を視認することすら出来ない。知識として少しは知っているけれど、元々の才がないのだから仕方ないことなだけけれど、圭さんはそれを本当に負い目を感じているようで、たまにそんな表情を見せる。

でも、

「大丈夫ですよ。圭さんはそのままでもいいければ」

「ですが」

「在藤兄さんもきつとそう思ってますよ」

「……そうでしょうか」

「そうですよ」

在藤兄さんは花房家のために尽力する人だ。

そのために自らの命すら削るような人。

けれど、その兄さんの行動で唯一、それから外れているのが、この圭さんのことだった。

家のことを思えば、他の呪術師の家系からの縁談も来ていた中で、それらをすべて蹴って、この人と結ばれたのだから、兄さんの圭さんへの思いはきつと理屈なんかじゃないのだろう。

それに兄さんが圭さんに呪術の世界に触れてほしくないであろう理由が、もうひとつ。

「それに、圭さん一人の身体じゃないんですから」

「……はい。そう、ですね」

そう言うと、圭さんは少し照れたようにはにかみ、お腹を撫でた。

まだ一月目だから、気が早いかもしれないけど、わたしもその時が楽しみだなあ。

——花房邸・大広間——

散歩途中に、お手伝いから言伝を受け、わたしはその足で大広間に来ていた。

中で待っていたのは、在藤兄さん。

当主が座るはずの上座に座っていた。

数年前、現当主である花房憂蘭はなぶさゆうらんが寝たきりになってから、実質の当主は兄さんに移行

しているため、高専に入学するまではその光景も見慣れていたものだ。

けど、今日は見慣れない光景もあつて。

「や、雪ちゃん。今日も可愛いね。前髪切ったら、きつともつと可愛いのに」

「咲人さん……」

草木咲人。

美澄ちゃんのお兄さんがそこにはいた。

正直な話、わたしはこの人が苦手だ。

前に、美澄ちゃんも言っていたけれど、見るからに軽薄で、話すともつと軽薄で。わたしには理解できない人種だと思っている。

だから、なぜこの人が在藤兄さんと友人なのも分からなかった。

「咲人は私が呼んだ」

恐らく態度に出てしまっていたんだろう。

在藤兄さんから説明をされてしまった。

いけない。いくら苦手とはいえ、お客様であることには変わらないのだから、気をつけないと……。

「雪。お前に2点伝えなければならぬことがある」

「はい、なんででしょうか」

「まず呪術総監部より『呪吐』を月二回に変更するように通達があった」

「っ……はい」

薄々予想はしていた。

前回の『墮雪』顕現から一月以内。

期間が短くなっている。つまり、月に一度の『呪吐』ではわたしの呪力量の回復に追いついていないということだ。

苦しい、けれど、これは仕方がないことでもある。

わたしが秘匿死刑とならずに生き続けるため、兄さんが総監部に掛け合ってくれた結果なのだろうから。

受け入れる。

「もうひとつだが、現当主・憂蘭が死んだ」

「え？」

こちらは完全に想定外のことだった。

そして、さらに予想外のことを兄さんの口から告げられる。

「それに伴い、雪を花房家当主とする」

「……………え?」

今、なんて…………?

「お前が今から花房家の当主だ」

「え、え?!」

混乱。

なんで、わたし?

だって、わたしは養子だし、今までは兄さんが当主としての仕事をしてきたのに?

「すべてはお前が生きるためだ」

「……………それって」

「花房家は呪術界において、草木家と並んで、御三家に次ぐ力をもっている。それは理解しているな?」

それは知っている。

草木家は情報を司る家系として、花房家は生まれ代る子供の呪力の高さや術式の強さから呪術界で比較的大きな力を有している。

事実、正藤兄さんの『流体操術』や当主・憂蘭の『固定硫化』。

その上、在藤兄さんは自身の術式に加えて、反転術式まで使えるというように、術師としての格はかなり高い。

「でも、なら……わたしが当主になる必要は……」

「単なる術式の話ならば、私が当主になる方が理に叶っているだろう。だが、お前の内には『墮雪』が宿っている」

「っ」

「私が当主になったとして、発言力は今よりも明らかに低下する。御三家や総監部がお前を引き渡せと言われれば……正直な話、引き渡すしかなくなるだろう」

それほどまでに、今までの当主であった憂蘭の発言力は大きかった。

在藤兄さんは淡々とそう言う。事実のみを告げる。

「だが、もしお前が当主になるのなら、話は変わる。発言力は私が当主になった場合よ

りは落ちるだろうが……」

「花房家の当主の秘匿死刑や引き渡しを要求することはできないから、ですか」
「その通りだ」

憂蘭の後ろ楯がないとはいえ、花房家当主ともなればある程度の発言権は保証される。当主自身の身柄の引き渡しなど論外だろう。

「憂蘭の遺言もなく、今は正藤もない。私とお前が決めれば、それは花房家の総意となる。反対する者などいない」

「……………」

「当主としての務めならば、私がいるうちは補佐することもできる。心配する必要はない」

悪い話ではない、と思う。

けれど、それには強い意志が必要だった。

今のわたしじゃあ、

「一週間、待とう」

決められない。

俯きかけたわたしに、兄さんはそう提案してくれた。

一週間、時間をやろうと。

花房家当主となるのには相応の覚悟が必要。早まった判断は逆に自らの首を締めるからと。

「ありがとうございます……」

そう返すしかなかった。

ありがたい。

だけど、それで覚悟が決まるかどうかは、今のわたしには分からなかった。

「……雪の知り得ない会話……」

「一週間ねえ……在藤よお、甘やかしすぎじゃねえか？」

「そんなことはない。当主となる覚悟を固めるにはむしろ短すぎるくらいだ」

まだ年端もいかない女子ならば尚更。

在藤はそう呟いた。

そんな彼を茶化すように、咲人はこの先を続ける。

「本当に正藤とは正反対だな」

「……………」

「もし、雪ちゃんが当主になりたくないってなら言えよ。そんなときは最終手段をとろうじゃねえか」

「お前に雪は預けたくはないんだがな」

「俺は大歓迎だぜ。雪ちゃんみたいないい女を嫁に貰えるならな。多少当主様として働くのは面倒だが」

咲人を雪の夫として、婿に迎えること。

雪には話さなかったが、在藤はその可能性も視野に入れていた。

雪のため。そして、花房家のため。

そもそも現在の『呪吐』は花房憂蘭の呪力や知識に依存している部分があり、彼の死後にそれを補うためには、結界術の知識と技術を有する者を招き入れる必要がある。

その条件を満たす者として、咲人以上の人材はいない。

外部の者として協力を求めるより、内部に取り込んでしまった方が花房家にとってのリスクは少ない。

そのための策ではあったが……。

「雪の判断を待つ。この先はその上で決めることだ」

—————

第17話 離

————呪術高専1年教室————

1987年5月2日。

在藤兄さんから指定された1週間のうち4日が経過していた。

時間がないにもかかわらず、わたしの中でまだ答えは出ていなかった。それどころか日に日に大きくなっていつてるモヤモヤはわたしの脳内を支配してしまっている。

「ユキー？」

「っ、ごめん。ボーツとしてた」

「また？ ダイジヨブ？」

そのせいで、最近はうわの空になってしまふことも多くて、美澄ちゃんに何度も心配されてしまっている。

わたしの顔を覗き込む美澄ちゃん。わたしの目は前髪に隠れて見えないはずなのに、

美澄ちゃんの視線はいつもわたしのそれとちゃんと交差してる。そこから考えを見透かされる気がして。

「っ」

思わず目を、顔を反らした。

「ユキが言いたくないなら聞かないけどさ」

「……………うん」

言いたくない、訳ではない。むしろ話してしまいたい。

話して、美澄ちゃんに止めてほしかった。

わたしが当主になる、なんて。

そんな馬鹿げた可能性をいつものようなパワーで却下してほしかった。でも、

「これは……………わたしの問題だから」

「……そっか」

強がって笑う。

きつと美澄ちゃんには見抜かれてたろうけど。

「それより、怪我は大丈夫？」

「もうう、ユキ、それ何回目？」

「あ、えつと……」

「気にしなくてダイジヨブ！ 昨日も一昨日も話したけど、ユキのお義兄さんに治してもらったし。それに元々外傷は酷くなかったみたい」

「なら、いいんだけど」

見た目には確かに外傷はなく、普段通りの動きができているようだった。

やっぱり美澄ちゃんの言う通り、気のせいなのかな？

「それより、ユキ！」

「え、あつ、なに？」

「明日の任務の後さ、また出かけようよ！」

明日の任務。たしか、高専の近くに発生した呪いを祓いに行くんだよね。それなら終わった後でも遊べる、かな？

「うん。わかった」

「よしっ!! 明日が楽しみだなあ」

「……うん」

そう……だよ。やっぱり気のせいだ。

美澄ちゃんはいつもと変わらない。

呪力量が減っているのは、きっとわたしの勘違いだろう。

そうして、わたしはその違和感に蓋をってしまった。

—————

1986年5月3日深夜。

美澄ちゃんは呪術高専の医務室に運び込まれた。

今度は『墮雪』の暴走ではない。単に、任務で祓除するはずの呪霊にやられた。

『準二級呪霊』相手に重傷を負ったのだ。

その呪霊自体は、深手を負った美澄ちゃんを庇いながら、どうにかわたしでも祓うことができた。言ってしまえば、その程度の相手。わたしでも祓える相手だったのに。

そんな術式ももっていない相手に、美澄ちゃんはやられた。

「……美澄ちゃん」

ポツリと、医務室のベッドの上で横たわる彼女の名前を呼ぶ。

だけど、返事はない。

当たり前だ。辛うじて心臓には傷がなかったものの、肺を貫かれた。一時、生死の境を彷徨うくらいには重傷だったから、こうして自力で呼吸ができてるのが奇跡のようなものだ、治療してくれた呪術師の人も言っていた。

「どうしちゃったの、美澄ちゃん」

……在藤兄さんから聞いた話では。

準一級の呪術師が準二級呪霊相手に敗北したという事実を受けて、呪術総監部は美澄ちゃんの等級を準一級から準二級へと引き下げないように審議している最中だという。

「あの時……呪霊と戦っていた時の美澄ちゃんは、いつもの美澄ちゃんじゃなかった。呪力量がかなり減っていて……」

「っ、わたしが気づいてたら……」

任務前にわたしが感じたあの小さな違和感は本物だったんだ。気のせいなんかじゃなかった。

わたしが『呪吐』に花房家に行っていた間に、美澄ちゃんに何か起きた。その結果、美澄ちゃんの呪力が減っていた。

そう考えるのが自然だ。

「っ……みすみ、ちゃんっ」

ぎゅっと美澄ちゃんの手を握る。わたしと変わらない手。

こんなに……小さかったんだね。

そうだよね。美澄ちゃんもわたしと変わらない女の子なんだもん。少し強いだけの女の子。

なのに、わたしはそれを忘れてた。思い返せば、美澄ちゃんに頼ってばかりだった。

「雪」

背後から声。振り返らなくても、それが在藤兄さんのものだと分かった。

「医師からお前がここにいと連絡を受けてな」

「……はい」

「草木美澄の容態はどうだ？」

「……安定は、してるみたいです。あとは安静にしていれば1週間もすれば、というお話でした」

「そうか」

在藤兄さんはわたしの隣に座る。なにか思うことがあるのか、しばらく美澄ちゃんの

様子を見た後に。

「彼女はお前の友達だったな」

「はい」

大切な友達だ。

「友達は大事にしろ」

「はい……………」

分かってる。わたしのことをここまで大切にしてくれる友達は他にいないことなんて、分かりきってる。

大事にする……………したいのにつ！

「わたしには力が足りないっ……………友達ひとり守れないっ」

つい溢れた言葉は止まらない。

わたしがどれだけ彼女に守られていたのか。

わたしがどれだけ彼女に頼っていたのか。

わたしがどれだけ彼女を大切に思っているのか。

まとまらないままの言葉を、吐き出していく。

在藤兄さんはそれをただ黙って聞いてくれていた。

わたしの気持ちを、聞いてくれていた。

やがて。

言葉は止まる。

そして、わたしは――

「在藤兄さん」

「わたしは花房家当主になります」

――そう、口にしていた。

――

花房在藤より報告。

花房家当主・花房憂蘭の死亡を確認。

それに伴い、花房雪を花房家次期当主とする。

呪術総監部はこれを正式に受諾し、花房雪を呪術高専より除名した。

――――

転化

第18話 1988年4月

—————

1988年4月。

ユキが高専を去ってから1年の月日が経った。

この1年間は地獄の日々で、私の目の前には色彩を失った世界が広がっていた。任務自体は私の等級が準二級に下がったこともあって、難しいものは回ってこなかったけど、それでも手一杯で。

—————

「……お体の具合はいかがですか？」

「東坊城」

「またも任務で呪霊にやられて、寮の部屋で休んでいた私の元へ来たのは、東坊城天蓋だった。私を鍛えると言い、例の『縛り』付きの結界を私に施した人物。その成果は残念ながら未だに出ていないけれど。」

「それでもありませんよ。貴女の呪力はわたくしと出会ったその時よりもずっと洗練されておりますから」
「どうだろうね」

「自分ではそれを実感できない。1年経った今でも、呪力を上手く練れず、かなり低質で少量の呪力で戦うしかない状況だし。」

「この前も二級呪霊にやられるという失態を犯したばかりだ。」

「そう落ち込まないでください。貴女に施した結界は、結界内である程度の呪力を練ることができれば解除されますので」

「頑張ってくださいね。」

「東坊城はそう言って微笑んだ。」

「……それで今日は何の用事？ ただお見舞いに来た訳じゃないでしょ」
「相変わず察しがよくて助かります。草木美澄さん、ひとつ呪術界の人間として、貴女にご依頼したいのです」

穏やかな笑みを携えて、彼女はそう告げた。

「どんな依頼？」

「最近、呪術高専所属の呪術師が殺害されるという痛ましい事件が起こっております。その調査をお願いしたいのです」

「……それ、呪霊のせいじゃないの？」

「いえ。明らかに人為的なものです。ただ、少々不可解な点もあります」

「……まあ、いいけど。そもそもあんたが『予知』をすればいいんじゃないの？」

そう。東坊城の術式『予知』があれば、この先の未来の展開を見ることができては
はずだ。ならば、その過程で犯人を知ることできる。なのに、それを使わないのは
……。

そんな考えはすぐに彼女に否定される。

「前に少しお話ししましたが、『予知』はそう簡単に使えるものではありません。条件が揃わなくては一寸先のことも見えませんか」

そういえば、前にそんな話も聞いたっけか。正直、あまり興味がないから忘れていた。ともかく、調査ということであれば、準二級術師の私に依頼されるのも、まあ納得といえれば納得。

……それで、だ。

「……で、何が不可解なの？」

その一言は流石に引つ掛かった。

呪術に関することなんて不可解なことだらけ。その中でも不可解なんて言葉を使うんだから、相当なことのはずだ。

予想通り、東坊城は頷く。

「眼球や脳幹——遺体の一部がなくなっているんです。その部分だけ、すつぽりとね」
「……一部が、ない？」

それではまるで、私の……。

—————

「在藤兄さん」

中庭での鍛練の最中。わたしの背後に立っていた在藤兄さんに、声をかけた。

「ずいぶんと呪力感知の精度が上がったようだな」

「いえ、そんなことはありません」

「謙遜するな、事実だ。当主になる前のお前では感知できないほどには俺も呪力を絞っていた。それにもかかわらず、俺がここにいることに気づいたんだ。誇つていい」

「……ありがとうございます」

この1年間、わたしは鍛練を欠かさなかった。

呪力感知。呪力操作。そして、呪力量を増やす訓練もした。

その結果、今のわたしは、

「雪……いや、花房家当主・花房雪準一級呪術師に総監部から任務の依頼が来ている」

「……はい」

準一級にまで昇級していた。そして、先日、兄さんと共に向かった一級昇級のための任務も遂行した。だから、今回の任務を経て、わたしは一級術師になる。ただし、この任務はわたし1人で行う必要があつて。

不安ではあるけれど、それでもわたしは進まなきゃいけないんだ。美澄ちゃんの側に立てる、肩を並べられる呪術師になるために。

「任務の概要をお聞きします」

「ああ。任務内容は、最近多発している呪術師の殺害事件の解明と処理だ。それについては、前にお前に報告したことがあつたな」

「はい、覚えています」

その話は少し前に聞いていた。花房家当主としての仕事には、そういった呪術にまつわる事件の処理も含まれているからだ。

報告によれば。

ここ最近、高専に所属している呪術師数人が殺害されたという話。その遺体の一部が欠損していたという話も聞いている。欠損部位は眼球や脳幹という報告も覚えてる。

「呪霊による殺害……でしょうか」

「いや、恐らく呪詛師によるものだろう。呪霊によるものにしては、遺体が綺麗すぎる」

「……………」

ふと頭の片隅にとある疑惑がよぎった。

……いや、そんなことはない。そんな風に、報告を聞いてから考えないようにしていたことが、今蘇る。

「……………1年前にも似た事案はあった。準一級呪術師・要田純の殺害にも共通点がある」

「っ、それは……………」

覚えてる。美澄ちゃんとの任務に行った時に会った呪術師。あの人の遺体からも脳幹が切り取られていたという話だった。

……あの時、要田さんの死に際を確認したのは彼女だ。

彼女の報告から、呪霊の行動であることが判明したんだった。

「雪」

「……………はい」

「これは俺の私見だが、この任務の鍵は恐らく……」

「……草木美澄だ」

「二級術師として、お前を一級へ推挙した者として、助言をしよう。まずは彼女の身边を洗え」

「……………通達……………」

準一級呪術師・花房雪の一級への昇級任務。

殺害された高専所属の呪術師4名の死の真相を解明せよ。

また、それに関与したと思われる呪詛師を発見し、処刑せよ。

| | | | | | | | | |

第19話 裁断欠如―壹―

呪いの媒介として、肉体から切り離された部位を使うことには理由がある。その一部を呪力の道標として、本体へ呪いを伝播させるためだ。

代表的なものとしては、白装束を纏い、呪う対象の髪や爪など、体の一部と藁人形を釘で打ち付ける儀式・丑の刻参りがある。それを術式として確立した『すうれいじゅほう芻霊呪法』なるものも存在する。

草木美澄の術式『輪廻復原』もその類いの術式であった。

生きている状態の人間の眼球もしくは脳幹を切除し、自らの手で破壊することで『輪廻復原』は発動する。その存在と術式効果を知るのは現状、本人と東坊城天蓋、そして『五条』のみである。

――――

1988年4月6日。

呪術高専の入学式の日である。

そうはいっても、学校自体の性質上、その年に必ず新入生がいるとは限らない。呪術師自体の母数が少ないからだ。そのため、今のところは今年の新入生はいないらしく、1ヶ月だけ通っていた1年教室は、机もなくがらんとしていた。

わたしがそこに立ち寄ったのは、ある人物から呼び出させていたから。その人物は、教室の中に1人佇んでいた。

「佐木先生」

「時間通り。流星は花房家当主です」

呼び出された相手は佐木先生。

わたしが高専に在籍していた時の担任の先生だった。

その当時は一級術師だということしか知らなかったけれど、今は立場上少し裏の事情を知ってしまっている。

「……なんの（ご）用ですか」

「そう警戒をしないでくださいよ。僕はただ総監部の人間として、貴女を呼んだだけですから」

「それなら尚更です」

そう。佐木先生は呪術総監部の人間。

非術師の家系の出でありながら、呪術界の総本山に入った異色の呪術師だ。

『呪吐』は継続されているようですね。呪力を随分と絞っているようだ」

「……毎月の報告しているはずですよ」

「報告の偽造なんていくらでもできますから。そもそも総監部自体が自分以外信用できない人間の集合体ですよ」

僕を含めて。

感情を感じられない声で、佐木先生はそう言った。やっぱり、少し苦手。

ともかく、今回呼ばれたのは、わたしという『墮雪』の依代が本当に『呪吐』の儀を行っているか総監部の人間の目で直接見るため、ということなんだろう。

「ご用はこれで終わりですか。なら、失礼しまー」

「草木美澄」

「っ」

話を切り上げようと踵を返したところに、その名を出され、わたしは動きを止めた。ゆつくりと、佐木先生の方に向き直り、問う。

「美澄ちゃん何か……今、どこに？」

「任務です。といっても、僕はもう彼女の担任ではありませんから、その内容は知りませんが……」

「？」

2年生になって担任が変わること自体は珍しくはない。

疑問に感じたのは、任務の内容を知らないという方だ。いくら担任ではないとはいえ、でも、教職員であれば、それ以上に総監部から入り込んでいる呪術師ならば、その任務内容くらいは把握していて当然のはず。わたしに、いや、『墮雪』に近い位置にいた美澄ちゃんという呪術師を放っておくのは違和感があった。

総監部の人間が触れない立場に、美澄ちゃんはいるってこと？
……まさか『天元』様関係の？

「草木さんは東坊城天蓋という人間と行動を共にしています」

「東坊城……？」

ふと浮かんだ考えだったけれど、どうやら違うらしい。

『天元』様とは関係のない名前だとは思う。

けど、東坊城、東坊城……？

どこかで聞いたことがあるようなような……思い出せない。

「彼女を訪ねるならば、東坊城天蓋のことを調べておくといいでしょう」

相変わらず温度のない声で、佐木先生はそう告げる。

きつとわたしが美澄ちゃんに会おうとしていることは見破られていたんだと思う。
だから、そんな助言をした。そこにどんな思惑があるのかは分からないけれど。

「ありがとうございます、佐木先生」

「いえ。花房家当主様のお役に立てたならば何よりです。今後ともよろしく願います」

そうして、わたしは1年教室を後にした。

—————

在藤兄さんから、美澄ちゃんを調べろと言われ、わたしは真つ先に呪術高専へ連絡をした。もちろん、花房家当主として。

けれど、正直な話、わたしはただ、美澄ちゃんに会えることを楽しみにしていた。呪術の話抜きで、1年前のようにおしゃべりできることを望んでいた。

だから、電話口で佐木先生から1年教室に来るように言われたときは、もしかしたら美澄ちゃんに会わせてくれるのかと期待もしたけど……。

「結局、これだもんなあ……」

美澄ちゃんは任務で、会えず終い。

まあ、呪術師にとつてこの時期は忙しいから当然と言えば当然なんだけど……。

少しだけ不貞腐れながら、懐かしい校舎を歩く。この後、花房家に戻つて、在藤兄さんへの報告と美澄ちゃんが向かつたという任務の内容、そして、東坊城という人物に關する調査などやるのが山積みなのだから、このくらいは許されるよね？

「……ん？」

何故だろう。

不意に、校舎内の散歩中、窓から見える景色……高専の運動場が気になった。いや、視線を向けたことで、気になった理由は何となく分かつた。わたしの目は自然と、運動場に立っていた人物に惹き付けられた。

遠くではあるけれど、そこには1人の女性の姿。

在学中には見たことがない人だった。あの人は……？

「————」

「っ」

背筋が凍る。目があった。笑いかけられた。

ここからはずっと離れた場所にいるその女性に。

咄嗟に俯き、視線を外す。

殺気ではない、けれどそれに近いような異様な気配。呪力感知を切るのが遅れたら

きつとここで吐いていた。そのくらい濃い呪力。

「っ！」

顔を上げる。あの女性は？

「ハイハイ」

わたしのすぐ横。わたしの顔に着きそうなほど至近距離で、彼女はわたしに耳打ちをした。

「っ」

「あら。そんなに距離をとられると傷つくわね」

飛び退く。同時に構える。

呪力感知を切っていたとはいえ、あの一瞬でここまで詰め寄られて気づかないなんて……この人は一体何者？

よく見れば、美人ではある。上背で青みがかつた黒髪短髪の美女。

わたしは知らないスリットの空いた奇抜な服もこの人の美しさを際立たせるようだった。

ただ、それよりも彼女の左目……あれはっ!?

「空色の瞳……まさか『六眼』^{りくがん}!？」

「()明察」

『六眼』。

呪力を十全に廻すことができるという空色の瞳。詳しいことは知らないけれど、一目見ただけで相手の術式を看破できるって話も聞いたことがある。数百年に一人現れるかどうかのものだとも。

……でも、待って。

この1年、花房家当主として、今の呪術界について少し調べたけれど、現在『それ』をもつ術師は存在していない。そのはずなのに。

「……ま、紛い物の『六眼』だけけれど」

「紛い物……?」

そう聞き返すも、彼女はそれ以上『六眼』には触れない。
それよりも、と彼女は微笑んだ。

「あなたも目が……いえ、感度がいいのー」

「ーね」

ーゾワツー

悪寒。

彼女が呪力の出力を上げた途端に、全身が鳥肌立つのを感じた。これは本当に、この

ままだてられ続けたらまずい。

吐きそうな予感を感じ、警戒のために少しだけ使っていた呪力感知を反射的に切る。ギリギリだった。

「っ、はあっ……はあ……」

「あら、ずいぶん上達したわね」

正直、気を失わせる程度の調整はしたのだけけれど。

微笑みながら、彼女はそう言う。確かに、さっきのそれは1年間鍛えてなかったら、気を失うくらいはしていたかもしれない。

けど、今のわたしなら！

「っ」

再び構える。

呪力感知がダメなら神経を研ぎ澄ませ。

彼女の動きの全てを捉えて、反応しろ。

そうしなきや、わたしは死ぬ。

今までの経験ですべて使って――

「おっと……ごめんね。私は雪を傷つけるつもりはないわよ」

「……え？」

彼女はそう言うと、両手を挙げた。

敵意はない。それを証明するように、今までの刺すような雰囲気も消えていた。そして、微笑む。

「私は『五条』」

「あなたがどの程度成長したのか気になってね。ごめんなさいね」

さつきから、混乱しっぱなしだった。

いきなり現れた女性の呪力に当てられ。そう思いきや敵意はないと言われ。そして、

今――

ーギョツー

「大きくなつたわね」

その人に抱き締められていた。

……つて、ええ!?

「ちよつ、なにするんですかつ!!」

「そんなに邪険にしないで? ちよつと意地悪したのは謝るから、ね? もう少しだけ

こうさせてちょうだい?」

「くくつ、やめつ!」

向こうの方が身長もあり、力も強い。どう足掻いても彼女の腕の中からは抜け出せず、されるがままになるしかない。

1分ほど抵抗したけど、結局わたしは諦めた。

わたしが解放されたのはそれから5分くらいが経った後……体感はず30分だったけど。

抱き締められ放題でぐったりしているとわたしを尻目に、『五条』と名乗った彼女はわ

たしにそれを告げた。

「雪」

「あなたはその調子で力をつけるのよ。そして生き残るの。そうしないとー」

「ー世界が滅びてしまうから」

――

第20話 裁断欠如―貳―

| | | | | | | | | | |

紛い物の『六眼』をもつ女性・自称『五条』。

彼女が姿を消した後すぐに、佐木先生や他の先生方がその場に駆け付けた。どうやら彼女は呪術高専の関係者ではなかったらしく、強引にここに侵入したようだった。

そのせいで、わたしにまで何者かを手引きしたという疑いがかけられたけれど、その場は在藤兄さんがどうにか収めてくれて。

「すみませんでした、在藤兄さん」

わたしは花房家へと向かう車のなかで、運転席の兄さんに謝った。

「いや、元はと言えばお前を高専に向かわせたのは俺だ。その結果の騒動なのだから謝る必要などない」

「……分かりました」

ありがとうございます。

わたしが気にしすぎないよう気遣ってくれたんだろう。そのくらいならば言ってもバチは当たらないよね。

「それで、首尾はどうだ？」

佐木先生からの呼び出しや『五条』なる女性との邂逅と色々あったけれど、兄さんが言っているのは、例の事件……要田さん殺害の話だ。

今回の任務の役に立つことではないかと探ったけれど、目新しい情報はなかった。高専に保管されている記録にも、美澄ちゃんが話してくれた以上のことは書いていなかった。

それに、美澄ちゃんとも話せなかったし。

「そうか」

わたしの報告を聞き、兄さんはそれだけを口にした。わたしが後部座席に座つてゐることもあつて、運転席の兄さんの表情は分からない。

成果をあげられなかったこと、がっかりしてゐるだろうか。そうだったら……やだな。

「雪？ どうかしたか？」

「つ、いえ。なんでもありません」

「……なら、いいが」

「つ、そ、そうです。在藤兄さん！」

「なんだ？」

「わたしに接触してきた『五条』という人物……『六眼』をもっていました。紛い物、だとは言つていましたが……。それと美澄ちゃんも東坊城天涯という人物と共に任務に就いてゐるつて話も聞きました」

落ち込みそうになる気持ちを無理矢理振り払うように、話題を変える。それは兄さんに落ち込みかけたのを気づかれないためでもあるけど、それ以上にその情報を伝えなきゃと思つていたので。

「兄さん、何か知りませんか？」

わたしに意味深なことを告げ去っていった『五条』。

そして、美澄ちゃんと行動しているという謎の人物『東坊城天蓋』。

2人について訊ねたけれど、兄さんの反応は芳しくない。

「……残念ながら、『五条』という人物にも東坊城天蓋という人物にも心当たりはない」

「そう、ですか」

「ただ、その東坊城という姓には聞き覚えがある」

「姓ですか？」

個人ではなく姓。

その家系には心当たりがあると、兄さんは言った。

「ああ。雪、お前も『菅原道真』は知っているだろう」

「日本三大怨霊の1人の呪術師、ですよね」

「そうだ。その子孫にあたるのが今の御三家のひとつ・五条家」

「五条……」

なるほど。彼女が名乗っていたのは、その『五条』か。

400年ほど前にいたという五条家の呪術師——『六眼』と相伝の『無下限呪術』を有したその人物に準えてるんだらう。

ただ、それが分かったところで……。

「そちらの人物のことは分からんが……五条家と同様に、東坊城家は菅原道真の子孫に当たる家柄のはずだ」

「！」

菅原道真の子孫。

じゃあ、美澄ちゃんと行動を共にしているその人物は御三家の人間ってこと？ そんなわたしの疑問を兄さんは否定する。

「東坊城家は云わば分家、五条家とは親交もないはずだ。そもそも呪術師が生まれなくなつて久しく、呪術師の家系としての東坊城家は酷く衰退したと聞いたが」

「……………」

兄さんもこれ以上は知らないようだった。

花房家当主代理として、呪術界に携わっていた兄さんでも知らないこと。情報が圧倒的に足りない。

呪術師の殺害事件自体も、それに関わっているであろう人物のことも。

なら、どうするか。答えは簡単だ。

情報を集める。そのために……………」

「兄さん、これから草木家に寄れますか」

「……………当主である琉兵衛氏に伺いを立てよう」

「お願いします」

在藤兄さんの運転する車は方向を変え、わたしたちは草木家へ情報をもらいに向かった。

—————

草木琉兵衛氏からの許可を取り、わたしは草木家の地下にある資料室に入っていた。この場所に入るには草木家当主の許可が必要な上、外部の人間は同時に1人までしか入ることが出来ないという規則があるらしく、在藤兄さんは屋敷外で待機してもらつて

る。

だから、ここにいるのはわたしと、

「お久しぶりです、イチさん」

イチさんだった。草木家の家政婦さん……というよりは、この資料室の管理人といった方がしっくりくる。

「御無沙汰しております、雪様……いえ、花房家の当主様とお呼びした方がよろしいですか？」

「や、やめてください」

花房家に引き取られた後、何度かここには来ていた。在藤兄さんが咲人さんに会いに

来る時にもくつついてきたもので、美澄ちゃんの部屋で遊ぶ時も、イチさんは部屋までお菓子をもってきてくれたり、色々なお世話をしてくれたりしたことをよく覚えてる。

だから、幼い頃のわたしを知っているイチさんに今さらそんな風に呼ばれるのは、さすがに気恥ずかしい。イチさんもそれを分かっているようで、柔らかな笑みを返してくれる。イチさんというのとやっぱり安心するな。

「美澄ちゃん、最近元気ですか」

ふとそれを聞くと、彼女は少しだけ暗い顔をした。

イチさん曰く、わたしが当主になってからは一切帰ってきていないみたいだった。寮暮らしだからというのもあったんだらうけど、それ以上に、美澄ちゃんのお父さんー琉兵衛氏が帰ってくることをよく思わなかったらしい。

等級が落ちたことで、美澄ちゃんへの評価が下がったんだらうとイチさんは悲しげに呟いた。

「……美澄様にお会いできないのは少し寂しゆうございますね」

「……………そう、ですね」

わたしから振った話だったけど。

イチさんの悲しげな笑みが見ていられなくなって、話を例の件に戻すことにした。

「そ、それでなんですけど……」

「はい。旦那様からお話は伺っておりますよ」

イチさんの様子がふつと変わる。仕事モードに切り替わったのがわたしにも分かった。

イチさんは近くの本棚から何冊かのファイルを取り出した。流石はイチさんだ。その話をしたのはついさつきだったから、時間もそれほど経ってないだろうに、もう手元に用意してあるなんて。

「草木家で管理しています情報ですと、要田純氏が死亡した状況の詳細。それから東坊城家に関する資料がご用意できました」

「ありがとうございます」

イチさんからファイルを受け取り、用意してもらった椅子に座る。そのまま、わたしはファイルにある情報に目を通していく。

「……………」

要田さんの事件に関しては、やはり目新しいことは書かれていない。わたしが美澄ちゃんに連れ出されるまでの状況とも整合性はとれていて、今回の事件に繋がる何かはありそうもなかった。

……要田さんを殺したという呪霊は美澄ちゃんが祓いたらしいし、今回の呪術師4名の殺害とは無関係ってこと、かな。

「……………」

次に、美澄ちゃんと行動している東坊城天涯という人物、そのルーツとなる家系について、目を通す。

東坊城家。

現在、御三家と言われている五条家と同じく、菅原道真を祖先にもつ家系で、2000年ほど前までは五条家と変わらない勢力を保っていたという。記述によると、その勢力の根底には東坊城家の相伝の術式が関わっているらしいけれど。

「イチさん、この東坊城家相伝の術式って……」

「はい。そちらはどうも東坊城家が秘匿したいものらしく、当時の資料にも情報が残っていないようです」

「そうですか」

種が分かると十分な効果を発揮しない術式なのか。

それとも、表に出せない類いのものなのか。

どちらにせよ草木家の資料室にないのであれば、他の場所にも恐らく残ってはいないだろうな。

とりあえず今の東坊城家に関する記載は……。

「……………ん？」

読み進めるなかで、少し気になる記述があった。

東坊城家の現状に関すること。

ここ100年ほど、東坊城家に呪術師が生まれてこなくなったこともあり、呪術界においてその地位や発言力は衰退していた。けれど、今から28年前に、術式をもった子供が誕生しているようだった。その術式が相伝かどうか記載はない。その上、それは呪術界の要である高専等にも伝わっておらず、呪術総監部だけが知ることだとも書いてある。

その結果、東坊城家が呪術界での力を取り戻した、とも。

わたしはそれが気になった。

「……………それだけで家の力が戻るもの、なのかな」

いくら菅原道真の血を引く家系だからといって、たった1人、呪術師が生まれてきただけで、呪術界での力を取り戻すなんて、そんなことあるんだろうか？ もし、それほどまでに優秀な呪術師ならば、在藤兄さんが名前を知らない訳はない。

それに東坊城家に術式をもった子が生まれてきたことを知るのが総監部だけというのも引つ掛かった。

「この記述が本当ならば、生まれてきた呪術師は今、28歳……たぶん、例の東坊城天蓋って人だよな」

今、美澄ちゃんと行動を共にしているその人がその人物である可能性はかなり高いと思う。

でも、生まれてきただけで家を復興させるような呪術師。そんな人がなんで美澄ちゃんを……？

謎は深まるばかり。だけど、わたしの直感が告げていた。

「はやく、美澄ちゃんに会わなきゃ……」

そうしなくてはならない。

そうしなくちゃ、何かが起こってしまいそうな気がした。

—————

第21話 裁断欠如一参一

——東京都八王子市・郊外——

「総監部の人間にとって、わたくしは目の上の瘤……邪魔な存在です」
「でしようね」

奴等は自分達の立場や保身を第一に考える人間の集まりだ。

危険度の高い特級呪霊はその依代ごと殺してしまおうと考えるくらいには屑野郎共だ。

自分が第一で、男尊女卑——旧代的な考えの連中にとつては、そりやあ未来が見えるとはいえ、女相手に指図されるのは許せないだろう。ただし、奴等は表立つては動かないし、動けない。

だから、

「わたくしの『予知』は利用する。その一方で、わたくしが死ぬことも望んでいる。だから

ら、こんな呪詛師まで利用するのでしょうか」

「ほんと、総監部は録でもないな……」

「おんながににん……きいたとうりだあ」

私と東坊城の目の前に立ち塞がるように、その男は立っていた。眼球が飛び出しそうなほど目をひん剥いて、だらしなく舌を出した……品性の欠片もない人間だった。

……なるほど。高専の人間が死ぬのは困るが、そっち側の人間ならばいくらでも使い捨てられると、そういう魂胆だろう。

浅はかな考えで、その考えを実行するような愚かな連中だ。

……そもそも総監部の人間は、私にユキごと『墮雪』を殺せとそう言い渡した。本当……総監部の人間を全員殺してしまった方がいいんじゃないかとも思う。

「草木さん」

「ん……ああ、考え事してた」

「侮ってはいけません。呪力量だけでいえば、この方の等級は準一級程度。今は貴女の方が劣勢、集中を」

東坊城はそう言う。呪力量だけが等級に繋がる訳ではないが、呪力も十分に練れず、術式の行使も難しい今の私にとっては、どちらにせよ勝つのが厳しい相手というのは分かる。

けど、舐められたものだ。

「すきしにていいってさあ……いわてれるんだ」

物色するように目玉を動かす男。気味の悪いその目玉を――

――ブヂュッ――

「いぎやあああああつ?!?!?!」

――潰す。少し狙いがずれ、当たったのは右目だけとはいえ、先制攻撃は成功した。確かに呪力量はそれなりにあるんだらうけど、無駄な動きも多く、見るからに思考も散漫だった。この程度の相手ならば、呪力を使わずとも勝てる。現に、視界の半分は潰せた。

「あ、あああああ……っ」

潰れた右目を抑え、ふらふらと彷徨う呪詛師。

このまま、畳み掛ける。まずは足をかけ、倒れさせる。

「ああっ」

成功。

次に、倒れた呪詛師の上に乗れ、回避不能にする……成功。

あとは練った呪力を手刀にのせ、『廻』で威力を上げ、首を一突きすればいい。少ない呪力でもこれで終わるー

ーブチユツー

瞬間、激痛が走った。

視界の半分……右目が潰れたのだと理解したときには、

ーバキッー

「か、はッ!？」

腹部を殴られていた。たまらず呪詛師の上から飛び退く。

内臓は……ダイジヨブ。そこまでは達していない。

それよりも右目の痛みが酷い。この術式は……。

「……『呪詛返し』の術式」

「げへ、げへへっ」

油断していた。こんな術式を使う呪詛師には見えなかった。

体勢を立て直してー

「おそおおい」

想定を超えた速度で、奴は私の視界から消えた。単純な呪力による身体強化だろう

が、感知もザルになって私の反応は遅れる。

殴られるのに合わせ、どうにか呪力で固めるので精一杯だ。

けど、所詮弱い呪力で固めたところで、万全の状態で連撃を食らってれば、

「っ」

「すぎあるううう！」

力業で押し切られてしまう。

奴が繰り出した拳を受けて、防御していた両手が上がる。

やられる。

攻撃を受ける覚悟を決めた私は、呪力を体を纏わせる。もつとも練れる呪力が少ない状態では限度はあるが、それでもないよりマシ。

ーバキッー

「ッ」

腹部への一撃。想定していたより重い。思わず崩れ落ちる。

それを見て、呪詛師はケラケラと笑う。本当に趣味の悪い男だった。

「おんながくるしいのすきだあ……」

「下衆が……っ」

口ではそう言うけど、思ったよりも状況はよくない。この感覚……見た目には傷はないけれど、恐らく内臓が傷ついている。

それでも、今は呪力を練れ。絞り出せ。

ここではまだ死ねないんだ。ユキを救う。ユキを守る。

そのために、私は――

「……………ん、あ?」

内から呪力を振り絞る私を他所に、呪詛師は間の抜けた声を出し、自身の頭を抑えた。そして、一言二言、空に向けてなにかを喋ってる。誰かと会話をしているように見えるけれど……?」

「……いやだだ。すきにしていっていわてただろ」

「？」

「いやだああ!!」

会話の相手の言うことを拒絶するように、首をブンブンと振る呪詛師。どうしても言うことを聞きたくないのか、やがて奴はこちらへ向き直る。どうやら会話相手の言葉を無視して戦闘を続行しようとしているらしい。

「いいいやあ……おれはおんなおこおすんだあ」

ニタアつと気味の悪い表情を浮かべる呪詛師。

奴が呪力を放出した、次の瞬間、

ーーぐにいいいいーー

奴の首が捻れた。首が一回転、二回転して。

やがて、体と繋がっていられなくなった首は地面に転がる。

「……………」

呆然とするしかなかった。

だけど、すぐに警戒をする。

この男の首を捻ったのは、私の『廻』では決してない。今の私の呪力では他人の人体を捻切ることなど不可能だ。勿論、東坊城でもない。

ということとは、第三者。恐らくこの呪詛師が会話をしていた相手の術式だろう。人——それも準一級相当の呪術師の首を容易く捻切れる相手が、どこかにいるってこと？

「うるよ、はいはい」

「！」

転がった首を拾う人物がそこに立っていた。

呪力を感じるから恐らく呪術師……呪詛師だろう。

真つ黒なセミロングの髪。女とも男ともいえない中性的な体。その雰囲気は、幼くも

あり、大人びても見える。拾った呪詛師の首を手持ち無沙汰に弄ぶ様と穏やかな微笑みが噛み合わない。存在自体がどこか矛盾したような人間だった。

「フッフ、『呪詛返し』が『縛り』を破ったせいでその呪いが跳ね返るなんて、実に愉快だ」

「……………」

「君もそうは思わない？」

得体の知れない呪詛師。少なくとも見積もっても一級。

そんな相手だったから警戒は解かない。

ーグンツー

「っ!？」

気づけば、私の体は地に伏していた。上から物凄い力で押さえ付けられるような感覚。

「なに、を……っ！」

「ただの結界術だけれど？」

「っ」

これが結界術？

人間を完全に拘束できるような攻撃的な結界なんて聞いたこともない。こいつ、一体なんなんだ。

「とにかく彼の首は回収してくね。そうしないとボクが困るから」

そう言つて、私を押さえ付ける結界を維持したまま、そいつは平然とこちらに背を向け歩き去ろうとする。

「待ちなさい」

それを制止する声。東坊城だ。

首すらも動かせない私からは見えないけど、どうやら東坊城はこの結界に捕らわれて

はいないようだった。

その呪詛師を引き留めたのは、恐らく呪術界の人間として、その人物をただ見逃すことができなかったんだろう。東坊城はそのまま呪詛師に問いかける。

「……あなたは一体何者ですか。何が目的なのですか」

「ああ。見たことがあると思つたら東坊城の呪術師か。その目……まだやってるんだね」

「なにを仰っているのか……」

「ああ、そうだった。目的だっけ？」

問答の末に呪詛師は笑う。

笑いながら、それを口にする。

「花房雪を殺そうと思つて」

「それだけ。じゃあね」

そう告げると、呪詛師は掌を振って、その場から立ち去った。

「ま、てっー！」

起き上がろうとしても、例の結界がまだ残っているせいで体は動かない。それどころか力が抜けていく。

ユキに何をしようとしてるのか。

本当は体が裂けてでも、呪詛師を捕らえて聞き出さなくてはならなかったのに、意識が遠退いていくのに抗うことができなかった。

―――秘匿文書―――

東坊城天蓋による報告。

呪術高専所属の呪術師4名の殺害に関する調査の際に、正体不明の呪詛師と遭遇した。

等級は少なくとも一級。

結界術と思われる攻撃を受け、準二級呪術師・草木美澄が負傷した。残された呪力の残穢と呪術師4名の殺害現場に残っていたものが一致した。

合わせて本件に関わる任務に、この呪詛師・仮称『楽』の搜索及び抹消を追記することとする。

――――

第22話 裁断欠如一肆一

————呪術高専・寮玄関————

反転術式による治療後、私はすぐに例の呪詛師『楽』の搜索に動き出していた。正直、今までは東坊城に言われて、調査をしていた節があった。だが、奴の目的を聞いた今、動かない訳にはいかない。

「草木さん、お待ちください」

寮から出ようとしたその時、玄関前で待っていた東坊城に呼び止められた。

「……なに？」

「反転術式を施したとはいえ、貴女の体はまだ治りきっておりません」

すぐに医務室へ戻るように、と東坊城は告げる。だけど、そんなわけにはいかないだ

ろう。ユキが狙われてるといふならば、そんな状況で医務室で休んでいる私なんてあり得ない。

それを東坊城に告げると、返ってきたのは意外な言葉だ。

「……その話なのですが、呪術高専及び総監部宛に、一通の手紙が届きました……いえ、犯行声明といつてもいいでしょう」

「犯行声明?」

「はい。今までに殺された4人の呪術師の体の一部と一緒に今朝届いたのです」

悪趣味な贈り物。

それに同封された手紙にはこうありました。

「1988年4月30日」

「花房雪を殺し、奪った『墮雪』を以て、呪術高専に攻撃を仕掛ける」

「——っ」

一瞬、キレかける。だけど、どうにか押さえる。
耐えろ。今、必要なのは情報だ。

「……高専と総監部はどう動くつもり」

「花房家へこのことを伝令し、総監部への呼び出しをかけております。花房雪、花房在藤両名が揃い次第、通達をし、花房雪に護衛をつけるとのことでした」

「……………」

妥当な判断ではある。腐りきった総監部のことだから、そのままユキを放置するかとは思ったけれど、どうやら『墮雪』を顕現させずにコントロールできているユキを見殺しにはできないという考えか。

「……………最終的には殺そうとしている癖に」

ボソッと呟いた私の言葉に、東坊城はなにも触れない。まあ、こいつも『墮雪』を殺すことには賛成している人間だから何も言えないだろうが。

「それで、なのですが、草木さん。貴女はー」

「ー勿論、ユキの護衛につく」

「……ですが」

呪力も録に練れない状態では戦力にもならない。

そう言いたいんだろうが。

「力がないことはユキを守らない言い訳にはならない」

いざとなれば、盾くらいにはなれる。

だから、私はユキの側にいく。

「……分かりました。わたくしから話を通しておきましょう」

東坊城はため息を吐く。

その代わり、今は休んでください。

交換条件と言わんばかりに、それだけを告げて彼女は高専校舎の方へ向かっていっ

た。

「……………仕方がないか」

わざわざ犯行声明を送ってきたんだ。4月30日というのは何か意味があるのだろう。なら、今はまだ襲ってこない可能性は高い。

東坊城の言うことをきくようでも少し釈然としないけれど、今は体を回復させることを優先しよう。

そして、体が治ったらすぐに――

「この結界を解く」

「そして、今度こそユキを守る」

――呪術総監部――

「花房雪、花房在藤両名をお連れしました」

総監部の遣いー佐木先生に連れられ、わたしと在藤兄さんは呪術総監部にやってきていた。そこは暗闇に白い布が何枚か暖簾か何かのように立ててある空間。その向こうに呪術界を牛耳る存在がいる。

「……お初にお目にかかります。花房家当主、花房雪と申します」

白い布の向こう側にいるであろう人たちへ名乗る。

この人たちとはあくまでも通達を通してしかやりとりをしたことなかったから、これが初対面だ。とはいっても、相手の姿はこちらからは見えないんだけど。

「よく来た。花房家の」

「通達は送ってあるが、見たか？」

複数の白布から声がある。どれを見たものかいまいち分からなかったから、とりあえずは正面にある布へ返答する。

「はい。わたしが今受けている一級への昇級任務を『楽』という呪詛師の搜索と抹消とす

る。そう記憶しています」

隣に立つ在藤兄さんに少しだけ目を向けると、静かに頷いた。在藤兄さんから聞いた話だから確かなはずだ。

それを白布のひとつが肯定する。ただその後、

「少々、状況が変わった」

「え？」

「……詳しくお聞かせください」

わたしより先に、在藤兄さんが声をあげる。それに答えるように、さつきとは別の白布が話し出した。

曰く。

今朝、呪詛師『楽』から呪術高専宛に荷物が届いたという。中には、わたしが追っていた例の事件で殺された4人の呪術師の体の一部は入っていた。それと一通の手紙。

「1988年4月30日」

「花房雪を殺し、『堕雪』を奪い、呪術高専を攻撃する」

手紙にはそう記されていた。

驚きではあつた。

いきなりわたしを殺すなんて、青天の霹靂もいところだったから。けれど、目的はわたしの命ではなく、内に宿る『堕雪』を奪うこと。

それを聞いたら納得してしまう自分が、少し嫌だった。

そんなわたしの心中は知らずに、話は進んでいく。

「4月30日までの間、花房雪、お前に護衛をつける」

護衛。

手紙の文脈から見ると、恐らく呪詛師側には『堕雪』を奪う算段がついているということだろう。それを防ぐための護衛だ。

嫌でも察してしまう。

これは殺させないためではなく、奪われないための護衛なんだ。

「……………」

少し複雑だけど、従うしかない。

いや、どちらにしろ護衛をつけてもらえるんだからありがたいよね。うん、そう思う。

「本来であれば、呪術高専の敷地内にて、花房雪の身柄を預かるのが一番ではあるが、当主としての仕事もあるであろう」

「……」厚情痛み入ります」

「勿論、こちらからも数人呪術師は派遣するが、その他、花房本家での護衛の任およびその人選については、花房在藤に一任する」

「はい。承りました」

—————

「雪、大丈夫か」

「はい。驚きはしましたが、同時に納得もしました」

総監部からの呼び出しの帰り、高専の敷地内を兄さんと歩きながら会話を交わす。い

つの間にか外は暗くなっていて、高専生どころか先生方の姿も見えなくなっていた。

「なぜわたしの命を、とは思いました。けれど、その狙いが『墮雪』ならば……腑に落ちます」

「……………」

「……ただ、わたしのせいで4人の呪術師の方が殺されたと思うと……」

「お前のせいではない。実際に殺したのは呪詛師だ。お前がそれに心を痛める必要はない」

「……………はい。ありがとうございます」

心はまだ晴れない。モヤモヤは残ってる。

ふと視界に遠くの寮の明かりが目に入って、彼女のことを思い出してしまう。

「美澄ちゃん……」

ポツリと言葉が溢れた。隣を歩く在藤兄さんにも聞こえないほどの小さな声だった。さっきのことがあるまでは、会わなきゃって思ってた。

美澄ちゃんの周りで何かが起こって、それがきつと任務にも関係してて、わたしが美澄ちゃんの助けにならなきゃって思ってたんだ。

なのに、今は違う。

会わなきゃ、じゃなくて、会いたって思ってた。しまった。

美澄ちゃんなら何て言うだろう。何て言ってくれるんだろう。そんなことが頭のなかをぐるぐると回ってる。

………いや、いやいやいや、だめだ。

美澄ちゃんのことを守れるくらい強くなろうって決めたのに、どこかで美澄ちゃんに頼りたくなっている自分がある。

こんな弱いわたしは美澄ちゃんに見せたくないのに……。

会いたい。

美澄ちゃんに心の内を全部話して、優しい声をかけてほしい。

会いたくない。

うじうじと迷ってる弱いわたしを見せたくない。

相反する気持ちがぶつかってる。わたしは一体どうしたら……。

———都内教会———

「集まった？」

『楽』と呼ばれたその呪詛師は、スーツ姿の女性に穏やかな口調でそう訊ねた。

「はい。4名ほど」

「4人か……思ったよりも少ないね」

「お言葉ですが、呪詛師は各々の思想で動いております。4名集まっただけでも上出来かと」

それもそうか。ありがとう、芹。

芹と呼んだその女性の言葉に納得したようで、『楽』は笑みを向け、感謝を伝えた。

勿体ないお言葉ですと、芹は深々と一礼を返した。その様子からも彼女が『楽』に心酔していることが見て取れる。

「さて、それじゃあ折角集まってもらった同志の顔を見ようか」

『楽』はそう言うのと、礼拝堂へ繋がる扉を開けた。

中にいたのは3人の男と1人の女。入ってきた『楽』を見て、意外そうに凝視する者や興味なさげに視線を戻す者、目を輝かせる者もいた。

「三者三葉、いや、四者四葉かな……どちらにせよいいね。それでこそ呪詛師だ」

穏やかに笑う『楽』。

それに対して、1人の男が立ち上がり、『楽』に詰め寄った。その顔には怒りにも近い色が浮かんでいる。

「おい。お前が呪詛師界限に今回の話を流した奴か？」

芹がその男を止めようとして、逆に『楽』に制される。ここは任せて、と言わんばかりに微笑む『楽』に芹は大人しく引き下がった。

「そうだね。ボクが君たち呪詛師に呼び掛けた。まあ、正確には彼女に頼んで広めてもらったわけだけけれど」

「はっ！ 俺らを集めたような奴がどんな強え奴か知りたかつたんだがなあ……こんなひよろい奴とは残念だ」

そういうと男は『楽』の胸倉を掴み、その体を持ち上げる。

「無礼者ッ!!」

「なかなかの膂力だ。呪力なしでそれとはね」

血相を変えて叫び臨戦態勢に入る芹とは対照的に、落ち着いた様子で『楽』は男の膂力を褒めた。

確かに男の力は並外れている。呪詛師界限において、彼の名を知らぬ者はいないほどには。

生まれつきその身に備わっていた膂力で今まで齒向かってきた者、氣に入らない者を病院送りにしてきた。呪術の世界に触れてからは、その膂力に呪力を上乘せできるようになり、人を殴り殺すことにおいて彼の右に出る者はいないと噂されるようになった。

彼の呪詛師としての強さの根底にあるのは力。力こそ彼が自分らしく自由に生きられる自信そのものであった。

「おいおい、もやし野郎！ 何、余裕かましてやがる！ 殺しちまうぞ！」

「このままでは話を聞いてもらえないね。それは……困ったなあ」

「ハッ！ なにをー」

だから、想像もしていなかった。自分の腕が自分よりも圧倒的に体も小さく力も弱い人間に抑え込まれるなどは。

「動かねえ……!? 術式かッ!？」

「いや、ただの結界だよ。それよりも結界を解いたら離してくれるかな？」

「誰がッ！」

男はさらに激昂する。どうにも未だ落ち着いた様子の『楽』の姿が癪に触る。

今までそんな経験はなかった。どんな術式も結界も彼の力の前には無力で、そんな呪術師に遭う度に振じ伏せてきたのだ。

だから、拘束されている手で殴って分からせる。結界など関係ない。力づくで呪術を叩き壊す。男はいつもそうしてきた。

だが、

「そうか。残念だよ」

ーボトツー

『楽』がそう告げた次の瞬間に、男の腕が落ちていた。

痛みで叫ぶより前に男は激昂し、残った方の腕で殴りかかる。

その攻撃はー

「……さて、話を進めようかな」

何事もなかったかのように、『楽』は話を進める。

その側で男の体が、鋭利で巨大な刃物で一文字に切り裂かれたかのように、ゆつくりとずり落ちた。みるみるうちに血溜まりが教会に広がっていく。

それには構わず『楽』はその上ー息絶えた男の上を歩き、教会中央の祭壇で残った3人の呪詛師と芹に向き直る。

「今日は集まってくれてありがとう、同志諸君」

「君たちにも伝わってることと思う。ボクたちの計画は、花房雪を殺害し、『墮雪』を奪うこと。そして、呪術高専を襲い、壊滅させる」

「大丈夫。ここに集まってくれた同志である君たちとならやれるよ」

「そうして初めて、ボクたち呪詛師は自由になれる」

その言葉を聞いて、1人は笑い、1人は頷き、1人は恍惚とした表情を浮かべた。先ほどの『楽』という人物を見定めるような空気はもうない。

その場にいる誰もが『楽』の力を認め、その理想に賛同した。

「来る4月30日」

「ボクたち呪詛師は自由を勝ち取ろうじゃないか」

—————

第23話 偶然必然

—————

4月15日。

呪詛師『楽』の襲撃まであと半月となったその日。

わたしは美澄ちゃんに会うことになっている。

今日はその前日14日。

だというのに、わたしはまだ覚悟ができていなかった。美澄ちゃんに会って、強がれる覚悟。

わたしが狙われているという事実を知らされて時間が経ったこともあり、少しは落ちていたけど、未だに不安は残っている。

だから、たぶん美澄ちゃんに会ったら甘えてしまう……気がする。

こんな気持ちのまま、彼女には会えない。

そう思って、わたしは気晴らしも兼ねて町中に出掛けた。在藤兄さんの計らいで、今日は久しぶりに呪術師としての仕事もお休みにしてもらった。きつと町中を歩いてい

たら、心の整理もできるだろう。そんな風に思ってたのに……。

——都内・喫茶店——

「ユキ!!!」

「み、みすみちゃん!?!」

出掛けた先、なんとなく入った喫茶店でばったり出会ってしまった。美澄ちゃんがテーブル席から頭をひよこつと出して、わたしの名前を呼んだ。

「ユキ、こつちこつち!!」

店内にも関わらず、わたしの名前を大きな声で呼ぶものだから、気づかないフリはできなかつた。大人しく誘われるがまま、美澄ちゃんの座るテーブル、彼女の対面の席に座る。

「偶然だね、ユキ」

「う、うん」

美澄ちゃん、につこにこである。

高専に出入りしている在藤兄さんから聞いた話によると、高専で見かける美澄ちゃんの表情はそれはそれは暗いものだったって聞いていたから、少し拍子抜け。それよりも、安心かな。

「ユキはなんでここに？」

「えっと、今日は久しぶりにお休みとれたから、少し町中に出ようかなって。それで歩き疲れたからここに入ったら美澄ちゃんがいたんだ」

気持ちの整理云々はもちろん伏せて答える。

「そういう美澄ちゃんは？」

「私もユキと同じだよ。ふふっ、そんなところまで同じなんて、運命だね」

「あはは……」

なんだか異様に高いテンションで美澄ちゃんを笑いかけてくる。まあ、わたしもなんだかんだ美澄ちゃんに会えて嬉しいけどさ。

「っ」

わたしを見て笑ってくれる美澄ちゃんを見てたら、急にすべてを吐き出さなくなってしまう。わたしの今の境遇とか、気持ちとか、迷いとか全部。

それをどうにか飲み込んで無理矢理笑顔を――

「ユキ、どうかした？」

「っ、なんでもないよ」

「ううん。ユキ、なんだか無理してる」

「っ」

無理矢理作った笑顔。それは美澄ちゃんには通用しないらしい。わたしが笑顔をつくるのが下手なのか、それとも美澄ちゃんがわたしを見てるからか。

……………どっちも、なのかな。

「……………」
「……………」

黙つて、わたしを見つめてくる美澄ちゃん。わたしが話し出すまで待つてくれてるみたいだ。

……このまま何も話さなかったら美澄ちゃんはわたしの側に来てくれる、のかな。そんなよくない考えも頭に浮かんできて。

どのくらい経つたのかな。長い時間そうしてた気もするし、ほんの1分くらいだった気もする。

まっすぐにわたしを想うその目を見たら、むしろ隠していることの方が悪いように思えてきて、わたしは口を開いた。

「あのね、美澄ちゃん……」

わたしは、話し始める。

当主になってからのこと。当主として振る舞うことやその任務の重さ。総監部から

は『墮雪』の器としか見られていないこと。そして、今、狙われている事実とそのせいで呪術師が4人も亡くなったこと。

話し始めたら止まらなかった。

ただただ話し続ける。吐き出し続ける。

……………。

「けほっ」

ずっと話していたからか、喉が少し痛むことに気づいた。話しすぎたみたい……つて、

「ご、ごめんね、美澄ちゃん。こんな愚痴みたいなこと、ずっと聞かせちゃって……」

わたしが話している間、美澄ちゃんは黙って聞いてくれていた。だから、謝ったんだけれど。

「高専にいた頃とは逆だね、ユキ」

「え？」

美澄ちゃんはそう言つて笑う。

「1年前まではさ、ユキはいつも私の話とかわがママを聞いてくれてたじゃん」

「う、うん。美澄ちゃんの話聞いてるの嫌いじゃなかったから」

「ユキ、私も同じだよ」

同じ、と美澄ちゃんは言った。

けど、美澄ちゃんの話はいつも楽しいもので。それに比べて、わたしのは全部愚痴だ。こんな聞いてても、楽しい訳じゃない。

「ううん、好きな人の話だよ。ユキのことなんでも聞きたいし、なんでも知りたい」

「美澄ちゃん……」

「ね、ユキ」

「私はどんなことがあつてもユキの味方だから」

状況は何も変わらない。わたしは当主のままだし、『墮雪』の器として狙われたまま。死んでしまった人だって返ってはこない。

それでも、美澄ちゃんのその言葉に、わたしは少し救われたんだ。

—————

次の日。

わたしの護衛として、総監部から派遣された呪術師と在藤兄さんの選定した呪術師が花房家にやってきた。

佐木先生と咲人さん。どちらも見知った人物だ。

他に2人、私のわがままで呼んでもらった人がいる。

1人は彼女と一緒にいるという呪術師。

そして、最後の1人はもちろん、

「ユキ、私を守るからね」

「ありがとう、美澄ちゃん」

守られるだけのわたしじゃない。そのために当主になった。
でも、美澄ちゃんがそう言ってくれるなら、少しだけ甘えるね。
その代わり、わたしが美澄ちゃんを守るから。

――――

第24話 転化制動一壺一

—————

1988年4月30日。

午前4時30分。

東京都立呪術高等専門学校の結界に、呪詛師『楽』を含む呪詛師5名の呪力を感じた。

同時に結界への攻撃、結界の一部の破損と結界内への侵入を確認。

侵入後、速やかに草木咲人による『帳』を複数同時に展開、呪詛師を3ヶ所に分断し、対処に当たる。

—————SIDE : A 呪術高专中央参道—————

高专の中心に陣取った花房在藤と草木咲人が対峙するのは、呪詛師『楽』と男の呪詛師の2名。

分断は計画通りに済んだ。さらに、咲人は結界を瞬時に展開し、『楽』と男の呪詛師を完全に分断する。これで在藤と男、咲人と『楽』という一対一の構図が出来上がった。

「こんな朝早くに戦闘に付き合うんだ。あんたにはもう一人の一級が合流するまで大人しくしてもらおう。そのくらいは譲歩してもらおうじゃねえか」

結界で『楽』の四方を囲み拘束した後、咲人はその目的を明かした。

咲人が言う一級は佐木のことを指す。彼の實力ならばすぐに合流、その上在藤が呪詛師を撃破することで、三対一に持ち込めるという算段であった。

「彼らは強いよ?」

「そりゃあ心配だ」

分断されて尚、『楽』は余裕を崩さない。相手の戦力は確かに未知数だ。けれど、それと一級術師への信頼とを天秤にかけたら確実に後者に傾くだろうことを咲人は確信していた。

横に目をやれば、在藤と呪詛師との戦闘が始まろうとしていた。

—————SIDE : B 運動場—————

咲人さんが下ろした『帳』の1つは高専の運動場。敵がどの方向から来ても分かる所だから、相手の目的である私と総監部から派遣された佐木先生がここにはいる。

そして、私と佐木先生の目の前には2人の呪詛師。

1人は男性。見るからに攻撃型だと分かる筋骨隆々な肉体で、頭に何本かある手術跡に目がいく容姿をしている。

もう1人は女性。地面につくほどの長い髪。そして、裕に2mはあろうかという長身。

「っ」

2人から発せられる威圧感に、少しだけ体がすくむ。けれど、息を吐き出し、切り替える。わたしは強くなった。大丈夫。

「花房さん」

「はい」

半歩分わたしの前に立つ佐木先生が名前を呼ぶ。変わらない感情のブレのない声色に、変に安心感を覚えた。

「本来であれば、護衛役である僕が2人を相手にすべきですが、少々あの女の方が厄介ですので、君にはそちらの男の方を任せます」

「分かりました」

「危なくなったらすぐに呼んでください。君を死なせるのはまずいので」

「……………はい」

任せてください、とまでは言えないけれど、やってみせる。この1年間やってきたことをすべて出し切るんだ。

覚悟を決め、わたしは構えた。

「お前が例の『墮雪』カア？」

首を鳴らしながら、男は聞く。けれど、その目はわたしのことを見ておらず、隣の佐木先生に焦点が合っているのが分かった。

「確かにわたしの中には『墮雪』がいます」

「そうカア……じゃあ、お前を殺してそっちの呪術師と戦おう」

「狙いはわたしじゃ……」

「お前の呪力は少ない。俺は強い奴と戦いたい」

なるほど。そういうタイプの呪術師ってことか。

「とつとと死ネエエ！」

ーグググッー

呪詛師が叫ぶと同時に、振りかぶる。

そして、

ーブワッー

振るった拳が突風を引き起こした。

「贅力だけでっ!？」

特殊な術式ではないと呪力感知が告げている。呪力は纏わせているものの、これは彼の純粋な力だけで起こした風だ。

「反応が悪いナア」

「!？」

「ーバギツー」

突風と砂煙で視界が遮られたその一瞬を突かれ、彼の拳を受けてしまう。

反射的にどうにか呪力を纏わせ防御したけれど、それでも腕が痺れてる。それほどの力だった。

「よく止めたー」

「っ」

「ナア!!」

ーバギツー

間髪入れずに連撃が来る。術式を使った攻撃ではない分、連発できる。風圧を起こせる分、それだけで脅威だ。

攻撃のせいで右腕が麻痺してる。最悪、折れてる可能性もあるけど、もちろん敵は待ってくれない。

「らああアア!!」

ーバギツー

もう一撃。大振り。それをまた呪力を纏わせた右腕で防いだ
吹き飛ばされながらも、体勢は立て直す。

「痛っ」

さつきによりも痛みが増している。もってあと2発かな。けど、もう少しだ。もう少しで、

「『見える』から」

———回想———

「雪、お前には術式がない」

「その面で他の術師よりも圧倒的に劣っていることは事実だ」

それは確か、12月頃のこと。

わたしが当主になってからずっと続けてもらっていた在藤兄さんとの稽古の途中で、そう告げられた。

「っ、は……はい」

分かってることではあった。だけど、そうはつきりと言われると少し心にくるものがある。

でも、兄さんはわたしを傷つけるためだけにそれを言う人ではないのも分かってる。つまり、

「……では、お前にあるものはなんだ？」

わたしの思った通り、兄さんは言葉を続けた。

あるもの、ですか？

「そうだ、他の術師にはなくてお前にはあるものだ」

「……………」

すぐに思い浮かぶのは、『墮雪』を身に宿してること。

そして、高すぎる呪力感知能力。

「その2つ、でしょうか」

「その通りだ。『墮雪』の方はともかく、呪力感知は大きな武器になる」

相手がいるかどうかを感知するだけではない。調整さえできれば、相手の動きや術式の発動を予測することもできる。

兄さんはそう言った。

……なるほど。確かにそれはそうかもしれない。

呪力の量や流れを『見る』ことさえできれば、相手の動き自体は予測できる。そして、それを元に動きを組み立てれば……。

「ああ、更に強くなれるだろう」

在藤兄さんは頷く。

ただ、その後にこうも告げる。

「だが、それだけでは足りない。術式があれば『極ノ番』や『領域展開』で決めきれぬだろうが」

「……それが無いわたしでは、最後の詰めを決めきれないということですか」

「ああ」

「っ、なら、わたしはっー」

「だから、雪。お前にはー」

—————

「ちよこまかとうつとうシイツ」

「はっ……はあ、はあ……」

呪力は『見えた』。だから、動きも予測はできたから、わたしは避け続けていた。けれど、その分息が切れていた。

……いや、これじゃダメだ。

わたしはふと、目を閉じた。

「目も閉じて満身創痍だナア、『堕雪』の女ア」

「はあ……はっ……」

息を吸って、吐く。

「呪力も底をついてきたカア？ さつきから呪力が感じられねえヨオオ」

「っ……………はっ……………」

呪詛師の言葉が段々遠ざかっていく。

「……………ふっ……………はあ……………」

「返答もなしカア？」

「……………」

もう呪術師の言葉は耳に入らない。

「……………」

「つまんねえナア。おまえ、もういい、もうー」

ーググググググググツツー

「死ねエエエ」

「……………」

わたしはゆつくりと目を開けた。
……………ああ、呪力が廻る。

ー……………バヂツ……………

『黒閃』

次の瞬間、黒い火花がわたしの目の前で爆ぜた。

「ハ、ア……………なん、ダヨ……………？」

呪詛師の腹には大きな穴。彼はそのまま倒れ、絶命した。非力なわたしでも、一撃で命を刈り取るほどの威力だった。

初めて『それ』を放つてから一月ぶりの感覚。呪力が体を廻る感覚をわたしは感じていた。

「……っ、『黒閃』……どうにかできた……けど、痛っ」

呪詛師を倒したことで集中力が少し切れ、右腕の痛みが戻ってくる。確実に折れてるだろう。でも、今は――

「無理はしない方がいいですよ。僕の方は終わりましたから」

「佐木先生……」

背後からの声は佐木先生のものであった。

いつもと変わらない感情の見えない表情からは戦闘を終えた様子なんて見えないけど、顔についた返り血が相手の絶命を以て戦闘が終わったことを物語っていた。

「思った以上に苦戦を強いられました。生け捕りが理想だったのですが」
「……………そうですか」

佐木先生が戦闘していた方を見ると、そこには血溜まりの中に長身女の遺体が転がっていた。失血死するには十分な出血。

殺すこと自体は簡単。

そうもとれる言い回しに少しゾツとした。

「さて、一級のお二人はともかく、草木さんは大丈夫でしょうか」

平淡な声にハツとした。

「美澄ちゃん……………」

—————

第25話 転化制動―貳―

―――SIDE：C 寮裏側森林―――

呪術高専の寮の裏手には森が広がっている。その森の中には、いくつかの『天元』とは別の結界が張られていて、侵入してくる者を感じする効果もある。けれど、今回の件で侵入者を感じしたのは咲人の結界で、森の中の結界は機能しなかったらしい。

いや、東坊城曰く機能を停止させられていたようだ。
私の目の前にいる女によって。

「ここには誰もいないと踏んでいたのですが」

スーツ姿の女は落ち着いた様子でそう言った。その姿は決して呪詛師には見えない。イカれてはいないように見えるけど、おそらくそれはそう見えるだけ、なんだろうな。

「残念ながら2人も待機してるから」

「そのようですね。しかも、そちらの方は、五条家の人間でしょうか」

呪詛師は東坊城へ視線を向け、そう問いかける。

「いえ、わたくしは東坊城天蓋。五条家の人間ではありません。元を辿れば一緒ですが」
「東坊城……それでは貴女があの方が仰っていた呪術師。地位のために紛い物の『六眼』を作り続けている哀れな一族の娘ですね」

「否定はいたしません」

「そちらは……ああ。あの方から聞いてますよ、我々が派遣した『呪詛返し』持ちにやられたという学生さん」

嘲るような表情、見下したような目。この女は私を完全に格下だと見ていた。

……まあ、実際はそうなんだろう。今の私はただの準二級呪術師だ。私の数少ない武器である結界を無効化するような呪詛師相手ならば尚更、勝率は薄い。

「呪詛師の方」

「芹よ。あの方から頂いた尊き名前なのだから、こちらで呼んでほしいわ」

東坊城の言葉を否定し、女は芹と名乗った。

それにしても、さつきから女の会話に出てくるあの方って。

「あの男か女かも分からないボクっこ呪詛師のこと？」

「は？」

私の一言で、澄ましていたその顔が怒りの形相に変わる。
なるほど。それがこいつの地雷か。

「世俗的にあの方を表現するなッ!!!」

キレる女。これはいい。冷静さを欠いてくれれば、こつちも戦いやすいし。煽れるだけ煽ろ。

「あんなのに従ってるんじや程度も知れる」

「あ、あんなのオ……？ 撤回しろッ!!」

「いや、撤回するも何も事実でしょ？ あんな威厳も何もない奴にでも人を従えられるんだって思ったよ」

「あああああああ!? 撤回しろ、撤回しろ」

「ヤダね」

「撤回しろ撤回しろ撤回しろ撤回しろ撤回しろ撤回しろ撤回しろ撤回しろ」

怒りに震えながら、女は繰り返し返す。あの方と慕う人間を、あんなのと呼び、愚弄した私への怒り。そこに隙が一瞬見えた。

「隙あり」

「ーバギツー」

「がアっ!」

不意打ちの一撃を顎へ。これで脳が揺れた。すかさず肩へ、喉へ、腹へと足技を当てていく。そして、最後に『廻』を纏った蹴りを奴の腹部へ食らわせ、奴をそのまま森の方へ吹き飛ばした。

「……草木さん。その戦い方どうかと思いますが」

東坊城の声は静かではあったけど、少し引いているのが分かる。

けどまあ、相手は呪詛師だし。このくらいは卑怯のうちには入らないでしょ。

それに……。

「撤回撤回撤回撤回撤回撤回撤回撤回撤回撤回撤回撤回撤回」

「このくらいじゃ立ち上がってくるみたいだし」

森の方からぶつぶつと不気味に呟きながら、女が戻ってきた。

不意打ちだったこともあって、最後しか『廻』は使っていなかったから、起き上がってくるとは思っていたけど。

「草木さん、単刀直入に申し上げますが、恐らくあの方の術式は今の貴女では突破できないかと思えます」

「……もう術式分かかってるわけね」

「そうですね。この右目がありますから」

紛い物の『六眼』。

あの呪詛師の女はそう言っていた。

行動を共にするようになったこの1年間、東坊城からは『予知』のこともその眼のことも詳しくは聞いていなかった。正直興味もなかったし。

ただ、呪詛師の言葉を聞いて腑に落ちたこともある。

『六眼』なんとなく聞いたことはあった。呪力のロスなく十全に廻すことができ、見た対象がもつ術式すら看破する特異な眼。その『六眼』をもっているならば、私が隠している『輪廻復原』も見抜くことができる。

だから、東坊城は『輪廻復原』を知っていたってことなんだろう。

そんなことを考えながらも、東坊城との会話は続く。

って、なんだっけ……ああ、あの女呪詛師の術式の話だったね。

「恐らく『再生』に類する術式かと」

「『再生』……どの程度？」

「相当のものでしょうか。外傷だけでなく体の内側も瞬時に治る程度には術式効果は高いようです」

「『廻』では無理、倒しきれないってこと？」

「は、」

私の問いに力強く頷く東坊城。

嫌なお墨付きを貰ってしまった。今のお前では倒せないと。

可能性があるとすれば、東坊城が私に張った結界——『縛り』を壊すことだろう。それが唯一の活路。

「ごちゃごちゃとウルサイっ!! 撤回しろッ!!」

「!」

話しているのを待ってくれるほど理性的ではないようで、会話を遮るように、ヒステリックに叫びながら女が飛びかかってくる。それに合わせて、

「『廻脚』」

——ギリギリギリギリ——

カウンターの要領で『廻脚』を奴の顔に叩き込む。

手応えあり……だけど、女は止まらない。廻る呪力で顔を扶られながらも、勢いが落ちていない。見れば、扶られながらも瞬時に回復……『再生』しているのが分かる。

「っ」

ーブンツー

このままでは押し切られる。そう判断した私はその足で奴を吹き飛ばした、はずだったんだけど。

「撤回しろオオオ……!!」

吹き飛ばされると悟ったならば、普通の人間は飛ばされる方向へ力を逃がすはずだ。だけど、女はそれとは逆。私の足に自らの体を振じ込み、わざと体を破壊させた。蹴る対象からの反発がなくなったことで、体勢が崩れる。

ーブンツー

そこへ呪力を帯びた拳。その一撃は的確に私の顔を狙ってきてて。

「っ」

ーギンツー

咄嗟に張った極小の結界がその間に入り、勢いが止まる。ただ、さっきのことを考えるに、奴はこのまま自分の拳が壊れることも厭わず殴り続けるだろう。ただでさえ急拵えの結界だ。壊れるのも早いはず。

私はすぐに『廻』を乗せた足で距離を取った。

「見た目の割に、力業な戦い方なわけね」

一見すると、理知的だから性質が悪い。

「草木さん」

「なに？ こっちは忙しいんだけど」

「あの方の『再生』……ほとんど発動に呪力を消費していません。つまり……」

戦闘中、ずっと東坊城は女の呪力の流れを見ていたのだろう。その上での言葉。

ほぼ無限に『再生』し続ける術式だと、東坊城はそう言った。

さらに戦い方を変えるべきだと、進言してくる。

「時間を稼ぐことを優先するべきです。『楽』を抑えているお二人はともかく、幸いなことに総監部の呪術師も来ています。彼ならば恐らくすぐに呪詛師を倒し、こちらへ駆けつけてくれるでしょう」

「……………」

時間を稼いで、佐木に託せ。

……まあ、確かにその方が安全だ。佐木は強い。今の私とは比べ物にならないほどに強いから、この女を相手にしても突破口を見つけて出し勝つだろう。

けれど、

「それじゃあ、私はこのままだ」

私が東坊城の話に乗ったのは、強くなる必要があったから。3年間で『墮雪』を私だけで殺せるようになるためだ。そのための結界、そのための鍛練だった。

目の前の呪詛師は倒せないから、応援を待ちましょう？

他の呪術師に任せましょう？

そんなことは『その時』には許されない。やるしかない。

……いや、私がやるんだ。

「……………」

「草木さん……………ここはわたくしの提案に乗ってー」

「ー乗らない」

「！」

「私にしか『墮雪』は倒せないでしょ？　ここで引いたら今までと何も変わらない。変われない」

「つ……………そ、それはそうですが……………今はその時ではありません。貴女はここで死んではいけないんですっ」

声を張る東坊城。

彼女らしくないその様子が、私が思っているよりもずっと厳しい戦況であることを物語っている。

確かにその時ではない。

けど、

「こいつらはユキを狙ってる。殺そうとしてる」

「そんな連中相手に勝てないなら、きつといつになっても勝てない。このまま、負け続けるままだ」

ユキを守るために。

自分の力で『縛り』の結界を壊して、ユキを狙う目の前の愚^コか者^ミを排除する。それが私のすべきこと。

「っ、ですが！」

「止めても無駄」

「っ」

まだ反対して来ようとする東坊城に、それだけを告げ再び構える。

女の様子を見ると、体の『再生』は完了し、再び元の姿に戻っていた。それどころか、その手にはどこから出したのか長刀が握られている。

「それ、どこから出したわけ？」

「……背骨にしまっておりましてので、先ほどそちらが話している際に引き抜いておきました」

女は少し冷静さを取り戻しているようで、静かにそう答える。私と東坊城の話聞いていたのだろう。

「そちらは私の『再生』を突破できないと聞きました」

「なら、そんな物騒なものしまえば？」

「その割にはあなたが随分と落ち着いて見えたものですから」

さっきまでのキレてた方がやりやすかったな。でも、落ち着いてしまったなら仕方が

ない。それならそれで戦うだけだ。

「草木さん！」

「っ」

東坊城の声でどうにか躲せた。決して集中してなかったわけではない。けど、気付けば目の前に女が持っていた長刀の切先があつて。

「いい反応ですッ」

「ーブンツー」

そのまま横に長刀で薙ぐ女。どうにかそれも伏せるように回避する。短刀や小太刀と比べて圧倒的に長い長刀での一閃は隙が大きいはず。私は瞬時に女の足を払った。狙い通り、女が宙に浮く。

「ここへ逆足で奴の顎を揺らせばー」

「ーザクツー」

地に刃物が刺さる音がした。直感的に分かった。体が地から離れ、制御権を失う前に地面に長刀を突き刺したんだ。これで奴は長刀を軸に動けてしまう。

ーバギツー

「がつ!？」

それに気付いた時にはもう遅い。顔面に一撃を喰らってしまう。そのまま着地した女は、私の首を掴んで持ち上げる。

っ、息がつ!？」

「無様ですね。学生さん」

「っ、あぁッ」

「この状況でまだこちらを睨む余力があるとは……」

憐れむような表情。格下に見られているのがありありと伝わってくる。

「さあ、学生さん。撤回なさい。あの方を愚弄したことを」
「っ、ッ」

首を絞めている手から逃れようとどうにか力を込める。けれど、呪力で握力も強化しているのかびくともしない。

「……まだ反抗をするのですか。愚かな……」

愚か？ 愚かなのはそっちだろう。

ユキのことを『墮雪』の器としか見ない愚か者。ユキを殺そうとする愚か者。本当に愚か者ばかりだ。

「……っ」

「……ああ、このままでは話すことができないのですね」

女はそう言うと、掴んでいた手をパツと放し、私は地面に音を立てて落ちた。何度か咳をして息を整える。その間も女はどうとうと話し続けている。

「悲しいものです。先ほど話しているのを聞くに、あなたは余程、『墮雪』の器に執心しているように見えます。愛していると言っても過言ではないでしょう」

「……………」

「人を愛する。それ自体は素晴らしいことです。私もあの方を深く、深く愛していますから！」

「……………」

「しかし、あなたは愛する対象が『器』。こんなにも悲しいことはない。愛する相手を間違ってしまったのですね……そう考えれば悲しい人です」

「……………」

「ああ、そうです！　もしあなたが先ほどの発言を撤回し、あの方を信仰して、『墮雪』の器を差し出すというのならば、あなたの命は助けてもかまいません。あなたならば『墮雪』の器に警戒されずに近づけるのでしょうか？」

「……………」

「あの方には私から話をしましょう。寛大なあの方のことです、きっと分かっていただけます！」

勝手なことを、ペラペラと口にする女。

同情と嘲笑。そして、頭のおかしい提案。

反吐が出る。

「……………」

「答えは？」

「……………」

「…………まあ、いいでしょう。このまま、あなたとそこの東坊城を殺し、あの方に合流いたしましょう。きつとあの方は褒めてくださる…………それほどまでに嬉しいことはありません」

恍惚とした表情で、女は話し続ける。下らないことを話し続ける。

でも、そうね。「もういい」というのは同意見。これ以上は時間の無駄。

「ねえ」

私は女に声をかける。

こいつに告げる言葉はひとつだけだった。

「ありがとう」

きつと、その時の私は笑顔を浮かべていただろう。

—————

第26話 転化制動一参一

————東坊城天蓋視点————

「ありがとう」

草木さんが芹と名乗った呪詛師へそう言い放つ。

その表情は、背筋が凍るような空っぽな笑み……いえ、笑みというのは正確ではないでしょう。一言では表せないほどに感情の渦巻いた表情でした。

それと同時に、彼女から呪力が溢れ出す。赤黒い呪力。

「うツ……!?!」

咄嗟に顔を伏せて正解でした。あのままこの右眼で見続けていたら、嘔吐してしまいそうな呪力でしたから。

しかし、わたくしが施した『縛り』なのですから、見届ける義務がある。どうにか顔

を上げ、草木さんと芹へ目を向けます。

「っ、その呪力……!?!」

芹もその異質さには気付いたようで、草木さんから大きく距離を取っていました。

「今までとは違う、いったい!?!」

叫ぶ芹に、草木さんは話し始める。

「今まではあいつに呪力が組めないように制限されてたんだよ。私の呪力を底上げするために」

「呪力の制限……?」

「そう。一定以上の呪力を練ることができないという『縛り』の中で、その一定以上の呪力を練る。そんな矛盾した『縛り』を」

——スッ——

彼女はそう言うと同時に姿を消しました。恐らく呪詛師には見えていないでしょうが、わたくしの眼には見えています。あれはただの呪力による脚力の強化。つまり、今までとやっていること自体は変わりません。ただ、その練度も強度も桁違いで。

ードスツ---

「ーッ!?!」

気付いた時には蹴られていた。

芹にはそう感じることもしかできないでしょう。それほどまでに彼女の呪力は上がっている。

呪術師の成長曲線は必ずしも緩やかではありません。

そもそも素質は十分でした。けれど、彼女はきっかけを掴めずに、この1年間、呪霊や呪詛師に負け続け、傷つき続けました。

そのきっかけが今、与えられた。

それで、彼女に課した『縛り』が、彼女の籬が外れた。

「は、はあっ……ふうっ!」

内臓を抉られるほどの一撃でも、芹は一瞬で『再生』していました。ただ、その速度は先ほどよりは明らかに遅い。彼女が息を切らしているのが何よりの証拠です。

「草木さん」

「……………」

わたくしの声は、届かない。いえ、わたくしが言わずとも彼女は理解しているのでしよう。

彼女は静かに、語り出します。

「私の術式は『廻』じゃない。あれはただの癖みたいなもの」
「!」なら、あなたの術式は……」

芹に答えるように、草木さんは掌の上に小さな立方体の結界を展開した。その中にはいつの間にか、赤黒い臓器——脳幹が現れていて、その結界を解くと同時に、脳幹は彼

女の手の中に入り、

「本当の術式は——」

——グチャツ——

「——『輪廻復原』」

握り潰した。

彼女の右手から夥しい量の血が滴り落ちていく。それは臓器を潰した程度で出るような血液量ではなく、まるで人間1人から抜き取ったかのような量でした。それは見る見る形を為していき、やがて1人の男性の姿になります。

くたびれたスーツ姿でところどころ白髪之交じった黒髪の男性。どこにでもいそうな方でした。

ただし、その両目には本来あるはずの眼球が入っておらず、ただただ暗い空洞があるだけです。

「その男が……あなたの、術式……？」

「当たらずとも遠からず。『これ』はこの男の残骸だ」

「発動条件は、生きている状態の人間から取り出した眼球か脳幹を私が壊すこと」

「術式効果は、破壊した部位の持主を、人格を排除して、術式だけを残した骸人形として蘇らせること」

「これが私の『輪廻復原』」

術式の開示が終わると同時に、芹の長刀が骸人形の首を飛ばしました。不意打ちの一太刀でした。

「これでいいのでしょうか!?!」

そのまま彼女は草木さんに距離を詰めます。草木さんはそれに対して防御体勢も取らずに、

「殺った!」

ーブンツー

長刀が彼女の体を二つに切り裂こうとしたその瞬間、

ーキイイインツー

金属音が響く。

それは芹が振るった長刀と草木さんの目の前に突如現れた小刀が交わる音。離れた所から見ていたから分かります。草木さんを守るように現れた小刀は、あの骸人形が作り出したものでした。

「どこから!？」

「『あれ』が放った。ええと……『構築術式』だっけか、それで作って飛ばしたみたいだね」

「みたい!？」

骸人形には意志も命もありません。ただ術師を守るように設定されているだけの存

在。腕を飛ばされても、足を切られても、頭を落とされても、術式が使える限りは動き続ける。

「っ」

「あっ」

突然のことに動揺していたようで、芹は隙を見せ、そこへ草木さんは右手を伸ばします。その右手は気付けば、芹の目の前、眼前へと迫っていて――

「隙あり」

――グヂャヤヤアツ――

――左目を割り貫く。

それは彼女がよくする行為なのでしよう。慣れた手付きで、視神経をブチブチと千切りながら、その眼球を引摺り出しました。

「あああああああああ」

!?!?!?!?

叫び声をあげる芹。その様子に、痛みは感じるんだと少しだけ驚いたように草木さん。その光景を見て、私は少し恐怖を感じます。同時に安堵。この方が呪詛師でなくてよかった、そう感じてしまいました。

「どうせこれも『再生』するんでしょ」

「っ、ああ……はあっ……」

左目を押さえ、苦悶の表情を浮かべながらも、草木さんの言う通り、『再生』の術式をもつ彼女の左目は治っていました。

「やっぱり」

「……はあ、はあ……確かにその術式……数を揃えられてしまっっては面倒ですが、私には『再生』があります……」

そうです。だから、わたくしは草木さんに進言しました。彼女を殺すのは不可能で、総監部の呪術師を待つべきだと。

しかし、状況が変わりました。

『輪廻復原』が使える今の草木さんならば、関係がない。

「『輪廻復原・自壊』」

「グチャツター」

握り潰したのは、つい先ほど引摺り出した左目。

それもまた形を為していく。そして、そこには『芹』が出来上がっていて。

「は、はは……私の人形……？ そんなもの増やしたところで私は『再生』し続けるのよ

!!」

「……言い忘れてた。骸人形は私を守るように動く。だけど、その骸人形が、原型となった人間を確認すると、骸人形は違った行動を取り続ける」

「それはー」

「ースパツター」

芹の言葉を待たずに、骸人形は動きました。

『構築術式』で作られた小刀で、芹の頭を切り落として。

「つ、だから、くどいのでー」

ース。パッー

また殺す。

また『再生』する。

殺す。

『再生』する。

その繰り返し。

「骸人形は自分と同じ存在を許せないみたいでさ。死ぬまで殺し続けるんだよ」

「その術式『再生』も少しは呪力を使ってるんでしょ？ なら、いつかは『再生』できなくなる」

「それまで自分に殺され続けてなよ」

—————

わたくしが見た未来。

花房雪を呑み込み、完全に受肉した『墮雪』。それを殺し得る人物をわたくしは探して
いました。

その可能性があるのは彼女——草木美澄と彼女の術式『輪廻復原』のみ。彼女の術式
は『墮雪』をも殺し得る。

……ただ、実際に彼女の『それ』を目の当たりにして。

そのおぞましい術式を見てしまつて。

この方を本当に育てていいのでしょうか。

そんな不安が心を蝕み始めているのを、わたくしは見ない振りをしました。

これがきつと正解だと言ひ聞かせるように、わたくしは彼女に笑みを向けたのでし
た。

—————SIDE : A 呪術高专中央参道—————

「咲人、こちらは片付いた」

呪詛師の男を倒した在藤は咲人へそう告げた。それに答えるように、咲人は呪詛師『楽』を拘束していた結界を解く。

「おいおい、ずいぶん時間がかかったなあ、在藤」

「狭い場所では術式が十分に使えんからな。体術のみではこんなものだろう」

手についた血と瓦礫の破片を払いながら、在藤はそう言う。それを脇目で見た咲人はニヤリと笑い、彼の肩に手を置いた。

「じゃ、やろうぜ、在藤」

「本来であれば合流すべきだろうが、仕方あるまい」

2人の様子を見て、『楽』は困ったように笑い、そして、呟く。

「2対1」

「これじゃあどつちが悪者か分からないね」

その笑みは崩れない。

—————

第27話 転化制動一肆一

—————

事戦闘において、花房在藤に並ぶ者はいない。

草木咲人はそう考えている。

強力な術式。恵まれた体格とそこから繰り出される体術。それに加えて自他を治療できる反転術式まで保有している。

友人という鼻肩目はあるだろうが、現代最強と言っても過言ではないと考えている。事実、彼が負けた場面は見たことがなかった。

自他共に認める女好きのろくでなしである咲人であったが、在藤に対しては従順であり、心酔しているとも表現できるほどには慕っていた。

—————SIDE：A 草木咲人視点—————

『耐呪結界』

在藤と合流したところで、結界を張り直す。

『耐呪結界』、呪力を通さない結界の一種だ。奴をさつきまで拘束していたのもこの結界。

だが、今回は分断のためのものじゃねえ。

「在藤！」

俺が名前を呼ぶ前に、在藤は動いている。術式は使っていない。呪力を拳に乗せているだけだが、それでも、

ーースツー

「はあああッ!!」

ーバキツー

在藤の拳が奴の顔面を捉えた。吹き飛ぶ呪詛師『楽』。

「流石だぜ、在藤」

「……今のタイミングで構わん。奴を自由に動き回らせるな」

「了解だ」

雪ちゃんとその先生。妹ともう1人の女。そして、俺たちを分断する結界を張っている都合上、戦える場所はそこまで広くはない。

だからこそその策だ。俺の結界でギリギリまで奴を拘束し、在藤の攻撃のタイミングに合わせて結界を解く。かなりの精度の連携が必要だが、俺と在藤ならばできる。

「速度を上げる。いけるか?」

「任せろ」

タイミングの次は速度かよ。本当にこいつの要求は高くてつかれるぜ。だが、それでいい。それでこそ在藤だ。

——スッ——

ーバキツー

「つと」

余計なことを考えていたら、在藤に追い付けねえな。今は目の前の戦闘に集中だ。

一発、二発、三発と連携攻撃を続けて気付く。攻撃自体は当たっている。だが、この呪詛師、相当の使い手のようで、在藤の攻撃をいなし威力を弱めた上で、結界を応用して捌ききつていやがる。

「咄人」

「在藤！」

ほぼ同時に名前を呼び、『楽』から距離をとった。このままでは埒が明かない。そう判断したからだ。策を変える必要がある。

「どうする？ この狭さだと手段は限られてくるぜ」

「……………」

時間にしてほんの数秒。在藤はすぐに答えを出した。

「この結界だけ解く」

それはつまり、目の前の呪詛師『楽』に逃げ場を与えることを意味する。万が一逃げられでもしたら。

……と凡人は考えるだろうが、こいつは違う。

戦闘の天才。才能の塊だ。だから、俺は在藤の言うことには従う。

「3秒後でいいか?」

「ああ、構わん」

そう言うと同時に、在藤は動き出す。俺の方を見ないのは、あいつからの信頼の証。嬉しいこつたな。

きつちり3秒で周りに張った結界を解く。勿論、妹たちの方はそのままどこだけを解除した形だ。

その結果、ここだけ場の制限がなくなる。あいつは無敵になる。

「『雷動』」

在藤の言葉の後、あいつは駆ける。

『雷動呪術』。

花房家の歴史を遡っても見られない完全に在藤だけの術式。

その術式効果は、呪力による体内の電気信号の加速と完全制御。簡単にいうならば、人間の限界を超えた反応速度をその身に宿すというものだ。

ーグッー

「……術式を発動してる？ その割にはあまり変わらないね」

懐に入った在藤を見て、奴は瞬時に結界を展開した。やはり速い。結界の構築速度だけではないかそれ以上だ。

だが、

「ああ、変わらん……お前の防御を避けて叩くだけだ」

ーグググッー

「!」

結界が張られるのを見てから対応できる在藤には、

ーバギイツー

速度など関係ない。反応速度の上昇とはつまり、常に相手の出方を見てから動きを選
択できるということだ。常に後出しじゃんけんを相手に強要することができる。

そのまま在藤は殴り続ける。

結界を張られて、それを見てから攻撃を変える。それを続けていけば流石に理解した
ようで、奴は大きく後退りしながら、壁状の結界を張った。

次の手を練るための時間稼ぎだろうが、

「関係ねえ! 突っ込め、在藤!」

「ああ!」

結界術ならば俺の領域だ。咄嗟に張った間に合わせの結界なんてのは1秒あれば十分破壊できる。

ーバーリンツー

ほらな？

さあ、在藤、やつちまえ！

ーードンツー

「あっ？」

在藤の呪力を込めた攻撃。それはいつの間にか構築された分厚い壁に阻まれていた。それはやはり奴の結界。さらに、その結界は範囲を拡げ、在藤を囲うように張り巡らされていく。

「これは……!?!」

「在藤！」

在藤の攻撃を防いだということは少なくとも在藤よりも速く反応して展開しなくてはならないことになる。それは不可能だ。

それに、今張りやがったこの結界は……崩せねえだど!?

「その君」

「！」

「彼の攻撃を防ぐのは不可能。そう思った？」

奴は俺に向け、そう訊ねた。俺が結界術に長けていることを踏まえた上でそう聞いているならば、相当に性格が悪い野郎だ。

脇目で見ると、結界に囚われている在藤には変化がない。

こちらへの攻撃は今のところしないというわけか。

在藤と視線で意思の疎通を図る。

内側からも破壊は難しいようだ。とすれば話に乗るしかねえか。

「……ああ。そいつ、在藤の攻撃は反応どうこうで防げるもんじゃねえからな」
「そうみたいだ。現にボクが結界を出したのを見てから避けて攻撃してきたからね。いやあ、いい術師だ」

普段ならば、在藤が称賛されれば、そうだろうと頷く場面ではある。だが、こいつの真意が読めねえ。

「では、君はどうだい？」
「あ？」

「どういふことだ？ 俺はどうだ、だと？
こいつは何が言いたい？ 何をしたい？」

「結界術は多少心得ているみたいだけれど、彼に任せてばかりで戦闘に参加しないのはどうかと思うよ」

「……お前にどういふ言われる筋合いはねえ」

「それもそうだ。ただ、同胞として少し残念だという話」

同胞。

こいつはそう言った。

「俺には、出来の悪い妹以外に兄弟はいないつもりだがな」

「兄弟……そういうことではないさ」

「じゃあ、俺が呪詛師とでも言うのかよ。ああ？」

「それも違う。前者の方が近かったかな」

意味を図りかねる。

「咲人！ 呪詛師の戯言だ。構うな！」

「っ、ああ」

在藤の一言で、その雑念を振り払う。

そうだ。今はそんなことを考える必要はねえ。考えるべきは、在藤を拘束する結界を壊す方法だ。

考えろ考えろ考えろ。

「ほら、隙ができています」

「!?!」

思考は一瞬で、結界自体も機能していたはずだ。

だが、奴は俺の目の前にまで迫っていた。呪力感知が発動していないのか？ いや、違う。呪力感知に引掛からないほどに、こいつが速すぎるのか!?

攻撃を喰らう。咄嗟にそう判断した俺は、自分の前に結界を張ろうとして、

「……おや、残念。どうやら同志たちがやられてしまったようだね」

奴から攻撃の意思が消えた。それは奴の発した言葉の通り、

「在藤兄さん！ 咲人さん！」

俺たちの近くまで、雪ちゃんと妹、それに佐木とあと1人が合流していたからだった。

俺の結界は呪詛師の死亡を条件に解除される。つまり、それぞれが呪詛師を撃破してきたんだろう。

まあ、雪ちゃんの方は佐木もいるから大丈夫だとは思ってたが。

「咲人」

「……おう、妹」

俺に声をかけたのは妹。

この愚妹がどうやって呪詛師を倒したのか少々疑問だったが、今、こいつを見て得心がいった。どうやら内包する呪力量が上がってるようだった。

「見ねえ間に随分育ったじゃねえか」

「うるさい。こっちはやつとユキと合流できて気分がいいんだ。話しかけるな」

「あ？ お前が話しかけてきたんだろうが」

「ユキの前で、家族を心配してるアピールしただけ。勘違いすんな」

この妹、そんな軽口を交わせる程度には余裕があるようだ。

……それに、どうやら俺も余裕が出てきていたようだった。

まあ、それはいい。本題に戻ろうか。

こちらは全員が生存している。そして、あっち側は1人、呪詛師『楽』のみときている。在藤が結界に囚われているとはいえ、こちらが優勢なものには変わりない。

「おい、呪詛師！ 多勢に無勢みてえだな！」

奴にそう投げかける。人数が集まってる中でそう言うのは若干ダセエが、こっちの完全勝利だ。存分に煽らせてもらおうじゃねえか。

「……………」

……だが、俺の声に奴は答えない。ただじつとこちらを見つめている。その視線の先には、

「……………私を見てる？」

我が妹の姿があった。

あ？ 奴の狙いは雪ちゃんの中の『墮雪』じゃねえのかよ。なんで、あいつのことを見てる？

「草木一級術師」

「ああ、なんか様子が変だ」

佐木の呼びかけに頷く。同時に、佐木が戦闘態勢に入っていることを確認した。こいつも一級だ。なら、在藤との連携ほどではないが連携して追い討ちをかける。

そう判断した時には、

「嬉しいね。こんなところに『それ』をもつ者に会えるとは」

「！」

まただ。俺たちの意識の間を突いて、移動している。

奴は俺と佐木の後ろ、妹の目の前に立っていた。

「!？」

「美澄ちゃんっ!!」

「草木さん！」

俺と佐木が振り返る。

だが、

——ガシツ——

「!？」

突如として現れた着物姿の女。 奴の仲間であろうそいつは、俺と佐木の頭を掴み、止めてきた。

「主様は今、用事を果たそうとしておりますので、邪魔をしないでいただきたい」

「こいつ、どこから!？」

「草木術師！」

佐木の声に合わせて、俺は結界を展開した。

||
||
||
||
||
||
||

第28話 転化制動―伍―

――美澄視点――

そいつが目の前に現れた時、私はまったく反応できなかった。東坊城の結界を破り、術式を取り戻した今の私ですら気付けなかったんだ。

「!?」

「美澄ちゃんっ!!」

「草木さん!」

「つと、邪魔しないでほしいな」

そう言うのと、こいつは私とこいつを囲うように軽く結界を張った。だが、その所作に反して、結界の精度は高い。壊すことは難しい。その上、結界の内からは外が見えないように、駆けつけようとしてくれたユキの姿も声も認識できない。

……どうする、ここで『輪廻復原』を使うか？

隠してきた術式がバレるリスクはあるけれど、この中に私の結界を張ってしまえば、外からは見えないはずだ。

「あ、安心して。君を今すぐどうこうするつもりはないから」

「あ？」

呪詛師の言葉を信用できる訳がない。

私は結界を展開した——

「……………は？」

——はずだった。

外から見えずに、呪力も遮断することができるとして、失敗した。この感覚はさつきまで味わっていたもの……いや、それ以上だ。呪力が完全に練れなくなっていた。

「そ。この『封呪結界』の中では呪力は練れないよ。勿論、ボクもね」

そう言つて笑みを見せる呪詛師。

その笑みにはどこか親しみにも似たものが宿つているように思える。気味が悪い。私の心中などお構いなしに、呪詛師はこちらへ話し始める。

「君、『輪廻復原』をもっているよね？」

私の術式を言い当てる呪詛師。

『五条』といい、東坊城といい、こうも隠しているはずの術式を看破されると、流石に自信がなくなる。

「隠していた、のかな。この間は気付かなかつたよ」

「……………」

「君、名前は？」

「……草木、美澄」

「いい名前だ」

呪詛師はそう言って笑う。止める、呪詛師に褒められてもただただ気持ち悪いだけだ。

いや、今は感情を殺せ。呪力を練れない今、ここでできることは、情報を引き出すことだ。

まずは、こいつの目的——ユキを殺すという馬鹿みたいな目的、その真意を聞き出す。

「お前、ユキを殺すって言っていたけど」

「ああ、そうだったね。でも、止めた。君がいるなら話は別だ。計画を変えるよ」

「は？ なにを!？」

話は終わりとばかりに、奴はひとつ手を鳴らし、結界を解除した。視界が広がる。

「っ」

「美澄ちゃんっ!!」

「草木さん!」

まずはユキの姿を確認する。よかった、いた。

隣には東坊城。どうやらこつちも無事なようだった。

あとは、咲人たち。

結界が張られる前に彼らがいた場所に目をやると、そこには咲人と佐木が着物姿の女と交戦していた。

「ユキ、怪我はない？」

「う、うん。美澄ちゃんこそ大丈夫なの!？」

「うん。何もされなかった」

話はされたけれど、それだけだ。

私とユキの会話に割り込むように、東坊城が口を出す。

「歓談している暇はないようです」

「東坊城……あの呪詛師は？」

「残念ながら、結界解除後は姿を見ておりません。ですが、先ほどまでとは戦況が変わり

ました。わたくしたちは雪さんを護衛しつつー」

「いや」

「草木さん……?」

「あいつ……ユキを殺すのは止めるって言ってた」

「え? それは一体どういうことですか?」

「詳しい話は後でするけどー」

「そうだね。詳しい話は後で連絡することにするよ」

「!?!」

「呪詛師『楽』!」

横からの声。

それは奴のものだった。だが、反応したときにはもう遅い。

「え……?」

「ユキッ!!!」

奴は、私の隣にいたユキを拐った。
瞬間、頭に血が昇るのが分かる。

「おまえええええッ!!!」

次々に構築した結界を足場に、宙を駆ける呪詛師。
それを同じ要領で結界を使い、私も追う。

あいつの言葉を一瞬でも信じた私が馬鹿だった。あいつはユキを殺すつもりだ。
許さない。許せない。殺す。

「だから、殺さないって。拐ってくだけ」

「信じられるかッ!」

「もう。仕方がないなあ……『陰絵』!」

—————咲人視点—————

「畏まりました。主様」

呪詛師『楽』と妹が空を駆けていたのは分かった。

『楽』の呼びかけに答えるように、その女は呟く。女はそのまま掌印を結び――

「『領域展開』――『嵌合暗翳庭』」

女の足元から伸び拡がっていく『翳』が辺りを支配していく。地を、空を囲うように『領域』が拡がっていき、やがて出来上がったのは『翳』の領域。

それらは俺と佐木、結界に囚われている在藤、そして、結界を使い、空を駆けていた妹と『楽』を閉じ込めていた。

「ふう、これで落ち着いて話せるね。ありがとう、『陰絵』
「いえ」

そう言って、『楽』は抱えていた雪ちゃんを地に置いた。

雪ちゃんが捕まっちゃった。つまり、呪詛師側の目的は達成したってことか、くそがっ

領域を支配する『翳』に足を絡め取られている俺と佐木に為す術もない。それに、妹は領域の上部に片腕を吞まれ、拘束されているようだった。そのまま雪ちゃんを返せと吠えている。この状況『領域』内に捕らえられていながら、まだ吠える胆力があることには、我が妹ながら感嘆するぜ。

「さてさて。一級が3人と美澄ちゃん、よく聞いてほしいんだけど」

「この娘……花房雪は預かっていくよ。殺しはしない」

殺さない？

そこに違和感を覚える。そもそもこの襲撃の目的は、雪ちゃんの中にある『墮雪』を奪うこと。

雪ちゃんが奴の手中にあり、俺たちを拘束している時点で目的は達成できるはずだ。にもかかわらず、殺さないだ？

何を考えてやがる？

「……………雪をどうするつもりだ」

ぎゃんぎゃん叫ぶ妹の声にも負けない声で、在藤がそれを口にした。

「計画が変わったんだ。この娘はどうもしない。ただの人質だよ」

「人質？」

「そ。数日後、改めて連絡はするね」

そう言うと、奴は意味ありげに妹の方を見た。

「まただ。こいつ、妹に何かを見出だしているのか？」

「さて、花房雪は殺さない。それは約束するけれど、ここにいる呪術師諸君は別だ。ボクは同志が殺され、悲しんでいるんだよ」

「ただ攻め込んだのはボクたちだから文句は言わない。それに目的は達成したわけだしね」

「というわけで、君だけ殺しておくね」

それは一瞬だった。

奴がそう言うと同時に、結界に囚われていた在藤が崩れ落ちた。

「つ、おい!! 在藤っ!!」

叫ぶ。

よく見ると、在藤は吐血しながら自分の体を抱きかかえ、ガクガクと震えていた。

「在藤に何しやがった!？」

「ん? 結界を張っただけだよ。彼の体内の臓器ひとつひとつを分断するようにね」

ありえない。

人間の、しかも他人の体内に入り込む結界だと……!？」

そんなもの、ありえねえ!

「信じる信じないはご自由に。じゃあ、ボクはこの辺でお暇するかな。行くよ、『陰絵』」

「はこ」

『楽』と『陰絵』と呼ばれた女は、領域の『翳』に沈んでいく。地面に横たわっていた雪ちゃんも一緒に。

数秒後、領域が解けたその場所で。

妹の叫び声と、俺の在藤を呼ぶ声だけが響いていた。

—————

第29話 傷痕

——花房家 在藤夫妻寝室——

「ああ……来てくれたか、咲人」

咲人と私が通された在藤の寝室には、ベッドに横になる在藤とその妻、花房圭の姿があった。

頬は痩せこけ、体の筋肉は衰え、体を起こしているだけでやつとという様子で、妻に支えられていた。長年、花房家当主代理を務めていた一級呪術師の面影はもうない。

「在藤……体の具合はどうだ」

「まあ、それなりだ」

「……………」

それなりだと彼は言った。

その言葉が嘘であることは、この場にいる誰もが分かっている。けれど、誰一人としてそれが嘘だと指摘できる者はいなかった。咲人は勿論、私ですら言えない。

他愛のない話を少ししてから、彼は妻である圭に部屋の外へ出るように言う。それに従い、彼女が部屋を出たことを確認した彼は私たちに本題であろうその話を切り出した。

「私はもう長くないだろう」

「っ」

その一言で、咲人の顔が強張るのが分かった。それに気付かぬフリをして在藤は続ける。

「私の力不足で、雪は呪詛師に連れ去られ、私自身もこの有り様だ……呪力・術式の発動はおろか体を動かすこともままならん」

「在藤……」

「分かっている。お前がここ2日間ずっと私の中に入り込んだこの結界を破壊するため動いていたことは。そして、この結界を破壊する術がないこともな」

「……すまねえ」

俯く咲人。そんな咲人は初めて見る。

「……咲人」

在藤は咲人の名を呼ぶ。

そして、告げる。

「圭と優^{ゆう}を頼む」

「……………」

「愛する妻と息子を頼めるのはお前しかない。頼む」

そう言うと、在藤は頭を下げた。体がろくに動かないという発言通り、ぎこちない動きだ。けれど、その姿からは彼の思いが伝わってきて。

私ですらそれを感じ取ったんだ。咲人にとっては――

「分かった。お前のぶんまで……っ」

「ああ、恩に着る」

「短く、それだけを咲人に告げた彼は、次に私の方を見た。
えっと……。」

「ユキは私が助け出す」

「よろしく頼む」

その後、私たちはすぐに部屋を出た。

入れ替わるように、圭が部屋に入っていく。その腕には、赤ん坊が抱えられていた。

「……早く帰るぞ」

「ん」

これ以上、ここにいても邪魔になるだけだ。

珍しく咲人の言葉に同意して、私たちは花房邸を後にした。

—————記録—————

1988年5月3日未明。

一級呪術師・花房在藤の死亡を確認。

花房家当主・花房雪が呪詛師『楽』に捕らえられているため、草木家に花房家の権限を一時譲渡する。

草木家に関して追記。

—————草木家・広間—————

今後の話をお父様へ相談するため、草木家に戻ってきた私たち2人を迎えたのは、広間の中央にある机の上に置かれた遺体だった。

「……………親父？」

それは草木家当主・草木琉兵衛のもの。その体は血に染まり、遠目からでも絶命して

いることが分かった。広間にはいくつもの傷跡と夥しい数の血痕が残っていて、激しい戦闘があったことを物語っている。

その中で異質だったのは、いつもお父様が座っている席に代わりにいた人物。

「やあ」

呪詛師『楽』。

奴は穏やかな笑みを携えたまま、足を組み座っていた。まるで何事もなかったかのよう
うに。

「何しに来やがった……」

「ユキに何もしてないだろうなッ」

声が重なる。

「あー、同時に話されるとボクも困るね」

ヒラヒラと手を振る呪詛師。

「じゃあ、美澄ちゃんの写真から答えようか。彼女にはなにもしていないよ。ただまだ眠っているようだけどね」

「……………」

「信用できないって顔だ。そうだなあ…………この連絡先に電話をしてみるといい。彼女が起きれば繋がるはずだよ」

「！」

呪詛師が机に置いた紙を結界を使い、手元に移動させる。そこには確かにどこかの電話番号が記されていた。

『陰絵』を待機させてある。通じるかどうか今、確認してもらっても構わないよ。

奴はそう補足し、咲人へ向き直った。

「次はその結界使い君への答えだ。何をしに来たのか…………言っただろう？　後日連絡するってさ」

「つまり、宣戦布告つう訳だな」

「そうだね」

咲人と奴が話している間に、私は部屋を出る。この電話番号がちやんと通じるのか確認するために。

————咲人視点————

妹が広間を出たことを確認して、俺は再度奴に問う。

「何が目的だ」

「ん？ 言っただろう？ 宣戦布告だって」

「ちげえよ。雪ちゃんを拐い、親父と在藤を殺したお前の目的のことだ」

「……ああ」

そつちか、と息を吐く『楽』。そして、奴は語り出す。

「ボクはただ『生き返りたい』だけだよ」

「そのために美澄ちゃん……彼女の体を頂こうと思ってるんだ」

「あ？」

意味がわからねえ。生き返りたい？ 妹の体を頂く？ 本当に何を言ってるやがる。

「……おい、『楽』」

「『楽』？ ああ、そうか。まだ名乗っていなかったから、勝手に名前をつけられたという訳だね」

そんな適当な名前で呼ばれるくらいならば名乗っておこうか。
奴はそう言うのと、椅子から立ち上がり、一礼した。

「はじめまして。ボクは福濁ふだく」

「草木福濁くさきふだく……君たち草木家の源流だよ」

—————記録—————

草木家に関して追記。

同日に呪詛師『楽』による襲撃を受けた。その際、草木家当主・草木琉兵衛が死亡。

また、『楽』と仮称した呪詛師が、草木家初代当主・草木福濁であることが報告されており、その真偽を確認中である。

—————

器

第30話 通話記録

—————
1988年6月某日。

草木家廊下の固定電話より。
—————

「もしもし、ユキ」

『こんばんは、美澄ちゃん』

「体はダイジョブ？ 酷いことされてない？」

『あはは、大丈夫だよ。それ、昨日も聞かれたし』

「そりやあ聞くよ！ ユキを捕まえてる奴ら、呪詛師なわけだし」

『うん……でも、酷い扱いはされてないし。部屋には呪力を遮断する結界が張られてはいるけど、その中で生活できる広さは確保してもらってるから』

「……なら、いいけど」

『納得してとは言わないけど、危害を加えられるってことはないかな』

「ほんと?」

『本当だよ。美澄ちゃんには嘘つきません』

「……私に黙って当主になつたくせに?」

『あ、あはは……』

.....

『……そっちはどう?』

「変わらないよ。イチさんや東坊城の力も借りてるけど、ユキの居場所は分からないま

ま……ごめん」

『そっか……』

「訓練も続けてるよ」

『呪力練れるようになったんだもんね……『廻』も強くなった?』

「ああ……うん」

『……それは、よかった』

.....

『……………圭さんと優くんは……………どう?』

「え、ああ、元気にやってる。イチさんも子供のお世話手伝ってるみたいだし……………とはいえ、圭さんの方はまだ元気がないけど」

『そう、だよね……………うん』

「……………まあ、咲人も私も様子は見てるつもりだから」

『ありがとう、美澄ちゃん』

「いやいや、ユキの家族だからねえ。私にとっても家族みたいなものだよ」

『ふふつ、なにそれ』

……………

『そろそろ時間、かな』

「えええつ!! ヤダ!!」

『……………そうは言っても、わたしも囚われの身だし』

「……………早く助け出すからね」

『……………うん、待ってる』

「ご機嫌なようだね」

通話を切ると同時に、彼がわたしの部屋に入ってきた。

さつきまでの美澄ちゃんとの通話の余韻を壊すような、嫌な気配を纏った人がそこにはいた。

草木福濁。

彼はわたしにそう名乗っていた。草木家の源流……つまり、咲人さんの先祖だとも言っていた。そのときに、彼の目的も聞いていて。

「……………美澄ちゃんに手を出さないでください」

だから、わたしはそれを彼に告げていた。

「またそれかあ。毎日毎日、健気だねえ。そんなに美澄ちゃんが大事なのかい？」

「……はい」

「ふふつ、『墮雪』の器風情が一人前に人間ごっこか。いや、『器』同士仲良くて睦まじいとも言えるかな」

「っ」

それを言われることに嫌悪感がなかったと言えば嘘になる。けれど、それ以上に彼が美澄ちゃんのを乗っ取ろうとしていることを看破できるはずもない。

「……なんと言われようと、わたしの意思は変わりません。美澄ちゃんに手を出さないで」

「ボクと君の意見は平行線……これ以上は時間の無駄だよ。それとも暴力で以て解決するかい？」

「っ」

目覚めた初日。

呪力が封じられていることに気付き、在藤兄さんから教わった体術で抵抗を図った。ただ彼の御付きの女性『陰絵』によって、取り押さえられてしまった。彼が一人で部屋

に来た時に襲撃しても結果は同じで、彼女はきつと今も彼の側に潜んでいるはずだ。

「……………」

「うん、それが賢いよ。君が抵抗しなければ、ボクも手荒なことはしない。美澄ちゃんと約束もしたしね」

「……………」

約束。

この人の言うことをどれだけ信じられるか分からない。けど、抵抗した時以外は本当に手厚いもてなしをされている。害されるような素振りは一切ない。

なら、わたしは待つ。

美澄ちゃんや咲人さんが助けに来てくれるそのときまで。

「あ、そうだ」

ふと、彼は手を叩く。

それでわたしの思考は現実へと引き戻されて。

「美澄ちゃんですごい出した。近々、彼女を迎えに行くことにしたよ」

「え……？」

思わず聞き返してしまう。

彼女……それは美澄ちゃんのこと。美澄ちゃんを迎えに行く？ それって……!?

「そろそろ『生き返ろう』かなって思ってたさ」

「最後に、君も美澄ちゃんに会いたいだろう？」

—————

第31話 対話記憶

1988年6月28日。

呪詛師『楽』改め、草木福濁から音沙汰はなく、あの日から1ヶ月以上が経過していた。

花房圭・優親子が草木家に来たり、咲人が草木家当主になったりして、環境が変わってきている。私も東坊城の『縛り』を突破したことで、本来以上の呪力を手に入れていた。

勿論、イチさんや東坊城の権限を使つて、草木福濁の所在を掴もうとしているけれど、さつぱり掴めず苛立ちが募る。

唯一の救いは、毎晩かけ続けている電話ごしに、ユキが無事だと分かること。ユキが無事ならば、状況はまだマシだ。

でも、いち早く助けなきや。

そして、いつもの平和な日常を取り戻すんだ。

それが私のやるべきことだから。

———家跡地———

私が草木家に引き取られ、呪術師としての任務で得た給料で買った土地。

それがこの???家跡地。

都内であるにも関わらず、坪当たりの値段が格安なのは、この土地が日く付きであるからだろう。娘のみを残してこの家に住む一家が惨殺されたという事件の結果としての日くが。

……まあ、だから私でも買い取れたんだけど。

「久しぶりだ」

元々あつた住居自体は取り壊され、今はプレハブ小屋がポツンと建つだけの土地を見て、私は呟いた。

学生服に閉まつてある鍵を取り出し、その小屋を解錠する。なんの変哲もない内装。その中央に置いてあるちゃぶ台だつて、近くの寺から貰つてきたものだ。

その下、ちゃぶ台をどかして簡素な床板を外す。そこにあるのは見慣れたやけに古びた隠し扉。ここから地下へ繋がっている。

「……………鍵穴、少し錆びてる」

床下にあることもあって湿度やらなにやらで錆びやすいんだろう。しかも、ここ一年ほど……………私に『縛り』が課せられてからは来ていなくなかったから当然と言えば当然か。

少しは掃除でもしておけばよかったなと思いつつも、軽く鍵穴を磨いてから、その扉を持ち上げるように開いた。

地下へ続く階段を、一段一段下がっていく。体感で2階分の階段を下り終えると、そこには少し広い空間が広がっている。梅雨も明け、夏に近づいているこの時期にも関わらず、肌寒い空気を肌で感じた。空調もちゃんと働いていて、一安心だ。

「1、2、3……………3体か。この間、一つ使っちゃったからなあ」

呪詛師を殺すために使った『構築術式』の術師を除いた3体の呪術師の残骸がそこには保管されている。どれも私が集めた駒。

多少蒐集癖の気がある私にしては少ない数だった。それほどまでにこの1年の『縛り』はきつく、蒐集はできなかつたんだ。

とはいえ、3体とも『あいつ』を倒し得る力はない。その上現状、草木福濁と名乗る呪詛師を殺すために使えるほど、数に余裕があるわけじゃない。

『輪廻復原』の骸人形は使い捨て。

とすれば、今やることはひとつだ。

「草木福濁を殺すための骸を集めなきゃ」

勿論、ユキから『あいつ』を分離する手段も探しながらだ。それが私の目的なのだから。

その後、私はその空間に張られている結界の点検を済ませ、小屋を出たのだった。

—————

小屋から外に出てきた私は、気配を感じて立ち止まる。

この気配は……。

「『五条』」

その気配の主の名前を呼んだ。

「お久しぶりね。1年ぶりかしら」

「……………こんなところにまで現れるとは思わなかった」

「本当は高専で接触できればよかったのだけれど。生憎、一度侵入したせいで警戒されているでしょうから」

「? ……ここに何しにきた」

この1年間、この女は私の前に姿を見せなかった。それがこのタイミング……ユキが連れ去られたタイミングで現れた。前回と今回、共通項はユキの危機という点だ。なら、恐らくだけど、こいつはユキに関わるなにかを私に伝えにきた。そう考えるのが自然だろう。

私の考えを読んだかのように、『五条』は頷いた。

「ご名答よ。私は草木福濁の情報を伝えにきたのよ」

「……なんでお前が知ってるんだ」

そう訊ねると、当然の疑問ね、とだけ返される。私の質問に正対するつもりはないらしい。なら、情報をいただくだけいただとする。正藤の時もこの女の情報は正確だったわけだし。勿論、完全に鵜呑みにするわけにもいかないけれど。

「あいつはどこにいる？」

「何処にいるかは知らないわ。ただー」

「ー近いうちに貴女に接触してくるのは確かよ」

「それは………私を奪うため？」

「本当に、察しがよくて助かるわ」

1ヶ月と少し前、草木邸に侵入した福濁が咲人に語ったこと。

私の体を奪い『生き返る』。

もし奴が本物の草木家の源流——当の昔に死んでいるはずの人間だったとしたら、何らかの方法で死を逃れ、さらには『生き返ろう』としていてるってことだ。生き長らえている理由は分からない。ただ『生き返る』って方に関して言えば、あり得ないとは言い切れない。

私の術式『輪廻復原』ならば可能性はあるのだ。

骸人形として呪術師を甦らせることができるならば、その先も……。つまりはそういうことだろう。

「いつ接触してくるかは分からない。草木福濁の気分次第といつてもいい」

「……来るって分かっただけでも十分」

「そう。くれぐれも気をつけてね。そして、あの娘を守って」

「言われなくてもそうする」

「その言葉を聞けて安心したわ」

あの娘。

それがユキのことを指しているのは分かった。

こいつは本当になんなんだ。ユキの関係者？ でも、花房家にこんな人間がいるなん

て聞いたことがない。ただの呪詛師だと自称する身元も分からない人間だ。

………ただひとつ、心当たりみたいなのはある。こいつの雰囲気はどこかあいつに似ていて、しかも、その左眼は、

『六眼』

「………そうね。紛い物だけれど」

紛い物の『六眼』。

そのフリーズに私は聞き覚えがあつた。いや、これは確信に近いもの。だから、私はそれを問う。

「あんた、東坊城天蓋つて知ってる？」

紛い物とはいえ『六眼』の左眼と右眼をもつ2人の女。それに初めて東坊城を見たときの既視感も含めて、私にそうだと訴えかけている。

私の質問に、『五条』は少し黙って、そのあとで口を開いた。

「知ってるわ。双子の姉妹ですもの、妹のことを知らないわけではないでしょう」

「……やっぱり」

「まあ、『六眼』もちなんて滅多にいない上に双子。そんなの答えを言っているようなものね」

そう言つて、『五条』は笑う。

「私の本当の名前は……」

「？」

「いえ、止めておきましょう。そもそも貴女にとって私の名前なんて興味はないでしょうけど」

「そう」

その通り。私のことをよく分かっているようだ。

別にこの女の名前を知ったところで、私には何の感慨もない。ただの事実の確認程度の認識だ。

これ以上は特に話すこともなかったようで、

「そうね……あとは彼を――草木福濁を倒した後にでも、ゆっくり話しましょう。その時に私の名前を伝えるわ」

『五条』はそう言つて踵を返した。ヒラヒラと手を振りながら、彼女は去つていく。

「……………」

なぜかは分からない。けど、その背中を見て、私はそれを問いかけたくなつた。

「あんたはユキの味方でいいのよね」

頷く『五条』。

じゃあ、

「私の味方？」

「……………」

私に背を向けたまま、彼女は立ち止まり、静かに答えた。

「いいえ、貴女の敵よ」

――

第32話 呉越同舟―壺―

―――草木家・大広間―――

「来た」

『五条』との会話の3日後、夜の11時、その時はやってきた。

草木邸に張った自身の結界に反応があつたようで、咲人は一言だけ告げる。

「人数は？」

「……1人」

私の質問に短く返す咲人。

この状況で結界を張つてある草木家に入り込む人間など草木福濁くらいしかいない。『五条』の話を信じるのならば、恐らくもう1人の『陰絵』とかいう呪詛師も近くにいるはずだ。

「場所は？」

「中庭だな」

「中庭？」

草木邸は入り口のホールから伸びる左右2つの廊下が大広間に繋がるようにできている。そして、左右それぞれの廊下の中央に中庭が広がっていた。だから、急に中庭に現れるなんて……。

「奴の言葉を信じるなら、相手は草木福濁……俺たちのご先祖様だからな。隠し通路のひとつやふたつ、知っててもおかしくはねえよ」

「……………」

「中庭で挟撃だ。いいな」

「異存なし」

確実に倒すためなら、咲人との共闘もやむなしだ。中庭での挟み撃ちのために、私と咲人はそれぞれ広間から出て、廊下を私は左に、咲人は右に移動する。

——左通路——

中庭に繋がる扉の前に、見慣れない薄暗い色をした結界が目に入った。この呪力の感じは……草木福濁のもの。つまり、それは敵の仕掛けに間違いない。

なら！

『廻』!!

先手必勝。私は呪力を廻した脚でその結界を蹴り抜いた。

結界はいとも簡単に割れる。防御用じゃない。これは恐らく何かを入れておくための結界だ。

——ガシツ——

私の予想は当たる。

攻撃を受け止めた人物は小柄な老人。前の戦いにはいなかったであろう呪詛師だ。

「ハハッ、いい攻撃じゃな。じゃがー

「邪魔ッ!!」

ーバギッー

逆足での一撃は老人の首を捉え、老人は白目を向いて倒れた。

呪力量はそれなりだけど、小柄ながら『廻』の攻撃を受け止めたことからそれなりの術師だったんだらうことは予想できる。だけど、今の私の敵じゃない。

私はそのまま中庭への扉を開けた。

ーーー右通路・咲人視点ーーー

「……なるほどな」

俺の目の前にいるのは、着物姿の女。『陰絵』と呼ばれていた草木福濁の腹心であろう女だった。

前はいきなり戦闘に入ったせいでその容姿をじっくりと見る機会がなかったから改めてその姿を見る。

日に当たったことがないかのような真つ白な肌と腰まで伸びる艶やかな黒髪。まるで職人が仕上げた一点ものの日本人形……芸術品のような美しさだ。いい女であることは間違いねえ。

目を閉じ、静かに佇むその姿は、神聖さすら醸し出していた。

「あんたが俺の足止めって訳か」

「……………」

俺の問いに彼女は答えない。

「なあ、『陰絵』って言ったか？　なんであんたみたいないい女があのか呪詛師に付いてるんだ？」

「……………」

「あんたの術式『十種影法術』……禪院家相伝の術式だろ。禪院家との関係は知らねえが、そいつがあれば呪術界での地位は保証されてるも同然のはずだ」

それは彼女によつて呼び出された『それ』に止められていた。いや、手応え自体はあつた。彼女の術式である式神を破壊した感覚だ。

だが、『それ』はまだいる。兎のような姿をした『それ』は消えるどころか増え続けているように見えた。

「――『脱兎』」

「チツ、時間稼ぎか！」

数十羽はいるであろう兎は、俺の視界を奪うよつに俺の周りを囲う。目眩ましと壁の役割なんだろう。一羽一羽は弱いが、如何せん数が多い。こいつは、

「――バシューー」

「面倒、だなっ！」

祓つても祓つてもキリがない。

俺をここに足止めし、草木福濁と妹が対面する時間を少しでも稼ぐこと。それが恐らく彼女の役目なんだろう。

草木家の資料室に置かれている情報には、御三家の一角である禪院家相伝の術式『十種影法術』に関するものもあり、彼女の術式に当たりをつけた時点で、それについて調べてはいた。

最初に『玉犬』と呼ばれる式神が術師に与えられ、それを使い、他の式神を調伏していく。つまり、その術式をもっている時点で、『脱兎』よりも攻撃に向いているという『玉犬』は保有しているはず。

にもかかわらず、攻撃用でもない『脱兎』を使っているのは、つまりそういうことなんだろう。

「主様からはあなたをここで足止めするよう仰せつかっています」

俺の推察を肯定する『陰絵』。それを隠すつもりもないようだ。『脱兎』で着かず離れず時間一杯まで鬼ごっこ。制限時間は草木福濁が何らかの手段であの妹様を使い、『生き返る』までつてことか。

「あなたは結界術に特化した術師。1人ならば恐れることもないと、そう聞いていますので」

「はっ、あんたのご主人様は俺を嘗めてる訳だ」
「……………」

事実、奴が在藤にかけて結界を俺は壊すことができなかつた。戦闘中に分断した結界も、在藤を死に至らしめた結界も。だから、奴は俺をその程度の術師だと評価している。自分の腹心で事足りると判断した。
……………そういうことだろうな。

「まあ、否定はしねえさ」

「あなたは取るに足らない呪術師だと認めるのですね」

「ああ」

そうだ。

俺は1人じゃ弱いんだよ。

—————

俺はずっと在藤と共にあった。

あいつと任務をこなし、あいつと昇級し、あいつに従うような戦い方をしていた。依存にも近いそんな関係性だ。

「お前はもつと強いんじゃないか」

不意にあいつから投げられた言葉を思い出す。

そんなことはねえよって、あの時はそう答えたっけな。

俺はさ、在藤。

お前と一緒に戦えて楽しかったんだ。

お仲間が簡単に死んでく、こんなクソみたいな世界で、お前と肩を並べて死の恐怖を越えていくことが楽しかったんだよ。レベルの高いお前に合わせるために、自分の限界を無理矢理引き出してる時が、どんな女といるときよりも生を感じられた。

「圭と優を頼む」

「愛する妻と息子を頼めるのはお前しかいない。頼む」

お前の最期の言葉、笑えるぜ。

お前が、お前みたいいなすげえ奴が最期に頼るのが、こんな女好きの下衆野郎ってことによ。

正直な話。

お前が死んだ時、俺はもう何もかもがどうでもいいと思った。

もうお前はいない。それを考えただけで、自分の生きている意味が分からなくなつて、もう死んでしまおうかとさえ考えた。

でも、それはできなかつた。その度にお前が託してくれたものを見て、思い止まつたんだよ。

お前に託されたものがどんなに重いものか、分かちまつたから。

「私は圭にも優にも幸せになつてほしい。『呪い』なんてものに脅かされない世界で」

「だから、私は祓い続ける」

あまつちよろい考えだ。『呪い』に関わる人間の最期がどれほど凄惨かあいつは分かっていたはずだ。その上で、家族を作つたらうに。

「それでも私は——」

……ああ、分かつてるよ。

—————

「なあ、あんたが言った通り、俺は1人じゃ弱いんだよ」

「……………」

「結界を張るしか能がねえ、そんな呪術師だ。その上、俺が戦う理由なんて楽しいからってだけだ。誰かさんみてえな大層な理由は持ち合わせてねえ」

在藤が言った他人のためにだとか、家のためにだとか。

そんなものが自分の力になるなんて下らねえ。それは今でも思ってる。

だけどな、分かっちゃまった。

自分が楽しむために戦ってた、そう思ってた。

だが、俺はいつの間にか俺を信じてくれるお前のために戦ってたんだってよ。

だから、

「生憎、託されちまってんだ。2人分の命を」

「俺の大事な人間の、大事な2人の命をよ」

呪力を開放する。

同時に、自分とその周りにいるすべての式神を囲うように結界を展開した。

「……………『脱兎』を閉じ込めましたか。ですが、そのままではあなた自身も出ることができません」

その通り。

だけど、結界術はただ閉じ込めるだけじゃないんだよ。

『転移結界』って知ってるか？」

「転移…………？」

「ああ、結界から他の結界へ結界内の対象を転移させるものだ。こうやってー」

ーバシューー

「ーなッ!!」

ーードスツーー

「がつ!？」

俺の放った拳は、『陰絵』の背中を捉えていた。

「つ、なに、を……」

よろけながらも後退る『陰絵』。

理解できないだろうな。自分との距離があつた俺が一瞬で、目の前に現れるそのカラクリは。

ただ、答えはもう告げている。術式の開示は済んでいる。

簡単だ。

俺の展開した結界は3つ。

1つは俺自身と『脱兎』を閉じ込めた『耐呪』。

1つは俺だけを囲うように張った『転移』。

そして、感知されないほどに薄い呪力で、『陰絵』の背後に作ったもう1つの『転移』。つまり、『転移結界』による自身の移動。

「すまねえな。あんたみたいないい女を痛め付ける趣味はねえからよ。次でー」

ーバシューー

「ー終わりだ」

今度は上空へ転移する。そのまま『陰絵』の脳天へかかと落としを喰らわせた。崩れ落ちる『陰絵』。

「……こんな、結界の使い方など……」

術師自身の転移など危険でないはずがない。

だが、リスクを負ってでもやらなきゃいけねえことがあんだよ。

「俺らしくもねえけどな」

ーーーーー

「さて、それじゃあ愚妹に加勢しに行くかね」

『陰絵』に結界を施した後、俺は中庭へ繋がる扉に手をかけて、止まった。

「はっ、はあ……まだ、主様は目的を果たしていません……」

「……はあ、俺は女をいたぶる趣味はねえんだよ」

大人しく寝てろ。

そう告げるも、彼女はふらふらと立ち上がる。

「おい、まだ動くのか……？」

脳は揺れ、まともに立ち上がることすらできないその状態でも彼女は動く。

「大した忠誠心だな、おい」

「主様の邪魔を……させるわけには——」

一瞬のことだった。

彼女が掌印を結んだ途端に、俺の張った結界が割れて、

『領域展開』——『嵌合暗翳庭』

俺と彼女を『翳』が包み込んだ。

「はあ、はあ……はっ、はは……これであなたは私の手中……この領域の中では私の式神の攻撃はすべて必中になる……」

その言葉に呼応するように、翳から湧き出してくる式神。

犬、蛙、鶴、大蛇、兎。

翳から無数に沸き上がってくるそれらが俺に襲い掛かる。

「あなたを、殺せとは言われていませんっ……ですが、主様の脅威になるものは私が排除して——」

「……………言っただろ」

やっぱり脳は揺れていたんだろうな。

だから、それに思い至らなかった。

『領域』まで使える術師に施した結果が、そんなに簡単に壊れるのはおかしいと思わねえか？

「俺は女をいたぶる趣味はねえんだ」

——パチンツ——

指を一つ鳴らす。

その瞬間に、『陰絵』は意識を失った。

俺が彼女に施したのは『乗呪結界』。

破壊された場合に効果を発揮する特殊な結界。

結界を破壊した術式……今回でいえば『嵌合暗翳庭』の術式効果を跳ね上げるという効果をもつ結界で、本来は味方に使う類いのものだ。

……ただし、これには制約がある。

術式効果を跳ね上げる代わりに、必要とする呪力量も跳ね上がる。消費する呪力は元

の2乗。

『領域展開』の欠点は必要とする膨大な呪力量。もし、それが2乗されたら？

考えるまでもない。呪力は一瞬で消費され、『領域』を維持することはできなくなる。呪力とは気力に近いものだ。それが一瞬で消費されれば、体は動かなくなり、意識も失う。

それが『乗呪結界』、俺が編み出した『領域展開』を封じるための結界だ。

「そこでゆっくり寝てろ」

「全部が終わったら迎えに来てやるよ」

—————

第33話 呉越同舟一式一

———中庭———

中庭への扉の先には、奴がいた。

草木福濁。

人質とかいう理由でユキを拐った愚^コか者^ミ。

私が殺すべき相手だ。

「やあ、美澄ちゃん」

軽く手を上げ、笑いかけてくる福濁。

気色悪い、吐き気がする。

「彼を倒してきたんだね。3ヶ月前、初めて会った時と比べて本当に強くなったみたいだよ」

「器にするから、でしょ」

「まあ、そういうことだね」

悪びれる様子もなく頷く福濁。

「……………」

咲人はあの女と対峙しているようで、反対側の廊下からその呪力を感じる。戦況は分らないけど、今ならば誰も見ていない。

『輪廻復原』のストック分を同時に使えば、少なくともこいつの隙はつけるはず。そうすれば、こいつから眼球を抉り作り出した骸人形に奴自身を殺させることができる。

……やるか？

ユキの中の『墮雪』が動き出し、五条悟を殺すという日まであと1年と少し。今のストックでも『墮雪』を殺せないのに、残り1年でそれ以上の骸を集められるか？

それに、ユキとの分離の問題も残っている。

ここで使っても――

「色々と考えてるみたいだね」

「っ」

「ボクを殺す算段かい？ それとも、彼女……花房雪のこと？」

お前と話す気はない。

そう、奴の言葉突き返す。けれど、それに構わず奴は私に話しかけてくる。

「約束通り、彼女に危害は加えてない……って、それは知ってたね」

「……………」

「んー、じゃあなんだろう。花房雪……彼女の中身の話でもしようか？」

「……中身……？」

その言葉について反応してしまう。

それはユキと『あいつ』を同一視する愚^カか者^ミ共^ミがよく口にする言葉だったから。私に
はどうしても聞き流せない。

「お前……中身っていうのはまさか『墮雪』のことを言ってるんじゃないだろうな」

苛立ちと殺意を込めて、静かに問う。

「……『それ』もまあ、あるね」

「？」

思っていたのとは少しズレた返答。初めは『墮雪』を奪うためユキを殺すと言った。そして、今は私の体を奪うために人質としてユキを捕えた。

だから、こいつはユキを『墮雪』の器、生き返るための駒としか考えてない。なら、私の問いに対して肯定が返ってくると思っていたんだけど……。

「んー、そうだなあ……少し質問をしてもいい？」

その方が話を進めやすいと奴は言う。

肯定も否定も返さない。いや、なんとなく返せなかった。

「美澄ちゃん、君は『人』というものをどう捉えてる？」

「?」

「そうだね。『人』には外側と内側がある。肉体と精神、器と魂と言い換えてもいい。それはいいよね?」

「……………」

「……ボクがしようとしたのは花房雪の中身……つまり、1つの肉体に複数の精神が宿っている現状の話だよ」

1つの肉体に複数の精神。ユキの体に、ユキ本人と『墮雪』の精神が宿っている。

それは私が抱える大きな課題のうちの1つの話だ。

だから、私は奴のその言葉を聞いて、何かが揺れるのを感じた。

「その状態、ボクならば解消できるって言ったらどうする?」

「…………… 咲人視点……………」

「チツ、また結界か」

『陰絵』を撃破した後、中庭への扉を開こうとして、またそれが張られていることに気づく。草木福濁の目的は、妹の体を奪うこと。ならば、この結界も納得はいく。

現状、俺にこの結界は破れない。いや、恐らくこれは術師本人ですら解けない、そういう『縛り』を加えることによって結界の存在強度を上げている代物だろう。

「仕方ねえ、反対に回るか」

妹が使った方の扉ならば、ここよりは結界の強度はマシなはずだ。妹の呪力が中庭に辿り着いてからそこまで経っていない今ならば、結界が張られていたとしても大したもののじゃない。

通路を逆走し、広間へ。そこからさつきとは逆の通路へ。

扉にはやはり結界がかけられていた。だが、想定内の強度。これなら破壊は容易い。

「らあっ!!」

ーバリントー

結界に呪力を込めると、途端にひび割れ、碎け散る。

さて、行こうじゃねえか。

——中庭——

中庭への扉を開けると、そこにあつたのは3つの人影。

1人は『陰絵』。膝をつき、息を切らしている。恐らくだが、自力でここまで来たわけではなく、奴の『転移』でここに来たんだろう。どんな手を使ったかは知らねえが、呪力も少しだけ戻っていた。

もう1人は草木福濁。相も変わらず気味の悪い雰囲気纏ってやがる。

そして、最後の1人は、

「つ、美澄!!」

横たわるように、あいつはいた。

いや、ここからでは美澄の呪力が感じられない。まるで死んでるように——

「つ、てめえ!! 『耐呪』ツ！」

美澄の側に立つ草木福濁に向かって駆ける。同時に、奴の周りに結界を展開し、逃げ場を塞ぐ。その間に入ろうとしたのだろう。『陰絵』は立ち上がろうとするも叶わず、膝をついたままだ。

「『解』！」

——バギツ——

俺の拳が当たる直前に、結界を解いた。手応えはある。だが、それは人体に当たる感覚じゃねえ。これは、

「結界……っ」

「まあ、当然だよ。構築速度はまあまあ速いようだけど、ボクほどじゃあない」
「っ、『転移』ッ！」

続けて『転移結界』を張る。

「『転移結界』の同時展開……なるほどね」

俺と福濁。それぞれに『転移結界』を張り、そのまま『転移』を実行。俺と奴の位置を入れ換えた。

さらに、『陰絵』ももう一組の『転移』で飛ばす。これで美澄の側に敵はいない。

「美澄！」

「……………」

そのまま美澄の元へ。脈を計る。だが、

「……………っ、手遅れかよ」

脈はない。しかも、体が冷たくなっていた。

恐らく奴と会敵した瞬間に殺された。ここには反転術式を使える奴もいない。蘇生は不可能だ。

「くそツ!!」

「……………」

妹のことなんてなんとも思っていないはずだった。

録な術式ももっていない変な奴が家に来たと思ってた。くそ親父から離れるために利用してやろう。その程度の感情。

なのに、俺は今、動揺している。

……家族馬鹿な在藤のそれが移ったんだらうよ。

「……………おい、「福濁」

「なんだい?」

「こいつの体に乗っ取るんじゃないやなかったのかよ」

「……………んー、まあ、やめた。というかー」

「ー勢い余って殺しちゃった、ごめんね?」

その言葉を聞いて、

「――術式解放」

何かがキレるのを感じた。

長年使っていなかった『それ』を解放する。醜い術式。俺には相応しくないと思っていたその術式を。

「『人獣呪術』 ツ!!」

『人獣呪術』。

術師の肉体に人為らざるモノ……けだもの獣の呪霊を憑依させ、自身の肉体を作り替える術式。

それによって、俺の体は作り替えられる。骨格が、筋肉が人間の2倍近い強靱なものに置き換わっていく。手も足も爪が伸び、命を刻む形に。そして、数秒も経たずに、俺は牙を剥き出しにし、唾液を撒き散らすけだもの獣に姿を変えた。

「驚いた。人狼か」

「ウウウウウ……ッ」

「人為らざる者から力を得る下等な呪術。草木の血も墮ちたものだね」

「アガアアツ!!」

——ブンツ——

——ギイイインツ——

一撃は止まる。

俺の前、結界。

「アアアツガガツ！」

——ギイイインツ——

——ギイイインツ——

——ギイイインツ——

何度も腕を振る。

届かない。

「……………結果があるからどうにかなったものを。わざわざ捨てるなんてバカなことをしたね。『陰絵』」

「っ、はい……………」

奴らが消えてく。

翳の中に沈んでく。

「まあ、戦果代わりに、美澄ちゃんの死体は貰っていくよ。といっても、今の君に理解できぬかも知れないけれど」

「バイバイ、下等な獣けだものくん」

—————

手に伝わる振動がなくなった頃。

そこには結界を壊せないまま、両腕から血を流す俺だけが残っていた。
在藤しんゆうの仇も討てず、敵の1人も殺せずに。

たった1人の肉親すら守れなかった。

この日、俺は完全敗北を喫した。

—————

……………。

—————雪視点—————

あの人がここから出ていってから、どのくらいが経っただろう。

『生き返る』ために、美澄ちゃんに会いに行く。

そう言っていた。

もし、あの子の目的が果たされてしまったら……。

「……………つ、美澄ちゃん」

ポツリと彼女の名前を呼ぶ。その声は勿論、彼女に届くはずもなく、がらんとした部屋に散ってゆー

「や、ユキ」

「え……?」

わたしの呼びかけに答える声。

あり得ない人の姿がそこにはあった。

「美澄ちゃんっ!!」

「~~~~~」

「久しぶりいいい、ユキいいい!!」

「わっ!!」

叫びながら、美澄ちゃんはわたしのことを胸に埋めるように抱きしめてくる。

一瞬、偽物とかもう乗っ取られた可能性を考えただけだ。この反応と感覚は本物だ。本物の美澄ちゃんだ。

それから30分ほど、わたしたちはその場で飛び跳ねながら、再会の喜びを分かち合ったのだった。

—————

落ち着いて、我に返る。

長い監禁生活からの親友との再会で、少々取り乱してしまった……まあ、美澄ちゃんはいつも通りといえいつも通りだったけれど。

ともかく状況を確認するため、美澄ちゃんと話をして、今の状況を聞いた。

美澄ちゃん曰く。

今日、草木福濁が草木邸を襲撃し、その結果、美澄ちゃんは捕まってしまい、ここに連れてこられたという。

『生き返る』には時間が必要だということで、どうやらもう少し美澄ちゃんは生かされているのだそうだ。

その上でわたしは、美澄ちゃんにこう言った。

「美澄ちゃん、今度はわたしが助ける番だよ」

「ここから2人で脱出しよう」

美澄ちゃんは、それに笑って頷いてくれた。

—————

「よろしいのですか」

「ん、ああ、いいんだよ」

教会の礼拝堂にて。

草木福濁に『陰絵』は訊ねた。その内容は勿論、草木美澄のことだ。

「『生き返る』のに時間は必要ありません。ならば、主様がいち早く復活できるよう、今すぐにでも——」

「——いいんだよ」

「つ、失礼いたしました」

『陰絵』はすぐに発言を撤回する。

出過ぎた真似をした。主人には主人の考えがあり、自らはそれに従うだけ。自らの逸る気持ちを制し、彼女は頭を下げた。

「ま、『陰絵』の言うように、『生き返る』のに時間は必要ない」

「けれど、案外『器』っていうのもしぶとくてね。未練を残したまま奪っても録なことにはならないんだよ」

これ、ボクの経験則ね。

そう言つて、福濁は『陰絵』の頭を撫でる。失敗した子供を慰めるように撫で続ける彼は、ただにこやかで、穏やかで。

「彼女はボクの力で花房雪を救える。ボクは彼女を器として復活を遂げる」

「呉越同舟、だよ」

「少しの間、お互いの利益のために協力しようじゃないか」

}|
}|
}|
}|
}|
}|
}|

第34話 呉越同舟―参―

―――回想―――

「どういふこと……?」

私は思わず聞き返していた。

こうもなるだろう。私はずっと悩んでいた課題――ユキと『墮雪』の分離を自分ならば解決できると、目の前のこいつが言うのだから。

青天の霹靂だった。

「言葉の通りさ。ボクは花房雪の中にいる『墮雪』を引き摺り出せる」
「っ!」

捲し立てたくなる気持ちをぐっと抑えつける。

冷静、に。

こいつから聞き出す、んだ。

「……………それ、は……………どうやって」

「ボクの術式を使つてだよ」

術式……………そうか。

こいつが今まで戦闘で使っていたのは、あくまでも結界術のみ。その術式は未だに使っていないかった。

「どんな術式だ……………？」

「簡単にいえば、人の肉体と精神を分離させる術式だよ。何を隠そうボクが『生き返ろう』としているのもこの術式で、君の肉体と精神を分離させて、空の器に入るという手段をとろうとしていたんだからね」

「……………」

肉体と精神の分離。それならば、理論上はこいつが『生き返る』ことも、ユキから『墮雪』を精神として分離させることもできる。

「それを使った時に起こる不利益は……？」

「肉体と精神が分離した後、一定時間以内に別の肉体へ精神を入れなかった場合、それが消滅してしまうこと。この場合は心配いらないだろう？ 君にとって大切なのは花房

雪で、分離した『墮雪』はいらないのだから」

こいつの言を信用するのであれば、これ以上にならないほどの手段だ。ユキは無傷で『墮雪』は消滅する。勿論、『奴』が特級仮想怨霊であるならば、分離後に顕現する可能性はあるが、少なくとも分離はできる訳だ。

正直、ユキを殺そうとしたことも人質にしたことも許せるわけがないし、反吐が出ることに代わりはない。けれど、ユキが救われるのならば、こいつの取引に応じる価値はある。

あとは……。

「証拠、だね。ボクがそんな術式を本当に所持しているのか」

「……それを示さないことには、領けない」

「うーん、ボクが存在自体が証拠ではあるけれど」

「それでは弱い」

目の前で見せろ。

私は奴にそう告げた。奴はしばらく悩んだ後に、ひとつ手を打ち、結界を展開した。

「警戒しないで。君に証拠を見せるための準備だよ……つと、どうやら彼の方も終わってたようだ」

しばらくして、結界内から人影が現れた。

1つは女、『陰絵』。

そして、もう1人はさっき私がのしたじいさんだ。

どちらも気を失っているようだ。

「結界を張っておいたとはいえ、彼がここに来るのも時間の問題だ。仕方ない」

ーバキツー

ーバキツー

仕方ない。そう言って、奴はその2人の腹を蹴り上げた。

あまりの衝撃に咳き込みながらも起き上がる2人。

女は何も言わず、蹴られた腹を抑えたままでも頭を下げていた。ただ、老人の方はそうではない。

「き、さま……この俺に向かって……」

「あら、元気だね」

「殺すっつ!!」

老人が懐から出した小刀を突き出すと同時に、福濁は体を軽く捻り、老人の右脇へ。そして、呪力を解放した両手で、老人の頭に優しく触った。

『一二元解離』
にげんかいり

術式が発動した。

そう認識した時には、既に老人から力が抜けていた。さっきまでのギラギラとした殺意も生気もない。脱力し切った肉体は福濁の両手で支えられており、力ない腕がただブラリと揺れていた。

「はい、終わり」

両手を老人の頭部から離し、途端にその肉体は崩れ落ちた。糸の切れた人形のような姿。

曰く、あと10秒もすれば精神も完全に消滅する。

これが奴の、草木福濁の術式か。

「どうかな？　これで証拠になる？」

「……………」

私は、それに黙って頷いた。

目の前で起こったことに言葉が出ない。それは恐怖から来る沈黙ではない。

これは期待の感情だ。これならば、ユキと『墮雪』を分離できるかもしれない。勿論、

まだ完全に信用したわけではないけれど。

「……さ、どうする。美澄ちゃん」

迷うわけもない。

私は、

「手を組む。あんたの力を貸して」

「勿論だよ。その代わり、それを見届けたらボクは君の体で『生き返る』からね」

「ああ」

呉越同舟。

そうして、私はユキから『墮雪』を分離させるために奴と手を組んだ。

「さて、話もまとまったところで……どうしようかなあ。美澄ちゃんをこのまま連れ帰るには、彼が邪魔かな。目撃者は全員殺した方が美澄ちゃんも動きやすいだろうし」

私が生きていることを呪術高専や総監部に知られるのは面倒だし。全員殺すのが楽………だけ。

「ねえ、あんた」

「福濁と気軽に呼んでいいよ」

「……………福濁」

「なんだい？」

「この死体、借りていい？」

たった今、精神の抜け落ちた老人の肉体を指差して、福濁に確認する。それに福濁が快諾したのを確認してから、私は術式を解放した。

『輪廻復原』

『転移結界』で手元に呼び寄せた脳幹を潰し、1体の骸人形を作り出す。保存しておいた3体のうちの1体。確か、高専入学直前に殺した呪詛師だった………かな？

正直、術式は覚えていても、呪詛師そのものがどんな人物だったとかは覚えていない。

「おお、『輪廻復原』！ やっぱいい術式だ」

「……………作り替えて」

私の指示に反応して、骸人形が老人の腹にその腕を突き刺した。そして、腕が腹を貫通、そのまま一気に引き抜いた。

すると、老人の姿が変わっていく。ベキベキと音を立てて、作り替えられていく。やがて、その姿は私のそれと全く同じになっていた。

「素敵な術式をお持ちだね」

「……………とはいえ、呪力や残穢まででは変えられない。この死体は……………あの女にでも回収させてよ」

「……………ふふっ、なるほどね。承知したよ」

目の前の私の死体とその言葉だけで福濁は理解したようで、穏やかに笑った。

「おっと、そろそろ彼が来るようだ。『陰絵』、術式は使えそうかい？」

「は、はい……」

「じゃあ、美澄ちゃんを翳の中へ招待して。あともう1人の美澄ちゃんの回収をお願いね」

「畏まりました」

—————

以降、福濁は呪術高专側への接触をしない。

目的である私が手の内にあるのだから、当然といえば当然だろう。

私の方かというと、準備自体は整っているが、『堕雪』についてももう少し調べた上で分離させたい。それまでユキと私は福濁が用意したという部屋で過ごすことになる。

ユキと一緒に時間が増えたから、なんだったら高专にいた頃よりもずっといいのは、なんて考えながら、私は今日も眠りにつく。

「おやすみなさい、美澄ちゃん」

「おやすみ、ユキ」

もう何も心配することはない。
私は幸せだ。

――――

第35話 呉越同舟一肆一

1988年7月13日。

呪術総監部からの呼び出しを受け、草木家当主兼花房家当主代理・草木咲人はその場に来ていた。

そこには東坊城天蓋の姿もあり、草木福濁の襲撃に関わる者が集結している。本来はここに花房雪や草木美澄の姿もあるべきではあるが、前者は未だに福濁によって拐われ、後者は既に死亡していることが咲人からの報告で判明していた。

そのため戦力として動ける呪術師は、草木咲人のみであった。

———呪術高专内・中央参道———

「草木さん」

「咲人でいい。にしても、君が総監部のトップとは驚いたぜ」

「……………厳密にはトップではありません」

「でも、雪ちゃんが五条悟を殺すつてのを総監部に教えたのは君だろ」

「……………」

俯く東坊城ちゃん。それを見て、俺は自分の予想が当たっていることを悟る。

『呪吐』を手伝う手前、在藤から聞いてはいた。雪ちゃんの中にいる『堕雪』のことや秘匿死刑回避のために『呪吐』を行っていること。ただ、なぜ総監部がまだ生まれてもない五条悟についての情報をもっているのか、長い間疑問ではあった。それが今回のことでハッキリした。

「『予知』の術式をもっています。年に数回単位ですが、未来が見える。そんな術式です」
「なるほど。総監部はその術式を受けて、『呪吐』を行わせていた、と」
「はっ」

静かに頷く彼女。その様子からなんとなく察することができた。総監部の連中がやってたのは『呪吐』だけじゃねえ。恐らく、

「……雪ちゃんを殺すために動いてた連中もいたんだな」

「わたくしの見た未来は変えることができます。ですから……」

「そうか」

彼女が『予知』で見た未来で、『墮雪』となった雪ちゃんが五条悟を殺す。五条つてのがどの程度の術師になるかは分からねえが、彼女が見た未来ではそれは世界を滅ぼすことに繋がるという。

ならば、雪ちゃんを殺せというのは納得もいく。

「在藤はそれを知ってたのか」

「わたくしが直接伝えたわけではありませんが、未来のことはお伝えしていたと聞いています。そのために『墮雪』を顕現させない『呪吐』を提案したのが……」

「まあ、在藤だからな」

裏で雪ちゃんを殺す算段を総監部がしているとは知らずに、あいつは雪ちゃんを当主にしたって訳か。

「くくつ、笑えるな。それを知らないまま、最善手を取ってる。流星は在藤だぜ」

日頃の行いかね。俺とは大違いだ。

「咲人さん」

「おう」

「わたくしの『予知』は恐らくあと一月は使えません。目まぐるしいほどに環境の変化した今、何が起こるかわたくしにも分かりません」

「ま、やることは変わらねえよ。俺は草木福濁を殺す」

親友と……妹の仇だ。

それは俺にしかできねえことで、俺がやらなくちゃならねえことだからな。

「幸いなことに草木家の情報網の要は生きてる。俺は俺で調べるさ」

「………はい。武運を」

「ありがとうよ」

そうやって、俺は参道にそびえる鳥居をくぐり、呪術高専を後にした。

——東坊城天蓋視点——

「ねえ」

咲人さんを見送った後のことです。わたくしは声をかけられました。振り返るとそこには女性の姿。

彼女は、

「水仙^{すいせん}姉様」

わたくしの双子の姉——東坊城水仙がいました。

前に彼女の姿を見た時から随分と雰囲気が変わっています。けれど、間違えるはずもありません。

「水仙……ふふつ、久しぶりにその名前を聞いたわね」

「……『五条』でしたか。そんな名前を名乗っていると風の噂で聞きました」

「あら、呪詛師界限にも詳しいなんて、流石は天蓋ね」

「っ」

「流石は天蓋ね」

姉様がわたくしを褒める時に使っていた言葉。あの時と変わらないように笑う姉様の表情に、少し苛立ちが沸いてくる。

「……………なにを、しに来たのですかっ」

「あなたに会いに来たのよ」

「っ、今更っ!」

わたくしを捨てて、家を捨てて、挙げ句の果てに呪詛師になっておいて。

わたくしの積み上げてきた地獄の日々も知らず。

今更なぞ、わたくしに会いに来たのでしょうか。

「……………あなたに黙って家を出たのは謝る。けど、あなたも分かっているんでしょ？」

今の状況を」

「それ、は……」

今の状況。勿論、その言葉に心当たりがないわけではない。

草木福濁。

花房雪一『墮雪』の器は今、彼の手にあるという事実。呪術高専襲撃の際は、彼女を殺して奪うのが、彼の目的だったはず。今でこそ目的は彼自身の復活だと言っていたようですが、草木美澄は死んでしまいました。それを受けて、目的が『墮雪』に戻ってもおかしくはないんです。

分かっています。けれど――

「姉様と、協力しろ、ということですか……」

「……端的に言えばね。御三家から戦力を借りることが出来たとしても、落ち目の五条家・加茂家からの支援は無理。禪院家に協力を仰ぐのも難しい……となれば、戦力は草木家に残された草木咲人のみ」

姉様に言われずとも、状況が芳しくないことは分かっています。

それに、姉様の術式があれば、この状況をひっくり返すことができるかもしれないという可能性だって。

「分かってはいます……」

「……納得はできない？」

「……はい」

「ま、そうね」

呪術界という括りで見れば、呪詛師を招き入れるというリスクを負ってでも領くのが最善です。

だから、これはわたくしの心の問題。

「……少しだけ時間をください。そこまでかかりませんから」
「分かった。ここに連絡を頂戴。待ってるわ」

そう言うと、姉様はわたくしに電話番号がかかれた一枚のメモを渡し、ヒラヒラと手を振って去っていきました。

こうして、わたくしと姉様の十数年ぶりの邂逅は終わりました。勿論、わたくしは姉様の提案を受け入れざるを得ません。現状、盤面をひっくり返せるのは、姉様だけですから。だから、もう少しだけ……。

—————記録—————

草木咲人一級呪術師より報告。

草木福濁の潜伏先を、都内廃教会と断定。

1988年7月19日。

草木福濁への攻撃を開始することを決定。

この任務には、東坊城天蓋、草木咲人、佐木宗吾の3名を派遣する。

また、東坊城天蓋の監督の下、出頭した呪詛師『五条』と他2名を本任務限定で使用することを許可する。

—————

第36話 盛夏

———回想———

「姉様！」

「どうしたの、天蓋？」

「今日ね、またテストで100点をとったの！」

「すごい！ 流石は天蓋ね！」

小学生の頃、何か嬉しいことや頑張ったことがあると、必ず姉様に伝えていました。水仙姉様もちろん学校には通っていたけれど、別々の学校だったから、わたくしの学校での様子も気になっていたようで、それを嬉しそうに聞いてくれました。

そして、その度に水仙姉様はわたくしを褒めてくれた。それがとても嬉しかったんです。

.....

「大丈夫？ 天蓋」

わたくしが学校で男の子にいじめられていたとき、姉様は絶対に駆けつけて、わたくしを守ってくれました。

わたくしは泣きそうで、でも、泣くのだけは必死に我慢をして。

「……泣かないっ」

「うん、流石は天蓋ね」

そうすれば、姉様はわたくしを優しく撫でてくれたから。

……………

「姉様！」

「どうしたの、天蓋？」

「今日、母様に呼ばれたの。今度の土曜日、あのお部屋に入れてもらえるって！」

「本当!? すごい……私は呼ばれたことないのに。流石、天蓋!」
「えへへ」

あの日——母様からお部屋に呼ばれた日も、わたくしは姉様にそれを報告しました。姉様でも許可されなかつたあの部屋に入ること。それがとつても嬉しくて。だから、

.....

部屋中に悲鳴が響き渡る。

それがわたくし自身のおかげたものと気づくよりも先に来る激痛。自分の眼球がくり貫かれる感覚。いえ、事実わたくしの右眼は母様の手によつて抉り取られていました。

母様は強引に、わたくしの空になった右眼に『それ』を押し込んできて。

「早く馴染んで……はやく……」

祈るような声で右眼を押し付けられる。

母様がわたくしを傷つけたという現実から逃げるように、わたくしは理由を探した。苦痛と混乱の中、わたくしは理由を見つけました。

「母様は、わたくしのために、してくださったんですね……」

「なんでっ、なんで馴染まないのよっ!? はやく仕上げなきやあの人に捨てられちゃうのっ」

「……ありがとうございます、母様」

……

「姉様……?」

夏の日。太陽が容赦なく照りつける東坊城家の庭に、姉様は立っていました。その足元、へたり込むわたくしの目の前には、父様と母様の遺体があつて。

「なにを、してるのですか……姉様……」

「……………」

強い日差し、逆光のせいで表情は見えません。けれど、その光景を生み出したのが姉様ということは、嫌でも分かかってしまいました。だから、聞いたのです。

「なんで……父様と母様を……？」

問いかけるわたくしの前にかがみ込んだ姉様。そこでやつと見えた姉様の顔、その左眼は血に染まっています。そして、その瞳の色はわたくしと同じ空色。

その空色の瞳で、姉様は言いました。

「こんな激痛に耐えていたなんて……流石は天蓋ね」

「……………」

そうして、水仙姉様はわたくし以外の東坊城家の人間を殺しました。なにかの理由があったはず。そう考えたわたくしは、東坊城家当主を継ぎ、姉様を匿うことを決めまし

た。

けれど、姉様は黙ってわたくしの前から姿を消して。

—————

「天蓋」

「っ」

姉様の声で我に返ります。昔のことを思い出していた、そんなことを言ったら笑われ
てしまうかもしれせん。

「……………この戦いが終わったら、少し話をしましょう」

「それ、死亡フラグって言うのよ」

「フラ、グ…………？」

よく分からないことを言って、笑う姉様。

死亡フラグ…………それが何かは分かりませんが、わたくしは死にません。咲人さんに佐

木さん。それに姉様も。戦力としては姉様が連れてきたという呪詛師もいます。

それに対して、相手は2人だけ。1人は『領域』を使えたと聞きましたが、咲人さんは一度倒した相手だとも聞いています。

草木福濁の結界は厄介ではありますが、佐木さんや姉様がいるならば……。

「ま、私の見た未来でも天蓋の死は見えなかったわ。だから、大丈夫でしょうけれど」
「……………」

『予知』の術式による未来視。わたくしのものとは少し違うようですが、姉様にもそれは備わっています。ただ、姉様の言葉に安易に頷くことはできません。

なぜなら、わたくしたちの『予知』は絶対ではない。

『予知』で見る未来は、あくまでも現時点で起こり得る可能性の最も高い未来——逆を返せば、何かのきっかけで変わり得る不安定なもの。

だから、もしかしたら——

「大丈夫よ、天蓋は私が守るわ」

「っ」

嫌な方向に転がりそうになる思考を止めしてくれる一言。

思わず溢れてしまいそうな感情を押さえつけるように、わたくしは顔を伏せます。そんなわたくしに気を遣ってくれたんでしょう。姉様は静かにわたくしから遠ざかっていきました。

「……………姉様は、本当に——」

口を突いて出たその言葉は、姉様には届かない。

でも、それでいいのです。今はまだ。

—————

1988年7月19日。

草木福濁との戦闘に関する記録。

佐木宗吾一級術師が死亡した。また、出頭した呪詛師2名が行方不明となっており、状況から逃亡したと判断する。その主犯として東坊城天蓋及び草木咲人を処分対象と

第37話 蚕食鯨呑一壺一

——都内廃教会・礼拝堂——

「君の兄も東坊城の人間も総監部に拘束され、身動きがとれなくなってる。これで目的を果たせるね、美澄ちゃん」

祭壇に寄りかかるように座る福濁の言葉に、私は黙って頷いた。

福濁の言う通り、あの2人さえ行動不能にしてしまえば、こちらからは手出しをしない以上、呪術界の方からの攻撃はないだろう。

加えて草木・花房家の当主不在。それは両家の実質的な衰退を意味している。呪術師の人手不足も相まって、恐らくユキの奪還に乗り出すほど呪術界に余裕はないはずだ。

「『墮雪』の分離、ゆっくり取り組もうじゃないか」

ゆっくり、ね。

今が7月下旬だから、恐らく『墮雪』の顕現まで1年少し。本当はゆっくりしてる暇なんてない。

「焦るのも仕方がないけど。君の方に流した呪詛師2人も大したことがなかったという話だし」

「戦ってから気づいたけど、あれは録な術式じゃなかった」

「ハズレはハズレなりに使い道はあるさ」

まあ、それもそうではある。これで私の手持ちは4体目。そもそもの手持ちが少ないんだから贅沢は言ってられない。

「そつちは……佐木を殺したんでしょ」

「ん……ああ、彼……佐木といったんだね」

殺したこと自体を忘れていたかのような反応をした後、それを肯定する福濁。なかなか骨がある術師だったとも付け加える。今の反応を見るに、本当にそう思っているかも甚だ疑問ではあるが。

「……担任、だった」

「それは、悪いことをしたね」

「いや」

きつとユキがそれを知ったら、悲しむのだろうけど、私の心はまったく痛まなかった。ともかく福濁には、そのことを含めて、今の向こう側の状況をユキに言わないようにだけ釘を刺しておく。ユキが心を痛めるのだけは避けたいし。

「承知したよ」

ユキが悲しまないように、慎重に進めなきゃ。

————雪視点————

ここに美澄ちゃんが連れてこられてからどれくらいが経っただろう。その間、美澄ちゃんはこの部屋から何度か連れ出されることもあって。きつと『生き返る』ための何

かをしている、させられているんだと思う。それを考えるたびに、胃が痛くなる。

「早く、脱出しなきゃ」

美澄ちゃんに危険が及ぶ前に。

今度はわたしが助ける番だつて、美澄ちゃんに言い切つたんだから。わたしはそれを守らなきゃいけない。約束だもん。

問題は、

「いっじや呪力を使えない」

自分の呪力も、わたしの中の『墮雪』の呪力も感じない。この部屋に張られてる結界の中じや呪力感知ですら封じられているんだ。

一応、体術も在藤兄さんから教わつてはいるけど、あれはあくまでも呪力で強化する前提だから、この結界を物理的にどうにかするのは無理。

そうなると、この結界が緩んだ時に仕掛けるしかない。美澄ちゃんが結界の外に出される瞬間、呪力感知が戻ることがあった。つまり、結界が緩むのはここから誰かが出入

りする一瞬だけ。

かなりシビアなタイミングだけど。

「……………たぶん、大丈夫」

ここに連れ去られる前のあの戦いで、わたしは『黒閃』をもう一度経験したんだから。『黒閃』——黒く光る呪力。

打撃との誤差が100万分の1秒以内に呪力が衝動した際に生じる空間の歪み。在藤兄さんからはそう聞いた。曰く『黒閃』による攻撃は、通常の呪力による攻撃の2.5乗の威力にもなるという。

それを経験した者としていない者では、呪力の核心との距離に天と地ほどの差があるとも。

……わたしはそれを2度経験してる。

あれから少し時間は経ってるけど、あの感覚を思い出せば、結界が緩む一瞬の隙だつて突けるはずだ。

——ガチャ——

「ただいま、ユキ」

部屋の扉を開けて、美澄ちゃんが帰ってきた。

……………うん、やっぱり少しだけ緩んでる。

「おかえりなさい。大丈夫だった……？」

「うん、平気」

いつもみたいに草木福濁と話をしてきただけ。

美澄ちゃんはそう言って、にこりと笑いかけてくれる。心配をかけないようにつてことなんだと思う。

「……………っ」

「ユキ、どうかした？」

「ううん、なんでもないよ」

「……………辛くなったら言ってるね。私たち親友なんだから」

「……………うん」

親友。

そう言ってくれるんだもん。絶対助けなきや。

そのためにもー

「ねえ、美澄ちゃん。ここを脱出する方法なんだけど……」

――

第38話 蚕食鯨吞―貳―

――雪視点――

1988年8月15日。

その日は来た。美澄ちゃんと相談して決めた脱出の日だ。

2日前に美澄ちゃんがここから出された時にも、結界の緩みは確認できていた。だから、あとは一発勝負。

部屋の中からはわたしが、外からは美澄ちゃんがこの結界を攻撃して破壊する。

「……美澄ちゃん」

「わかってるよ、ユキ」

今、美澄ちゃんが結界から、出た。

――回想――

ユキには嘘をついて申し訳ないなって思ってる。

けど、これもユキを『墮雪』から解放するためだから。

「2日後、あんたの結界を私とユキで壊す」

それを福濁に伝えると、奴は少し驚いたような表情を見せた後に、軽く笑った。

「それをボクに伝える君の胆力もそうだけれど、『封呪』を破壊しようと企む彼女にも驚かされるね」

「ユキは優秀だよ。私が結界を出る時にそれが緩むのに気づいてた」

「……なるほど。確かにそれは中々だ」

私はユキに言われるまでその事実には気づかなかった。呪力が練れない状況で、一瞬使えるようになったその瞬間を感じ取っていた。まさに、呪力感知に優れたユキだからこそこできたことだった。

「それで、本題に入ろうか。それをボクに伝えてどうするつもりなのかな？」

本題は何か。目的は何か。福濁は訊ねてくる。

勿論、決まっている。

結界を破壊したその時に、

「『墮雪』をユキから引き剥がす」

あの部屋の中にいるユキや私が呪力を練れず、呪術を使えないように、福濁も結界の中では呪術を使えない。それは『封呪』の術式効果を上げるための『縛り』、加えてあの結界は福濁自身でも解除できず、ユキ以外の人物は1人しか出入りできない。呪具や呪物もなしに、長期間結界を維持するにはそれほど強烈な『縛り』が必要だったと聞いた。

つまり、ユキに奴の術式『二元解離』を使うタイミングは、結界が破壊された瞬間しかない。

「まあ、そうだね。そろそろ頃合いか。ただ、本当に破壊できるのかな？」

「……………」

「美澄ちゃん、君はともかく、彼女にあの結界を破壊するほどの力は——」

「あまりユキを馬鹿にするな」

「……それは失礼」

決行は8月15日の午前2時。

それだけを伝え、私はその場を後にした。

————美澄視点————

「美澄ちゃん!!」

私が結界から出た瞬間、ユキの声が響く。

それを聞くよりも前に、私は振り向き、ありったけの呪力を脚に込め、『廻』を放った。同時に、ユキも呪力を込めた拳を突き出す。ユキの呪力は黒く閃く。

私の『廻』とユキの『黒閃』。

2つの衝撃は結界の一点で重なり、

ーバーリンツー

結界は砕かれた。

破壊された箇所を中心に結界が崩れていく。そして、数秒後にはユキを捕らえていた。その結界は綺麗サツパリなくなっていた。

「やった！ 成功だよっ」

そう言って喜び笑うユキ。

可愛い。

「っ」

じゃなかった。いや、ユキが可愛いのは事実だし、喜ぶユキならば小一時間は眺めて

いられるけれど。それでも今は違う。優先順位はユキを救うことだ。

ユキにバレないようにさりげなく周りを見渡す。

計画は伝えてある。時間通り。それに結界が壊れたことはきつと福濁も感じ取っているはずだ。なのに、福濁はどこにいる？

「？」

視界の端。ユキの足元で何かが揺らめいた。

それはユキの影。ユキの動きに合わせて動くはずのそれが、意図しない方向に動いていた。

そうか。結界が割れたそのタイミングで、『陰絵』の術式でそこに潜んだのか。

私がそれに思い至ったと同時に、ユキの陰から奴らは現れた。まだユキは気づいていない。

そのまま、福濁の両手がユキに迫りー

「随分と長いこと、閉じ込めてくれたな、小僧」

ー『あいつ』の声が聞こえた。
そして、

ーグンツー

「が……っ!？」

背中に衝撃。そして、体の中、内臓が揺れる感覚。

吹き飛ばされ、部屋から続く廊下の奥、その壁に叩きつけられたのだと遅れて気づいた。

今の衝撃で脳まで揺れてるのが分かる。ぼやける視界で、どうにか目の前というには離れている部屋の中の状況を確認した。

そこにいたのは、

「ふむ。久しぶりの表だからか……呪力の制御が効かん」

ユキの姿だけど、まったく違う気配。前髪をかきあげるあの仕草。間違いない。『墮雪』だ。

分離まであと少しつて時に、最悪のタイミングで顕現された。

「さい、あく……」

ポツリとそんな言葉が漏れる。その呟きが聞こえたようで、『奴』は私の方へ向かってきて。

「フツ、いや、助かった。流石の俺でもここまで『縛り』で強化された結界は壊せんからな」

「っ、おまえの、ためじゃ……」

「こいつのため、だろう？」

「っ」

「それが巡って俺のためになる。皮肉だなあ、娘」

邪悪な笑み。ユキのものとは対照的な笑みを浮かべ、『奴』は私を嘲笑った。

その後、『墮雪』は私に背をむけ、あいつらと対峙した。……いや、もうあいつら”
じやなくなってる。

私とは反対側、今までユキを監禁していたその部屋の壁に、彼女はいた。福濁から『陰絵』と呼ばれていたその女は絶命していた。恐らくあの衝撃のせいだ。距離の長い廊下に吹き飛ばされた私と違い、部屋の中で、しかもユキの近くにいたあの女は壁に強く叩きつけられたんだと思う。その体は、壁にめり込み、半分に折れてしまっていた。

「小僧、出てこい」

『墮雪』はその遺体に話しかけた。すると、彼女の影から福濁が現れる。

「『墮雪』だね」

「ああ、俺が『墮雪』だ。お前は、なんだ？」

「ボクは草木福濁……平安から続く呪術師の家系・草木家の開祖だよ」

福濁の言葉で得心がいったようで、『墮雪』は手を叩く。

通りで結界が破れんわけだ。

そう言つて、『奴』は、

「では、今一度防いでみる」

「！」

福濁へゆつくりと迫る。

そして、呪力を込めた拳を振りかぶり、

ーバギツツー

ーバリントー

殴つた。それと同時に、結界が碎ける音もする。

殴る瞬間に張つた結界をそのまま破壊した。なんのことはない。『墮雪』は福濁の張つた結界を力づくで殴り壊した。それだけだった。

その衝撃で壁は崩れ、福濁は外へ吹き飛ばされる。見れば、奴は膝から崩れ落ちていた。

それを追い、ゆつくりと外へ歩みを進める『墮雪』。

「こうなる前に、殺しておけばよかったよ」

「悪手だったな。なに、後悔とは先には立たんものだ。仕方がないと諦めろ、小僧」

呪力を帯びた拳を振りかぶる。そして、そのまま振り抜いた。

「……?」

結果を言えば、『墮雪』の攻撃は福濁に届かなかつた。2人の間に1つの影が落ちていて、それが『墮雪』の拳を止めていた。

その人物は、私にも見覚えがある人間だ。

彼女は、

「……やはり、こうなってしまったのね」

呪詛師『五条』だった。

第39話 蚕食鯨吞―参―

「女……何者だ」

自らの攻撃を止めた。『彼』が生きていた時代はともかくとして、現代でそれほど術師には未だ会ったことがなかった。それゆえに、『墮雪』は目の前の女に興味を示した。『墮雪』の問いに、彼女―『五条』は答える。

「私はただの呪詛師よ」

「ふむ、呪詛師か……まったく下らん住み分けだ。呪術を使う人間にいいも悪いもあるまい」

そう言うと、『墮雪』は一步退いた。再度攻撃を仕掛けるつもりなのだとその場にいる者は理解したのは、『墮雪』から溢れ出る呪力を感じていたからだ。

「ほう。『無下限呪術』か」

「それも正解」

『無下限呪術』。

『五条』と名乗る彼女の術式である。とは言っても、それは近い未来に誕生する彼の術式には遠く及ばないものである。その左眼同様に紛い物、後付けの術式だ。

だから、彼女は強敵を前にすると必ず自らの手の内を明かす。術式を開示することで『無下限呪術』の効果を引き上げ、かつ彼女にかかる負担を抑えるためだ。

「昔、それをもった人間と戦ったことがあつてなあ………ん？」

そこまで話した『彼』は何か思い至る。近い距離で、彼女を観察する『墮雪』。その口元が歪んだ。

「すると、その眼は『六眼』か」

——ゾワッ——

「っ」

触れられるはずもない。にもかかわらず感じる強烈な悪寒。

それは『五条』の後ろにいる福濁も感じ取っていた。

「『封呪』」

福濁が咄嗟に選択したのは、呪力によって顕現している『墮雪』を封じるための『封呪結界』の展開。

勿論、即席で展開することもあり、雪を閉じ込めていた結界よりは数段効果が落ちることは分かっている。だが、ここで『墮雪』に自由に呪術を発動させるわけにはいかな
い。なにより彼の生存本能がそれを訴えかけていた。

だが、

「ガシッ」

「それは不快だ」

ーバギツー

「~~~~~つ!?!」

結界の発動よりも速く、『墮雪』は彼の両腕を折った。

本来であれば、それで怯むべきではなかった。一瞬でも隙を見せれば、『彼』はそれを突いてくる。

呪力を乗せぬただの打撃で、福濁は数メートルも吹き飛ばされ、意識が飛んだ。

「っ」

それを見た『五条』は『無下限呪術』による防御を選択した。下手な攻撃は隙を作るだけだと考えたのだ。

「フツ、『六眼』も『無下限』もその身に宿しておきながら攻めぬとは……宝の持ち腐れ。つまらん」

ーースッー

『墮雪』は嘲笑うようにそう言うと、掌印を結ぶ。

先ほどもでのこちらを試すような雰囲気とは違う。刺すようなそれは『彼』が術式を以て、彼女を殺しにかかってくることを意味していた。

「さつきまでは優しかったのに、どうしたのかしら」

「事情が変わった。『六眼』ならば、ここで確実に殺さなくてはな」

「これ、紛い物なのよ。見逃してはくれないかしら」

「……………」

『五条』の軽口に『彼』はもう乗らない。

呪力が溢れ出す。

「術式解放ー」

ーーピキッー

—————美澄視点—————

刺すような呪力を感じた次の瞬間、『墮雪』が止まった。

誰かの術式かと思っただけ、『あいつ』の呪力以外は感じない。これは一体……。

「—————」

ボソリと何かを呟いたのが見えた。少し離れたここからじゃ何を言ったのかは分からないけど、その後、『奴』は踵を返し、どこかへ立ち去っていった。

そこに残されたのは、意識のない福濁と息を切らせた『五条』。

そして、視界が暗くなっていく私だけ。

そこに、ユキはいない。

—————

『墮雪』を出さないための儀式『呪吐』は、花房家の呪術師が死に、咲人が捕らえられて

いる時点で行える者がいない。

私がしようとしたこと、ユキと『奴』を分離させる案も失敗した。顕現した時点で『奴』にその隙はなかった。

だからといって、そのまま倒すなんてできない。ユキがまだ『奴』の中にいるんだ。理解してしまう。

この状況が詰んでいることを。為す術がないことを。私の世界はもう、終わってしまった。

—————

第40話 終秋

|-----|

1988年10月30日。

呪術高専内のある一室。

そこは秘匿死刑となった者を捕縛・拘束しておくための部屋である。あらゆる呪術による破壊を否定するという強い術式が施されており、どのような術師であつてもこの部屋からの自力脱出は不可能とされている。

そこに彼女はいた。

「……………」

東坊城天蓋。

『予知』の術式と『六眼』の右眼を保有する呪術師で、呪術総監部に唯一指示できる人間。呪詛師の逃亡と総監部直属の呪術師・佐木宗吾の殺害を首謀したとして、この部屋に

投獄されていた。彼女に反抗の意志はないようで、落ち着いた様子のまま、部屋の中心で正座している。

その彼女の元に、1人の呪術師が訪ねてくることで停滞していた状況が動き出した。

「天蓋、久しぶり」

「水仙姉様」

東坊城水仙。1月前まで『五条』と名乗っていた呪詛師で、天蓋の双子の姉。天蓋同様『予知』と『六眼』の左眼、それに加えて五条家相伝の術式である『無下限呪術』を使うことができる。

「どうやってここへ？」

「力づくで」

「……………」

「勿論、見張りは殺してはいないわ。眠ってもらってるだけよ」

その答えに安堵したようで、天蓋はひとつ息を吐く。そんな彼女に水仙は声をかけ

る。

「思っているよりも落ち着いているわね」

「……はい」

「その様子だと見えてしまったのかしら」

「……………」

水仙の問いかけに、天蓋は黙って頷いた。そして、静かに口を開く。

「わたくしは数日後死ぬ。そんな未来が見えました」

「それは……処刑という形で？」

「はい。わたくしは元々総監部にとって邪魔な存在ですから、彼らもこの機を逃しはしないでしょう」

「そう」

2人の間に沈黙が流れる。

2人ともその眼を移植した時から断片的ではあるものの未来を見てきた。それが変

えることのできるものであることも分かっている。

だが、天蓋はその運命を受け入れている。それに姉である水仙は何も言わない。それは彼女の心中を察しているからだった。

「草木さんは……無事ですか」

「……まだ目は覚めていないそうよ。あれから2ヶ月……体は治ってるそうだけれど」

「………花房雪の所在は」

「『墮雪』が顕現したあの時から消息は不明。呪力を探っても上手く絞ってるようで、見つからないわ」

「そうですか」

水仙からの返答に、天蓋は驚きも落胆も示さなかった。まるで、ただの確認。知っていたことを再び聞いた時のような反応だった。

それはそうだろう。彼女はそれをもう『予知』によつて見ていたのだから。

「1988年12月、五条家に生まれた五条悟を『墮雪』が殺す未来」

「わたくしが見た未来は未だ変わっていません」

それまで『墮雪』は見つかからない。

そして、それを唯一止めることのできる可能性をもつ草木美澄はまだその域に達していない。

勿論、これから何かが変わる可能性はある。だが、彼女自身が死んでしまえば、未来を変える可能性も失われる。

「わたくしはできることをしました。けれど、こうなつてしまった」
「きつともう、わたくしに未来は変えられません」

天蓋の顔には諦めの色が浮かんでいた。

水仙はその理由をなんとなくではあるが理解していた。彼女がだいぶやつれていることから分かる。ここに拘束されていた間、何度も何度も『予知』を試したのだろう。天蓋が草木美澄と行動を共にしていたことは知っていた。結界を使い、彼女自身の呪力を底上げしたことも。

その上での未来。変わらない未来に彼女は絶望したのだ。

「……姉様も見たのでしよう。『墮雪』が五条悟を殺す未来」

「……………ええ」

「……………姉様？」

妙に間を空けて、水仙はそれを肯定する。水仙と天蓋の『予知』には差があることは天蓋自身も察してはいた。だから、水仙のその反応から天蓋は何かを感じ取っていた。

「姉様の見た未来は……わたくしの見た未来とは違うのですか」

「……………」

少し悩んだ様子を見せたあと、水仙はため息を吐いてから答える。

「私の見た未来でも『墮雪』は五条悟を殺したわ。それはあなたと同じ……けれど、私はその先の未来も見てるの」

「え……？ その後、『墮雪』が世界を滅ぼすのでは……」

天蓋が見た未来はそこまで。

『墮雪』が五条悟を殺し、世界を壊し始める。そこまでしか彼女の『予知』は働かなかつた。だが、水仙はその先を見たと言う。

「『墮雪』は祓えるわ。そして、五条悟がいなくてもきつと世界は続く」

「けれど、『墮雪』が祓われた後で——」

「——草木美澄が世界を壊すのよ」

「!？」

水仙は彼女に話し始めた。

水仙の『予知』は天蓋のそれと違って受動的にしか働かず、より断片的にしか見るこ
とができない。呪詛師として行動を起こす度に、その未来は形を変える。『墮雪』がずつ
と早い時点で消える未来も、『墮雪』が花房雪に入らない未来も、様々な未来を見て、行
動し、変えてきた。

だが、水仙の『予知』の終わりには必ずといっていいほどに、草木美澄の姿があつた。
彼女の見える未来につきまとう草木美澄の暴走。だから、彼女はそれを阻止するために動
いていた。

「それは……草木福濁が草木さんの体に乗っ取ったから、ですか」

「そうだった未来もあったと思うわ。ただ、彼女自身がそれを選ぶ可能性もあるの」「それじゃあ、わたくしのしたことは……」

草木美澄は天蓋の手によって確かに成長した。それがもしかすると、世界を滅ぼすという未来に繋がっているのではないか。『墮雪』から世界を守るために行動していたことが、世界を壊すことに繋がっているのではないか。

その可能性に思い至った天蓋の顔はみるみる青くなっていく。

「……分からない。けれど、あの娘を生かしてはおけない」

「っ、でも、『墮雪』を倒せるのは、草木さんの『輪廻復原』しかっ」

「……………」

天蓋は切実にそう叫ぶ。彼女らしくもない大声で。その声は部屋中に響き、やがて消える。

力なく項垂れる天蓋に、水仙は静かに彼女の名前を呼んだ。

「……………天蓋」

それは、水仙にとつて一番辛い選択だった。だが、ここから彼女を連れ出すこともできず、ただ死を待つ妹の心を救うには、それしかなかった。

「私が『墮雪』も草木美澄も止める。倒すわ」

「え…………」

「あなたの『予知』だと、草木美澄なしでは『墮雪』を祓うことはできない。そうよね」
「……………はい」

「なら、私が『墮雪』を倒せるようになればいい。そうすれば、草木美澄を早い段階で、なんなら今の眠ったままの彼女なら簡単に処分することができる」

「つ、でも、姉様の術式だけでは……………！」

「ええ、無理ね」

事実、2ヶ月前に『墮雪』が顕現した時、水仙は防戦一方であった。あの時は体に『墮雪』が馴染んでいなかったのか退いてくれたが、次は恐らく無理だ。虫を払う程度の力

で殺されてしまいうだろう。

だから、水仙はそれを告げる。

呪詛師になってまで守ろうとした最愛の妹に。

「だから、あなたの眼を私に頂戴」

皮肉なものね。

天蓋の眼を繰り貫いた故に手にかけてあの女と同じことをしようとしている。血は争えないのかしらね。

水仙は自嘲する。

「……………」

「……………」

天蓋にとって信じていた母親に眼を繰り貫かれたことがトラウマになっていることは知っている。だから、水仙はただ黙って彼女の答えを待つしかなかった。

嫌われるかもしれない。憎まれるかもしれない。

でも、自身が憎まれる程度で、最愛の妹が目指していた世界を守ることに繋がるのならば……。

水仙はもう、その覚悟を決めていた。

「……………水仙姉様」

長い沈黙の後。

天蓋は口を開いた。

「お願いします」

そう言った彼女の表情は穏やかで。

「ごめんなさい……………天蓋」

「……………いいえ。違いますよ、姉様」

「っ」

「天蓋は……流石ね」

そして、彼女は実の妹をその手にかけてた。

—————

その日、私は最も大切な者を失った。

その代わりに見える世界が変わった。

ここまで来てしまったのだから、後に退くことなんてできない。

あの娘が望む未来を掴むためならば、私はなんだつてする。

それがあの娘へのせめてもの償いだ。

大丈夫。

きつと私も長くはないわ。

やるべきことを全部済ませて、早くそつちに行くからね、天蓋。

—————

恋慕

第4 1話 恋慕の情―壺―

私がユキに出会ったのは、今から7年も前のことになる。

私が10歳の時。私が通っていたなんの変哲もない小学校に、ユキが転校してきたんだ。

「これから皆と一緒に勉強する●●雪さんです。じゃあ、自己紹介できる?」
「つ、は、はいっ……あの……●●雪……っつていいいます……」

綺麗な黒い髪。目まで隠れるくらい長い長い前髪。華奢で服装は地味。

見るからに気の弱そうな女の子。私とはたぶん気が合わない。それどころか私とは

正反对で。

「……むかつく」

あのおどおどした感じがなんか嫌だった。

—————

「ねえ、●●さん！ どこから転校してきたの？」

「おうちどのへん？ 放課後あそぼうよ！」

「●●さん、学校案内してあげる！」

「あの、えつと……」

転校生にありがちな質問ぜめ。クラスの子たちは●●さんの様子に気付かずに質問を続けてる。

「ねえ」

むかつくタイプなのに、なぜか放っておけなくて声をかけた。●●さんを囲むよう
にしていた他の子たちの体が跳ねるのが分かる。そして、●●さんからそくさと離れ
てく。まったく分かりやすい奴らだね。

「●●さんだっけ？」

「は、はい……えっと……」

「美澄」

「え……？」

「私の名前」

「……美澄さん……わたしになにか……」

もちろん用らしい用はなかった。ただなんとなく声をかけたっただけ。それを悟ら
れるのはすごく嫌で。

「放課後、ひま？　ちよつと付き合つてよ」

つい彼女を誘っていた。有無を言わさぬ口調に、彼女はただ頷いた。

—————

「……………」

「……………」

小学生2人、渋谷を歩く。

隣じゃなくて私の2歩後ろをついてくる●●さん。距離もあるせいか会話はなし。チラリと後ろを見ると、俯きながら歩いていた。ますます嫌な感じがする。

「ねえ、なんでそんなにおどおどしてるのさ」

「っ、ごめんなさいっ」

ほら、思った通りすぐ謝る。自信なさげななよなよしてる嫌いなタイプ。

「……………私はなんでそんなにおどおどしてるか知りたいの。謝ってほしいとか思ってな

い

「……ご、ごめー」

「だからっ！」

また謝ろうとする彼女の態度に苛ついて、私は後ろを振り向きながらつい大きな声を出してしまった。

ただ少し感情的になっただけ、だったのに……。

「ご、ごめんなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ」

「えっ？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

彼女の方を見ると、その場で膝を抱えてうずくまってしまっていた。それだけじゃない。ブツブツと謝罪の言葉を繰り返している。

「ちよ、ちよっと！ 私、そんなにー」

「ひいつ!？」

——ビクツ——

今度はガクガクと怯えるような姿を見せる。私は下手に彼女に触ることもできずに、彼女の側に立ち竦むしかなかった。

——————

苛立つ相手とはいえ、流石に怯える●●さんを一人にしておくことは私にはできなかった。人目をつくところまで泣かせているのもバツが悪くって、私は四苦八苦しながらも彼女を、大通りから少し入った小さな神社に誘導した。

気付けば夕方。夕陽が辺りを赤く照らしていた。それから少しして……。

「……落ち着いた?」

「……ごめんなさい、美澄さん」

「うん、その謝罪は受け取っておく」

その言葉に、彼女はまたごめんなさいと呟いた。

「私もクラスの子からは怖がられてる自覚はあるけどさ、あんなに謝られたのは初めてだった」

「……………わたし、いじめられてたんです」

「え…………？」

唐突に、彼女はそれを口にした。

いじめられていた？ それって…………。

「わたし、親がいないんです…………。転校してくる前から、クラスの子に親なし親なしって言われて…………」

「っ、それは…………」

「それに、わたし…………なにやってもどんくさくて…………それも全部親がいないから、教えてもらってないからだろうって」

それはまだ小学生の私が聞くには重い事実だった。困惑する私に構わず、彼女は続ける。

「それで、ばかにされてっ……ことばだけじゃなくなっ……殴られたり髪をちぎられたり……っ」

「それ……」

「うん。いじめられた痕、体にいっぱい残っちゃってるの……」

「なっ、なんでそんな……」

「わからない……わかんないよっ」

堰を切ったように泣きじゃくる彼女。溢れ出る涙を止めようと、ごしごしと目を擦る。かける言葉が見つからない私は、彼女の涙をハンカチで拭おうとして、隠れた前髪をかき上げた。そこで初めて彼女の目が、その瞳が現れる。

真っ赤に染まる、紅色の瞳。

夕陽の色よりも紅い――

「――綺麗な眼」

ポツリと溢れた言葉。

「……………え……………」

「っ、いや、なんでもないっ！」

それを聞いた彼女は涙でぐちゃぐちゃな顔をあげた。私は思わず出てしまった自分の発言に急に恥ずかしくなって、ぶっきらぼうに言い放つ。

「ほ、ほらっ、涙拭いてっ！」

少し乱暴に、私は●●さんの涙を拭く。その間、彼女は目をぎゅつとつぶって私のされるがまま。

動揺した私の心が少し落ち着いたのを見計らって、私は立ち上がる。

「……………あのさ、私は苛めないから」

「え……美澄さん？」

「美澄でいいよ」

そんな言葉が自然と出ていた。後で思い返せば、目の前で泣かれて、いじめられていた過去があつて、その上親もいないっていう彼女に同情していたのかもしれないけど。

それでも、私はなぜか彼女に優しくしなきゃならないって思った。

「あ、え、えつと……」

「それともいや？」

「っ、その……わたし、呼び捨てなんて……」

「んー、じゃあ、ちゃん付けは？」

そんな妥協案に彼女は、

「美澄……ちゃん」

「うん、ユキ」

第4 2 話 恋慕の情一弍一

ユキとの出会いから2ヶ月。2人でいることが多くなった私とユキは毎日のように遊んでいた。私の家とユキのいる施設は少し離れていたから、あまり長い時間は遊べなかつたけれど、それでも楽しい時間を過ごしていた。

そんなある日のことだった。

「●●さん、ちよつといいかな」
「え……」

放課後、帰る直前でユキが呼び止められた。見ると呼び止めた相手はクラスの子。ユキの様子から、ユキもそこまで面識がないことを察した私は、ユキとその子の間に入る。

「なに？」

「っ」

私に少したじろいだみたいで、その子は言葉を詰まらせる。いつもだったら大体の場合、それで終わり。なんでもないと引いて終わるんだけど。

「あの……●●さんに用があるの」

今回はそんな風に引き下がってきた。珍しいこともあるんだね。

その勇気に免じて、とりあえず話くらいは聞いてあげてもいいかな。

……つて、その前に。

「どうする、ユキっ？」

私はユキにそう聞いた。ユキの事情を知っているのは、私だけだ。ユキが言うには、先生にも施設の人にも言っていないそうだから。

最初はなんとなく一緒にいただけだったけど、最近はユキを守らなきゃってそう思うようになっていた。

「……いつてくるね。先に神社にいつてて、美澄ちゃん」
「……………うん」

少しだけ不安ではあったけど、ユキが一步を踏み出そうとしているんだから、私は応援しよう。

そんなことを考えて、私は教室を後にした。

—————

先に家に帰ってかばんを置いてから、神社へ向かって。

ここについてからどれくらいが経っただろう。ユキも施設に戻ってからここに来るはずだから、少し遅くなるのは分かるんだけど……。

「さすがに遅すぎるよね」

お母さんに買ってもらった時計を見ながら呟いた。時計の針はもう午後5時を指していた。学校が終わったのが3時。それからあの子と話をしたとしても30分くらいでしょ？

「……………何かあったのかな」

ふと頭をよぎるのは、いじめられているユキの姿。それを想像してしまう。そんなことはきつとないと思う。でも、一度してしまった悪い想像は頭にこびりついて離れない。

「迎えに行ったほうがいいかな」

ポツリと独り言。

行くこと自体はいい。思い過ごしならそれでいいし。行く判断を鈍らせているもの、それは…………。

「もう……日が暮れる」

学校に着いて帰る頃には、きつと周りは暗くなり始める。そうになったら……。

「っ、行こう」

悩んだ末に、私はそう決めて、駆け足で学校へ向かった。

—————

結論から言うと、ユキはまだ学校に残っていた。ユキを呼び出したあの子と一緒に。だけれど、状況が違っていた。

——ゾゾツツ——

「これ……まさか……」

夕暮れの小学校。本当なら先生もまだいるはずなのに、まだ夕方なのに、なぜか真夜

中みたいに真つ暗で静まり返っていた。校舎の外からでも、異常だつてことは一目で分かる。

私は直感していた。

きつと『あれ』がいる。

物心ついたときから『化け物』が見えた。

他の人には見えない『それ』は、時には背の異様に高い黒い影だったり、時にはうずくまった小さな女の子だったり、黙っている奴もいれば意味の分からない単語を口にする奴らもいた。ひとつひとつが違う形を取っている中で、共通しているのが人を呪うようなドス黒い気配だけ。

家にもつていれば『それ』は現れなかったから、幼い頃はダイジョブだった。けど、小学校に入つてからはそうもいかない。ただ、登校の時はよかつた。明るくて人も多いからか『それ』を見ること自体めつたになかつたから。

でも、下校の時に特に日が落ちきつた後は『それ』が現れ始める。きつと夜があいつらの時間なんだろう。

私が外で遊ぶとき、神社へ行くのはそれが理由だ。なぜか分からないけど、あそこには『それ』が出ないみたい。だから、ユキと遊ぶときも少しでも長く遊べるように、あそこを集まるようにしてた。

「っ」

怖い。このことを家族以外には相談した。先生にも友達だった子にも。でも、『それは他の人には見えないみたいで、相談した相手は首をかしげたり、私のことを変なものを見る目で見たりするようになった。

私にしか見えない化け物。何かしてきたってことはない。けど、そこにいるだけで感じる恐怖は私にしか分からないんだ。そのことを考えるだけで、足が震えてくる。怖い。怖い。

でも、ユキのことが頭に浮かぶ。逃げ出せばいいのに、どうしても浮かんでしまう苛められてるユキの姿。

「ユキっ」

震える体を両腕で抱えながら、私は校舎内へ向かった。

| | | | | | | | | |

コツ、コツ。

足音が校舎に響く。響いた足音は暗闇に消えていく。

やっぱり、おかしい。まだ5時半だよ？ それでこんなに暗くなるはずない。

となると、やっぱりここに『それ』がいるの？ でも、あいつらはそこにいるだけのはず。

「こんなことなかったのに……」

学校ごと化け物になったとか？

化け物になって、残ってる先生を食べちやっただとか？

「そ、そんなことっ」

ーぶるっー

否定したい。けど、『それ』が何か分からないから、ありえないとも言えなかった。早くユキを探さなきゃ。そうして、ここからすぐ出よう。

そう思つて、廊下を走り出した時だつた。

『ろう力をハシルノだあアアあれエええ？』

音……ううん、何かの音がした。

体が止まる。声はたぶん廊下の奥、私の視線の先から聞こえてきた。

早く、逃げなきや。本能が告げてくる。でも、動けない。

いや、ダメだ。早くここから離れて――

『ワルいこゝミつけええエ』

「ひっ!？」

いきなり目の前に現れた『それ』に驚き、腰を抜かしてしまふ私。

そんな私を品定めでもするみたいに、『それ』は私を見つめてくる。

ガリガリでところどころ皮膚も剥がれ落ちているグロテスクな体とそれに不釣り合いな逆さまの『能面』。私が今まで見てきたどんな化け物よりも化け物だつた。

『ワルいこキョウイクキヨキキキョウイイイイククク』

骨が軋むような音をあげてその『能面』は私に骨と皮しかない腕らしきものを伸ばしてきてー

「美澄ちゃんっ!!」

突然のことだった。

私と『能面』の間に割り込むように、彼女は飛び出してきて、そのまま私を抱き締めてくれる。

さつきまで感じていた寒気を溶かしてくれるような暖かさを感じながら

「ゆ、き……っ?」

「み、みすみちゃんに手を出さないでっ!!」

私は意識を手放した。

次に目が覚めたのは、私の家だった。

寝てる私の側にはお母さんが心配そうに私を見てた。なにがあつたのって聞いたら、学校で倒れてるところを先生に発見されたって、お母さんの仕事場に連絡がいったみたい。

そこで私も学校であつたことを思い出して、ユキのことを聞いた。私と一緒に転校生の子がいたはずだって。でも、先生からの連絡だと私しかいなかったって。

夢だったのか、なんて思わない。

あれは確かに起こつたことだ。そう思った私は、次の日、ユキをあのかの神社に呼び出した。

—————

「単刀直入にきくよ、ユキ。昨日なにがあつたの」

私の質問に、ユキは口を開いた。

「あのね、美澄ちゃん」

「わたしも『呪霊』が視えるの」

――

第43話 恋慕の情―参一

ユキから返ってきた答えは、私の質問から少しずれていた。けど、なんとなく分かる。ユキが言う『呪霊』っていうのは……。

「あの、『能面』みたいな奴らのことだよね」
「うん」

頷いたユキを見て、理解した。やっぱり昨日のことは本当にあったことで、しかもユキもあいつらを見ることが出来る。

『呪霊』。

人の負の感情から生まれる化け物。ユキはそう説明してくれた。

そう言われて納得する。私が見てきたあの化け物たちも、そういうものの集まりだったんだ。しかも、それは限られた人しか見ることができない。

「先生も、クラスの子も見えてないの」

「じゃあ、なんでユキは見えるの……?」

「分からないよ。美澄ちゃんもじゃないの?」

「……うん。昔から見えたから」

ユキはなんでそんなことを知ってるの?

それも聞くと、施設に出入りする人が教えてくれた、らしい。ちよつと怪しい話ではあるけど、今はその人物の言うことを信じるしかない。実際に私はその『呪霊』とやらを昔から見てきたのだから。

「あのね、昨日わたし呼び出されたときに、あの子からそのことを聞いたの」

「そのことって」

「うん、美澄ちゃんの変なものが見えるって言ってる嘘つきなんだ。だから、美澄ちゃんから離れた方がいいよ……そんな風に言われたんだ」

きつとあの子にとっては親切心だったんだろう。私みたいな嘘つきの奴と仲良くし

ている転校生への思いやり。

……………ホントに最悪だ。

そんな私の心中とは裏腹に、ユキは静かに笑う。

「わたしね、美澄ちゃんが初めてのお友達だった……」

「ユキ？」

「親のいない、苛められてたわたしに手を差しのべてくれた大切なお友達。本当に美澄ちゃんにはありがとうって思ってるの」

だから、とユキは続ける。

「今度はわたしが美澄ちゃんを助けられたら、って思ってる」

「助けるって……」

「美澄ちゃんは嘘ついてないよって皆に分かってもらう。それに、『呪霊』が見えて怖い思いをしてきた美澄ちゃんと一緒にいて安心させてあげたい」

わたしが美澄ちゃんに安心させてもらったみたい。

そう言うユキ。偶然吹いた風に、ユキの長い前髪が揺れて、その隙間から真つ赤な眼が見えた。その眼はどこか決意に満ちたような眼で。

「あのね、美澄ちゃん。『呪霊』を倒す人のことを『呪術師』っていうんだって」

「……呪術師」

「わたしは『呪術師』になる。そして、美澄ちゃんを守ってあげるからね」

—————

そうして、ユキは私の前で決意した。

『呪術師』になる、と。

彼女曰く、それからユキの暮らす施設に出入りするという人から呪術に関することを学んでいった。その人が来るのは、月1回程度らしいから、そのときに沢山のことを聞いて、学んで。

その成果を、私の前でよく話してくれた。

正直、私にはよく分からなかったけど、それでも話しているユキが楽しそうだから、まあいいかなって、そんな風に思っていた。

相変わらず『呪霊』は視える。

けど、今までと違うのは、ユキが一緒にいてくれること。

嘘つきだと言われようと、周りから腫れ物のように扱われようと、ユキと一緒にいてくれる。それだけで私は少し救われていた。

けれど、ユキが転校してきて2年くらいが経ち、私たちが6年生になったその日、事件は起こったんだ。

—————

「…………ユキ…………？」

真つ暗な場所で目を覚ました私は、ゆっくりと立ち上がり、よろよろとユキを探す。

目を覚ます前、なにをしてたんだっけ？

……………ええと、たしかいつもみたいに放課後、神社に集まって、遊んでいたはず。それで、そろそろ日が暮れるから帰ろうとして……。

「そうだ…………階段を上がってくる『なにか』を視たんだ」

カツンカツンと階段を上がってくる『あれ』はきつと『呪霊』の類いだとは思ふ。けど、その正体を確かめる前に気を失っちゃったから。

「……………つ、ユキは—」

あれが『呪霊』だったとしたら。前に学校に出たみたいな奴だったとしたら、私を守るように前に出たユキは—

「つ」

最悪の想像に、背筋が凍る。それを頭から追い出すように、ぶんぶんと頭を振って、再び周りを見渡す。暗さに目が慣れてきたこともあって、なんとなく周りの景色が分かる。たぶん神社、なんだと思う。でも、いつものところじゃない。

参道は苔むし、鳥居は半分崩れ落ちてる。電気も通っていないのか明かりらしい明かりもない。そんな酷い周りの有り様に反して、本殿らしき建物はなんの損傷もない。そのちぐはぐさがどこか気味が悪かった。

——ガタツ——

「!?」

静まり返っていたこの場所に、急になにかの音が響く。反射的に体が跳ねた。怖い、けど、もしかしたら……。

「ユキ……?」

私は音のした本殿の方にゆっくりと歩を進めた。

————

「ユキ、いるの……?」

小さな声で呼びかけながら、私は本殿の戸を開けた。

外側と同じように中も荒れている様子はない……そう気づいたのは全てが終わった

後だった。

戸を開けた私の目に飛び込んできたのは、

「ユキ!!」

「……………」

ユキの姿。

ユキは虚ろな動きで、本殿の正面――御神体らしきものに触れようと手を伸ばしているところだった。

なにかヤバイ。そう感じた私はそのままユキに駆け寄る。

「ユキ、やめてっ!!」

だけど、私がユキに触れるより前に、ユキはその御神体に触れた。

その瞬間、その御神体から赤黒い『なにか』が溢れ出し、彼女を包み込んだ。包み込んだ『それ』はそのままユキに入り込んでいく。

そして、

——フラッ——

「ユキ！」

私が倒れたユキを抱きかかえると同時に、景色が暗転する。

そして、また意識を失った。

——————

気づいた時には、私とユキはいつもの神社にいて。

その周りには、何人もの大人がいた。それが私たちを引き取る花房家と草木家の人間だと分かるのは、後の話。

その後、私たちは別々に連れられて、花房家と草木家の養子になった。そして、『呪術師』となる。

それが私とユキが出会い、『呪術師』になるまでの話。

——————

あれ？

なにか足りない気がする。
そもそもこの記憶は――

――

第44話 汚泥のような違和感と

「俺の術式について話をしようか、小娘」

『墮雪』が内側にいるわたしにそう語りかけてくる。

いくら体を返すように言っても聞かないし、取り返せない相手。今は話したくもなかった。

「そう言うな。お前の協力なくしては呪術を十全に出せんのだ」

やっぱり自分のためじゃない。なにが目的かは分からないけど、あなたのために協力なんてしない。

「……お前、あの娘のことについて知りたくはないか」

え？ あの娘って……。

「なんといったか……ああ、ミスミとかいう娘だ」

美澄ちゃんについて？ それがあなたの術式となにか関係があるっていうの？

「大ありだ。あの娘は俺のおかげでお前を慕っているんだぞ？」

なにを言ってるの……？

美澄ちゃんがわたしを好いてくれるのが『墮雪』のおかげ？ そんなことあるわけがない。

美澄ちゃんわたしの大切なお友達で、転校してきたわたしの心を救ってくれて、わたしも皆から嘘つき呼ばわりされてた美澄ちゃんを守るためにずっと一緒にいた。ただそれだけ。わたしと美澄ちゃんは本当の親友ってだけ。

「ふむ、それは間違いない。そういうことになっているからな」

っ、これ以上変なことを言うのはやめてっ!!

「時間か。仕方がない。またの機会にしよう」

……また、眠気が……。

—————

体の主導権を奪われてから、わたしの意識は1日に何度か浮上する。それ以外の時間はなにもない闇の中にいる。まるで眠っている時のように。

目覚めると、わたしはその場所にいた。たぶん『墮雪』の心象風景——『生得領域』の中だ。そこはこじんまりとした部屋で、今よりもずっと昔の、中世の外国のような、昔映画で見たことのあるような一室だった。

そこに2つある椅子の1つに座って、わたしは『墮雪』を説得してた。けど、いつも失敗する。まるで取り合ってくれない。

「『呪霊』だもん……話が通じるわけないか」

ポツリと呟く。『墮雪』の意識が外に向いているせいか、今は『墮雪』の声は聞こえないし、たぶんこつちの声も聞こえていない。

「なんで、こうなっちゃったかな」

草木福濁に呪術が使えない状態で監禁され、やっと美澄ちゃんに会えて、脱出を図った。それで体を乗っ取られた。

少し考えれば、『呪吐』を行っていない状態であれば、『墮雪』が出てくる可能性は確かであった。けど、今まではわたしが眠った時や意識を失った時に乗っ取られていたから、正直油断してた。

つまり、

「それほど『墮雪』は力をつけてきた……」

主導権を無理矢理奪えるほどには『墮雪』は力をつけて……いや、取り戻してきてい

る。

『墮雪』の完全権限による呪術界の崩壊。

呪術総監部が想定したことが現実を起こらうとしているのかもしれない。

「……わたしが死んでおけば」

ついそんなことを口走ってしまつてから、ぶんぶんと首を振つてその考えを追い出す。

わたしが生きているのは、在藤兄さんが色々考えてくれたおかげ。死を望むつてことは在藤兄さんの優しさを踏みにじることになる。

それに、

「美澄ちゃんに守ってもらつたからわたしは生きてられる」

『墮雪』に入り込まれ、花房家に引き取られて。

わたしは皮肉なことに呪術師になつた。本当は呪霊が見えることで孤立してた美澄ちゃんを守るために、なんて考えてたのに、結果的に美澄ちゃんは草木家に引き取られ

てからぐんぐん力をつけて、逆にわたしが守られる側になっちゃった。

それが嫌で、もがいて、どうにか美澄ちゃんの側に立てるようになったもん。

「こんなところで死ねないよね」

とにかく、どうにか体の主導権を取り返さなきゃ。

とはいっても、今はできることがない。『墮雪』と話すこともできないし……。

「あつ、そういえば……」

今回、眠りに落ちてここに戻ってくる前に、『墮雪』と話した内容。あれを思い出して、少し気になった。呪霊の言う戯言といえはそれまでだけど。

「『墮雪』の術式と美澄ちゃん……なにか関係があるのかな」

俺のおかげでお前を慕っているんだぞ。

『墮雪』はそんなことを言っていた。

美澄ちゃんがわたしのことをとつても大切にしてくれていることは分かっている。親友なんだから当たり前だつて思つてた。事実、わたしも美澄ちゃんのことには大事だから。……ふと、昔のことを思い出す。

美澄ちゃんとお会つた日のこと。あの神社で笑いあつた日々。美澄ちゃんが『能面』に襲われた時のこと。呪術師になつて美澄ちゃんを守ると誓つたあの日のこと。そして、わたしが『墮雪』に触れた始まりの日。

ー そういうことになっているからなー

そういうことになっている？ どういうこと？

それじゃまるでわたしの記憶が『作り物』かのような……。

……うん、そんなはずない。わたしの記憶は正しいはず。そんなことはー

ーゾワツー

一瞬、気持ち悪い感覚に襲われた。

なに？ 何かに気付いた気がしたんだけど、それが何か分からない。認知することができない。

その正体分かる前に、わたしの意識が遠退いていく。

「ま、た……」

—————

「え……？ あ、あれ？」

気付けば、わたしは体を取り戻していた。『墮雪』の声は聞こえない。

なんで……？ 理由を探ろうとしてすぐやめる。それを考えるのは後だ。『墮雪』に体に乗っ取られていたからか、呪力感知が今までの比ではなく鋭くなっている。なら、主導権を奪われる前に今しなきやいけないことは——

「美澄ちゃんっ！」

わたしは彼女らしくない弱々しい呪力の方へ駆け出した。

—————

呪術高专に張られた結界はなぜか弱まっていて、呪霊の気配を濃く纏う今のわたしでも難なく入ることができた。

「運がよかった、のかな」

上手くいきすぎている気はするけど、理由は考えない。今はなによりもそれを優先する。

「……………」

目をつぶり、感覚を研ぎ澄ます。

……………いた。

これは、医務室、かな。呪力が完全に一定なところから考えるに、たぶん眠っているんだと思う。その周りには、誰もいない。これなら十分会える。

医務室に入ると、美澄ちゃんはまだ眠っていた。わたしも『墮雪』の中で眠ってたこ

ともあって正確な時間は分からないけど、たぶん美澄ちゃんもあれから2ヶ月くらいずっと寝たきりなんだろう。

「……っ」

感情が溢れそうになるのをぐっと抑え込んで、ひとつ深呼吸をする。息を整えてから、彼女の名を呼ぶ。

「美澄ちゃん」

2人だけの医務室に声が響く。

いつも、美澄ちゃんはわたしの声に答えてくれた。眠ってても答えてくれるくらいに、わたしの声に反応してくれた。

でも、何度声をかけても、今の美澄ちゃんには届いている気がしない。

「……お願い、美澄ちゃん……目を開けてっ」

眠ったままの美澄ちゃんの手をぎゅっと握る。心なしか体温も低下してるとような気がしてしまう。それほどに今の美澄ちゃんからは生気を感じられない。とにかく美澄ちゃんの目を覚まそうと必死で。

だから、わたしは気付かなかつたんだ。後ろにいるその気配に、

『二元解離』

| | | | | | | | | |

第45話 福は濁りて淀みゆく

|-----|

草木福濁にとって、生き永らえることこそが生きる目的であった。

魂とその器を切り離し、一時どちらも宙に浮いた状態へと変える。それが彼の術式『二元解離』である。自らの魂をその器から解き放ち、別の新しい入れ物へ移す。そうして彼は現代まで生き永らえてきた。

|-----|

ベッドで横たわる草木美澄に意識を集中させていた花房雪の後ろから両手で頭を挟み、術式を発動する。

術式は確実に、彼女を捉え、器から魂が分離した。

「草木……福濁……っ」

後ろを振り返りながら、途切れ途切れ自分の名を呼んだ花房雪に、福濁は笑いかけた。

「おめでとう、『墮雪』の器。君は今、『墮雪』から解放されたよ」

「なに、を……う？」

「『二元解離』——器と魂を分離させるボクの術式だ。これで君から『墮雪』を解き放つた」

彼の言葉を聞きながらも、雪は両手と両膝とつき、地面に伏す。

「それがボクと美澄ちゃんの間にあった『縛り』でね。そうしない限り、ボクは彼女の体を貰えない……裏を返せば、分離さえしてしまえば、彼女の体はボクのモノということなんだよ」

「……そんな……」

「彼女は君を『墮雪』から解放しようと必死だった。それこそ自らのことなど何も省みなかった。美しい友情……いや、愛情かな」

そうやって、福濁は歩を進める。彼を止めることは、今の雪にはできない。そして、彼は美澄の頭に両手を添えた。

「これで君との『約束』^{縛り}は果たしたよ。『約束』^{縛り}通りいたたくね。君の身体

「や、めっ!」

「『二元』」

「本当に不快な男だ」

その声と共に、福濁の右腕に激痛が走った。一瞬なにか起こったのか理解できなかつた。『彼』に捕まれたのだと理解したその時には、福濁は医務室の窓に向け、投げ飛ばされていった。

ガラスが割れる音。背中に感じる激痛。

医務室の外、高専の運動場に投げ出され、福濁はやつと状況を飲み込んだ。

「失敗した………ってことかな」

体勢を立て直しながら、呟く。

『二元分離』は人間の魂に直接働きかける術式。術師には相当な技量を求める分、失敗することはほぼあり得ない。もちろん、分離に多少時間がかかる場合もあるが――

「これが特級仮想怨霊『墮雪』か」

少し遅れて、医務室から『墮雪』が出てくる。

「まったく……俺の計画が台無しだ」

不機嫌そうな様子の『彼』。

福濁はそれを見て、考えを改める。慢心していたその心を捨てる。

「その様子だと分離は失敗したようだね」

「……その程度の術式で俺をどうにかできると思っていたとはな」

本当に不快だ。

ーブブブー

『墮雪』の呪力を込めた一振り。ただの風圧でも人を死に至らしめることを福濁は理解していた。

『耐呪』

ーギギギツー

咄嗟に展開した結界で、風圧を防ぐ福濁。

だが、目の前には既に『墮雪』の姿がある。

「遅い」

「ああ、そう来ると思っていたよ」

至近距離での攻撃に備え、『耐呪結界』と同時にもうひとつの結界を発動していた。

『反呪』

「ん？」

そのまま振り抜き、もろとも破壊する。そのつもりで結界に触れたのだろう。だが、違和感に

——スツ——

力が抜ける感覚に、『墮雪』は咄嗟に後退した。呪力を吸収されている感覚に近かったが、どこか違う。

「……反転術式か？」

「流石は『墮雪』呪術への造詣が深いね。当たりだ、『反呪結界』は結界に触れた者の呪力を反転させる術式効果を付与してある」

『呪霊』であれば腕ごと消し飛んでいたか」

「名答」

術式の開示で効果を底上げし、福濁は再び構える。

「さて、今度はこちらからいかせてもらおうか」

慢心はしない。その証拠に福濁は体の前で、掌印を結んだ。

両手の人差し指から小指までを組み、両の親指を立てたまま合わせる。

「『領域展開』——」

「——『業業解皆脱』」
じょうじょうげかいだつ

両の手から溢れ出した呪力は白い靄となつて、辺りを包んでいく。五里霧中。まるで霧か霞の中のような少し先も満足に見えない世界。その中で唯一存在を主張するのは、術師の前にある真つ白な太陽のような光の塊のみ。

それが草木福濁の領域『業業解皆脱』であつた。

「領域展開……年の功か。呪術の極致であるそれを会得しているとは」
 「冗談のひとつでも言いたいところだけれど、呪力の消費が激しいんだ。終わらせてもらおうかな」

「『解』」

「福濁の前の光が動き出すと同時に、『堕雪』の中に入り込んだ。」

『解』。

引きずり込んだ対象の魂を解析する術式。

これにより対象の魂と器の繋がりを明らかにして、次の術式により確実に切り離す。

「『脱』」

「福濁の言葉と同時に発動するその術式は、『堕雪』の魂と器を切り離した。必中の『解』と確定の『脱』によって、『業業解皆脱』に引きずり込んだ相手の魂は消滅し、器にはその遺恨も残らない。勿論、『堕雪』の中の花房雪の魂も消滅するのだ。」

「惜しむらくは、美澄ちゃんとの『約束』^{縛り}を反故にしてしまうことだね」

花房雪の魂が消滅したことで、きつと彼女は反抗するだろう。けれど、器に入ってしまえさえすれば多少時間はかかっても調節はできる。それに今の生気のない草木美澄ならば、調節に時間はかからないはずだ。

「……さて」

ーゴロツー

領域を展開したまま、福濁は空っぽになったであろう器を足で転がす。

「流石に消えた、かな？」

領域を解除した時には、膨大な呪力消費故に本来の術式が数秒間焼き切れることを福濁は知っていた。だが、彼には結界がある。一瞬とはいえ『墮雪』の攻撃を躊躇させることができるのなら、もしこれで『彼』が生きていたとしても十分に対応は可能だろう。

そう考え、福濁は領域を解除した。

—————

ここまでは『墮雪』が書き記したシナリオだった。

今、草木福濁は地に這いつくばり、吐血しながら苦しんでいた。

「な……に」をおお……………」

「つまらん。長く生きたせいだろうが、慢心がすぎる」

福濁には理解ができない。完全に勝っていたはずの勝負。それを一瞬で、認識できない内にひっくり返されていた。

「術式には限界がある。勿論、俺の術式にもな」

死にかけの福濁に背を向けて、『墮雪』は独り言のように語る。

「確か蘇りたいのだったか。だが、自らの術式を過信するものは生きてけんよ」
「特に敗北も知らん呪術師はな」

—————

声が聞こえた気がした。

私のことを呼ぶ声。愛しい声。

それに導かれるように、私の意識は浮上していく。

「……………」

目を開けた時、私の目の前にいたのは、

「美澄ちゃんっ！」

ユキの姿だった。

「ユ……」

名前を呼ぼうとして、声がでない。それに体も上手く動かない。

「ゆっくりで、いいよっ」

「……う、ん」

ユキに支えてもらいながら、どうにか体を起こす。そんな私を優しく抱き締めてくれるユキ。

「……う、ん」

「『あい……つ』……は」

「『墮雪』は今、私の中にいるよ。なんでかは分からないけど、表に出てこれたの」

「……う、ん」

よかった。ただ安堵する。

けれど、もう私には……。あの時の絶望を思い出し、私は俯いた。きつとこれも『あいつ』の気まぐれなんだろう。今度また、ユキを奪われてしまったら、私にはどうすることもできない。

「美澄ちゃん」

諦観し俯く私の名前を、ユキは呼んだ。

「ユ、キ?」

「わたしね、『墮雪』の中にいた時、思い出したの。美澄ちゃんと出会った時のこと」
「……………」

なんの偶然だろう。私もその夢を見ていた。

ユキの隣にしようって思ったあの時の、ユキが私を助けてくれようとしたあの時の思い出。

それを懐かしむように、ユキは目を瞑ったまま静かに続ける。

「色々、あったよね。転校してきたばかりの苛められてたわたしに苛めないからって
言ってくれたこと」

「気味の悪いわたしの赤い眼を綺麗って言ってくれたこと」

「わたしね、本当にそれに救われたんだ」

そう言つて、ユキは微笑む。揺れた前髪の隙間から見える赤い眼。

ああ、やっぱりユキのその眼は綺麗だなんて思つたりして。

「ね、美澄ちゃん」

焦点の合わない私の目をじつと見て、ユキは言葉を紡ぐ。

「わたし、きつと戻ってくるから。『墮雪』を抑え込んで、美澄ちゃんの側に戻ってくる
からっ！ だから、その時は——」

「——また一緒にいてね」

「ツ、ユキ……！」

動かない腕をどうにか上げて、彼女の頬へ。

それを見て、ユキはまた微笑んだ。

——福濁視点——

ここで終わるわけにはいかない。

まだボクは生きている。生き永らえなくてはならない。

ボクはボロボロになった体を引き摺って、彼女のいる場所へと向かう。

草木美澄。『輪廻復原』をもつ呪術師。

幸いなことに今の彼女は体を動かすことすら儘ならならず、先ほどまでいた『墮雪』の気配ももうなくなっている。

両手で彼女の頭に触れることさえできれば、ボクは生き残れる。自分と彼女への『二元解離』を発動できる程度には、呪力は残っている。

進め、この身体はもうどうなってもいい。あの器さえ手に入れば——

「……………ふだく」

這いながら進むボクの目の前に、彼女が現れる。見るからにフラフラで立っているのがやつとという様子だった。

運がいい。彼女からこちらへ来てくれるとは。

「す、ごし……………肩をがしてぐ、れ……………」

「すごいケガだ」

「ああ……………だが、だいじょうぶだ……………がらだのがえはある」

「……………そう」

彼女は頷くとしやがんで、ボクの体を持ち上げた。

ああ、ありがとう、美澄ちゃん。

これでボクは生き返ることがでー

「はやいうちに気付けばよかったんだ」

「な、にを……………」

ーパッー

彼女はそのままボクから手を離す。

支えのなくなったボクの体は、そのまま地面に転がり、ボクは空を仰ぐように仰向けになる。

「おまえの『二元解離』は私がつかう」

なにを、しようとしている。

やめろ、やめろ。やめろやめろやめろツ!!

指を近づけてくるなツ！ ボクの視界を塞ぐなツ！

ーグヂュッー

激痛。言葉にならない叫び声。

まだ痛みは続く。

「目だけじゃ不安だから。このまま脳幹も引き抜くからね」

もう、りかいできない。いたみ。のうになにかがはいってくるいぶつかん。
いたい、いたい、いたい、いたい。
もう、いやだ。しにたい。

—————

何を諦めてようとしてたんだ、私は。

ユキはまだ諦めてない。なら、私も諦めるわけにはいかない。
手段など選ばない。どんなことをしてでも達成する。
そう決めたじゃないか。

そうだ。

私はユキを救うんだ。

—————

美澄と雪

第46話 1989年6月

——東坊城水仙視点——

1989年6月7日。

私と天蓋が『予知』したその未来まであと半年。

その間に呪術界の情勢は大きく変わっていた。『墮雪』の完全顕現。草木家・花房家の衰退。保護されていた草木美澄の失踪。そして、五条家の令嬢の懐妊。

『予知』した未来が刻一刻と近づいてきているのを感じている。

勿論、私は天蓋を殺めたその日からずっと彼女たちの情報を探っていた。だが、フリーの呪術師たちや呪詛師、東坊城関係の協力者など、どんな伝手を辿っても2人の行方は知れなかった。

頼りの『予知』も、天蓋の『六眼』と引き換えに私の中から消えてしまつて、私にはもう未来を視ることができなくなっている。

そんな中で、私はある筋からその情報を受け取った。

私が訪れたのは、東京から遠く離れた山間の小さな村。

過疎化が進み、高齢者しか住まわなくなっているこの村に、7ヶ月前ほどに1人の女の子が引越してきたという話を、彼女が住んでいるという屋敷の近隣の人から聞いた。

住民曰く、その少女は青黒い長髪を後頭部で縛り、真っ白な服を着ていた恐らく10代後半くらいの少女だったという。

「ただの家出娘の可能性もあるけれど」

ただ、ここに向かうきっかけになった情報源は、信用はできる人物だったから、可能性は高いとは思っている。

私は目の前にそびえ立つボロボロの屋敷を見上げる。元々は、明治時代にどこぞのお偉いさんが密会のために建てたものだったらしく、この屋敷で密会相手の女性が自死してからお偉いさんは来なくなり、そんな曰くがついてしまったものだから、壊すに壊せ

ず……というこらしかった。

こんなところに住み着くのだから、少女は一般人じゃないわよね。そう思い、改めて眼鏡を外し、その建物を『六眼』で視る。

「……………いる、わね」

確かに見える。『六眼』に引つ掛かる呪力の塊……呪霊が何体か。その中のひとつから一際嫌な感じがするのは、自死したというお偉いさんの密会相手がそうなってしまったものなんだろう。これはどちらにしる祓っておく必要があるかも。

それにしても、

「例の少女はいないのかしら」

人間とおぼしき呪力は見えない。もしかしたら何かの細工をしている可能性はあるでしょうけれど……。

とにかく話は中に入ってから。そう思って、私はその屋敷の扉を叩いた。

ーゴングンー

応答なし。何度か続けても同じ。

仕方がない、緊急事態よ。私はそう呟いて、『帳』を下ろしてから、屋敷の扉を吹き飛ばした。轟音が響く。

そして、

『いいいいいい』

『しゃんしんしんしゃんしんしん』

『カイかゆかゆいいいい』

『たノシいたたのノシイイ』

音に反応するように寄ってくる呪霊の群れ。

この建物への恐れや嫌悪感、負の感情が集まったせいかしらね。思っていたよりも数が多い。けれどー

「術式順転『蒼』」

ーグンツー
ーバシユンツー

両眼に『六眼』を揃えたこの7ヶ月間で習得した術式の強化ー『無下限呪術』を強化した『蒼』。

簡単に言えば、『引き寄せる力』を呪霊の真ん中に発生させて、その力で強引に潰す。見たところ低級だから質量で潰すことはできなくても、呪力でできたもの同士ならぶつけることができる。

今までの私ではできなかった芸当。

天蓋がくれたからできるようになったことだった。呪力が廻る。

ーグンツー
ーバシユンツー
ーグンツー
ーバシユンツー

『蒼』を数発も使えば、屋敷の中は粗方片付いていた。あとは例の一際大きな気配の主を

倒して終わー

『……………』

「！」

悪寒を感じて、跳ぶ。見れば、さつきまで私がいたところには『女性』が立っていた。ボロボロの衣服と首には縄。その手にも首にあるのと同じ縄が握られていた。

「なるほど。例の『女性』の呪霊ね」

やはり存在していた。明治時代のいつに『彼女』が死を選んだのか、詳しいことは分からない。仮に明治の終わりだったとしたら、70年以上を呪霊として生きていたことになる。恐らく呪力量だけで見れば、

「二級……で足りるかしら」

下手をすると特級とも渡り合える呪力量。もちろん『堕雪』ほどではないけれども。

さて、少し気合いを入れなきやいけないわ。

まずは目の前の『彼女』をきつちり祓って、家捜しといきましょうか。

ーグンツー

まずは私の方へ引き寄せる。そのまま殴る、

ースツー

「当たらないっ」

はずが空を切る。低級呪霊によくあるすり抜けではなく、恐らく術式の類い。なら、

まずはその術式を見極める。

意識を両眼に集中させる。私の『六眼』は『彼女』の術式を丸裸にする。

「種は分かった」

術式は『透過』。術式効果は一定の呪力をもつ者の攻撃全てを、自分の体に触れさせず

に通過させるもの。単純だけれど強い。けれど、それは術式を使いこなせばの話。見たところ『彼女』の意思は薄く、この屋敷に侵入した者の首を括ることだけで動くような状態。

ならば、

「私の敵ではないわ」

ーグンツー

一瞬で距離を詰める。すかさず蹴りを放つ。

ースツー

当たらない、のは想定内。本命はこの後の呪力をほぼ帯びない一撃。

ーバキツー

『……………』

無反応なまま『彼女』は吹き飛ぶ。

やっぱりね。術式『透過』は自動では発動しないようで、使う際には発動する必要がある。緩慢な呪霊では呪力を帯びた攻撃と帯びていない攻撃の連撃には対応できない。勿論、まったく呪力がない攻撃は効かないだろうけれど、『透過』が発動しないギリギリの呪力量で攻撃すれば、

ーバキッー

「攻撃は当たるー」

また一気に距離を詰めての攻撃。このまま一気に決めるわ。

当たると同時に、両手に『無限』をもってくる。その両手で『彼女』の首を挟んで、断ち切った。

「ごめんなさいね」

首が飛び、転げる。

そう、それで終わりのはず。普通の呪霊ならば、消えてなくなるはずだった。

『……………』

けれど、『彼女』は立ち上がった。

「つ……完全に被えたはず」

『六眼』にもあの一瞬で呪力は消えていた。なのに、こうして私の前で『彼女』は立ち上がっている。

……つて、なに？

また『彼女』の体に呪力が戻っている？ 何が起こってー

「まったく騒がしいな」

呪霊の『彼女』の後ろから現れたのは、

「お久しぶりね、美澄ちゃん」

「……『五条』」

私を『五条』と呼ぶ白いコートを着た少女。最後にあつた時から雰囲気は変わっている。

より深い黒の呪力。

なるほど。私が戦った呪霊の『女性』から感じる呪力は、美澄ちゃんと同じもの。今までの美澄ちゃんの呪力が変容しているせいでその存在に気付かなかつた、というわけね。

「何しに来たの」

「観光、といつても信じてはくれないでしょ？」

「……………」

「……………あなたに会いに来たのよ」

そう告げると、美澄ちゃんは『彼女』を下がらせた。そして、私へ向けて言う。

第47話 黄泉孵り一壺

ボロボロの外観とは違い、その部屋は綺麗だった。勿論、壁や床は古いままだけれど、寝具や簡単な収納に関してはそれなりに新しいもので、彼女がここで生活をしていることを感じる事ができる。

人間らしい生活はしているみたいね。

「あの子は元々呪術師だったから」

唐突に、キッチンスペースから声がする。美澄ちゃんは私が戦ったあの呪霊の『女性』について、キッチンで作業をしながらそう語った。言われてみればそうだ。彼女の術式『輪廻復原』は術師を対象とする術式だったはずで、呪霊を操るということはできなかつた。それに、気になることはまだある。

「いつから死んでいる人間も骸人形にできるようになったのかしら」

「ノーコメント」

「じゃあ、貴女の呪力……それはなに？」

「それもノーコメント」

私の問いに答えるつもりはないみたい。ノーコメントとだけ返して、彼女は私の前に簡素なカップに注いだ紅茶を置いた。

「ねえ、美澄ちゃん。覚えているかしら、前に私が貴女に伝えたこと」

美澄ちゃんは表情を変えずに、私の対面へ座り、紅茶をすすつてからその問いに答える。

「ユキの味方で私の敵、だっけ」

「ええ………もしかしてこれ、毒でも入ってる？」

「まあね」

冗談めかして聞くと、美澄ちゃんは興味なさげにそう返す。
素っ気ないわね。少し笑ってから用意してくれた紅茶に口をつける。

「あんたが私の敵なのは……まあ、別にどうでもいい。万が一殺されかけても、特に何も思わない」

「ずいぶんとドライじゃない」

自分の命には何の興味もないのが感じ取れる。ドライというよりも熱がないといった方が正しいかもしれないわ。

そんな彼女だったけれど、不意にそれを肌で感じた。

「ただし、ユキを救う邪魔をするならー」

殺意。それは脅しの類いではなく本物。

邪魔するものがなんであろうと全てを薙ぎ払い進むという覚悟が、彼女の瞳から見取れる。

あくまでも全ては雪のためってことね。

「雪を助ける。そのことに対して邪魔をする気はないわ」

「……そう」

それなら構わない。

美澄ちゃんは静かにそう呟く。感情のコントロールが完璧にできているようで、さつき放った殺気は陰を潜めていた。

「で、結局は何の用？」

閑話休題。

本題に入りましょう。

「貴女に共闘を申し込もうと思っただけね」

草木美澄は私の敵。天蓋が願った平和な世界を破壊する可能性を秘めた呪術師。

けれど、彼女の立ち位置的には、雪が死ななければ堕ちることはない。私は考えてい

る。ならば、彼女を利用する。天蓋がその可能性を見出だした『輪廻復原』をもつ彼女を利用して、『墮雪』を祓除して雪を救い出す。

そのための共闘。

「貴女の『輪廻復原』は確かに強いと思う。けど、決して完璧な術式ではない。それは私の『予知』と『無下限呪術』もそう」

『輪廻復原』は骸人形に限りがある。恐らくこの7ヶ月で数は増やしたのでしようけれど、それでもたかが知れている。

私の『無下限呪術』も不完全で、『六眼』を以てしても呪力消費が激しく長時間の術式行使はできない。

「だから、お互いがお互いを補うように戦いましょう」

「……………」

「それに草木福濁の術式『二元解離』、あれがなければ雪を『墮雪』と分離させることができない。貴女がもっているんでしよう？」

「何を根拠に」

「貴女が福濁にやられずに『生きています』のがその証拠よ」

『墮雪』が廃教会で完全顕現したあの時、草木福濁は『墮雪』によって瀕死に追い込まれてはいた。それでも私が介入し、『墮雪』が去った時点で、彼は生きていた。いつの間にかその場から消えてはいたけれど。

とにかく彼が生きていたなら、美澄ちゃんの体を奪おうとしたはず。それにも関わらず、美澄ちゃんが今ここに生きているのなら、つまりはそういうことなんでしょうね。

「……そこまで分かっているんだ」

大きなため息を吐いてから、彼女は頷いた。

「雪を助けるために手を組む。それだけだから」

「ええ、よろしく」

そうして交渉は成立。私と美澄ちゃんは手を組むことになった。

雪と『墮雪』の分離。

当面はそれに注力するとしましよう。

————呪術高専内————

「出る、草木咲人」

秘匿死刑となるはずの彼の元へ、その女はやってきた。

つり目の金の長髪。日本人ではまずあり得ない澄んだ碧眼。咲人を見下すような眼差しで、腕を組み仁王立ちするその姿からは彼女の気の強さを垣間見ることができた。

「……最期の案内人がこんな美人とは、日頃の行いがよかつたみてえだな」

「長期間拘束された状態でそんな軽口を叩けるとは。大したものだ」

「俺は草木咲人だぜ。美人の前では格好もつけるさ」

格好をつけるとは言うが、言葉だけで体はだらしなく座ったまま。咲人の体は限界であつた。約1年、封印用の鎖と呪符以外ない部屋で拘束されていたのだ。筋力も体力も気力もほぼ尽きかけている。

「それで？ やつと死刑執行かよ」

強がってはいたが、正直助かったと思っっている自分がいることに咲人自身とつくに気付いていた。

早く殺してくれ。

拘束されてからどれだけの時間が経過したのかも分からないその空間では、死刑の時を待ち焦がれてしまうのも無理はない。それほどに何も無いことは苦痛だったのだ。

だから、その女が発したその一言は、彼にとってまさに青天の霹靂であった。

「釈放だ。無駄口を叩かず早く出ろ」

「……………あ？」

……………

シャワーを浴び、身を清めた後、咲人はその場所に通された。真つ暗な中に何枚かの白布が浮かんでいるその空間は、拘束される前に何度か訪れたことのある場所……呪術

総監部のお偉方がいる忌々しい空間であつた。

「なんの風の吹き回しだ、ああ？」

呪詛師を逃がした等という濡れ衣を着せられ、1年も経過していたのだから、啖人がキレるのも無理はない。この場で白布の向こう側の奴らを皆殺しにしてしまおうかという激情にも駆られかけるが、どうにか抑えてそれを訊ねる。

一度秘匿死刑が決まったのだ。それが覆るなど余程のことが起きない限りあり得ない。

つまり、

「その余程のことが起こっておるのだ」

白布のひとつがそう答える。それを受けて、他の布も口を開く。

「8ヶ月前、東坊城天蓋が死んだ」

「そして、お前の妹も失踪した」

「草木福濁の動向も掴めておらん」

「その上、『墮雪』も陰を潜めておる」

「さらに最近は更に呪霊の動きが活発になつとる」

口々に白布は現状を話していく。それで咲人は理解した。

つまり、手が足りないのだ。ただでさえ呪術師は少ないというのに、それに対して懸念する事案が多すぎる。ならば、ということなんだろう。

「俺に何をしろと?」

「その者と共に任務に就け」

その者というのは、先ほど咲人を迎えに来た女性のことを指しているのはすぐに分かった。

「なるほど。佐木が死んで次はこの女が総監部直属の呪術師って訳か」

「そういうことだ。詳しい話はその者に聞け」

「はいはい」

「いいか、くれぐれも妙な気は起こすなよ」

「この子に手を出すなってことか？ それは保証しかねるぜ、こんな美人を前に手を出さねえのは逆に失礼だろうよ」

冗談半分にそう返す咲人に苛立ったようで、白布のひとつが怒鳴り声をあげた。

「逃げようと思うなということだ！ お前の秘匿死刑は撤回しておらんのだからな！」

怒号を背中に受けながら、咲人はその忌々しい空間を後にした。

—————

第48話 黄泉躰り一式一

「名前、教えてくれよ」

高専の敷地内にあるベンチに座り、咲人はそう訊ねた。総監部から命じられた任務に同行するという目の前の女性は、言わば監視役。そんな彼女に対しても口説くつもりでいるのが、彼女自身にも伝わったのだろう。彼女は嫌悪感を露にする。

「いや、そんな顔すんなよ。せつかくの美人が台無しだぜ」

「……誰のせいだと」

そんなやり取りを交わしながらも、咲人はそれを切り出した。

「圭ちゃんと優くんは無事か」

さつきまでと全く違う雰囲気、彼女は一瞬たじろぐが、平静を装い答える。

「無事だ。どこにいるか私は知らんが、呪霊が少なく弱いどこかの田舎に疎開していったとは聞いている」

「そうか。ならまあ……いいか」

親友から託されたものが無事と分かり、ひとまず安堵のため息を吐く咲人。それは拘束されている間の唯一の懸念事項が解消された咲人の心境をよく表していた。

「……安心するのは早い。我々には任務が課せられている」

「俺の心中も察してくれよ」

「貴様の無駄話に付き合っただけでは話が先に進まん。私は無駄口と頭の悪い人間が嫌いだ」

彼女の言葉に肩をすくめながらも、咲人は話を進めることにした。

「で、任務つてのはなんだ？」

「大きく分けて3つ。1つは貴様の妹を搜索し、連行すること。場合によつては抹消だが。これは分かるな？」

「ああ」

人手が足りないのは、自身を解放したからも明白であり、使えるのならば使いたいのだろう。

だから、連行。そして、

「草木福濁がもう入っている可能性もあるからな、仕方ねえ」

「……思ったより物分かりがいいな」

「まあ、事の重大さは分かつてるつもりだ」

その可能性が捨てきれない以上は抹消も視野に入れるべきだ。そもそも咲人にとつて、彼女は草木邸襲撃の時に死んだ人間。生きているかもしれないというだけまだ救いはある。だから、最悪の時は自らの手で……。美澄の失踪と福濁の存在を総監部から聞いた時点で、咲人はそれを覚悟していた。

「2つ目は『予知』の術式をもつ呪詛師を拘束することだ」

『予知』……なるほど」

先ほど総監部から伝えられた東坊城天蓋の死。

彼女の術式を失くしたのは総監部としても痛いのだろう。だから、それに変わる人間を必要としている。その人物についても、予想はついていた。

「呪詛師『五条』だっけか。いや、天蓋ちゃんの姉っていった方がいいか」

「……知っていたのか」

「まあな」

拘束される前の最後の任務で、出頭してきた呪詛師が任務に加わっていたことを思い出していた。外見こそ違うタイプだったが、その中の1人が天蓋と瓜二つであることで、咲人はその仮説を立てた。目の前の彼女の反応で、予想が当たっていることを悟る。

「本名は東坊城水仙。東坊城天蓋の実の姉だ。元々、身内を惨殺したことで呪詛師と認

定されている」

「惨殺、ね。そうは見えなかったが」

「外見では人間の内面の判断などできん。どちらにしろ危険な人物であることに変わりはない」

「その水仙ちゃんも『予知』をもっている。だから、総監部は欲しがっている。そういうこつたな」

仏頂面のまま、彼女は頷いた。

「五条家の令嬢が懐妊し、12月に男児が生まれる。そう聞いている」

「なるほど。天蓋ちゃんが『予知』したっていう未来に確実に向かっているわけか」

「総監部の方々は危惧している。このままではその未来に……『墮雪』が五条悟を殺し、呪術界を崩壊させる未来に繋がるのではないかと」

「はっ、自分らで処刑しておいて、術式が必要になったら代わりを探しましょうってか」

相変わらず反吐が出る連中だ。

例の任務の前に話した東坊城天蓋という人間は善性であると咲人は感じていた。呪

術界の未来のために自らの術式を行使する人間。それはどこか家や家族のために粉骨碎身していた咲人の親友に重なる部分があつて。

だからこそ、咲人はそう毒づいた。

ただ、彼女は黙つてはいない。総監部への批判と彼の誤解を正すため、口を開く。

「……口を慎め。そもそも東坊城天蓋は処刑されたのではない」

「あ？」

「彼女は殺された。拘束部屋の中で、右眼をくり貫かれていた」

「右眼……狙いは『六眼』か」

「だろうな。そして、残された呪力の残穢から彼女を殺したのは、恐らく彼女の姉、東坊城水仙だ」

そこで先ほどの話が咲人の中で結び付く。身内を惨殺した呪詛師。そいつが今度は実の妹を殺した、と。

「そいつはとんだ危険人物だな」

咲人が納得したのを見て、彼女は東坊城水仙についての話を区切り、最後の目的について話し出す。

「最後は言わずもがな」

『『墮雪』の祓除、だろ』

それに関しては、もう散々言われてきたことだ。雪ちゃんの中に潜み、完全顕現を果たしたという『墮雪』。

咲人自身も目の前の彼女も、水仙や美澄もそのための道具。要はそのための任務だ。拾った命だ。その任務を全うしてから、これからのことを考えるとしようか。そんな風に咲人は心の整理をした。

「貴様の妹の搜索は補助監督を中心に行っている。我々の当面の目標は東坊城水仙の拘束だ。何か疑問はあるか」

「……そうだな」

少し考える。正直、聞きたいことは山ほどあったが、

「やっぱりよ、名前を教えてください」

咲人は再度問う。

答える必要はない。彼女はそう返したが、咲人に任務をする上で支障が出ると言われてしまい、結局一瞬躊躇いながらも答えた。

「……………桔梗」

「可愛い名前じゃねえか」

——バキツ——

ニヤつと笑う咲人を問答無用で殴り、吹き飛ばす桔梗。
だから言いたくなかったのだ。

そう言いながら、桔梗はその場を後にした。

————————

第49話 黄泉髑り一参一

————咲人視点————

補助監督による搜索の成果もあり、草木美澄らしき人物がとあるド田舎の廃屋に住んでいることが分かった。さらに、俺と桔梗ちゃんの調査を進めるうちに、水仙ちゃんもそこに入りしていることが判明した。

「2人一緒とは好都合なこったな」

愚妹たちが拠点にしているであろうその建物に俺たちは来ていた。

「油断するな」

「ああ、分かっているよ、桔梗ちゃん」

「っ、名前でッ!!」

怒る桔梗ちゃんを適当にあしらい、俺は再度その建物と対峙した。廃屋と聞いたときにはボロ小屋をイメージしていたが、目の前のそれは予想に反してずいぶんと立派なお屋敷だった。使われなくなつて長いのか外観こそ悪いが、それでも相当なものだ。

「で、ここに本当にいるのかよ？」

「十中八九、ここにいます」

「確かにそれなりの呪力は感じるが、ありやあここに住み着いてるっていう呪霊のものだろ？ 肝心の愚妹様の呪力は感じねえな」

「……貴様の妹なのだ。結界も使えるのだろうか？ その手の結界もあると聞く。ならば、呪力を感じなくても不思議ではない」

なるほど。それもそうか。

つうか、俺の手の内は明かしてないはずだったんだが、総監部伝いで知られちゃつてるのな。

ともかく入るぞ。

監視役様のその一言で、俺はボロ屋敷へ足を進めた。

「……………屋敷内……………」

結論から言うと、屋敷の中には呪霊がいた。しかも、わんさかだ。だが、俺らにとつてはただの雑魚。物の数分で片がつく。それに収穫もあつた。

「桔梗ちゃんは拳銃を使うんだな」

「……………なにか文句でもあるのか」

「いんや、ただ総監部側の呪術師にしては、ずいぶんと近代的なものを使うんだと思って言ってみただけ、他意はないぜ」

共闘する上で互いの手札を理解しておくことは重要なことだ。だから、指摘したんだが。

「……………」

明らかに不機嫌だ。どうやらその話題は地雷だったようで、桔梗ちゃんの機嫌を損ねてしまった。仏頂面で美人が台無しだ。

……俺としたことが。

「悪かったよ」

彼女の言動から総監部への深い忠誠心みたいなものを感じ取ってはいた。そんな彼女にとって、自分の戦い方はあまり好ましいものではないのだろうか。

頭を下げると、桔梗ちゃんはそもそも気にしていない、とだけ返してくる。まあ、あからさまに気にしているんだろうが、とりあえずはその言葉を飲むことにするか。

「……ともかく進む。警戒を怠るなよ」

「了解」

……

屋敷を100mほど進んだところに、大きな扉が見えた。ここに来る前に見た屋敷の見取り図によると、この扉の向こうは広間のはずだ。

広い空間。しかも、遮蔽物がない場所だと、俺と桔梗ちゃんだと若干戦いにくい。そ

れに、

「相手は妹様かどうかも分からんしな」

中身が草木福濁だとしたら厄介だ。俺は奴に一度敗れてもいる。

「もし草木福濁が相手だとしたら、俺は完全に奴にかかりきりになる。水仙ちゃんの方は——」

役割を確認しようとして、言葉を飲み込んだ。扉の中、広間から壁越しでも伝わるほどの殺気を感じたからだ。

言葉を発さないが、桔梗ちゃんと意思の疎通は取れた。このまま、突入する。彼女が指でそう指示するのを見て、俺はその扉を蹴破った。

「……………はあ、こころも嗅ぎ付けられると自信がなくなるんだけど」

俺と桔梗ちゃんを迎えたのは、我が妹・草木美澄だった。

彼女は広間の中央に陣取る大きな机の上に座っていた。

「……お前は、どつちだ？」

「あ？」

俺に見せる不機嫌な表情は確かに妹様のもの。だが、呪力が違う。今までのあいつのものでは決してない。

「草木美澄以外、誰に見えるわけ？」

「……福濁はどうしたよ？」

「ああ……そういうことね。あいつは私が殺した」

俺の様子に得心がいったようで、妹様は即答する。自分が殺した、と。嘘を吐いてい
るような気配はない。

「……これは信じてもいいか？」

「まあ、咲人が疑う気持ちも分からないではないけど、事実は事実。私の体を奪おうとし

たあの呪詛師はいないから」

信じるも信じないもそっちで勝手にして。

妹様はそう言って、俺たちから視線を外し、座っている机を飾る装飾に指を這わせている。

と、そこで俺の後ろにいた桔梗ちゃんが一步前に進み出た。

「初にお目にかかる。草木美澄、だな」

「……………だれ？」

また女を誑かしたのか、という俺への視線は無視して、桔梗ちゃんは話を進める。

「私は桔梗。呪術総監部直属の呪術師だ」

「……………」

「今日はお前に話があつてここに来た。私達と一緒に来てもらいたい」

「……………」

「それからここにいますであろう呪詛師・東坊城水仙もだ」

「水仙……?」

「とぼけるな。東坊城天蓋の姉で、『五条』と名乗っていた呪詛師の女だ」

「……ああ、あいつか」

そう言うと、妹は机から降りて自分の後ろにある扉を指差した。そっちにいる、ということなんだろう。

「勝手につれてけば」

水仙ちゃんにしても、福濁のことにしても、本当に興味がないんだろう。俺はそれを
感じ取っていた。

対面してはつきりと感じる殺意と呪力に反して、妹様の言葉に感情と呼べるものが見
当たらない。

……いや、違うか。恐らくだが、こいつは今までと変わっていない。こいつの執着の
対象はたった1人。

「なあ、妹よ。お前、雪ちゃんの居場所を知りたくはねえか？」

「！」

目の色が変わった。

まあ、そうだよな。お前はそういう奴だ。

「……ユキの居場所、知ってるのか」

「いんや、知らねえよ」

「っ、ふざけてるのか……殺すぞ……」

「まあ、落ち着けよ、妹。お前同様に俺らも雪ちゃんを探しているんだ。いずれ見つかる。だから、俺達と一緒に来いよ、って話だ」

言い方は悪いが、雪ちゃんを餌にすれば、妹様は必ず乗ってくる。そう考えての発言だった。

「分かった」

だから、妹が頷いた時に俺は少し安心しちまったんだ。そうして、俺は手を差し出し

た。友好の証としての握手をしようとして。

——グラッ——

「は………？」

俺は意識を失った。

——————————

第50話 黄泉廻り一肆一

覚醒したのは、薄暗い場所。

目が慣れるまではそこが牢の中だとは分からなかった。

幸いなことに手足は縛られてはおらず、簡単だが生活できる設備もあるようだった。だが、明かりもなく、窓もないから昼なのか夜なのか分からないような状況で、それに加えて、

「呪力も練れねえな」

この感覚……恐らく『封呪結界』だな。古い文献にあった呪力を完全に絶つ結界で、福濁も使つてやがったあの結界だろう。

状況的に使っているのは、我が妹様。それまで会得してるつて訳か。

「前までのあいつとはまるで別人だ」

「どうやってここまで……?」

「あいつの変貌ぶりへ思考が深まっていく前に、声が聞こえた。」

「草木咲人……」

「この声は……。」

「桔梗ちゃんか!?!」

「……あ、あ」

辛うじて聞こえるくらいの音量。強気な彼女らしくない弱々しい声だ。自分の声の反響具合を聞くに、壁が厚いからというわけではないだろう。だとすると、

「なにか、されたのか?」

「目を……抉られた……」

「!？」

息も絶え絶えで桔梗ちゃんはそう言う。

目を抉る？

それには聞き覚えがあつた。というか、桔梗ちゃんから聞いた話だ。

「東坊城水仙か？」

確か、天蓋ちゃんの『六眼』を抉り、殺したのも彼女・東坊城水仙という話だった。そういう術式なのかもしれない。

だが、俺の予想を桔梗ちゃんのか細い声は否定する。彼女の目を生きたまま抉った相手は、

「草木美澄……貴様の、妹……だ」

「……は？」

思わず聞き返す。

いや、いやいやいや。ちよつと待て。

「冗談だろ？」

「この状況で……冗談、など言うものか……」

「いや、確かにあいつは雪ちゃん以外には興味のねえ変な奴ではあるぜ。だが、それで他の人間を傷つけるようなことは……」

……………違う。

いや、あり得ねえだろ。あいつがそんなことをするなんて、あり得ねえはずだ。やっぱりあいつの体の中に草木福濁が入っているとしか考えられない。

「使うのは……結界術と呪力を廻す術。そう、いったな」

「……ああ、そのはずだ」

「結界は、ともかく……『あれ』は別物だ……」

『あれ』？ 別物？ 一体なんの話だ？

そう訊ねるが、突然答えが返ってこなくなる。

「おい、桔梗ちゃん！ 桔梗ちゃん、大丈夫か!?」

返事はない。

……くそつ、何がどうなつてやがる。

桔梗ちゃんは生きてるのか。妹は何をしようとしているのか。そもそもあの妹は本当に本人なのか。

今の俺には分からないが多すぎた。

————時間前————

「……………つ」

不意に目を覚ました。不覚にも、気を失っていたようだ。辺りは暗く、視界は悪いが、自分の体が拘束されていることは、手首と足首を冷たく締め付ける拘束具の感触で理解した。

「目、覚めた？」

「つ、その声は……草木美澄ッ！」

姿は見えないままだが、声でそれを判断する。

「私に何をしたッ！」

「そっか、覚えてないんだ。まあ、多少は荒っぽいことしたから仕方ないか」

少しずつ目が慣れ、草木美澄の姿が見えてきた。

私から離れたところに、彼女は立っている。その手には、見慣れない道具があった。それが何かは分からない。だが、いい状況ではないことだけは分かる。

「……尋問、というわけか」

「あたり。ついていったら何をされるか分かったもんじやないし、そもそも総監部の人間なんて信用できない」

「目的なら話す。だから、この拘束具を解け」

「……………」

「だが、お前の目的はなんだ。なぜこんなことをしたのか話してもらおう」
「……………」

彼女は無言のまま、私に近づいてくる。そして、私の左手首の拘束具を持ち、手にしていた工具で――

ーブヂッー

「ひギッ!？」

左中指に強烈な痛みが走る。爪を剥がされると遅れて理解した。
絶叫。

「っ、あああがああアアっ!?!？」

「……………」

強烈な痛みは収まらない。私は声をあげて叫び続ける。

…………どのくらいが経っただろうか。

私の声が収まるのを待っていた草木美澄は語り始める。

「質問をするのは私。立場を弁えなよ」

「……っ」

「あとは嘘はつかないでね。面倒だからさ」

「わ、わかった……」

痛みに耐えながらどうにか頷く。

じゃあ、始めようか。

彼女はそう言っ、私の前に立った。

「なんでここに来たの？」

「……っ、草木美澄、東坊城水仙の連行のため、だ」

「それはなぜ？」

「『墮雪』の所在が分からない。『予知』の術式をもつ東坊城天蓋が死んだ。それに対応できる呪術師が圧倒的に少ない」

「……なるほど。だから、私たちを利用してようって魂胆か」

「あ、ああ」

私の答えを聞いて、草木美澄は腕を組み、考えを巡らせているようだった。その隙に、現状を確認する。呪力は練れない。恐らく彼女の使う結界のせいだ。拘束具も腕の力だけでは破壊できないだろう。

自力での脱出は不可能。こうなれば、できることはひとつだけ。彼女の質問に答えろしかあるまい。

勿論、こちらのもつ情報をそのまま渡すわけではない。総監部の不都合になる情報やこちらが不利になる情報は徹底して伏せ、協力を取り付ける。

これが今の私にできる最善手だ。

剥がされた爪の肉が常に空気に触れ、痛みは引かない。

けれど、思考を止めるな。最適解を選び続ける。

「そつちの戦力は2人だけ？」

「ああ」

「ユキの居場所は分からない、というのには真実」

「事実だ。補助監督も動いているが、未だに『墮雪』の呪力の痕跡も見つかっていない」

「……………ユキだよ」

「つ、失礼した。現在、花房雪の所在は不明だ」

迂闊だった。彼女にとって、その一言は地雷なのだろう。その眼光からは明確な殺意を感じた。

ここで私が殺されれば、それこそ呪術総監部からの任務を遂行する術師がいなくなる。慎重に、慎重に答えなくては。

「総監部はユキを見つけて、どうするつもり？」

早速だ。『墮雪』の器に関する質問。

話しているに、草木美澄の目的は花房雪の救済だ。それは総監部の意向と相対するもの。それをそのまま伝えれば、恐らく彼女の逆鱗に触れることになる。

ならば、ここは、

「総監部は『墮雪』と花房雪を分離する方向で策を講じようとしている。彼女を見つけ、連行することさえできれば、『墮雪』のみを祓除することも可能だ」

「……そう」

「そのための戦力が足りていない。それが現状ではあるが」

これは勿論嘘。

こちらと彼女の目的が同じであると錯覚させるためのブラフ。万一、この拘束具に嘘発見器がついていたとしても、訓練を受けている私ならば誤魔化し通せるはず。

「その策はどんなもの？」

「それは私の術式を起点とする策だ」

「どんな術式？」

「媒介とした物体の半径1m以内の術式及び呪力の強制封印。これで『墮雪』を封印し、その後分離させる」

今語った話の半分は真実。術式の発動条件に関しては嘘はない。それを明かすことに大きなデメリットはないから、そこは偽らない。

ただし、後半の術式効果は真つ赤な嘘である。封印などできない。できるのはせいぜい術式効果を乱すこと。呪力が封印されても発動できる強みがある一方で、銃を媒介に

しなくては発動できない使い勝手の悪い代物。

そんなものが『墮雪』攻略の糸口になるはずもない。

「私の術式があれば、彼女を救うことができる。信じてくれ」

「……………」

嘘だ。

私の……いや、呪術総監部の目的は、花房雪もろとも『墮雪』を排除することなのだから。

私の言葉を受けて、彼女はまた考え込む。

……押しきれるか？

「わかった」

彼女は答えた。わかった、と。

それはつまり私はこの賭けに勝ったということだ――

『オヤドスアへろス』

突然聞こえた声。そして、気配。

今までは間違いなくいなかったはずの『女』は、拘束されている私を至近距離から血走った目で睨み付けていた。そして、流れるように私の首を絞める。ギリギリと。

「か、っ……あ……」

息ができない。この『女』が一体なんなのか考える余裕があるわけもない私は、口をパクパクと開けて必死に空気を吸おうとする。

そんな私に対して、草木美澄は告げる。

「やっぱり嘘だったね」

彼女は既に私の吐いた嘘を看破していた。『女』を止めず、続ける。

「嘘なのは……術式。それから、総監部の目的か」

「どうせ総監部の愚か者共は、ユキを『墮雪』もろとも殺すつもりなんだろ。呪術高専時代の私にもそれを持ちかけたくらいだ。その方針はそうそう変わらないでしょ」

「あとは術式の方の嘘だけど……まあー」

意識を手放す直前で、『女』は私の首から手を離した。

酸素を取り戻し、必死に呼吸する私に草木美澄の手が迫る。いや、正確に言うとな私の『目』に迫っていて。

「奪ってみれば分かるよね」

ーブヂユツツー

ー

第51話 黄泉廻り一伍一

—————屋敷内 地下牢—————

「それが……私と草木美澄のやりとりの、すべてだ」
「……………マジかよ」

桔梗ちゃんが意識を取り戻してからの10分間。

壁越しに話されたその事実は衝撃的なものだった。

妹……美澄のあまりの変貌に言葉を禁じ得ない。だから、もしかして幻覚の類いじゃないかとも聞いたんだが……。

「現に……左中指の爪は剥がれ、右側の視界も失っている……これが幻覚ならば、そう、あつて……ほしいものだ」

壁越しには見えない。だが、痛みを押し殺したように、時々詰まる声を聞いていると、

それが事実であることを嫌が応にも思い知らされる。

「草木美澄は狂っている」

「……そう、みてえだな」

生意気で、雪ちゃんだけが生き甲斐みたいなバカな妹だった。俺が雪ちゃんにちよっかいをかけようとすると、跳び蹴りを喰らわせてくる。その程度の狂暴さはあったが、それでも狂気には堕ちていなかったはずだ。

だが、桔梗ちゃんの話聞いてしまった今、あいつがもうおかしくなっちゃまっていることが分かってしまう。

「呪詛師として彼女を連行……もし抵抗するようならば、我々が殺すべきだ」
「……………」

理屈は分かる。あいつが嫌っているであろう総監部の人間が相手だとしても、やりすぎだ。越えてはならない一線を越えている。

「……仕方ねえか」

現状、俺たちはここから出る手段がない。だが、その時が来たならば、俺は――

――

「――きて、起きて」

「っ」

体を揺すられ、さらに大声で声をかけられたせいで、無理矢理目が覚めた。目の前にいたのは、いつか見た顔。

「東坊城、水仙」

いつか見たときとは違い、両眼とも空色の『六眼』になっているはずだった。しかし、今の彼女には『左眼』がなく、固く瞑られた左目から流血もしている。明らかに異常事態だ。

「……まさかこんな牢屋に目覚ましサービスが来るとは思わなかったぜ」

「不満だったかしら？」

「いや、最高だね」

そんなやりとりを交わす。さて、彼女をこのまま口説き落とすのも一興ではあるが、今はやめておこう。

「その左目は……あいつにやられたのか」

「ええ、隣の牢で眠っているあの女の子の『眼』を奪った途端に、私の『六眼』も奪われたの」

幸いなことに、奪われたのは私の左目。あの娘の右側を盗られなかっただけマシかもしれないわね。

皮肉混じりに笑う水仙ちゃん。それが強がりであることは、流石の俺でもわかった。

「急いで。ここから脱出するわ」

「ああ」

隣の牢にいた意識のない桔梗ちゃんを抱え、俺と水仙ちゃんはその地下牢から脱出した。

「……屋敷内 隠し部屋……」

「これで……とりあえずはいいか」

屋敷内で唯一結界が張られていない場所を探し出して、そこで2人に結界を施した俺は、ひとつ息を吐いた。

「……結界術にこんな使い方があったとはね」

『転移結界』を応用したもの。本来、欠損している眼球に繋がる血管同士を極小の『転移結界』で繋ぎ、その結界に血液の循環を担わせる。

あの日……親友が死んだあの時から組み上げ続けた成果がこんなところで日の目を

見るとは思わなかったな。

「とりあえずの処置だ。早いところ反転術式が使える術師に治療してもらった方がいい」

「それでも私とこの娘は命拾いしたわ。貴方のおかげね」

「……まあ、そう思うなら、あとで俺と遊んでもらおうかね」

「ええ、喜んで。勿論、ここから生きて帰れたら、だけれど」

「安心しな。死んでもここから出るからよ」

「あら、心強い」

本当ならばすぐにでもここから出るべきだろう。あの愚妹に呪力を感じられるのも時間の問題だろうからな。だが、まずは起こっていることを把握しなくちゃならねえ。そのために、水仙ちゃんには洗いざらい話してもらわねえと。

「何から話しましょうか」

俺に促されるでもなく、口を開く水仙ちゃん。話が早くて助かる。

……そうだな。まずは、

「君は誰の味方だ？」

それを訊ねる。あいつと一緒の場所に潜伏し、実の家族も手にかけている彼女を信頼してもいいものか。女の子なら誰でも信じてやりてえが、この状況では慎重にならざるを得ない。

俺の問いに、彼女はこう答えた。

「正直、目的を果たすためだったら、誰の味方にもなるわ。呪術総監部にでも、草木美澄にでも、もちろん貴方たちでも」

「……信用できねえ回答だ」

「ええ、そうね。でも、ひとつだけハッキリしていることがある」

「私は……天蓋の味方」

それは彼女自身がかけたはずの女性の名前で。その名を告げた彼女の瞳はその

色以上に綺麗に見えた。

「意味が分からねえ」

「そうでしょうね。ただ、私はあの娘が望んだ平和な世界を……自分の生涯をかけてでも叶えようとした世界を作るだけ」

「……………」

嘘は言っていないだろう。手段はどうあれ、目的は亡き天蓋ちゃんと同じ。ということとは、きつと……。

「今は味方、そう信じとくか」

「ええ」

呉越同舟。今は共闘すべきなんだろう。

さて、彼女を味方とするならば、次に聞くべきことはあのことだ。

「教えてくれ。俺の妹……草木美澄は一体何をしようとしている？」

恐らく雪ちゃんを救おうとしているんだろうということとは分かる。

だが、その経緯が分からない。理解できない。あいつは何の目的で人の眼球を奪っている？

「美澄ちゃんがしようとしているのは、雪と『墮雪』の分離よ」

「雪の魂にまで入り込んでいる『墮雪』を雪の体から追い出し、2度と雪に戻らないように祓おうとしている」

それは予想通りではある。あいつの雪ちゃんへの執着は俺も知っているところではあったから。

「そのことと人様の眼球集め……どう繋がるってんだ？」

「彼女の術式、知ってる？」

「……呪力を廻すだけの術式だ。あとは結界術が使えるのは見ての通りだが」

「それね、間違っているのよ」

それ？

どれを指してそう言ってるんだ？

「彼女の術式はそんなに単純なものじゃないの。隠し通せていたようだけれど、『六眼』の前では隠し通せない。私はそれを突いたから、彼女に一瞬でも取り入れることができた」

「……じゃあ、あいつの術式は一体なんなんだ」

「術式の名は『輪廻復原』」

『輪廻復原』？

聞いたこともない。

「無理もないわ。あれは呪術の中でも異質だから」

どんなものなのか、俺がそう訊ねると彼女は答える。

「簡単に言えば、他人の術式を行使できる術式よ」

「!! ……………詳しく、話してくれ」

「正確に言えば、生きている術師から体の一部を奪い、彼女の手で破壊することで、その術師の術式を継承した骸人形を作り出す。勿論、その人形は彼女の思いのままに動く。そんな代物よ」

…………なるほどな。

だから、桔梗ちゃん然り水仙ちゃん然り、その眼球を奪い取ったって訳か。それはなんと悪趣味で、おぞましい術式だ。

「彼女は恐らく草木福濁の術式も有しているわ」

「そういや、あの野郎は美澄の肉体を奪い取るのが目的だった……そうか、その術式が雪ちゃんと『墮雪』を分離するための鍵」

「ええ。それに加えて、相当の数の骸人形を用意してあるはずよ」

「特級レベルを抑えるには、そりゃまあ、相応の備えはしてあるだろうな」

術式を知ったことで、なんとなくあいつがやろうとしてるこの全容が読めてきた。

「あいつはー」

「やっと見つけた」

突然の声。それは勿論、あいつのものだった。

「よお、妹」

「咲人に総監部の犬……『五条』裏切ったんだ」

そう言って、美澄は水仙ちゃんを温度のない眼差しで見ていた。

「最初に乱暴したのはそっちでしょう？ 裏切ったのは、貴女の方よ」
「……まあ、そうだね。なら、仕方ないか」

ため息を吐く美澄。それを見て、俺は口を開く。

「おい、妹様よ」

「……………なに？」

「お前、何人殺した？」

「……………さあ」

人の命を奪う。本来、忌むべきその行為ですらも心底どうでもいい。そんな感情を、無関心をあいつから感じ取った。

……………ああ、そうか。

お前は本当に、もうダメなんだな。取り返しのつかないところまで来ちまったんだ。いや、もしかしたら元々こいつはそうだったのかもしれない。

「俺は別に、人を殺すなどとは言わねえ。目的やら任務のために、手を汚すことなんて呪術師ならざらにあるからな」

「……………」

「だが、命は命だ。人の命を命として見ることができなくなった時点で……………その価値を限り離れた時点で、呪術師は呪詛師になっちまう。外道に成り下がる」

もう手遅れなんだろう。だから、

「草木美澄」

「お前はもう……呪詛師だ。お前は俺が祓う。それが兄としての最後の務めだ」

「私はユキを助けなきやなんだ。その邪魔をするなら——」

「——死んでよ、お兄ちゃん」

—————

第52話 黄泉廻り一陸一

———回想———

俺たちは仲のいい兄妹では決してなかった。

お前が初めて家に来たとき、既に俺はお前が嫌いだった。知らない奴が土足で家の中
に上がり込んでくる感覚が死ぬほど嫌で。だから、お前を嫌った。

きつとお前もそうだったんだろ？ 少しでも歳の離れた知らない奴と急に暮らすこ
とになって、嫌気が差してただろうよ。いつもブスくれた可愛げのねえ顔をしてた。
嫌いだったよ、本当に。

———

『闇より出でて闇より黒くその穢れを禊ぎ被え』

「！」

美澄の呪言に反応するように、俺と美澄を包むように『帳』が下りる。桔梗ちゃんたちと俺たちを分断した形になった。

まあ、好都合ではあるな。

兄妹喧嘩に巻き込むのは申し訳ねえってもんだらう。

『耐呪結界』！

先制攻撃はこちらから。

美澄の周りに瞬時に結界を構築する。勿論、この程度で拘束できるわけがないのは分かっている。これはあくまでも時間稼ぎだ。

『転移結界・多重』

複数の『転移』の同時展開。呪力の消費が激しいのと練るのに多少時間がかかるのが欠点だが、

ーバーリンターー

「ちようど出来上がったところだぜ」

美澄の周囲を覆う『耐呪』が壊れるのと同時に、それらが完成した。

「……『転移』」

「ああ、これでお前は追いつけねえよ！」

自ら結界の中へ飛び込む。『転移』から別の『転移』への高速移動。そして、

「バキッ」

「バキッ」

呪力を込めた蹴りを叩き込む。一撃与えてすぐに移動、また攻撃して移動を繰り返す。あいつに俺の居場所を特定させない。ただし、その分一撃は軽く、決定打にはならない。

「……うっ……とおしい……うっ」

それを分かっているのか、美澄は俺の連撃を耐え続けている。

呪力を込めた一撃を放つ。それが均衡を崩すための一歩目だが、今のこいつはそのきつかけを簡単には見せないだろう。現に、守りに徹しているこいつを崩せる未来を想像できない。

それに、精密な操作を必要とする極小の結界も同時運用してるんだ。正直いって、長期戦は不利。削りきれない。

ならば、そのきつかけを、隙をこちらから作るまでだ。

『解』

ほんの一瞬、すべての結界を解く。同時に、俺の姿が美澄の前に現れる。

その隙を美澄は逃さない。

ー
ー
ブ
ン
ツ
ー
ー

呪力の込もった蹴り。

そうだ、狙いどおりだ。

ーースツーー

それをギリギリで躲す。だが、完全には避けきれなかったようで、美澄の蹴りは俺の側頭部を掠めた。瞬間、血が吹き出る。

「危ねえなッ!!」

そうは言うが、攻撃は止めねえ。美澄の攻撃の勢いを逆に利用したカウンターをこいつの顔面に叩き込む。

ーーブンツーー

殴った感覚はない。避けられるような状況じゃなかった。それでも、俺の拳は空を切ったようだった。

「……あれか？」

俺から少し離れたところに美澄の姿があり、その背後に1人の男がいた。

……いや、よく見ると人ではない。異様なほどに青白い顔と生気を感じられない瞳。なるほど、これが――

「『輪廻復原』か！」

あの人形の術式が何かは分からねえが、恐らくそのタイプの呪術ならば人形自体を破壊してしまえば、術式は使えないはず。

それに思い至った俺は、人形の破壊に回る。

「『転移』!!」

美澄の後ろの人形、その更に背後へ展開した『転移』で人形の元へ飛ぶ。

そして、呪力を込めた手刀で人形の首を跳ねた。念のためにもう一発。人形ごと軌道上にいた美澄を蹴り飛ばす。

吹き飛んだ美澄は『帳』の端へ。鈍い音を立てて、『帳』にぶつかった。

「……………」

衝撃のせいでまだ動けないのか、美澄は『帳』にもたれかかったような格好で動かない。

「……………どうした？ もう終わりーな訳ねえよな」

「……………」

俺がゆっくり近づいても、美澄はぐったりしたまま。

動きばかりを警戒し、慎重になっていたせいだろう。それに気づくのが遅れた。

「っ、違う」

いや、こいつは美澄じゃねえ。見せかけだけの偽者だ。そうなると、美澄はー

「…………『輪廻復原』」

声は俺の真上。見上げると、そこには何も無い場所に、まるで宙に立っているかのよう
うに美澄が浮いていた。

よく見れば、美澄の手から滴るように赤黒いモノ……恐らく血だろう。滴る血液が俺
の前で人の形へ為っていく。やがて、それは俺の見知った人間の姿をした『何か』になっ
ていた。

「…………正、藤」

『……………』

花房正藤。

俺の同い年の幼馴染みの、呪詛師。

2年前に死んだはずのあいつがそこにはいた。

『……………』

「なんの冗談だ？ 正藤はあの時に死んでー」

そこまで言つて気づく。

そういうことか。正藤が自分の術式でやられたような血を抜き取られたその奇妙な死の真相は……。

「正藤の術式も奪つた……あの時、正藤を殺したのはお前か、美澄」

「……………」

「……………本当に悪趣味だよ、お前」

俺の言葉に答えもせず、美澄はゆっくりと地に降りる。

そして、

「殺せ」

『それは動き出す。』

『『流体操術』』

ービュンツー

「!」

正藤擬きの術式が発動すると同時に、こちらへかざした手から針状のものが射出された。躲す。

「なる、ほどなッ! こいつ自身が液体……!」

正藤の『流体操術』は液体や気体を操る術式。人形が美澄の血液でできているなら、自身の形さえ自由に操れるってことだろう。

「っ、たし、かに……こいつは……」

飛ばしてくる血の針を避けながら、辺りを見渡す。打開策を探す。

なにか、なにかねえか……!?

どうにか一瞬の隙を突いて、『耐呪』を自分の周りに展開する。その間にも美澄と正藤擬きが結界に攻撃続けている。時間の問題だ。

……考えろ、考えろ。頭を回せ。

正藤の術式は強力だから正直放つてはおきたいが、あの人形がどれほど増やせるか分からねえ以上は放置できる訳もない。

なら、俺がやるべきは、

ースッー

『耐呪』をこちらのタイミングで解く。

今まで壁を全力で殴っていたからだろう。一瞬、美澄たちの重心が崩れる。

ここしかー

「ーねえよなッ!!」

ーヒタッー

体勢を崩した正藤擬きに触れ、更に美澄にも触れ、『転移』で離れる。

「……? 何をした……?」

「さあな。答えをそのまま教えるんじや面白くねえだろ？　そういうのは自分で解き明かすもんだぜ」

「……………うざい」

距離を詰めてくる美澄。同時に、正藤擬きも寄ってくる。

そして、奴らは呪力を解放する。

そう。

それが狙いだよ。

ーガクツー

「っ、呪力が…………っ」

まるで体から力が抜けたように、急に動きが悪くなる美澄。それに同調して正藤擬きも動きを止めた。

呪力消費を加速度的に増加させ続ける『乗呪結界』。

『領域』対策で作りに出したものだったが、『輪廻復原』も相当に呪力は消費するようだ。

どうにか、成功したみてえだな。

「賭けは俺の勝ちだぜ、妹」

「……………」

片膝を着いた体勢の美澄へ言い放つ。

少し……………おしゃべりをしたい気分ではある。言葉を交わすのも最期だろうしな。だが、

「残念ながら、俺もいっぱいいっぱいなんだ。終わらせるぜ」

「……………」

「……………じゃあな、美澄」

俺は最低限の呪力を帯びた拳で、そのまま美澄の心臓を——

——ビタッ——

「っ!？」

命を摘み取るその寸前で、俺の拳が止まった。

いや、拳だけじゃない。俺の体の動きが完全に止まっていた。視線も満足に動かさねえ。

これは、あいつの『流々翼下』!? 人形は完全に破壊してはいないとはいえ、人形自体にも『乗呪』はかけている。

にもかかわらず、まさか極ノ番すら使えるのかよ……!」

「危ないな……はこつちの台詞。こんな……人の呪力制御を狂わせる結界とか……」

「……………」

目の前の美澄は、ひとつ息を吐いてそう言った。どうやらこの短時間で『乗呪』を解呪したらしい。

随分と余裕、じゃねえか。

そんな言葉を投げてやりてえが、残念ながら俺の口も動かない。正藤の最大火力『流々翼下』をこうも簡単に……。

なるほど、これが『輪廻復原』——人の術式を行使するこいつの本当の術式か。

「……まあ、どうせ動けない——」

「——でしょ」

——バキツ——

思い切り振り抜いた美澄の蹴りは俺の腹に入る。

吐血もできない。まるで時間が止まっているかのように、俺は固まったまま、攻撃を受ける。

一発、二発、三発……よくもまあ、思い切り蹴りやがって。

「……こんなものかな」

美澄の眩きを境に、体が急に動き出す。

「~~~~ツ!?!」

同時に走る激痛。

声をあげる余裕すらなかった。

「……く、そ……っ」

「私を祓うとか、兄としての務めとかさ……この力量差でどうするわけ？」
「っ」

跪いた俺を冷たい眼差しで見下す美澄。

「本当に……お前は……」

「……はあ、もういい。せめて少しくらいは役に立ってよ」

そのまま美澄は手を伸ばしてくる。

弱った俺の目に、手を伸ばしてくる。

「術式順転『蒼』ツ!!」

体が後ろへ引き寄せられる感覚。気づけば美澄は遠くにいる。その代わりに、

「ごめんなさいね。お兄ちゃんとして、格好をつけたかったところでしようけど」

俺の隣には水仙ちゃんがいた。どうやら『帳』を破壊し、強化した『無下限呪術』で俺の体を引き寄せたのだと、少し遅れて理解する。

「……いや、助かった」

「あら、素直ね。格好をつけてくれるのかと期待したのだけど」

「こんなボロボロにやられて今さら格好つけるもなにもないだろうよ」

息をどうにか整える。その度に走る激痛は、折れたあばらが内臓を傷つけているであろうことを物語っていた。『転移』で血液を操作したところで、時間の問題か。

「……どのくらいもちそうっ?」

「安静にしてりやどうにかなるだろうが、まあ、そういうわけにもいかねえよな」

「ええ、残念ながら」

「なら、10分……いや、15分なら動ける」

「十分ね」

そう言って、俺の前に一步出る水仙ちゃん。

その背中を見ていたら、俺は気づけば眩いていた。

「……想像以上の化物になっちまったんだな、あいつは」

あいつの呪術を受けて分かった。分かっちゃまった。

美澄と俺の差を理解してしまった。

だから、ついそんなことを眩いちゃまったんだろ。弱音みてえな、本当に俺らしくもない。

そんな俺に水仙ちゃんは微笑む。

「大丈夫よ。もうー」

——パアアアアアンツ——

「——手は打ったから」

俺と水仙ちゃんの後方から放たれたその『銃弾』は、美澄に命中した。

——————————

「おいおい、化け物かよ」

「……………?」

美澄は当たった場所を手で触れ、首を傾げていた。

なんだ？

あいつの術式の効果じゃねえのか？

その質問に答えたのは、

「あれはただの銃弾ではない」

「桔梗ちゃん！」

「っ、だから名前で呼ぶな……………」

意識を失っていたはずの桔梗ちゃん。彼女はいつの間にか体を起こし、狙撃用の銃を構えていた。美澄の頭を撃ち抜いたのは、彼女のものだったのか。

「くたばり損ないの犬が……………」

美澄は俺たちのはるか後ろにいる桔梗ちゃんを睨み付けていた。すぐに美澄は件の骸人形を桔梗ちゃんの方へ向かわせる。そして、その人形たちが

ービビシャッー

形を失った。見れば、予想外のことだったようで、美澄も目を丸くしている。

「手は打ったと言ったでしょう」

「『五条』……何をした……?」

睨み付けてくるあいつの言葉に水仙ちゃんは笑みを返し、告げた。

「貴女がやったことと同じよ。貴女の術式を乱しただけ。私から『六眼』を奪ったときと同じようにね」

「……犬の術式」

「そう。『乱忌憚』……術式を乱す術式。貴女に撃ち込まれた弾丸は貴女の術式を乱し続け、『輪廻復原』をも封じる」

「ッ、下らないことをッ！」

俺が『帳』に囚われているその時に、水仙ちゃんはそれに思い至ったんだろう。意識を取り戻した桔梗ちゃんとしし合わせ、そのタイミングを待っていた。美澄の『輪廻復原』を封じるタイミングを。

「……………参ったよ、水仙ちゃん」

「ふふっ、それはあの娘に言っておいてあげて」

「ああ、そうさせてもらう」

さて、ここからだ。

『輪廻復原』は封じた。だが、まだ完全ではないらしい。

水仙ちゃん曰く、桔梗ちゃんの術式『乱忌憚』はそれを対象に撃ち込み続けなくてはならない。そのためには、彼女はあの狙撃銃で狙いを定める必要がある。だが、

「今の彼女には右の、スコープを覗いていない方の視界がないの。その意味分かるわよね」

「……………」

「狙いを定めている間、彼女は無防備になる。だから——」

「——あの娘を守ってあげて」

「……………守る」

そもそも俺の結界は、本来攻撃のためのものではなかった。敵を分断する。敵を包囲する。敵を遠ざける。

そのためのものだったんだ。あいつが死ぬまではな。

俺は守りきれなかった。

あいつを守りきれなかった。

そんな俺に、この場面で……………守れるのかよ。

……………。

お前ならばできるだろう？

……………。

私はお前を信じている。ならば、お前はそれに応える。

.....

そうしてきただろう。咲人。

.....ああ、そうだな.....馬鹿野郎。

お前はもう死んでるんだ。感傷的な気分させるんじゃないやねえよ。そのせいで少しだけ、

「任せとけ、水仙ちゃん。桔梗ちゃんには指一本触れさせねえよ」

やる気が出ちゃった。

「頼りにさせてもらうわね」

「ああ、水仙ちゃんも」

「ええ、分かってるわ。私が彼女を止めるから」

改めて戦闘開始といこうじゃねえか。

なあ、妹よ。

「やはり、完璧ではないな。術式というものは」

「……………」

「しかし、こうも簡単に俺の術式が解除されるとは……………相当な術師か、それとも単に相性が悪いだけか」

「……………」

「……………ともかく、これで真実を思い出すわけだ。あの娘も……………俺おまえ自身もなあ」

「さて、それではそろそろお前たちの物語を終幕へと進めるとしようじゃないか」

—————

「あ……………ああ……………」

美澄の様子がおかしい。急に頭を抱えて、這いつくばり出したのだ。

桔梗ちゃんの弾丸を頭に受けてから……もしかしたら、殺傷能力があったのか？

そう思つて、桔梗ちゃんを見ても彼女は首を横に振るだけだった。

じゃあ、何が起こっている？

「水仙ちゃん！ あいつに何か……」

「分からないわ。けれど、好都合よ。拘束するなら今しかないわ」

「つ、ああ」

攻撃してくる様子はない。まだ美澄は躓いているまま。

すぐに距離を詰め、腕を掴み、地面へと押さえつける。その間も抵抗はしてこない。

なんだ？ 何が起きてる？

「……大丈夫？」

「ああ、俺はな」

美澄を拘束する俺に声をかけてきたのは水仙ちゃん。神妙な表情で、俺の方へ視線を向けている。

遅れて、よろよろと桔梗ちゃんもやってきた。

「草木咲人、これはどういうことだ」

「いや、俺が聞きたいくらいなんだが」

「でも、今しかないわね。彼女に何が起こっているのかは分からない。けど、明らかに正気を失っている」

「……ああ」

美澄は呻き声を絶えずあげながら、涎を滴しながら躡いている。

異常だ。

これではまるで廃人じゃねえか。

「咲人くん」

美澄を見下ろす俺の名前を、水仙ちゃんは呼んだ。

ふと目が合う。

なんとなくだが、これから彼女が言おうとしていることが理解できてしまう。

そう、君はそれを言おうとしてるんだろ。

「彼女——草木美澄を殺しましょう」

「ああ」

即答だった。迷いはしなかった。

妹とはいえ、こいつは人を殺しすぎた。

雪ちゃんを救うという目的のためとはいえ、それは私欲だ。私欲で人を殺し、それを何とも思っていないのならば、もうこいつは呪術師ではない。

ただの呪詛師、外道だ。

せめて潔くこの場で、俺の手で。

「……少し離れててくれ」

俺の言葉に、水仙ちゃんは頷き、桔梗ちゃんを支えながら離れていく。

――

彼らの目の前で、草木美澄は死んだ。

これで楽に動けるな。

「うん、ありがとう」

礼などいらん。元々そういう契約――『縛り』だろう。

「それもそっか」

では、これからどうする？

早速動くのでしょうか。それとも少し、あの娘が正気に戻るまで待つか。

「そう、だね……」

なに、時間はある。

「うん。なら、少し待つことにしようかな」

ああ、それがいい。じっくり待ち、それから思う存分、お前の本懐を果たすといい。

「うん」

「美澄ちゃんはわたしがちやんと殺すから」

――

第54話 恋慕の情―花言葉―

思い出した。

わたしは思い出してしまった。

昔、わたしが美澄ちゃんに会う前のこと。

わたしが『墮雪』を身に宿した時のことを。

――

「おとうさん……？ おかあさん……？」

幼いわたしの目の前に広がっているのは惨状。

家の梁に吊るした縄で、首を括った両親の死体だった。

「おとうさんっ!! おかあさんっ!!」

わたしは必死で二人を下ろそうとする。ピクリとも動かないそれらを見て、このままでは2人が死んでしまうと幼心に分かった。

けれど、子供に大の大人の体をそこから下ろす力などなく、わたしが下ろそうと触る度に、ギシギシと梁を鳴らして、2人の体は揺れた。

やがて、泣き叫んで声が掠れて出なくなった頃に、『その人』は現れた。

「可哀相に」

「……………だ、れ……………?」

顔はよく覚えていない。最愛の両親の首吊り死体を目の前で見続けていて、わたしも放心状態だったから。

ただひとつだけ、覚えているのは、その人の額にあった大きな傷痕。傷痕の人は、わたしに言った。

「君のお父さんとお母さんは死んだよ」

「っ」

「父親の会社を圧力をかけて追い込み、融資をもちかけるフリをして、その実吸い上げられるものを全て吸い上げ、見捨てた。母親もどうにか金を工面しようとしたんだろうね。身体まで売ったというのに、最後は薬漬けにされた」

「……な、にいつてるの？」

「君には少し難しかったかな。つまりだ」

「殺されたんだよ。悪い人によってね」

幼いわたしには何を言っているのか分からなかったけれど、殺されたという事実だけは理解できた。

そして、幸せに生きてきたわたしの中に、初めてドス黒い感情が芽生えたんだ。

「いろ、して……やる」

初めての感情だった。

傷痕の人はそれを見て、『あるもの』を取り出した。

それは白い花だった。その場には、わたしの憎悪には似つかわしくない綺麗な純白の花。

その花を見つめるわたしに傷痕の人は語り出す。

「これは『待雪草』といってね。君の憎しみを叶えてくれるものだ」

「にく、しみ……」

「これを飲み込めば、復讐できるだけの力が手に入る。勿論、強制はしない」

「ただ、私は君をその憎しみから救いたいだけなんだよ」

傷痕の人はわたしの前にその花を差し出した。今になって思えば、状況は飲み込めなかったし、その人が信用できるかも分からなかった。

けれど、わたしはその『待雪草』を手にして、嘸下した。

そうして、『墮雪』は生まれた。

—————

花を取り込んでから数カ月は特に何もなく、わたしは親戚中をたらい回しにされた挙げ句に、施設に引き取られた。

そして、学校での凄絶ないじめ。

それでもわたしの心は壊れなかった。皮肉なことに、復讐という目的が心の支えになつていたから。ただ、壊れずとも、確実に弱つてはいつていた。

わたしが小学6年生になつた頃、見るに見かねた施設の人がわたしを転校させ、そこで出会つた。

美澄ちゃんに。

美澄ちゃんにはわたしの弱つていく心を救つてくれた。そして、美澄ちゃんもまた傷を抱えていることを知り、当時施設に出入りしていた呪術師の人からそれを聞き、わたしは呪術師になることを決意した。

この辺りの記憶は、真実を思い出す前と同じ。優しい思い出。復讐のことなんて忘れ、すっかり薄れ始めていた頃の記憶。

変わるの、思い出したのはここから。

わたしの記憶が食い違っているのは、その出来事からだ。

—————

知らせは急だった。

「……雪ちゃん、これを……」

「え、ええと」

「そこに君が探している人がいるはずだあ……」

「……探している人？」

「ほら、うけ、とって……」

施設に出入りしていた呪術師の人から渡されたのは一枚の古めかしい紙切れ。わたしはそつちにばかり注視していて気づかなかったけど、それを見ていた人曰く、その時の呪術師の様子は何かがおかしかったらしい。

わたしが紙を受け取ると、その人はよろよろと足元が覚束ない様子で施設を出ていった。そして、施設の外に出たところで死んだんだって。

とにかく、渡された紙には都内のある住所が書かれていた。調べてみると、そこは転校先の学校からそこまで離れていない住所で、放課後に寄れる距離にあつて。

「……明日、寄ってみよっかな」

それが何を意味するのか深く考えず、わたしは自然とそう決めていた。

—————

翌日、美澄ちゃんに今日は用事があるからと断って、その住所の場所へと向かった。美澄ちゃんは膨れっ面になって、拗ねていたけど、仕方がないよね。どうしても気になっちゃうんだから。

「この辺、かな……?」

都内の中心部からは少し外れた住宅街。その中にある大きな一軒家。紙に記されていた住所はその家を指していた。

見るからに裕福そうで、幸せな家庭なのだろうと想像して。なんとなくその家の表札を確認しようと、家に近づいて足が止まった。不意に近くの電柱の陰に隠れる。

それはその家から出てきた家族を見たからだ。

穏やかそうで見るからに優しそうな母親と笑顔でその母親と手を繋ぐ小学一年生くらしい女の子。

それからー

ービシャツー

「くくつ、うつ、うええつ」

父親とおぼしき男性。

その男性の姿を見た瞬間に、わたしは口から吐瀉物を撒き散らしていた。

それは到底耐えることのできない不快感から。

身体の内側から沸き上がってくるドス黒い感情から。

そして、薄れていたあの忌まわしき記憶から。

一目で分かった。理由は定かじやない。

けれど、感じ取ってしまったんだ。

あいつだ。

あいつがお父さんとお母さんを殺した奴だ。

「殺さなきや……」

ポツリと溢れた言葉。

わたしは、フラフラとその家族へ近づいて行って、あと数メートルというところで

「お父さん！ お母さん！ なずな！」

聞き覚えのある声に、動きを止めてしまった。

見ると、あの男の元へ駆け寄り一人の女の子の姿がそこにはあった。その人物は、わたしの――

「おねえちゃん！」

「ただいま、なずな！ つて、みんな、私を置いてどこ行くのっ」

「あら、今日もお友達と遊んでくるかと思っただのに」

——わたしの大切な——

「つ、今日は……用事があるんだって」

「フラれちゃったのねえ」

「そ、そんなんじゃないしっ！」

「……ともかく帰ってきたならちようどいい。家族みんなで出掛けようか」
「！ わかった！ すぐ着替えてくる」

——大切な友達——

「慌てなくても待っているよ、美澄」

「うん！」

——そう。

わたしの大切な友達。初めてできた友達は。

美澄ちゃんはわたしの家族を殺した男の子供だった。

「そつ、か……そうなんだ……」

だから、わたしは『殺してしまおう』

『………ああ、そうだ。殺してしまおう。お前俺から全てを奪ったあの男から全てを奪おう』

『なあ、墮俺雪よ』

—————

その時に『待雪草』は産まれた。

後に仮想特級怨霊として認定される『墮雪』として。

特級呪物『待雪草』。

それは入り込んだ人間の憎しみを叶える呪物。呪霊として産まれ変わらせ、膨大な呪力を与える忌物。

なんの因果か『それ』によく似た実在する花・待雪草。

その花言葉は『あなたの死を望みます』だという。

|
|
|
|
|
|
|

第55話 恋慕の情—壊想—

—————

声が聞こえていた。

男を殺せ、と。

出来るだけ苦しめて殺せ。

そんな声だった。

それはきつとわたしの中にある『彼』の声。

でも、本当は分かっていた。それはわたし自身の声なんだって。

わたしが自分の『望み』を教えているだけなんだって。

—————??邸—————

「な、なんで……こんな子供が……」

男は恐怖の表情を浮かべながら、後退りしている。その後ろには、男の妻とその子供。2人も同じように、わたしのことをまるで化け物かなにかのように見てくる。

「……………」

「や、やめてっ」

女は子供を抱きかかえながら叫ぶ。ぎゅつと抱きしめ、子供だけは守るとでも言いたいんだろうか。

「……………わたしはもうそうして抱きしめてもらえないのに」

「な、なにを言っているんだ」

へえ、この期に及んでしらを切るんだ。

男の反応も、女の反応も腹が立つ。それが目に入る度に、ドス黒い感情が体に満ちてくる。

「……………」

「え……?」

「この名字、聞いたことあるでしょ」

自分が死に追いやった、殺した人間の名前を忘れる訳がない。

そんなことをわたしはまだ思っていた。この男に少しだけ期待していた。泣いて謝るだろうと。自分が悪かったと。そう言ってくるのではないかって思ってた。だから、

「な、なんのことだ……?」

「っ」

その答えを聞いたとき、わたしの中で何かが崩れる音がした。

ああ、そっか。忘れてるんだ。

わたしの家族を殺しておいて、こいつは——

「たすけてくれ、金なら払う……命だけはっ!!」

家族を背にして、男は跪く。

その姿を見ながら、わたしは動いた。

ーグチャツッー

「あ、あああああ………つ」

まずは一人、女の心臓を一突き。

そのまま腕を振ると、女は子供の前に転がった。それを見て、子供が泣きじやくりながら女に駆け寄ろうとして、それを男が止めた。

「お母さんっ!!!」

「だめだっ、なずなっ!」

自身も泣きながら娘を必死で抱きしめ止める男。

「たのむっ、私はどうなってもいい。ただ娘は……っ、娘だけは助けてくれっ!!!」

「……………」

「おねがいだ……いや、お願い、します」

土下座。

自分の娘と歳の変わらないわたしに懇願する様は、本当に不快だった。死を望む人間の土下座なんかには価値はない。

「……わかった」

「っ、じゃあー」

ーギチツー

次は、娘。家族を失う苦しみを味わって、こいつには死んでもらわなきゃいけないもんね。

「お、と……さ……」

「なすな！ や、やめろッ!!」

「……おと……」

叫びながら、男はわたしに体当たりをしてくる。けど、今のわたしはそんなもので倒れるわけもない。

泣き叫びながら、わたしを攻撃し続ける男を尻目に、

ーゴギツー

娘の首を折った。

「なんて……ことを………」

それを見た途端に男は崩れ落ちた。両膝を着き、頭を抱えて唸り続ける。いい様だ。

「……………●●。聞いたことあるでしょ」

「うとうとう………」

「……………勝手に、壊れないだよ」

髪を掴み、無理矢理頭をあげさせる。勝手に壊れることなど許さない。

「●●●って名字に聞き覚えあるよね」

「●●●……………」

「お父さんの会社を潰した。自分で潰しておいて助けようとして、見捨てた。そして、お母さんも……………」

「●●●……………あ、ああ……………」

そこまで言って、男はやつと思ひ出したようで。顔色がみるみる変わっていく。

「あれは、仕方がなかったんだ……………」

仕方ない？ 何を、言ってるの？

そこから男は何か言い訳を口にしていてた。けど、わたしの耳には入らない。

だって、理由も、事情も関係ないから。

あるのは事実だけ。

わたしのお父さんとお母さんを殺したっていう事実だけだ。
本当なら今すぐ殺してしまいたいけど。

「……まだ殺さない」

「え……？」

「もうひとり、いるから」

「っ」

それで思い至ったんだろう。わたしが今からしようとしてることに。

「や、やめてくれ……」

「止めると思う？」

「っ、や、やめろおおおお!!!」

「ただいま」

男が叫び声をあげると同時に、その声が聞こえた。
聞き間違える訳がない。それは彼女の——美澄ちゃんの声だ。

「ツ、来るな、みす——」

——バキツ——

「かつ!?!」

鳩尾への一撃で男を叫べなくする。ここで逃げられたら困るもんね。
そうして、足音が近づいてきて。

「ただい————え?」

美澄ちゃんはやってきた。

目の前に広がる惨状に、言葉を失ってる。

「おかえり、美澄ちゃん」

「ユ、キ……?」

ああ、これでいい。

血塗れのわたしを見て、美澄ちゃんはきつと気づくはずだ。

わたしが美澄ちゃんの家族を殺したこと。

そして、あの時のわたしと同じように――

「っ、ユキ！ 隠れてっ!!」

「……………え？」

返ってきたのは、想定外の言葉だった。

「呪霊なんですよ！ こんなこと……こんなことしたのはっ！」

そう言つて、美澄ちゃんはわたしの側へ。壁を背にできるように、わたしを無理矢理自分の引き寄せる美澄ちゃん。

そんなことをされて、わたしは混乱した。そして、思わず聞いてしまう。

「……なんで泣き叫ばないの……?」

目の前の惨状を理解してるはずだ。

家族仲はいい方だつて聞いたことはあつた。いつも優しく話を聞いてくれる母親。自分のことを慕ってくれる少し歳の離れた可愛い妹。そして、静かで厳しいけど、自分のことを考えてくれる父親。

大切な家族だと教えてくれた。

だから、純粹に疑問だつた。

家族よりもわたしを優先した彼女のことが。

そんなわたしの疑問に答えるように、美澄ちゃんは口を開いた。

「泣きたいよ……叫びたいよ……みんな、死んじやつたんだからっ」

「じゃあ……なんで?」

「……でも、このままじゃユキも殺されちゃうからっ」

「わたし……?」

「うんっ、家族と同じくらいユキは大事なんだよっ! ずっと周りから嘘つき呼ばわりされてきたわたしのことを理解してくれて、それに守ってくれるって言ってくれた」

「それ、は……」

「わたしも守りたいんだよっ」

「ユキのこと大好きだもんっ!!」

そう言った美澄ちゃんは震えていた。

悲しいし、怖いだろう。家族が無惨に殺された、それにずっと呪霊を見てきて、牙を剥いた時の恐ろしさも、ついこの間味わったんだから。

にもかかわらず、美澄ちゃんはわたしを守るようにしていた。

血塗れのわたしの前に立って、呪霊の気配を探している。

「美澄、ちゃん……」

その姿を見ていたら……ううん、そんなことない。きつと気のせいだ。

わたしは、このまま美澄ちゃんをあつ男の目の前で殺す。

……そう、だよ。今なら後ろから美澄ちゃんの首を絞めて殺せるじゃないか。そして、あの男に美澄ちゃんが死んでいく姿を、表情を見せながら仕上げにすればいい。

—スツ—

わたしは、手を伸ばした。

わたしを守ろうと、泣くのを耐えながら気を張り巡らせる美澄ちゃんの上に、後ろから手を伸ばす。

そして、

「……………だ、め」

わたしの手は止まった。

途端に腕から、それどころか体からも力が抜け、頭の中が、ぐちゃぐちゃになっていく。

両親を殺した男への復讐心と、大切な友達・美澄ちゃんへの思いがぐちゃぐちゃに混ざっていく。混ざって頭の中を巡っていく。

「え？ あ……ああ、あああああつ、わたし……わたしはっ!?!?!?」

混乱。錯乱。

おかしくなりそうだった。自分の心の底にあるものが混ぜ反って、バラバラになっていく感覚に襲われた。

「ユキ！ しつかりして、ユキっ!!」

「み、みすみちゃん……？」

「ユキ！ ……いじよ……から……キ!!」

「……………」

だんだんと美澄ちゃんの声が遠くなる。

視界もぼやけていく。意識がもうどこかにいってしまいそうで。

やがて、何もかもがどうでもー

『それは困るな』

不意に、声が聞こえた。

世界の音が遠くなつていく中、その声だけが頭に響く。

『俺とお前の契約——『縛り』は、あの男の絶望と死だ』

『そうしなくては俺は存在すらできん』

『……………ふむ、そうか。この記憶が邪魔なのか』

『ならば、『上書き』してやろう。その娘の記憶も一緒にな』

『術式解放——『戯憶竄醉』』

—————

そうして、わたしの記憶は書き換えられた。

生きる気力を失いかけていたわたしが生きるために、記憶を捨てた。

わたしの両親が殺されたこと。

美澄ちゃんの家族を殺したこと。

美澄ちゃんと共にその全てを忘れ、ただの友達になったんだ。草木美澄と花房雪として。

—————

『あの時に、お前たちにかけて俺の術式はもう消えた』

「うん」

『あの娘も思い出すだろう。そして、その事実に来る』

「……わたしが美澄ちゃんの家族を殺したことでしょ」

『ああ、もう子供ではないのだ。あの状況から考えれば、分かるだろう』

「分かっている」

『あの時逃がしたあの男はまだ生きています。俺とお前の契約はまだ終わっていない』

「それも、分かっている」

『覚悟はいいだろうな？ あの時の二の舞にはならんように』

「……うん、あのときとは違う。急に記憶が戻ったせいで、少し混乱したけど、今はもうハッキリしてるよ」

「美澄ちゃんを殺す。そして、全部終わらせよう」
『ならば、よい』

—————

やがて、その時はやってきた。

わたしの呪力に気づいた術師は全員殺した。

止める者はもういない。もう、邪魔は入らない。

「おまたせ、ユキ」

「うん、美澄ちゃん」

美澄ちゃんは笑顔だった。

そんな美澄ちゃんをわたしも笑顔で迎えた。

今から幕が下りる。

終幕の時は近い。

|
|
|
|
|
|
|

第56話 終幕一壺一

——都内麿神社——

「おまたせ、ユキ」

「うん、美澄ちゃん」

いつか一緒に街に出掛けた時みたいに。

今日は別に待ち合わせをしたわけでもないけれど、わたしたちは出会った。2人とも笑顔で、言葉を交わし始める。

「どこでもいい？」

「うん」

美澄ちゃんに促され、昔のように腰かけた。今考えるととっても罰当たりなことをしてるな、なんて少し可笑しくなる。

「どうしたの？」

「ううん、こうしてゆっくり話すの久しぶりだなんて」

「まあ、うん。色々あったからね。しかたないしかたない」

「ふふつ、本当にそうだねえ」

色々あった。

美澄ちゃんと一緒に呪術高专に入って、任務に行ったり、お出掛けしたり。

わたしが正藤兄さんに狙われ、守ってくれたこともあった。

花房家の当主になった時は1年くらい会えなくて。

それから、今度は美澄ちゃんが草木福濁に狙われて、その頃くらいから本当に会えなくなっていた。

ゆっくり話したのが、囚われてた時だったのは皮肉な話だよな。

そして、わたしは『墮雪』に乗っ取られて……まあ、今となってはその表現は正しくないかな。

だから、こうして話せるのは本当に久しぶり。

「ねえ、美澄ちゃん」

「なに、ユキ？」

「わたしたちっていい友達だったのかな？」

「……私はそれ以上だっと思ってたよ」

「……………そっか」

でもね、美澄ちゃん。

それはきつと『上書き』されてた記憶のおかげなんだ。

その証拠に、今はきつと私を恨んでるでしょう？

家族を殺されて、幸せを壊されて、憎しみに支配されたはず。

あの頃のわたしとおんなじ気持ちだよ。

「あのね、わたしは美澄ちゃんの家族を殺したの」

「……………うん、思い出したから知ってるよ」

「きつと美澄ちゃんも辛かったよね。悲しかったよね。わたしのこと、きつと憎いよね」

知ってるよ。わたしもそうだったから。
それでも、

「ごめんねは言わない。言えない。わたし、そうしたいって思ってしまったから。わたしから両親を奪ったみたいなのに、全部殺して幸せを奪ってしまおうって思ったから」

それがわたしの気持ちだった。

謝らない。そもそも謝ったところで何か変わるわけでもないもんね。

それに、

「それにまだ終わってないんだ。わたしのお父さんとお母さんを殺したあの男はまだ生きてる。それに、美澄ちゃんも生きてるから」

でも、もう終わらせよう。わたしの、この憎しみを晴らそう。

この殺意はもう止めないから。

「ねえ、美澄ちゃん」

「お願いだから、殺させて」

わたしの言葉を受けて、美澄ちゃんはゆっくりと立ち上がった。
わたしも立って、美澄ちゃんと向き合う。

そしてー

ーブンツー

呪力を込めた拳を振り抜いた。

今のわたしは以前とは違う。呪力も膂力も『墮雪』と同じ。

「っ！」

ーースツー

それを感じ取っていたようで、美澄ちゃんは拳を受けずに避ける。受けていれば、確実に壊せてたのに……。

つと、惜しむのはあとにしなきゃ！

「『廻脚』！」

「っ」

ーギリギリギリギリー

両腕で受ける。確かに呪力は多少上がってるけどー

「受け切った、よ」

「……さすがはユキ。じゃあー」

ーグラーッー

「!？」

「これはどう!!」

足元がぐらついた。右足が急に落ちる感覚。

一瞬だけ呪力感知を足元へ向けると、右足側の地面が四角く抉れていて、そこからは美澄ちゃんの呪力の痕跡があった。

『結界』を使ったのだと理解すると同時に、わたしは地面についている左足で踏み切り、宙返りで後ろへ距離をとる。

これなら距離を離せるはず。けど、美澄ちゃんはわたしが地面を離れた隙を見逃さない。

ーガシッー

「つかまえた」

左足を持たれる。そのまま上へ投げ飛ばすつもりなんだろう。けど、それも想定してるよ。

ーググググッー

「っ、この力……っ」

「今のわたし、膂力も『墮雪』と同じなんだよ、美澄ちゃん」

ーブンツー

掴まれたまま左足を振り抜く。

わたしの足の力だけで、美澄ちゃんの体を吹き飛ばせた。

すかさず追い打ちをかける。駆けて跳ぶ。吹き飛ばした美澄ちゃんの頭上へ。そして、

ーバギツー

美澄ちゃんの腹部に呪力を込めた拳を叩き込んだ。

「くっく」

そのまま地面へ叩きつけられる美澄ちゃん。咄嗟に呪力で防御はしたみたいだけど……。

「立してっ？」

「……………」

体が地面にめり込んだまま反応はない。

……これで終わりかな。案外あつけなかった。そう思うのは、わたしに『墮雪』の力があるからで。

だからだと思う。それは今まででだったら考えられない油断。

呪力感知を怠ったせいで、気づくのに遅れた。

「……………」『輪廻復原』

ーゾゾゾゾゾツツー

美澄ちゃんの手には『転移結界』が張られていたことに。

『転移結界』でストックしてあった『それら』を美澄ちゃんが握りつぶした途端に、彼女の周りに血溜まりが出来ていく。けれど、その血溜まりはすべて呪力の塊で。

やがて美澄ちゃんがゆっくりと立ち上がる頃には、彼女を守るように7体の骸人形が出来上がっていた。その中にはあの呪詛師・草木福濁らしき姿もあつて。

「……総力戦、だね」

「出し惜しみしてる場合じゃないでしょ。それに、これが私の最後の『輪廻復原』になる
だろうしね」

「それじゃ第2ラウンドといこうか、ユキ」

—————

第57話 終幕一式一

「それじゃ第2ラウンドといこう、ユキ」

美澄ちゃんが右手で軽く合図をすると、7体の骸人形がバラバラの方向へ動き出した。

恐らく狙いは……。

「囲ませないよ、美澄ちゃん」

『墮雪』の力を宿してはいるとはいえ、相手の術式が分からない以上は警戒する必要がある。特に、草木福濁の骸人形には注意しなきゃ。『墮雪』として戦ったからその術式は覚えてる。

『二元解離』。

魂と肉体の繋がりを切り離す術式。前に戦ったときはまだ『墮雪』と完全には一体化していなかったから、一瞬離れかけた。今はきつとそれを受けても切り離されはしないだろうけど、それでも一瞬は隙ができるはず。

今の美澄ちゃん相手に一瞬でも隙を見せるのは……。

「あいつ、殺しておけばよかったかな」

そうは言っても後悔は先に立たないもの。あの時は『墮雪』わたしの思惑が分からなかった訳だから仕方がない。

だから、今は最適解を取ろう。

「まずはそれを壊させてもらおうね」

草木福濁の骸人形に向かって駆け出す。手の内の分かる一体を破壊してしまおう。そう思ったんだ。

骸人形の両手がわたしに迫る。発動条件は両手で触れることだったっけ？

ならー

ーググッー

「はあっ!!」

ーードゴッー

人形がわたしの頭に触ろうとした瞬間に、瞬時に身をかがめ、懐に潜り込み、人形の腹部へ一撃を入れた。

手応えは十分。それに応えるように、人形は参道から大きく外れた植え込みの方へ吹き飛んだーはずだったのに。

『二元解離』

ーービキッー

不意に痛みにも似た感覚が全身を駆け巡る。背後からわたしに触れたのが草木福濁の骸人形だと気づいた時にはもう遅く、わたしの意識が一瞬飛びかける。

「……はあつ！」

意識が朦朧としながらも、どうにか体全体を振るい、遠心力だけでわたしの後方の人形に裏拳を繰り出せた。

今度こそ命中したはず。

見れば、参道の中央、鳥居の側まで福濁の骸人形は転がっていき、やがて止まる。

「……もう効かないんだ、『二元解離』」

「少しだけ……チクツとしたくらいかな」

ブラフとも取れるような強がり、こちらへゆつくりと歩を進めてくる美澄ちゃんの言葉に応える。その側には5体の骸人形。

「福濁は最初に吹き飛ばしたはずだけど」

「まあ、もう壊されたから答えるけどさ。最初に壊された方の人形の術式がそういう術式——認識の阻害だったっけな。それで錯覚させただけ」

『墮雪』にも通用するある種の切り札のような術式だと素直に思った。だからこそ感じる美澄ちゃんの雑さ。それほどの術式をもつ骸人形を簡単に使い捨てるのは……。

「まだ策があるってことだよね」

「まあね」

——ダッ——

瞬時に距離を詰めてくる美澄ちゃん。

速い。でも、見える。

——ガシッ——

「！」

腕を掴み、捻る。腕が折られる。そう判断したみたいで、美澄ちゃんは自ら足を地面から離す。結果、美澄ちゃんの体が宙に浮いた。

その一瞬を逃さず、掴んだまま美澄ちゃんを地面へ叩きつける。

ーグニツー

「?」

本来なら、わたしの手にも衝撃が伝わってくるはずなのに、それが無い。その違和感の答えはすぐに分かった。

「影の中から人……?」

美澄ちゃんの影から這い出るように、人影があった。それが美澄ちゃんを地面に叩きつけるのを防いだんだ。でも、そのせいかな影はもう潰れて動いてない。

「これも人形?」

「そ。そしてー」

ーゾゾゾゾツー

悪寒が走る。同時に、体の動きが止まった。

これも違う骸人形の術式？

目だけは動く。視界の端に、いた。こちらに向かって呪力を向ける男の人形。ボソボソと口が動いているのを見るに、『呪詛』の類いかもしれない。

「……動かないで、ユキ」

その声に視線を戻すと、体勢を整え直した美澄ちゃんが両手をこちらへ向けて歩いてくるのが見えた。

きつとわたしの目をくり貫こうとしてるんだと思う。

けど、甘い。

ーググンツー

「!？」

呪力を込めて、強引に首を回す。

筋が何本か千切れる音も気にしない。そのまま視界の中に入った動きを止めてくる人形へ呪力の塊を飛ばし、その首を飛ばした。

「よし、動ける」

人形が首を飛ばしても動けるのは分かった。だから、追撃。首のない骸人形へ近づき、完全に破壊した。

改めて、美澄ちゃんに向き直る。

「やっぱりまだ策があるんだね、美澄ちゃん」

驚いた。そう言うと、美澄ちゃんはこちらの台詞だと返してくる。

「あれ、呪力を込めたところで動かせるものじゃないよ」

「うん。人間のままじゃ無理だったと思うけど」

「……ああ、そっか。そうだった」

うん。今のわたしは人間ではないんだ。

もう半分……ううん、ほとんど呪霊みたいなものだから。

「在藤兄さんみたいなの反転術式を使わなくても……ね、直った」

呪力を通せば、大抵の損傷は直る。さつき切れた筋ももう違和感がなくなってる。

「……………そうなんだ」

「うん、もうわたしは人間じゃないんだよ、美澄ちゃん」

「……………」

俯く美澄ちゃん。

今、彼女は何を考えているんだろう。友達だったわたしが化け物になってしまったことへの悲しみ？ それとも、やっぱりわたしへの憎しみや殺意かな？

その心中は、よく分からない。

前までのわたしなら、美澄ちゃんの気持ち、分かってたはずなのに……。

「……ユキ」

「っ、なに？」

なにを考えてたんだろう。集中しなきや。

だって、まだ目の前の彼女は――

「………なら、遠慮なく使える」

「『輪廻復原』」

戦意を失ってないんだから。

見えたのは、ひとつだけ。彼女がたった今握り潰したのは、『空色の眼』だった。潰れたそれはやがて人の形に象られていく。わたしも見知ったその姿に。

「……東坊城、水仙」

『無下限呪術』と『六眼』をもつ呪詛師。

彼女の骸人形がそこにはいた。

ーグンッー

「ッ!？」

瞬間、引き寄せられる。術式順転『蒼』だったっけ。

強烈な引き寄せる力でわたしは東坊城水仙の骸人形と衝突してしまう。急にぶつかり止まったことで受ける衝撃。内臓が揺れる。

「っ」

「……呪霊って言っても、体構造は人間なんでしょ。損傷は直せても揺れた脳は直せない。その間に、終わらせることは簡単だよ、ユキ」

確かに美澄ちゃんの言う通りだ。呪力を流しても……そもそも揺れたままの脳じゃ呪力自体を練ることができない。だから、直せない。

「終わりにしよう、ユキ」

美澄ちゃんが迫ってくる。追い討ちとばかりに、水仙の骸人形がわたしの体を後ろから羽交い締めにしてくる。

美澄ちゃんはきつとわたしに直接『輪廻復原』を使ってくるはずだ。

生きている術師の臓器を抉り出し、使役するその術式は、『二元解離』では効き目の薄い今のわたしにも有効なんだろう。

そうして、わたし自身を殺し合わせる。

ならー

ーブズツー

「ー仕方ないよね」

揺れる脳を、直接頭蓋骨を貫いた自らの指で抑える。震えは止まった。人間にはできない芸当だけど、今の『墮雪』わたしならば問題はないはずだ。そして、ここが使い時だ。『墮雪』の術式を発動しよう。

「術式解放『戯憶竄酔』」

術式を解放したと同時に、体の自由がきくようになる。美澄ちゃんの意識を一瞬改竄したことで、術式効果が薄れ、人形自体の膂力が落ちたんだろう。その隙に、背後の東坊城水仙の骸人形を破壊できた。

「……………危なかつたよ、美澄ちゃん」

「ユキ、その術式は……………」

そう。

『墮雪』としての術式。記憶を改竄する術式。

人間には短期記憶と長期記憶があるという。

『戯憶竄酔』はそのどちらにも干渉することができ、対象の認知や記憶を狂わせる。

美澄ちゃんやわたし自身に施したように、長期記憶を改竄して過去を誤認させることも、戦闘中には短期記憶を改竄して隙を作ることだってできる。

「(こ)うして……………」

ーグニャッー

発動。美澄ちゃんの動きが一瞬止まる。

その間に近づき――

「――とつたよ」

「!」

――グチャツ――

手を繋ぐ。そのまま呪力で強化した握力で、美澄ちゃんの両手を握りつぶした。

「~~~~ツ!」

声にならない悲鳴をあげる美澄ちゃん。術式から意識が離れたせいで、『輪廻復原』で作り出していた骸人形も消える。

いくら強い美澄ちゃんでも、こういう経験はないもんね。両手を粉碎される経験なんてさ。

「これで、もう『輪廻復原』は使えないね」

最初からこうしておけばよかったのかもしれない。そうすれば、抵抗もされず楽に殺せた。

……………ううん。

そうしなかったのは…………。

「美澄ちゃんには足搔いて足搔いて足搔いて足搔いて、死んでほしかったから」

「そうした方がわたしの気も晴れる。それにきつと、その方があの男も苦しめられるんだ。ちゃんと美澄ちゃんの苦しむ姿は伝えるからね」

わたしはそのまま、美澄ちゃんに馬乗りになる。

首に手をかける。

ギリギリと、力を込めていく。

「か…………ツ、あつ…………」

言葉が出ないんだ。意味のない声をあげて、美澄ちゃんはバタバタと悶える。でも、膂力が違う。わたしは呪霊で、美澄ちゃんは人間。いくら『輪廻復原』みたいな強い術式をもっていようと人間だから。時間が経てば、呼吸も止まる。そして、死ぬんだよ。

「……………は……………」

……………ああ、ほら。

抵抗する力ももうほとんど残ってないよね。

「……………っ……………」

ああ、これで終わり。おしまい。

美澄ちゃんの命の終わりを両手で感じながら、わたしは

「……………バイバイ、美澄ちゃー」

ーースツーー

「え……………?」

弱っていく美澄ちゃんが、最後の力を振り絞ってしたのは、わたしの頬を撫でること。優しく、優しく撫でることだった。

そして、彼女は笑う。笑って、ほぼ止まっているはずの呼吸でー

「『領域展開』」

「……………『合誦廻礼花』」
ごうじゆかいれいか

それを告げた。

……………

第58話 終幕―参―

『輪廻復原』

その術式効果は、呪力による術式と肉体の再構築。

その副産物として骸人形ができるのであって、それ自体が本質では決してない。

領域展開『合誦廻礼花』ごうじゆかいれいかは、それを更に一段上の呪術へと昇華させた領域になっている。

領域内の術師の呪力を蒐集し、術式を剥離させる必中効果。

肉体を再構築する強制効果。

そして――

草木美澄は自らの術式の解釈を拡げ、死の淵でやっとその領域を作り上げた。

――

信じられないことが起きていた。

結界を応用して、自らの手を再現したことも。

その手で掌印を結び、領域を展開したことも。

そして——

「なに、これ……?」

青紫色の小さな花が咲き誇る庭園のような領域。

冷たさを感じつつも穏やかなどこか矛盾したその領域内で、わたしは『わたし』と対峙していた。

『………こんにちは、わたし』

「っ、こんなッ!!」

——グチャツ——

呪力を帯びた拳で叩き潰す。

自分と同じ姿をしたものを殺すのは気が引けるけど、それでもそのまま話をするよりはましだった。

なのに、

『無駄だよ』

「っ」

そこにはまた、『わたし』がいた。

ーグチャツター

また殺す。

それでも、また、

『わたしはあなた。あなたがここにいる限り、わたしは存在し続ける』

「気味の悪い……」

『気味が悪くても、わたしはわたしだから』

『だから、お話ししよう』

「……話？ わたしを殺すんじゃないの？」

だって、そう聞いていたから。

美澄ちゃんの『輪廻復原』は骸人形が本人と対峙した時、殺し合わせるようになっていた。領域はその術式効果が強化されているだろうから、当たり前のように『わたし』はわたしを殺そうとしてくるものだと思います。

『うん。わたしはあなたに危害を加えない』

だから、その答えは予想外で。

何か裏があるのだと考えて探るも、目の前の『わたし』から害意のようなものは感じ取れなかった。

だから、少しでも話に乗ることにする。これも美澄ちゃんの領域を解明するため。

「ここはなに？」

『ここは美澄ちゃんの領域の中。綺麗だよね、ここ。美澄ちゃんの名前とおんなじ花がたくさん咲いてて』

『わたし』に指を差されなくても分かる。辺り一面を覆う小さな花。その名前をわたしも知っている。

ミスミソウ。

花言葉は『自信』。早春に雪の間から花を咲かせることからその言葉がついたという、自信に満ちた美澄ちゃんらしい花だ。

「っ、違う……！ そんなことを聞いたんじゃない。なんでわたしが2人いるの」

『……この領域『合誦廻礼花』は『輪廻復原』の解釈を拵げた結果生まれた領域。だから、この中では美澄ちゃんが出会ったすべての人間の肉体を再構築できる。もちろん術式もね』

「……それ、本当？」

『わたし』は自分に嘘はつかないよ』

それがもし本当ならば、美澄ちゃんを殺す上でこの領域は脅威になる。どうしたら……？

頭の中で、これからの戦闘の計画を練ろうとしているわたしを笑う声。少しムツとして、彼女を睨む。

「何がおかしいの」

『言ったでしょ？』『わたし』はわたしに危害を加えないって』

『わたし』の目的はひとつだけ。

目の前の彼女はそう言って、さらに言葉を紡ぐ。

『わたしはただ、あなたの本心を聞きたいだけ』

「本心って……わたしは美澄ちゃんを殺して、復讐を遂げたいだけ」

『……本当に？』

「っ」

その言葉に、わたしは少し動揺してしまう。

……なんで？ いや、そんなことない。

「……悲願だよ」

『うん、知ってる』

「お父さんとお母さんを殺した奴への復讐は、わたしの生きる目的……生きる意味だった」

『それも知ってるよ』

「……なら、なんでそんなことを聞くの」

復讐を遂げたい。その気持ちを疑うなんて。

もし本当に目の前の『わたし』がわたし自身ならば、ありえない愚問だ。

『本当に？』

「また……なにが言いたいのか！」

『わたしが生きる目的は本当にそれだけなの？』

「っ、くどい！ それだけ、それしかない！ わたしにはそれしかー」

『美澄ちゃんと過ごした日々は楽しくなかった？』

『わたし』はわたしにそう訊ねる。

……きつと、自問自答のような、そうではないような奇妙な状況のせいだ。わたしの心がこんなにぎわつくのは……。

「たのしく、なんてなかった」

『……………』

「記憶を上書きしていたから、表面上は楽しく見えたかもしれない。だけど、心の底では憎かった。憎かったよッ!!」

『……………』

わたしのことをただ見つめてくる『わたし』。

何故か、わたしはその視線から目を逸らしてしまつて。その行動をさらに指摘される。

それが本心なら、目を逸らす必要ないよね、と。

「ちがう」

『ちがわない』

「ちがうツ!!」

『ちがわないよ、わたし』

「うるさいっ!!」

『……………もう分かってるんでしょ?』

「黙れ黙れ!!」

……………うるさい。

うるさいうるさいうるさいうるさい。

黙れ黙れ黙れ。

そんなの、ありえない。ありえないの。

だって、

—————そんなのわたしが一番分かってるんだから—————

本当は、心の中では分かってるんだ。

わたしのことだもん。『わたし』に言われなくても自分が一番分かってるよ。

『やつと素直になった』

うん……そう。

本当はわたし………うん、『わたし』の言う通りだ。

楽しかった。

美澄ちゃんとの毎日も。一緒に戦った日々も。

大変だったこともあったけれど、楽しかったよ。

もちろん、わたしがあの男を憎んでるのは事実。殺したいと思ってるのも本当だ。

だけど、それは美澄ちゃんを殺してまで遂げようとは思えないんだ。それほどまでに

美澄ちゃんはわたしにとって――

「大事な、親友だもん……」

本当に大切に大切に、大好きな美澄ちゃん。

殺そうなんて、もう思えないよ。

『……………それが聞けてよかった』

「え…………？」

その一言で、目の前の『わたし』の姿が変わっていく。『わたし』から美澄ちゃんへと。

「美澄ちゃん？」

「うん。そうだよ、ユキ」

微笑む美澄ちゃん。

つてことは、今までの…………？

「私の『合誦廻礼花』は肉体と術式の構築だけじゃなくて、人格を剥離させる術式効果もあるんだ」

人格の剥離。それって…………？

「だから、今までユキが話していたのは、私の体をユキの体に構築し直したところにユキの人格の一部を入れたんだ」

「……じゃあ、あれはやつぱりわたしだったの……？」

「まあ、そういうこと。本当は『墮雪』を切り離して私の中に入れるつもりだったんだけどさ」

失敗しちゃった。

そう言つて、美澄ちゃんは落胆のため息を吐く。

「……まあ、ユキからその言葉を聞けたからよしとするかな」

一転、笑う美澄ちゃん。その表情はよく見慣れたものだった。

「美澄ちゃん……」

「これで両思いだね、ユキ！」

ああ、いつもと変わらない美澄ちゃんだ。

わたしにまつすぐな好意を伝えてくれる彼女。無邪気なようで、少しだけ下心も感じるいつもの好きをくれる。

それを見て、聞いた途端に、

ーブチッー

「あ、う……うう……あああ……」

「……ユキー」

急に心がぐらつく感覚に襲われ、思わず倒れ込んでしまう。美澄ちゃんはそんなわたしを支えてくれる。

「ユキー！ ユキっ!!」

「だ、めっ……あああ……みす、みちゃんっ……」

理解はしてたはずだった。なのに、一瞬勘違いをしてしまった。

もうわたしは戻れないのに。戻れないところまで足を踏み入れているのに。

このまま美澄ちゃんと一緒の日常に戻れるかもなんて、そんな勘違いをってしまったんだ。

もう、わたしは呪霊『墮雪』なんだ。

あの時、わたしは自らを差し出した。『待雪草』と同化して『墮雪』になることを選んだ。

これは『縛り』。もう戻れない。

わたしは美澄ちゃんを殺すまで止まらない。

どうなるかはもう分からない。もしかしたら、このまま暴走して美澄ちゃんを手にかけてしまうかもしれない。

そんなことしたくない。でも、もう無理だよ。

せめて最期に伝えなきゃ……。

「美澄ちゃん」

「ごめんね」

「ありがとう」

私の目的は最初からひとつだけだ。

ユキと幸せになる。

そのためにユキを守ってきた。

そのためなら、私はすべてを捨ててもいい。

……そう、すべて捨てるよ。

「術式解放——『輪廻真源』」

りんねしんげん

第59話 終幕一肆一

———回想———

「もうあの娘は人間には戻れない。彼女は貴女を殺すことだけを目的に動く呪霊に成り下がった」

『五条』——東坊城水仙は、私のところへ来るなり無礼にもそう言った。私に裏切られて尚ここに来るんだから、まあ、相当に胆は座ってるのか。

下らないと一蹴することもできたけど、それが事実であろうことは感じ取っていた。理屈じゃなくて本能みたいなもので。

「それで私が諦めるとでも思ってるわけ？」

「ふふつ、そうね。そう答えると思っていたわ」

軽く微笑むと、水仙は何かを懐から取り出し、私の前のテーブルに置いた。

それは極小の物体。何かの種のようなようであつた。その私の見立ては正しかったようで、水仙はその正体について話し出した。

『封対ノ種子』ふうたいのたねこ

「呪霊を封印するための呪物よ」

「……………それでユキを封印しろって言うわけ」

「ええ」

私の問いに、水仙は事も無げに頷いた。

普通に考えれば妥当な考えなんだろうけど、私には到底受け入れられるわけがない。

私にはそんなことはできないし、もし誰かがそれをやってユキを封印したら
……………

「貴女が世界を壊す。そうでしょう」

「……………それを分かつてるならー」

「まあまあ、話の続きを聞いてちょうだい」

頭に血が上りきる前に、水仙は私の言葉を遮って続きを話し出す。

続きとは『封対ノ種子』の使用条件について。

「『封対ノ種子』。ある筋からの情報によると、相当に強力な呪霊ですら確実に封印できる代物だそうよ」

『無常』という呪詛師、水仙曰く師匠だという人物から譲り受けた呪物。

なんとかつていう呪具の情報と交換で手に入れたと言つてたけど、そんなのはどうでもいいこと。適当に聞き流して、本題に耳を傾ける。

「この呪物は呪力の拮抗した対となる呪霊しか封印できないのよ」

「対？ 2体同時ってことなら効力にも納得だけど」

「ええ。『縛り』をつけたことで、そこまで強力な術式効果を得たんでしょうね」

「……………」

呪力の拮抗した対の呪霊。

ユキと……もう一体……。

ユキが封印されれば、私は『輪廻復原』を使つて世界を壊す。それを分かった上で、この話を私にしたということは、水仙の言うもう一体の呪霊というのは――

「……私」

「ご名答。貴女を呪霊にして、あの娘と一緒に封印する」

そういうことか。

それなら東坊城天蓋が危惧したユキも、東坊城水仙が危険視する私も一緒に封印できる。

私も一応の納得はできる話ではある。封印っていうのが、どれほどのものなのかは分からない。それでもユキと離れ離れにならずに、むしろ永遠に一緒にいられるならば……。

「納得はしてもらえた？」

「……どうやって私を呪霊にするつもり」

「貴女の術式『輪廻復原』の解釈を拡げる。貴女が骸人形そのものを作り出す時に使う肉体の再構築。あれを貴女自身の身体でやってもらうわ」

『輪廻復原』の本質である再構築は当の昔に看破されていたようで、水仙はそんなことを言い出した。

なるほど、理論上は可能だろう。

人間としての肉体を呪霊へと作り替える。

『輪廻復原』ならば造作もない。ただし、それは

「残念だけど、『輪廻復原』は自分の身体には使えない」

机上の空論。

いや、机上というか、既にそれは過去に試している。『墮雪』との力の差を感じた時に試して、失敗したんだ。

だから、

「領域の習得」

「え？」

「貴女に領域を習得させるわ。領域を習得した呪術師ならば、術式そのものを深化させるのも可能はずよ。それでも足りない部分は、私の『眼』を使いなさい」

水仙はひとつだけ残っている右の『六眼』を指差した。

私が奪っていない方の眼。東坊城天蓋から引き継いだ右眼を差し出すという。つて、いや、ちよつと待つてよ。

そもそもさー

「ーどうしてそこまでするわけ？」

それが疑問だった。

私は目的のためならば手段は問わない。

ユキと一緒にいるためならば、邪魔する奴は殺すし、利用できる人間はすべて使う。狂っている。その自覚はある。

目の前のこの女も利用した。

『輪廻復原』で『六眼』を使い、『墮雪』を攻略する一手にするためにだ。

なのに、水仙はまた私の前に現れた。

ユキの術式の影響だろう。戦いの最中に記憶を改竄され、静かに私の元を去っていった咲人と総監部の犬。『六眼』があるからか水仙に効きが悪かったんだろうことは予想できるけれど、それでも再び私の前に現れる理由にはならない。そして、協力を申し出るのも意味が分からない。

……じゃあ、なぜ？

その問いに、水仙は困ったように微笑みながら答えた。

「大切な人を手にかけるなんて、辛すぎるでしょう」

それは……いや、止めておこう。

「それにね、私も雪のこと大好きなのよ。昔、呪詛師になったばかりの頃にあの娘に出会ってね」

彼女の優しさに救われたの。

そう言って、水仙はまた微笑んだ。

私の領域『合誦廻礼花』によって、両の眼が空色の『六眼』へと再構築されて。同時に『輪廻復原』の本質をより深く理解した。そして、深化したそれを行使する。

「術式解放——『輪廻真源』」

発動したそれを内側へと使う。

瞬間、自分の身体がバラバラになる感覚に襲われる。初めて体験する身体が作り替えられていく感覚。

気持ちが悪い。吐き気が止まらない。

寒くて、暑い。周りが真つ暗で真つ白だ。

頭が痛くて痛くて仕方がない。

全身にまるで力が入らずに、倒れ込みそうになる。けれど、倒れ込みそうになる感覚と同様に身体が浮き上がる感覚も感じる。

やがて。

身体が輪郭を取り戻す。

私であり、私ではない存在の形をはつきり感じた頃。

私は呪霊になっていた。

『これでお揃いだ』

ポツリと呟いた言葉はきつとユキには届いてない。

ゆっくりと私を殺すために歩を進めてくるユキ。

私は同じくらしいの速度で、近づいていく。

一歩一歩、確実に私とユキの距離は近づいていき、

そして、触れた。

指を絡めた。

『やっと、こうして触れ合えた』

ここに来るまで本当に長かったよね。でも、大丈夫。だって、

『これからは永遠に一緒だからね、ユキ』

—————

1989年8月9日。

都内廃神社にて、特級相当の呪力の衝突を感知した。

それを受け、一級呪術師数名を現地へ派遣したが、呪力の残穢は残っており、何が起こったのかは一切不明である。

今回の件と関係があるかは判明していないが、その廃神社には2本一対の樹が絡み合うように聳え立っていたことを派遣された呪術師が確認しており、調査を進めている。

—————

最終話 美しく澄んだとある雪の日に

「……………またここですか、おじさん」

俺のことをおじさんと呼ぶ声に反応して、俺は振り返る。

生意気に成長した男子高校生がそこにはいた。

「おう、優」

彼の名前を呼ぶと、ため息を返されてしまう。

「おう、優じゃないですよ。桔梗さんも母さんも探してたんですから」

「落ち着かねえんだよ」

「はあ、いい加減落ち着いてください。もうおじさんも……………ええと」

「永遠の28歳だな」

「それは娘が生まれたときの年齢じゃないですか」

そんな小粋な冗談は優には通じない。まったく変なところで父親そっくりに育ちまっつて。おじさんは悲しいぜ。

「つて、おじさんの年齢はどうでもいいんです」

「ああ？ 俺についての話がどうでもいいとは優も偉くなったもんだな、ああ？」

「……桔梗さんがガチギレしてましたよ」

「……………それは、まあ、穏やかな話じゃねえな」

「はい、それはもう穏やかではなかったです」

そいつはともかくまづい。

昔から桔梗のガチギレは鉄拳制裁を伴う。つまり、ぶん殴られるわけだ。

「まあ、今回はおじさんが全面的に悪いですよ」

「……………分かってるよ」

娘の中学の卒業式直後にも関わらず、こんな廃神社でよく分らん樹を眺めてたつてんだから、そりゃあ俺が悪いさ。

愛娘にも愛想を尽かされても不思議はないだろうよ。

「早く帰りましょう」

「ああ」

そう促す優に頷く。

愛娘の晴れの日にまでこんな場所に来ちまうのは、まあ、いよいよ病気かもしれねえな。そんなことを思いながら、俺は今まで見上げていた絡み合った2本の大樹に背を向けた。

その時だった。

「………雪？」

空からハラハラと白い結晶が降ってきたのに気づいたのは。

3月も中旬に差し掛かるといふのに珍しい。東北の方ではあることだとは聞いたことがあるが、都内でなんてそうそうあるものではない。

物珍しさから少しの間、雪を眺めていると、

「おじさん、知らないんですか？」

「あ？ 何をだよ？」

「この神社の噂ですよ」

噂？

この寂れたというより、ボロボロで神社の体も為してないここにそんな大層なものがあのかよ。

そんな風に返すと、またため息を吐きながら優は答えてくれた。

「この神社、こんなに寂れてるのになんで取り壊されないんだと思います？」

「……………さあな？」

神社ってのは呪術的にもそれなりには意味がある。それは寂れていたとしてもだ。

呪術師から遠ざかり、隠居した今の俺にははつきりとしたことは分からねえが、恐らくその辺の事情があるんだろうとは予想できる。

まあ、呪術とは無縁の優にはする話ではねえから、わざわざ言うつもりもない。

俺はわざと無知なフリで、首をかしげた。

俺のナイスガイな配慮など知らない男子高校生は少し得意気に、無知なおじさんに教えてくれる。

「ここ、何度か取り壊そうとしたって話もあるらしいんですけどね。その度に人が死ぬらしいんです」

「らしい?」

「はい。死んだって話が出回るだけで、実際に誰が死んだとかは覚えている人がいないって聞きました」

そりゃあ、変な話だ。

まるで、実際にその現場を見た人間の記憶が消されちまって、伝聞だけが出回ってるような……そんな妙な話だ。

「あとはこの雪ですね。2月から3月半ばにかけて、この神社の周りだけ降るみたいですよ」

「で、そんな変な噂とか現象が続くこともあって、あまりにも不気味すぎて、工事業者も行政もここには関わらないことにしたって話らしいです」

なるほどな。

「そりゃあ一般人は近づきたがらねえ訳だ。その類いの案件なら、呪術高専にも依頼はいつているだろうが、それで解決されてねえってことは、高専側も触れない方がいいと判断したのかね。」

「まあ、俺にはもう関係ないけどな」

「何かいいました?」

「いや、なんでもねえよ」

「?」

それにしても、雪が降るのは2月から3月半ば。ちようど今頃の早春の頃か。

去年までもこの時期に来ることもあったが、俺は今日まで見なかったな。

「嫌われてるんじゃないですか」

「ああ？」

「なんて、冗談です」

そう言って笑う優。

不意に、その笑顔が昔、見たあいつの顔と重なった。本当によく似た表情を見せやがって……。

「おい、帰るぞ。なんか奢ってやるよ」

「！ じゃあ、あの店の唐揚げで！」

そんなことを言いながら、ボロボロに崩れた鳥居をくぐり、階段へ。そこでふと視界の端に、青紫色の小さな花が咲いているのが見えた。

ええと、たしかミスミソウだったか。積もった雪からその青紫色が覗いていた。

「……もうすぐ春だな」

|
|
|
終
|
|
|

完結後のエンドロールのようなもの

余談雑談

◎物語の始まりと終わり

1 物語のモチーフ（取っ掛かり）

①原作開始前の話を書きたい

②前作よりも百合よりで書きたい

③花言葉を絡めたい

④五条悟いる限り自由に動けん……せや、生まれてないことにしよ！

この辺から『墮雪の花言葉』に至ります。

2 エンディングの候補

①2人とも封印

②2人とも死亡

実は着地点が前作以上にフワツとしてました。見切り発車もいいところでしたが、書きたいエンディングまで辿り着けてよかったです。

◎キャラクター余談

1 草木美澄

主人公。モチーフは『ミスミソウ』。

とにかくヒロインである雪がすべての思考・行動の中心となっていて本物の雪ちゃんスキー。ヤンデレともいう。呪術がない世界線だと、雪とただイチャコラしてる愛重めの百合っ娘になります。

術式『輪廻復原』はネクロマンサーな主人公が書きたかったため生まれました。前作では領域展開まで到れなかったので、今作では絶対領域展開まで書くという強い意思の元書かれた術式。

2 花房雪

ヒロイン。というか裏主人公。モチーフは『スノードロップ』。

目隠れっ娘いいよねという心情でのキャラデザになりました。当初は雪ちゃんが呪霊としての人格で『墮雪』が人間としての主人公という設定でした。

術式はなし。ただ最初から『黒閃』は打てるようになる予定でした。

3 墮雪

本作のキーパーソンというかキー呪物。元の呪物である『待雪草』はスノードロップ

の和名。その花言葉のひとつが『あなたの死を望みます』という説があるらしいです。

そもそも一人称が俺である呪霊は存在してません。作中ではあたかも自分が昔、存在していたかのように話していましたが、雪の中に入った時に、雪の黒い部分を抽出した結果、人格が生まれました。もちろん『待雪草』を雪に渡したのは、額に傷のあの人物です。また、そもそも雪に渡す前に弄られていて、『六眼』を殺すように刷り込まれています。

術式『戯憶竄醉』は、記憶を上書きする呪術で、作中で語られたように中々に応用の効くものではありませんが、受肉した本人はそこまで評価していません。

4 草木咲人

女好きでチャラくて強い兄枠。こういう男が好きなんですよ、作者は。在藤とは親友だし、なんだかんだ正藤のことも嫌いではなかったし、嫌い嫌いとは言っていない、美澄のことは気にはしていました。あれ……こいつ、いい奴じゃね？

本作後、何故か桔梗とくつつきます。浮気はしません、というか出来ません。娘には激甘です。

術式『人獣呪術』は、優男が獣になるのが好きなんですよ、作者は。本人は本当にこの術式が嫌いで、それを使わないために結界術を極めていたというのが大きいです。

5 東坊城天蓋

師匠梓その1。実は元々の主人公でした。彼女が雪のように表人格でしたが、なぜかこのポジションに収まりました。本当はお姉ちゃん大好きっ娘だったけれど、立場と行き違いで姉を疎むようになりました。

術式『予知』と紛い物『六眼』は作品の根底に関わるものでしたので、主人公にはならずともいなくては話が成り立たない重要な人物であることは間違いありません。

6 東坊城水仙（呪詛師・五条）

師匠梓その2。元々の主人公の片割れで、墮雪のような裏人格の予定でした。妹思いのいい姉ですが、若干不器用な人。無意識にそれを隠すような自信ありげな口調になっています。チャイナ服はキャラ付けと作者の趣味です。そのうちナース服のヒロインも出てきそうで自分が怖いです。

術式『無下限呪術』は、皆さんご存じの五条先生のあれです。ただし、かなり控えめ & amp; ; 弱いので五条先生の足元にも及びません。

◎お絵かき集め

雰囲気絵（イメージ絵）落書きです。

藍沢はお絵かき完全初心者のため、クオリティは非常に低い。

読む上では必要ではないけれど

「あー、はいはい。こんな感じね。把握」としてもらうためのものです。見なくても全然OKです。見なくてもいいですからね。

草木美澄

花房雪